

北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 6

—長野市内その3—

みなみ そ みね い せき
南 曾 峯 遺 跡

2012.3

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構
鉄道建設本部 北陸新幹線建設局
長野県埋蔵文化財センター



南曾峯遺跡遠景



旧石器時代上層石器群



旧石器時代下層石器群

はじめに

古来、日本海は列島の北と南をつなぐ幹線として、あるいは大陸へ往来する航路として重要な位置をしめてきております。南曾峯遺跡がある長野市豊野町は新潟平野へと流れる信濃川（千曲川）と、信濃町を經由して高田平野へと抜ける国道18号線が交差する場所です。こうした日本海からの物流や情報が内陸にある長野県へ入る二つのルートが交差する要衝といえます。このような場所で、新しい地域交流の一つともいえる北陸新幹線の建設にともなって平成17～19年度に長野市南曾峯遺跡の発掘調査を実施しました。その後、整理作業を継続してまいりましたが、この度、発掘調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。

南曾峯遺跡が立地する丘陵は、旧石器時代に隆起がはじまってできたものと理解されてきましたが、今回の発掘調査によって、約2万年前には丘陵はまだ存在せず、千曲川の河原が広がっていた光景が想定されました。数万年かけて隆起した丘陵も、現在は削られて椿神社の一角を残すのみとなり、かつての地形を想像するのが難しくなっています。この丘陵には、地形の変動の歴史とともに、人々の生活の痕跡が刻み込まれていました。今回の調査で、その痕跡の一端を掘り起こすことができました。旧石器時代をはじめ、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世と続くあらゆる時代の人間の営みの痕跡が見つかりました。これらの発掘調査成果が地域の歴史の解明の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構北陸新幹線建設局の方々、長野県教育委員会文化財・生涯学習課や長野市教育委員会の方々、地元地権者や区長の方々、発掘・整理作業に従事協力いただいた方々に心から敬意と感謝を表す次第です。

例 言

1. 本書は北陸新幹線建設に関わる長野県長野市豊野町蟹沢に所在する南曾峯（みなみそみね）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構の委託を受けた(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
3. これまで発掘・整理作業の概要は『長野県埋蔵文化財センター年報』22(2005)・23(2006)・24(2007)、現地説明会、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告書とする。内容に相違がある場合は本書をもって訂正する。
4. 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000『中野西部』、1:50,000『中野』である。
5. 発掘、整理作業において以下の機関に業務委託をした。
測量業務及び空中写真撮影：株式会社ワイド、株式会社写真測図研究所
遺物の写真撮影：信毎書籍印刷株式会社
石器の展開写真：有限会社アルケリサーチ、株式会社アルカ
遺物の実測：株式会社アルカ
金属製品のX線撮影および保存処理：長野県立歴史館
6. 発掘、整理作業において以下の方々に、ご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。
青木和明、赤羽貞幸、倉石和彦、風間栄一、近藤洋一、佐川正敏、笹澤浩、佐藤宏之、戸沢充剛、長友恒人、中島庄一、中村由克、藤沢高広、望月明彦、森先一貴、渡辺哲也、
長野市教育委員会文化財課、長野市埋蔵文化財センター
7. 発掘調査・整理作業の担当者、発掘補助員・整理補助員は第1章第1節第1表に記載した。
8. 本報告書の執筆分担は以下のとおりである。調査部長大竹憲昭、調査第1課長上田典男が校閲した。
第1章、第2章、第3章第1節～3節・5節・6節、第4章：鶴田典昭
第3章第4節：宮村誠二
9. 註および引用参考文献は各章の末尾に記載した。但し、3章は各節の末尾に掲載した。
10. 調査資料及び遺物は長野県立歴史館へ移管予定である。

凡例

1. 遺物分布図・遺構図等に示した国家座標は日本測地系（旧測地系）の値である。
2. 遺物の番号は本文、挿表、実測図、分布図、写真のすべてに共通する。
3. 基本土層・埋土の色調の記録は『新版 標準土色帖』による。
4. 本報告書掲載図の縮尺は原則として以下の通りである。

（遺構実測図）

全体図（1：400） 遺構配置図（1：100） 竪穴住居跡（1：60） 土坑（1：40）

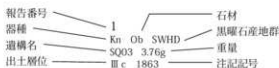
（遺物実測図）

土器・陶磁器実測図（1：4） 土器拓本（1：2） 石製品・金属製品（1：1） 五輪塔（1：8）

旧石器時代石器実測図（3：4） 旧石器時代以外の石器実測図（2：3、1：2、1：3）

上記以外の縮尺も用いているが、それぞれ図中に記載している。

5. 旧石器時代の石器実測図に付したキャプションの見方は以下の通りである。



6. 石器実測図、挿表の石材・石器器種・黒曜石産地群の略称は以下の通りである。

（石材）

An：無珉晶質安山岩 Ob：黒曜石 Ch：チャート Rh：流紋岩

Sa：硬砂岩 SS：珪質頁岩 Sh：頁岩 TS：凝灰質頁岩

（石器器種）

Kn：ナイフ形石器 ES：搔器 Dr：揉錐器 Gr：彫器

Sc：削器 NS：抉入削器 DS：鋸歯縁状削器 Bl：石刃

RF：二次加工がある剥片 UF：刃器 Fl：剥片

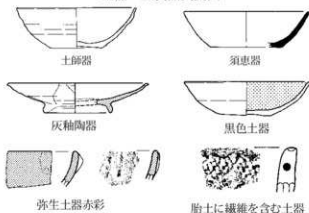
Sp：削片 Ch：碎片 Co：石核 Ha：敲石

黒曜石の産地群と産地記号

都道府県	エリア	判別群	記号
長野	和田 (WD)	鷹山群	WDTY
		小深沢群	WDRB
		土屋嶺北群	WDTK
		土屋嶺西群	WDTN
		土屋嶺南群	WDTM
		美谷ライト群	WDHY
	和田 (WO)	古峠群	WDHT
		ブドウ沢群	WOBD
		牧ヶ谷群	WOMS
	諏訪	高松沢群	WOTM
		星ヶ谷群	SWHD
	蓼科	冷山群	TSTY
双子山群		TSHG	
東京	神津島	福鉢山群	TSSB
		恩馳島群	KZOB
		砂嶺島群	KZSN

7. 本報告書で用いたスクリーントーンの凡例は以下の通りである。遺構図は各図版に凡例を付した。

土器・土製品実測図



石器実測図



目次

はじめに
例言
凡例
目次

第1章 発掘調査の経緯と方法	1
第1節 発掘調査の経緯と調査経過	1
1 調査に至る経緯 2 発掘調査と整理作業の経過 3 調査体制 4 調査日誌抄	
第2節 発掘調査と整理の方法	5
1 発掘調査の方法 2 整理作業の方法 3 遺物と記録の収納	
第2章 遺跡の環境と概要	10
第1節 遺跡の位置と地形環境	10
第2節 南曾峯遺跡の概観	12
1 遺跡範囲 2 発掘調査歴	
第3節 周辺の遺跡と歴史的環境	13
第4節 基本層序と調査成果の概要	19
1 基本層序 2 調査成果の概要	
第3章 遺構と遺物	27
第1節 旧石器時代	27
1 調査の概要	27
(1)調査方法 (2)石器群の観察と検討作業	
2 石器群の出土層位	28
3 遺構	28
(1)上層石器群と下層石器群の区分	28
(2)下層石器群の石器集中と礫群	28
(3)上層石器群の石器集中と礫群	29
4 遺物	31
(1)石器群の概要	31
(2)下層石器群の石器	34
(3)上層石器群の石器	37
(4)下層石器群の接合資料	40
(5)上層石器群の接合資料	43
5 年代測定と黒曜石産地推定	83
第2節 縄文時代	89
1 概要 2 遺物 3 黒曜石産地推定	
第3節 弥生時代	110
1 概要 2 遺物	

第4節 古墳時代	126
1 概要	2 出土遺物 3 小結
第5節 古代	129
1 概要	2 竪穴住居跡 3 土坑・ピット群・溝 4 遺構外の遺物
第6節 中世以降	143
1 概要	2 土坑 3 遺構外の遺物
第4章 総括	146
遺物観察表	151
写真図版	
報告書抄録	

図版目次

第1図 新幹線用地と発掘調査区	2	第29図 下層石器群の石器9	64
第2図 調査区とグリッド設定図	6	第30図 下層石器群の石器10	65
第3図 南曾峯遺跡周辺の地形	10	第31図 上層石器群の石器1	66
第4図 南曾峯遺跡の位置と範囲	11	第32図 上層石器群の石器2	67
第5図 南曾峯遺跡周辺の遺跡	16	第33図 上層石器群の石器3	68
第6図 基本層序	20	第34図 上層石器群の石器4	69
第7図 遺構配置図	22	第35図 上層石器群の石器5	70
第8図 1区遺構配置図	23	第36図 上層石器群の石器6	71
第9図 2区遺構配置図	24	第37図 下層石器群の接合関係	72
第10図 4区遺構配置図	25	第38図 下層石器群の接合資料1	73
第11図 旧石器時代の調査範囲	46	第39図 下層石器群の接合資料2	74
第12図 石器分布状況と砂礫層の分布範囲	47	第40図 下層石器群の接合資料3	75
第13図 1区土層図	48	第41図 下層石器群の接合資料4	76
第14図 下層石器群の石材別分布状況	49	第42図 下層石器群の接合資料5	77
第15図 SQ02・SQ03・SH05分布状況	50	第43図 下層石器群の接合資料6	78
第16図 礫群 (SH05)	51	第44図 下層石器群の接合資料7	79
第17図 下層石器群の石器分布状況	52	第45図 下層石器群の接合資料8	80
第18図 上層石器群の石材別分布状況	53	第46図 上層石器群の接合資料1	81
第19図 SQ01分布状況	54	第47図 上層石器群の接合資料2	82
第20図 上層石器群の石器分布状況	55	第48図 上層石器群の接合資料3	83
第21図 下層石器群の石器1	56	第49図 下層石器群の黒曜石産地別出土状況	86
第22図 下層石器群の石器2	57	第50図 上層石器群の黒曜石産地別出土状況	87
第23図 下層石器群の石器3	58	第51図 SD01	94
第24図 下層石器群の石器4	59	第52図 SD01土層断面図	95
第25図 下層石器群の石器5	60	第53図 縄文時代の土器1	96
第26図 下層石器群の石器6	61	第54図 縄文時代の土器2	97
第27図 下層石器群の石器7	62	第55図 縄文時代の土器3	98
第28図 下層石器群の石器8	63	第56図 縄文時代の土器4	99

第57図	縄文時代の石器 1	100	第76図	弥生時代の土器 10・土製品	123
第58図	縄文時代の石器 2	101	第77図	弥生時代の石器 1	124
第59図	縄文時代の石器 3	102	第78図	弥生時代の石器 2・石製品	125
第60図	縄文時代の石器 4	103	第79図	2区出土古墳時代の遺物	127
第61図	縄文時代の石器 5	104	第80図	SB01	131
第62図	縄文時代の石器 6	105	第81図	SB02	132
第63図	縄文時代の石器 7	106	第82図	SB02出土遺物	133
第64図	縄文時代の石器 8	107	第83図	SK13・14・15	134
第65図	縄文時代の石器 9	108	第84図	1区ピット群	135
第66図	縄文時代の石器 10	109	第85図	2区ピット群	136
第67図	弥生時代の土器 1	114	第86図	4区ピット群	137
第68図	弥生時代の土器 2	115	第87図	SD01埋土中の礫出土状況(SH01~03)	138
第69図	弥生時代の土器 3	116	第88図	SH03	139
第70図	弥生時代の土器 4	117	第89図	SD04・05	140
第71図	弥生時代の土器 5	118	第90図	SD01出土遺物 1	141
第72図	弥生時代の土器 6	119	第91図	SD01出土遺物 2	142
第73図	弥生時代の土器 7	120	第92図	中世以降の遺構と遺物	144
第74図	弥生時代の土器 8	121	第93図	南曾峯遺跡の石器	147
第75図	弥生時代の土器 9	122	第94図	長野県内の横長剥片素材のナイフ形石器	148

表目次

第1表	調査体制	3	第7表	下層石器群の器種別石材組成	35
第2表	南曾峯遺跡周辺の遺跡地名表	17	第8表	上層石器群の器種別石材組成	38
第3表	器種組成表	30	第9表	黒曜石産地推定結果	85
第4表	石材組成表	30	第10表	縄文時代石器器種組成表	91
第5表	母岩別資料一覧	33	第11表	縄文時代黒曜石産地推定結果	93
第6表	接合資料一覧	34	第12表	SK07出土銭貨一覧	145

写真図版目次

PL 1	旧石器時代の土層と遺構	PL12	弥生時代の土器 2
PL 2	弥生時代以降の遺構	PL13	弥生時代の土器 3
PL 3	旧石器時代の石器 1	PL14	弥生時代の土器 4
PL 4	旧石器時代の石器 2	PL15	弥生時代の土器 5
PL 5	旧石器時代の石器 3	PL16	弥生時代の土器 6
PL 6	旧石器時代の石器 4	PL17	弥生時代の土器 7
PL 7	旧石器時代の石器 5	PL18	弥生時代の土器 8
PL 8	縄文時代の土器 1	PL19	弥生時代の土器 9
PL 9	縄文時代の土器 2・石器 1	PL20	古墳時代と中世の遺物
PL10	縄文時代の石器 2	PL21	平安時代の遺物 1
PL11	弥生時代の土器 1	PL22	平安時代の遺物 2

第1章 発掘調査の経緯と方法

第1節 発掘調査の経緯と調査経過

1 調査に至る経緯

南曾峯遺跡は長野県の北部、長野市豊野（旧豊野町）にあり、旧石器時代から平安時代にわたる遺跡として知られていた。この南曾峯遺跡の一部に北陸新幹線の路線の建設が計画されたことから、日本鉄道建設公団（平成16年度より独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構）と長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下県教委）が協議を行った。平成14年10月の保護協議により、保護措置は記録保存とし、発掘調査は財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）が日本鉄道建設公団の委託を受けて実施することとなった（14教文第7-124「北陸新幹線建設工事に関する豊野町南曾峯遺跡の保護について」）。

平成16年4月1日付で独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線建設局（以下鉄道・運輸機構）と埋文センターで発掘調査受委託契約書を締結したが、発掘調査を含めた新幹線建設の地元説明会が延期され、同年9月2日の鉄道・運輸機構と埋文センターとの協議で平成16年度の発掘調査は実施しないことを決定した。

鉄道・運輸機構、県教委、長野市教育委員会（以下長野市教委）、埋文センターによる平成17年7月20日の協議を経て、平成17年8月22日付で鉄道・運輸機構と埋文センターで発掘調査受委託契約書を締結し、同年9月より発掘調査を行った。なお、7月20日の協議で、調査範囲は新幹線用地及び用地外の工事で掘削が予定されている隣接地を対象とすることとなった（第1図）。

また、用地内にある墓地の移設先（3区）の発掘調査は、平成18年6月27日の協議（鉄道・運輸機構、県教委、長野市教委、埋文センター）により埋文センターが行うこととなった。3区の調査終了後に墓地の移設先が変更となり、平成19年に新たな移設先である4区を発掘することとなった。

平成19年になり、新幹線本線用地に隣接した市道迂回路の造成に伴い包蔵地が掘削されることが判明し、県教委が発掘調査による記録保存を決定したことから、平成19年6月27日の協議を経て、本線用地の残存部分と合わせて8月から埋文センターが発掘調査を行うこととなった。

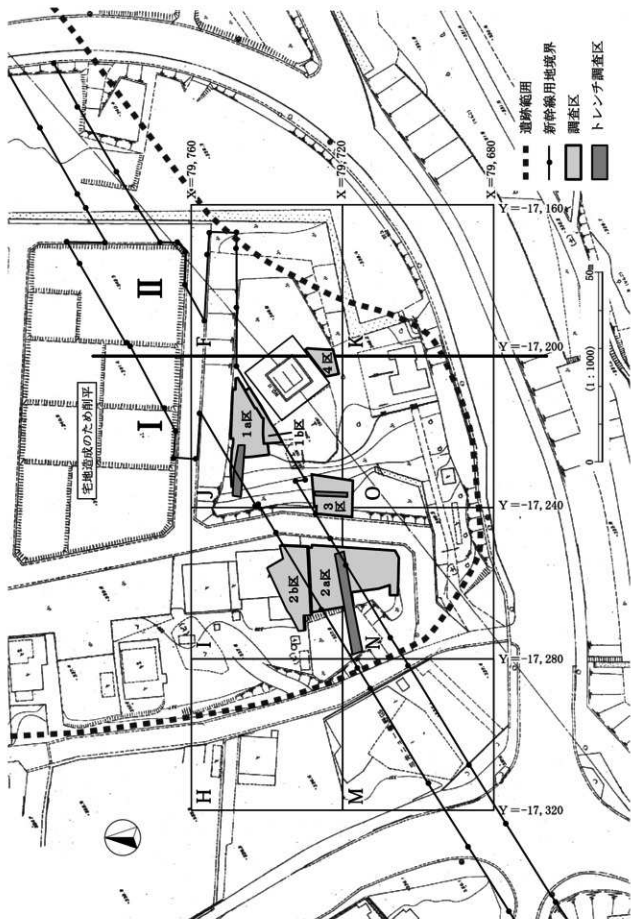
2 発掘調査と整理作業の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は用地買収の進捗状況と墓地移設の日程変更、さらに当初の調査範囲に加え墓地移設先及び市道迂回路部分の調査を実施した経緯から、調査期間は3ヶ年にわたり、調査区を細かく区切っての発掘調査となった（第1図）。

発掘の調査期間と調査面積は以下の通りである。調査面積は1,877㎡で平成18年度の調査区は平成17年度の調査区内の旧石器時代の調査であるため、延べ調査面積は1,977㎡となる。

平成17年	9月14日～11月4日・12月5日～12月9日	1,670㎡（1a区・2a区）
平成18年	5月8日～7月28日	100㎡（1a区・3区）



第1図 新幹線用地と発掘調査区

平成19年 6月20日～11月16日

207㎡ (1b区・2b区・4区)

平成17年度は丘陵上の1区と低地部の2区の調査を実施した。2区では自然流路跡(SD01)と考えられる溝状の窪地に弥生時代中期と平安時代の遺物や礫が多量に出土した。これらの遺物が出土したSD01の埋土は人力による掘り下げを行い、その下層部分(一部)は重機による掘り下げを行った。しかし、最下層より縄文時代の土器片が出土したため、再び埋土を人力で掘り下げ遺物を採取した。1区では平安時代の竪穴住居跡等の遺構が検出され調査を行った。旧石器時代のブロックも検出されたが、中野市沢田銅土遺跡(新幹線本線竪坑部)の調査を優先させるため、旧石器時代の調査は平成18年度に実施することとなり、土壌で調査区上面を覆い、越冬する措置をとった。また、1区北側の崖面で旧石器時代包含層の光ルミネッセンス年代測定のための銅パイプを埋設した。

平成18年度は1区の旧石器時代の調査を実施し、3か所のブロックを検出した。また、墓地移設先となった丘陵斜面裾部(3区)のトレンチ調査の結果、墓地移設先には遺構が広がっていないことが確認され、3区の調査は終了した。石器群と土層の対比が確実な1号ブロックに接する調査区南壁面で、再度旧石器時代遺物包含層の光ルミネッセンス年代測定のための銅パイプを埋設した。さらに、調査区南壁面及びブロックにかかるセクションベルトで火山灰分析の土壌サンプルを採取した。

平成19年度は、墓地移設先(4区)、低地部の未買収地であった一角と新たに調査をすることとなった市道迂回路部分(2b区)、墓地の移設待ちのため未調査となっていた部分(1b区)の調査を実施した。4区では竪穴住居跡(平安時代?)を検出し、2b区では2a区の続きの自然流路から縄文時代早期、弥生時代中期、平安時代の遺物が多数出土し、1b区では旧石器時代の2号ブロックの続きと礫群が検出された。

(2) 整理作業

平成17～19年度は冬期間に、図面の修正、写真整理、遺物注記等の基礎作業を実施した。一部の土器については器種分類と接合・復元をおこなった。平成19年度には石器の展開写真撮影を実施した。

本格的な整理作業は平成22・23年度に実施した。平成22年度は旧石器時代の石器の観察・接合作業、石器・土器等の遺物の実測、石器接合資料の展開写真撮影、原稿執筆をおこなった。遺物実測の一部、及び石器接合資料の展開写真撮影は業者に委託し実施した。平成23年度は遺物実測、遺物図・遺構図のトレース、図版組、原稿執筆をおこなった。

3 調査体制

発掘調査、整理作業の調査体制は以下の通りである。

年 度	所 長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員
平成17年	仁科松男	市澤英利	廣瀬昭弘	鶴田典昭 西 香子
平成18年	仁科松男	市澤英利	平林 彰	鶴田典昭
平成19年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田典昭
平成22年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田典昭
平成23年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	鶴田典昭
平成17～19年度 発掘補助員				
稲田敏恵	内山紀明	江坂法子	遠藤加代子	太田正紀 岡村文雄 加藤充也 川村幸彦 塩崎巖
徳永利夫	野村善和	野本秀男	藤村晨一郎	古沢三千代 丸山千寿 山口守 山田寿恵
平成17～19・22・23年度 整理補助員				
市川ちず子	宇賀村節子	窪田順	小池美香	小林愛 近藤朋子 高橋康子 清水栄子 清水秋子
西村はるみ	日向富美子	増田千代代	宮澤理恵子	矢島美雪 柳原澄子 山下千幸 山本和美

第1表 調査体制

4 調査日誌抄

(平成17年度)

- 9月14日 2a区のトレンチ調査を開始。
 9月20日 トレンチ調査に基づき、調査範囲を設定し、2a区の表土剥ぎを開始。
 9月21日 発掘補助員開始式。
 9月26日 1a区表土剥ぎを開始。2a区の自然流路(SD01)の調査開始。土器と大形礫が多数出土。
 9月27日 長野市教育委員会倉石和彦氏来訪。
 9月28日 1a区で竪穴住居跡2棟確認。表土剥ぎ終了。
 10月5日 豊野東小学校6年生見学(41名)。
 10月6日 1a区遺構調査開始。竪穴住居跡から旧石器時代の石器が出土。2a区SK02から銅鏡破片出土。
 10月13日 1a区地形測量。
 10月18日 2a区SK07から古銭出土。
 10月25日 空中写真撮影。空中写真測量(SD01)。
 11月1日 1a区SD01の3層・4層の掘り下げを開始。縄文時代の土器片と石器が出土。
 11月4日 2a区地形測量。沢田鍋土遺跡の調査を優先するため、南曾峯遺跡の調査を一時中断。
 11月18日 奈良教育大学長友恒人教授により光ルミネッセンス年代測定土壌サンプリング。
 12月5日 南曾峯遺跡調査再開。1a区旧石器時代の包含層を保護するための越冬準備。
 12月6日 2a区SD01部分の重機による立ち割りと土層記録。
 12月9日 2a区の埋め戻し終了。器材撤収。発掘補助員終了式。平成17年度調査終了。

(平成18年度)

- 5月1日 プレハブ、トイレ設置。
 5月2日 器材搬入。
 5月8日 発掘補助員開始式。1a区旧石器時代の調査開始(SQ01)。
 5月12日 遺物の単点測量開始。
 5月19日 豊野中学1年生(4名)が総合学習の一環として発掘体験。旧石器時代の掻器出土。
 5月22日 調査区壁面のトレンチで1号ブロックより下層に石器を確認(SQ02)。
 5月25日 下層に新たな石器集中区(SQ03)を確認し、調査期間の延長を検討。
 5月30日 部分的な砂礫層を挟んで上層石器群(SQ01)と下層石器群(SQ02・03)に石器群が区分されることを確認。
 6月4日 遺跡現地説明会。
 6月9日 奈良教育大学長友恒人教授の調査指導(光ルミネッセンス年代測定土壌サンプリング)。
 6月12日 明治大学戸沢充則名誉教授、長野県立歴史館大竹憲昭専門士の調査指導。
 6月13日 上層石器群(SQ01)はベルトを残し掘り下げ完了。下層石器群の調査。
 6月15日 信州大学赤羽貞幸教授、野尻湖ナウマンゾウ博物館中村由克学芸員の調査指導。
 6月20日 火山灰分析用の土壌サンプル採取。
 6月21日 土層観察ベルトから黒曜石製槍先形尖頭器(SQ01)が出土。

- 6月23日 土層観察ベルトから黒曜石製ナイフ形石器(SQ03)が出土。
 6月27日 墓地移設先(3区)の調査について鉄道・運輸機構、長野市教委、県教委、埋文センターで協議。
 6月29日 ベルト崩し終了。SQ03遺物集中部を礫層上面まで掘り下げ。
 6月30日 1a区旧石器面の発掘調査終了。発掘補助員終了式。発掘器材を中野市立ヶ花城跡(新幹線建設関連)へ移動。
 7月7日 プレハブ撤収。土層断面記録。
 7月28日 1a区埋め戻し。3区重機によるトレンチ調査。平成18年度の調査終了。

(平成19年度)

- 6月20日 4区重機による表土剥ぎ。
 6月22日 発掘補助員(4名)による調査開始。
 6月26日 遺構の単点測量。
 6月27日 4区調査終了。鉄道・運輸機構との協議により、市道迂回路部分(2b区)の発掘調査を実施することになる。墓地部分(1b区)と市道迂回路部分(2b区)を残して調査は一時中断。
 8月6日 2b区の調査開始。重機による表土剥ぎ(調査再開)。プレハブ、トイレ、水道設置。
 8月7日 器材搬入。2b区表土剥ぎ。
 8月9日 2b区発掘補助員(10名)による調査開始。グリッド設定。
 8月10日 2a区から続く自然流路(SD01)の掘り下げ開始。
 8月24日 SD01埋土から弥生時代の小形勾玉が1点出土。
 8月29日 SD01埋土1層の掘り下げ終了。2層上面での遺構検出でピットを確認。SK13から完形の土師器杯がまとも出土。
 9月3日 SD01埋土2層から燧輪破片が出土。
 9月10日 SD01北西縁にピット群を検出。
 9月12日 SD01埋土3・4層の掘り下げで、押型文土器、割片等が出土。
 9月14日 SD01埋土3・4層から縄文時代早期から前期初頭の土器が出土。
 9月20日 遺構の掘り下げ調査終了。
 9月21日 地形測量を行ない2b区の調査終了。墓地部分(1b区)を残し、調査は一時中断。
 11月1日 1b区の調査開始。重機による表土剥ぎ、遺構検出(調査再開)。
 11月2日 南宮中学校職場体験学習の一環で発掘体験。旧石器時代ブロックSQ02付近Ⅲb層上部でナイフ形石器出土。
 11月5日 平安時代の竪穴住居跡(SB01)の続き部分調査終了。Ⅱ層でチャート製ナイフ形石器出土。遺物(旧石器時代石器)の単点測量開始。平安時代の土坑(SK14・15)調査。
 11月7日 Ⅲc層でSQ02の続きと考えられるチャートと安山岩の割片が出土。
 11月9日 旧石器時代の礫層(SH05)を確認。
 11月14日 礫層の半截と断面観察。
 11月16日 1b区調査終了。

第2節 発掘調査と整理の方法

1 発掘調査の方法

(1) 遺跡記号と遺構記号

遺跡記号

「南曾峯遺跡」の遺跡記号は「MMS」である。埋文センターでは記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で示す遺跡記号を用いている。1文字目は長野県を9分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡内の調査遺跡を示す「M」^(註1)、2文字目及び3文字目は遺跡名のローマ字表記「MINAMISOMINE」の2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

遺構記号

発掘調査では埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。

S B : 2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。

【竪穴住居跡・竪穴状遺構】

S K : 単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められないS Bより小さな掘り込み。【土坑他】

S T : S Bより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。これ以外の落ち込みと関係が認められるものがある。【掘立柱建物跡他】

S F : 単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。【火床】

S H : 石が面的に出土するもの。【磔群、集石遺構、配石遺構】

S Q : 遺物が面的に集中するもの。【旧石器時代の遺物集中（ブロック）他】

S X : 以上に記した以外の不明遺構。

なお、掘立柱建物跡の柱穴と思われるものが多数検出されたが、発掘調査では建物跡の組み合わせを確認できなかった。掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高いものは、他の土坑と区別して遺構記号をPitとした。

(2) 調査グリッドの設定と呼称（第2図）

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（X=0.0000、Y=0.0000）を基点に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これを元に、調査対象範囲をカバーするようにグリッドを設定した。グリッドは大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。

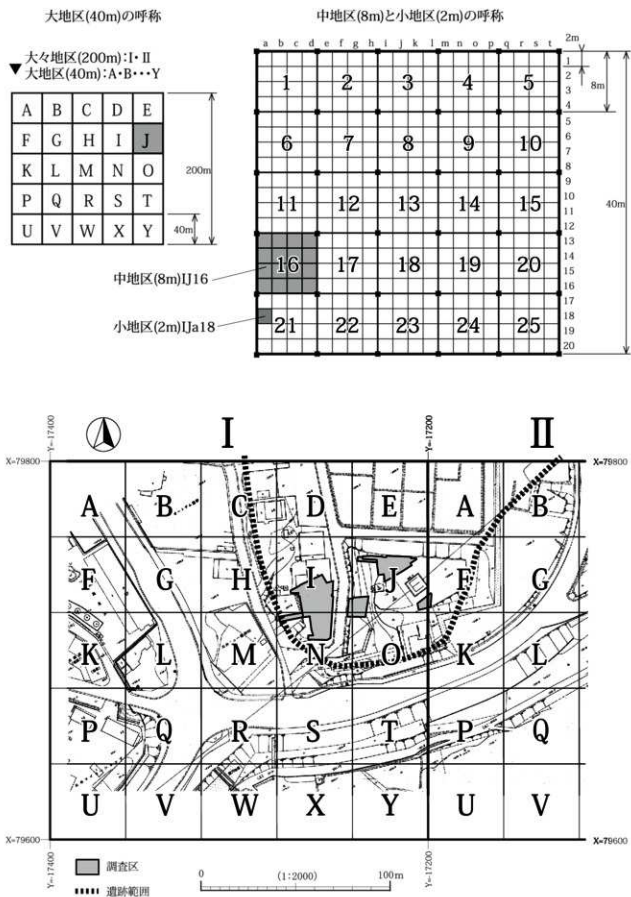
大々地区は200m×200mの区画で、ローマ数字で示した。本遺跡の調査では、X=79,800、Y=17,400を基準として調査対象地区全体にかかる2区画を設定し、I・IIと表記した。

大地区は大々地区を40m×40mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yまでの大文字アルファベットを用いた。

中地区は大地区を8m×8mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25の算用数字を用いた。遺構測量の基準・単位としたのがこの中地区画である。

小地区は大地区を2m×2mの400区画に分割したもので、大地区の北西角を起点として東西軸上に西から東へa～tまでアルファベット、南北軸上に北から南へ1～20の算用数字を付して、両者の組み合わせで「a18」のように小地区名を表した。

大地区と中地区のグリッド杭の打設は測量業者に委託して実施したが、小地区は中地区を基準に埋文センターが設定した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっ



第2図 調査区とグリッド設定図

ており、統一性を保つため日本測地系の座標値を用いている。したがって、報告書に掲載した図面の座標値は日本測地系である。

本書では、旧石器時代の遺物分布図、及び遺物観察表には2m×2mの小地区の名称を用いて表記し、縄文時代以降の遺構配置図及び個別の遺構図には8m×8mの中地区の名称を用いて表記している。

(3) 調査区の設定と遺構の発掘

調査区は丘陵部(1a・1b・3・4区)と低地部(2a・2b区)に分けられる。丘陵部は等高線に直交するトレンチ調査の結果、平坦部に遺構が確認され、急斜面部は表土直下が礫層となり、遺構・遺物が確認されなかったため、丘陵平坦部を調査区(1a区・1b区)とし、重機で表土剥ぎをおこない、遺構の調査を実施した。低地部も同様に等高線に直交するトレンチ調査の結果、調査対象地の西側が削平されており、包含層及び遺構が残存しないことを確認した。遺構と包含層が存在する東側を調査区(2a区・2b区)とし、重機で表土を剥ぎ、遺構の調査を実施した。

丘陵上の墓地移設予定地2か所については、斜面地の3区では遺構・遺物が確認されずトレンチ調査のみで調査を終了し、平坦面の4区では全面表土剥ぎをおこない遺構の調査を実施した。なお、トレンチ調査は、いずれも重機を用いて実施した。

1区の旧石器時代の調査方法は第3章第1節に記述した。

写真撮影は6×7、35mm一眼レフのカメラを用い、それぞれ白黒フィルム、リバーサルフィルムを用いて撮影した。また、35mm一眼レフとあわせてコンパクトデジタルカメラによる撮影をおこなった。空中写真撮影は平成17年度の調査でラジコンヘリコプターを用いて実施した。

自然科学分析は、旧石器時代石器群の年代を探るため、火山灰分析及び光ルミネッセンス年代測定を実施した。火山灰分析は調査担当者がサンプリングしたものを(株)パリオサーヴェイに委託し、光ルミネッセンス年代測定は、調査指導により奈良教育大学長友恒人教授がサンプリング及び分析を実施した。

2 整理事業の方法

(1) 遺物の注記及び管理番号について

金属器以外の土器・石器については、微細な遺物を除きすべてに注記をした。遺跡名はMMSの記号で示し、以下の略号を用いて注記した。なお、発掘時の遺物取上げ台帳と注記の対応表を添付CDに収録した(エクセル形式。ファイル名「遺物取上げ台帳と注記内容」)。

なお、注記は以下の略号を用いた。

Pit→P、床面→ユ、カマド→カ、攪乱→カク、SD01北区→SD01N、SD01中区→SD01M
SD01南区→SD01S^(注2)

また、旧石器時代の石器群、縄文時代以降の加工が認められる石器・石核、実測などの資料化が必要な土器・土製品について整理段階で管理番号を付した。管理番号は以下のとおり、時代及び遺物の種類ごとの通し番号とした。

旧石器時代の遺物 1～2482(※1～2176までは取上げ番号と管理番号が一致する。2177以降は土壌水洗で検出した破片及び、縄文時代以降の遺物包含層・遺構埋土から出土し、形態から旧石器時代の遺物と判断したものである。)

縄文時代以降の石器・石製品 10001～10247

縄文時代・弥生時代の土器・土製品 1～420(弥生時代1～300・401～420、縄文時代301～394)

古墳時代以降の土器・土製品（土師器・須恵器・埴輪・陶磁器） 1001～1114

金属器 1～25（保存処理番号と一致する）

（2）土器・土製品の整理について

今回の調査で出土した土器は、弥生時代中期と平安時代のものが大半を占める。

遺構別に接合作業を実施したが、遺構間の接合作業は実施していない。土器の大半はSD01から出土しており（縄文時代～平安時代）、そのほとんどが破片であることから、時代及び器種別に破片を分類し、口縁部及び底部破片数とその残存率を集計した。

平安時代の竪穴住居跡出土土器については、できる限り図化し提示した。その他の遺構については時代別に土器を分類した後、平安時代の土器は器形が判別できるものを中心に実測図を提示した。弥生時代中期の土器は器形が復元できるものはできる限り実測し、その他の破片については器種及び文様の分類をおこないその代表的なものを拓本で提示した。縄文時代の土器は少量であるが、時期及び型式分類した後、代表的な資料の拓本を提示した。

なお、平安時代土器の実測の一部は業者に委託し実施した。

（3）石器・石製品の整理について

すべての出土資料について器種分類、石材分類をおこなった。旧石器時代の石器は全点法量、重量を計測した。旧石器時代のブロックに重複した縄文時代以降の遺構埋土から出土した旧石器時代の遺物は新たに管理番号を付し、計測値を観察表に掲載した。縄文時代以降の石器（剥片・砕片以外の tool）についても同様に法量、重量を計測し、剥片・砕片については出土地点ごとの石材別出土点数と総重量を組成表に示した。

接合作業は旧石器時代の石器群のみ実施した。

旧石器時代の定形的な器種はすべて実測図を掲載した。縄文時代以降の資料は時期が判断できる石器を中心に実測図を掲載し、他の石器については形状が明確な定形的器種を中心に展開写真等を提示した。実測図及び写真で掲載できない石器については、全出土石器の出土地点別の石器組成表を示した。

なお、旧石器時代の石器展開写真・接合資料展開写真、縄文時代以降の石器実測の一部と展開写真撮影は業者に委託した。

旧石器時代の石器群及び、縄文時代の定形的器種（tool）の黒曜石産地推定分析は沼津工業高等専門学校望月明彦教授（平成20年度分析委託当時）が受託研究として実施した。

（4）遺構図の整理について

全体図、遺構図、断面図等は Illustrator10・CS3 を用いてトレースをおこなった。一部の図面は整理作業で作成した第2原図をスキャナーで読み込み、IllustratorCS3のライブトレースを用いて図面をデジタル化した。

石器分布図作成は石器の座標値データを DXF 変換ソフトで変換し AutoCAD2000LTi 形式で加工し保存したファイルを、IllustratorCS3 で読み込み、さらにドットの凡例作成、結線などをおこなった。

3 遺物と記録の収納

遺物・実測図面・写真は、報告書刊行後、長野県立歴史館へ譲与の上、保管される予定である。

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・地点別にテンパコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

遺構平面図、断面図等の実測図面は通し番号（図面番号）を付けて図面台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理事業で撮影した遺物写真とに分けて写真台帳に登録し、アルバムに収納した。デジタル写真データは撮影内容をファイル名とし、DVD に記録した。

註

- 1) 長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡内の遺跡であることを示す遺跡記号の1文字目は本来「B」であるが、地区記号の予備として「M」を設けている。長野市内では新幹線建設関連の調査遺跡については地区記号を「M」とした。
- 2) SD01の北区、中区、南区は、平成17年度調査分(2a区)について、2本のセクションベルトを境に3区画に区分した任意の区画である。



平成18年度南曾峯遺跡発掘補助員

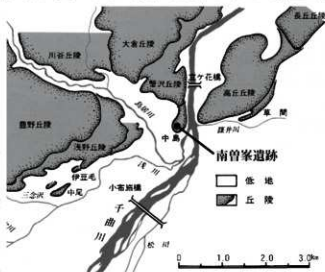
第2章 遺跡の環境と概要

第1節 遺跡の位置と地形環境

南曾峯遺跡は長野市豊野大字蟹沢字南曾峯 2758 他に所在する。本来の遺跡の範囲は、独立丘陵全体を含み、小字は南曾峯、北曾峯、街場の地籍にまたがる遺跡である（第4図）。今回の北陸新幹線建設に伴う発掘調査部分も含め、丘陵の大部分は削平されている。

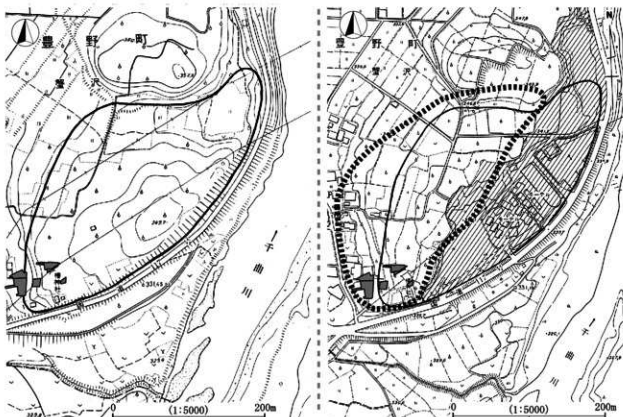
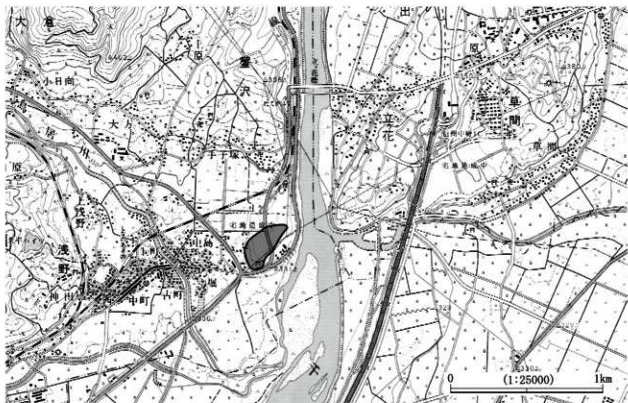
遺跡所在地は長野県北部にある長野盆地(善光寺平)北端の、鳥居川と千曲川の合流地点付近の丘陵に立地する。長野盆地を流れ下った千曲川は、浅川、鳥居川、松川、篠井川などが合流した後、丘陵の谷間を大きく蛇行して北流し、新潟県境に至り信濃川と呼称されるようになる。千曲川が丘陵の谷間を蛇行していくその入口部分では、右岸には高丘陵、長丘陵(中野市)があり、左岸には蟹沢丘陵(長野市)が連なる(第3図)。そして、千曲川左岸の蟹沢丘陵南端に離れ小島のように飛び出る曾峯と呼ばれる独立丘陵(以下曾峯丘陵と仮称)とその裾野が南曾峯遺跡である。

南曾峯遺跡が所在する旧豊野町は平成 17 年(2005 年)に長野市と合併し現在に至っている。旧豊野町は全体の面積の 70% に達する部分が丘陵であり、その他の部分が浅川、鳥居川、千曲川が形成した沖積地となる。丘陵部は標高や地理的な分布からさらに細かく区分されている(第3図)(豊野町誌刊行委員会 1997)。これらの丘陵は盆地の縁に平行に南西から北東に並び、盆地側から山地側に向かって階段状に高くなり、標高が高い丘陵ほど古い時代の地層から形成され、低い丘陵ほど新しい地層から構成される傾向にある。



第3図 南曾峯遺跡周辺の地形(『豊野町誌1』より引用)





採土工事前の地形と遺跡範囲

1985年現在での採土状況と遺跡範囲

● 『豊野町誌』(2001年)での遺跡範囲

■ 北陸新幹線関連の調査範囲

▨ 採土工事により破壊された部分

※豊野町教育委員会 1985『南曾峯遺跡』第2・3図に加筆

第4図 南曾峯遺跡の位置と範囲

第2節 南曾峯遺跡の概観

1 遺跡の範囲

南曾峯遺跡が立地する曾峯丘陵は360 m×160 mほどの独立丘陵である。昭和31年以後の大規模な土地改良事業に始まり、今回の北陸新幹線建設に伴う工事により丘陵は大きく掘削され、南端部の椿神社部分のみが旧地形を留めている。平成23年(2011年)現在の長野市遺跡地図^(註1)では、残存した丘陵南端部のみが南曾峯遺跡の範囲とされている。

従来は曾峯丘陵全体を遺跡範囲としていた(第4図下段左)(豊野町教育委員会1985)。その後、昭和45年(1970年)の土取りにより削られた範囲を除外し、従来遺跡外とされていた丘陵の裾野部を加えて遺跡の範囲とした(豊野町誌刊行委員会2001)。その範囲を第4図下段右に破線で示した。南曾峯遺跡の範囲内の丘陵上には南曾峯古墳が存在していたが、平成5年(1993年)の区画整備事業で削平されて消滅した。遺跡の大半は、次項に述べるとおり掘削されてしまい、ほぼ壊滅してしまった遺跡といえる。なお、調査時の遺跡範囲は、平成13年(2001年)の『豊野町誌』で示されたものである(第4図下段右図破線部)。

第4図上段の遺跡範囲は『豊野町誌』(豊野町誌刊行委員会2001)に掲載された範囲を示したものである。なお、『豊野町誌』ではこの範囲の南側を南曾峯遺跡、北側を峯の畑遺跡としており、その境界は示されていない^(註2)。平成17年(2005年)に豊野町と長野市が合併し、旧豊野町内の遺跡は長野市遺跡地図に登録されている。現在の長野市遺跡地図では、「峯の畑遺跡」は「峰の畑遺跡」と表記されており、前述のとおり南曾峯遺跡は丘陵の残存分のみ、峰の畑遺跡は遺跡範囲不確定とされている。

2 発掘調査歴

昭和31年(1956年)に豊野町(当時)初の大規模土地改良事業として蟹沢沖土地改良事業が着工し、南曾峯遺跡北西側が破壊された。昭和32年(1957年)には、南曾峯遺跡範囲内にあった南曾峯古墳が同土地改良事業の際に破壊され、直刀・菅玉などが採集された。南曾峯古墳は平成5年の区画整理事業に伴う発掘調査で、残存した石室の壁の基礎石と思われる石と礎床、石室の石の抜き取り痕などが確認された。

昭和45年(1970年)には個人の土取りにより、丘陵の東側が大きく削られた。その際、平安時代の竪穴住居跡1棟が確認された(豊野町誌刊行委員会2001)。

昭和55年(1980年)には中部電力送電線鉄塔建替工事に伴う発掘調査が行われ(A・B地点)、平安時代の竪穴住居跡(5棟)などが検出された(豊野町教育委員会1985)。

平成元年(1989年)2月には国道117号バイパス改良工事に伴う試掘調査が行われる。曾峯地区区画整理事業に伴い、平成2年(1990年)10月には第1次発掘調査、平成3年(1991年)3月には第2次調査、平成5年(1993年)7月～9月には第3次調査が行われ、弥生時代の環濠と思われる溝が検出されている(豊野町誌刊行委員会2001)。また、区画整理事業の工事中に粘土層より石器が採集され、中島庄一氏により中期旧石器新段階と評価されたが(中島1997)、その後平成12年(2000年)の「前・中期旧石器時代遺跡なつ造事件」の検証報告を受けて、その評価は撤回された(中島2006)。

第3節 周辺の遺跡と歴史的環境

今回の調査で、南曾峯遺跡から遺構・遺物がまとめて出土した、旧石器時代、縄文時代、弥生時代中期、奈良・平安時代を中心に周辺の遺跡の概要をまとめる。南曾峯遺跡周辺の中野市西部、小布施町、長野市豊野を中心とした遺跡分布図を第5図に示した。図中の番号は第2表および以下の文章の括弧内の番号に対応する。

旧石器時代：南曾峯遺跡(199)がある千曲川流域では、中野市から飯山市にかけて旧石器時代の遺跡が多数確認されている。千曲川対岸の中野市の沢田鍋土遺跡(83)、がまん淵遺跡(90)、牛出古窯遺跡(73)などでブロックが確認されている他、立ヶ花表遺跡(84)、浜津ヶ池遺跡(60)などでも旧石器がまとめて出土している。千曲川下流の飯山市の関沢遺跡、上野遺跡、太子林遺跡、日焼遺跡、トノ池南遺跡、新堤遺跡、さらに下流の栄村の横倉遺跡、小坂遺跡などでも発掘調査により旧石器が確認されている。また、南曾峯遺跡の北西12.5kmのところに野尻湖遺跡群があり、多数の旧石器時代遺跡が発掘調査されており、これらの資料をもとにした野尻湖編年が提示されている(谷・大竹2003、谷2004・2007)。

本遺跡に近接する沢田鍋土遺跡(83)、がまん淵遺跡(90)、野尻湖遺跡群の立が鼻遺跡は長野県最古段階の資料と位置付けられている(大竹2010)。前述した南曾峯遺跡の採集資料(中島1997)についても再検討していく必要がある。また、野尻湖遺跡群では、台形石器、斧形石器を伴う環状ブロック群が複数確認されている。千曲川対岸の牛出古窯遺跡(73)でも台形石器と斧形石器を伴うブロック群が確認されており、これらはAT降灰以前の所謂後期旧石器時代の古い段階の遺跡である。南曾峯遺跡周辺には日本列島の旧石器時代の始まりを探るうえで貴重な遺跡がまとまっている。

前述の、野尻湖遺跡群、南曾峯遺跡を含めた千曲川下流には多数の遺跡が確認されている。さらに下流の信濃川流域にあたる新潟県津南町周辺には旧石器時代から縄文時代草創期の多数の遺跡が存在している。南曾峯遺跡の下流に展開する千曲川・信濃川流域の遺跡群と野尻湖遺跡群を含む一帯は、日本列島の中でも旧石器時代の遺跡密度が高い地域である。発掘調査された遺跡も多く、日本列島の旧石器時代研究を進めるうえで重要な地域の一つである。

縄文時代：千曲川流域を中心に縄文時代の遺跡を概観する。草創期には良好な遺跡は確認されていない。飯山市のカササギ野池遺跡で爪形文土器が、飯山市小佐原遺跡、北竜湖遺跡、木鳥平村三枚原遺跡で表裏縄文土器が出土している。千曲川流域からは離れるが、長野県北部(北信地方)では、前述の野尻湖遺跡群で、降線紋土器、爪形文土器、円孔文土器、多縄文土器などが多数出土している他、高山村湯倉洞穴、須坂市石小屋洞穴などの群馬県境付近の山地部で草創期の良好な資料(降線紋文・爪形文・円孔文・多縄文土器など)が出土している。

早期には、木鳥平村の三枚原遺跡、高山遺跡、飯山市トノ池南遺跡などで押型土器、中野市がまん淵遺跡(90)、飯山市新堤遺跡などで沈線文系土器が比較的まとめて出土している。旧豊野町内では明神前遺跡(263)、立石ヶ丘遺跡(203)などで押型土器が僅かに採集されている。

前期では、南曾峯遺跡(199)に近接する上浅野遺跡(210)で環状集石群が確認されている。また、千曲川上流の長野市松原遺跡では地表下約5mから前期の集落跡が確認されている。下流の中野市の立ヶ花遺跡(79)、南大原遺跡(34)、飯山市の有尾遺跡、大倉崎遺跡、瀬附遺跡で竪穴住居跡が確認されている。なお、南大原遺跡(34)、有尾遺跡は前期土器型式の標識遺跡である。

中期には、旧豊野町内では表採資料ではあるが、明神前遺跡(263)で中期後葉を中心に多数の遺物が採集されている。このほか上浅野遺跡(210)で中期前葉の遺物が比較的まとめて出土している。千曲川下

流域では中野市の栗林遺跡(62)、姥ヶ沢遺跡(50)、宮反遺跡(49)、千田遺跡(23)、柳沢遺跡、飯山市深沢遺跡、飯綱町上赤塩遺跡(6)などで集落跡が確認されている。また、中野市風呂屋遺跡(25)では中期前葉の土器がまとまって出土している。上赤塩遺跡(6)、風呂屋遺跡(25)では北陸系の土器が、千田遺跡(23)では火焰型土器や東北系(大木式)の土器が、栗林遺跡(62)では関東系(加曾利E式)の土器が出土するなど、他地域との交流が認められる。また、姥ヶ沢遺跡(50)ではほぼ完全な形に還元される土偶が、千田遺跡(23)(長野県埋蔵文化財センター 2010)では200点を超える土偶が出土している。

後期には、中野市栗林遺跡(62)、飯山市東原遺跡などの集落跡と、石棺墓群が確認された飯山市宮中遺跡などがある。本遺跡対岸の中野市沢田鍋土遺跡(83)では中期及び後期の粘土採掘跡が発見されている。

晩期には遺跡が少なく、集落跡は確認されていない。旧豊野町内でも晩期は3遺跡のみで、南曾峯遺跡(199)、立石ヶ丘遺跡(203)、堰上遺跡(182)でわずかに土器が出土しているにすぎない。下流の中野市の牛出遺跡(74)、山根遺跡(31)、南大洞遺跡(24)、千田遺跡(23)、飯山市の山ノ神遺跡、上野遺跡などで晩期の遺物が確認されている。特に飯山市山ノ神遺跡でまとまった土器が出土しており、その中に魚形線刻画がある椀形土器が見られる。

弥生時代：千曲川流域には中期後半(栗林式)から後期(吉田式、箱清水式)の集落跡が多数確認されている。中期には千曲川流域に栗林式期の集落跡が多数発見されているが、本遺跡の周辺では栗林式に先行する時期の弥生時代の遺跡は少ない。約13km上流の春山B遺跡で氷Ⅱ式土器(弥生前期平行)が土坑から出土しているものの、善光寺平北半から奥信濃地域では弥生中期前半以前の遺跡はほとんど確認されていない。栗林式の最も古い様相を示す土器を出土した長野市牟礼バイパスD地点(千曲川西岸)、須坂市須坂園芸高校(千曲川東岸)などは千曲川支流の扇状地状に立地しており、いずれも本遺跡から7.5kmほどの距離にある。

旧豊野町内の中期後半では、本遺跡を含め鳥居川両岸の段丘上と千曲川西岸の扇状地上との二か所に遺跡が集中しており、前者では南曾峯遺跡(199)と向平遺跡(202)、後者では北土井下遺跡(262)でまとまった遺物が出土している。南曾峯遺跡と北土井下遺跡(262)では環濠の一部と評価されている溝が検出されているが(豊野町誌刊行委員会 2001)、竪穴住居跡などの居住施設が見つからない。本遺跡の周辺をみると、中期後半栗林式の標識遺跡である栗林遺跡(62)が千曲川を挟んで北東3kmに位置しており、環濠集落、礫床木棺墓などが確認されている。南曾峯遺跡の千曲川対岸の中野市立ヶ花城跡(88)でも竪穴住居跡が確認されており、本遺跡に対峙した丘陵上に集落跡が存在したことを知ることができる。さらに範囲を広げると、千曲川上流には長野市の中俣遺跡、浅川扇状地遺跡群(檀田遺跡・本堀遺跡・ニツ宮遺跡・本村東沖遺跡・浅川端遺跡・徳間本堂原遺跡・吉田古屋敷遺跡)、春山B遺跡、松原遺跡などの集落跡や川田条里遺跡などの水田跡が認められる^(註3)。なお、徳間本堂原遺跡では礫床木棺墓群が見つまっている。下流域には中野市の南大原遺跡(34)、柳沢遺跡、飯山市の北原遺跡(旭町遺跡群)、小泉遺跡、上野遺跡^(註4)などで集落跡が確認されている。柳沢遺跡、小泉遺跡、上野遺跡では木棺墓群が見つかり、特に柳沢遺跡では銅鐸、銅戈の埋納遺構、大形の礫床木棺墓などが発見され注目を集めている(長野県埋蔵文化財センター 2007・2008)(2012年報告書刊行予定)。また、水田跡が上流の川田条里遺跡、下流の柳沢遺跡で確認されており、弥生中期の千曲川流域での水田耕作の実態も明らかになりつつある。下流の中野市川久保遺跡では千曲川に面した微高地の縁辺部に、完形の栗林式土器が群をなしてまとまって多数出土した特殊遺構が発見されており、その性格の解明が期待される(長野県埋蔵文化財センター 2004)。また、榎田遺跡、松原遺跡などは太行蛤刃石斧の生産と広域流通に関わる遺跡として評価されており(町田 2008・2010、馬場 2001・2009・2011、柴田 2011)、善光寺平を中心とした弥生時代中期社会の解明に必要な新資料が次々に調査されている。なお、弥生中期の木製品が長野市川田条里遺跡、中野市七瀬遺跡

(59)、飯山市照丘遺跡などで出土している。七瀬遺跡(59)では竪穴住居跡も確認されている。

本遺跡では後期の遺構・遺物が確認されていないものの、旧豊野町内を見ると、遺跡の立地は中期同様に鳥居川兩岸の段丘上と千曲川西岸の扇状地上の二か所に集中している。しかし発掘調査例がなく詳細は不明である。対岸の中野市がまん瀬遺跡(90)では北陸地方に見られる斜面に環濠をもつ高地性の防衛的集落が確認されている。下流の中野市栗林遺跡(62)、安源寺遺跡(112)、七瀬遺跡(59)、宮反遺跡(49)、千田遺跡(23)、川久保遺跡、小牧遺跡、飯山市の田草川尻遺跡、小佐原遺跡、東長峰遺跡などの集落が千曲川沿いの丘陵や川岸に立地する。また、千曲川東岸の扇状地状に中野市西条岩船遺跡群、間山遺跡などの集落跡が確認されている。上流には長野市の浅川扇状地遺跡群(檀田遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡)、長野吉田高校グラウンド遺跡、神楽橋遺跡、下宇木遺跡、榎田遺跡、春山B遺跡、町川田遺跡、松原遺跡などの集落跡が確認されている。また、中野市安源寺遺跡(112)の土坑墓群、長野市春山B遺跡、飯山市須多ヶ峯遺跡の方形周溝墓群などの群集する墓が確認されている。一方、本遺跡から北東へ17kmの木島平村根塚遺跡では弥生後期の単独で独立した墳丘墓があり、その周辺から韓半島との関わりを示す渦巻き文様の有る鉄剣が出土している。古墳時代への移り変わりを考える上で重要な資料である。

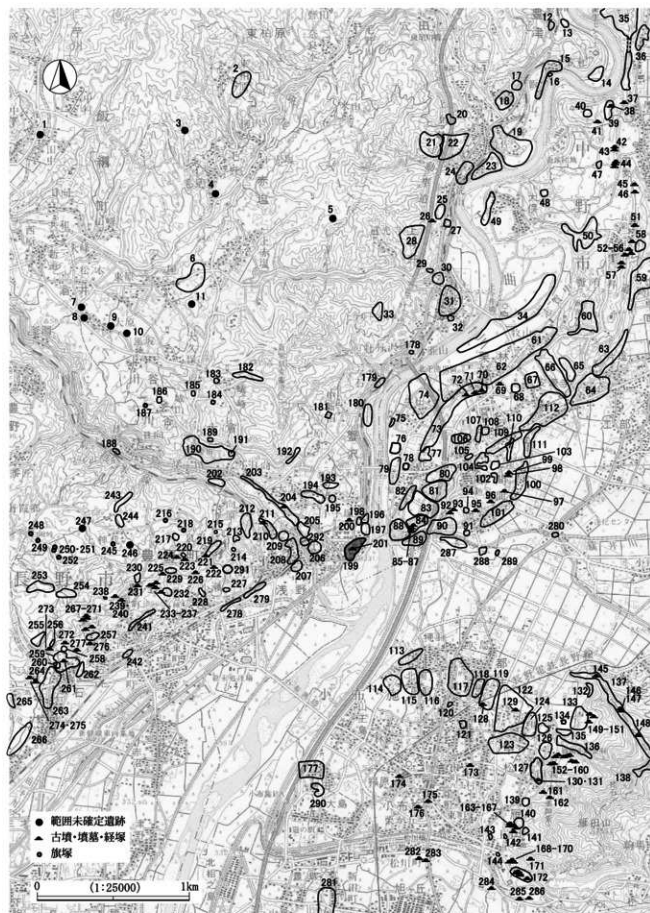
弥生時代後期末から古墳時代初めにかけては、中野市の牛出古窯遺跡(73)、牛出遺跡(74)、飯山市柳町遺跡などの集落、長野市川田条里遺跡の単独で存在する方形周溝墓や、中野市安源寺城跡遺跡(66)、長野市北平1号墳などの前方後方(型)墳丘墓が確認されている。

古墳時代：今回の調査では古墳時代の遺構は確認されず、埴輪破片、銅鏡破片、前期と中期の土器片が数点出土したのみであり、旧豊野町内の様子を概観するととどめる。古墳時代の遺跡の発掘例が少なく、集落跡は明らかにされていない。立石ヶ丘遺跡(203)、明神前遺跡(263)、北石遺跡(259)などで前期の土師器が出土しており、これらの中に北陸系や東海系の土器が認められる。また、前期古墳の存在は明らかになっていない。中期の古墳では、虚空蔵山古墳、粟ノ平古墳(274)、神楽殿古墳(273)などが想定されているが、発掘調査が行われていないため詳細は不明である。後期古墳では、山崎古墳(211)などの発掘調査例があるが、他では八雲台1号古墳(233)出土とされている須恵器や金環、上伊豆毛古墳(237)の金環と勾玉、東宇山古墳(231)の直刀と鉄鍔、南曾峯古墳(201)の直刀と銀象嵌のある鐔などの遺物が伝えられているのみである。後期古墳は千曲川西岸の丘陵部にまとまっており、南曾峯遺跡(199)がある鳥居川沿いの丘陵部には稀薄である。

なお、中野市高遠山古墳は近年の発掘調査で東日本最古級の前方後円墳であると評価されている。また、奥信濃では、本遺跡の下流11.7kmに善光寺平最古段階とされる飯山市勘介山古墳や中野市蟹沢古墳などの前方後方墳があり、長野県最古段階の弘法山古墳に後続して作られたと想定されているが(豊野町誌刊行委員会2000)、発掘調査は行われていない。周辺地域のその他の古墳の分布状況は第5図と第2表を参照していただきたい。

奈良・平安時代：旧豊野町内では北土井下遺跡(262)、中ノ丁遺跡(266)などで奈良時代の須恵器・土師器が、松ノ木下遺跡(212)、立石ヶ丘遺跡(203)、大久保遺跡(229)、北土井下遺跡(262)などで須恵器・土師器・灰釉陶器などが比較的多く出土している。しかし、竪穴住居跡が確認されたのは南曾峯遺跡(199)のみであり、貴重な資料といえよう。

さらに周辺地域をみると奈良時代の集落跡は中野市壁田遺跡、替佐遺跡群(19)、沢田鍋土遺跡(83)などで確認されている程度で、奈良時代の明確な集落跡は発見例が少ない。平安時代では、中野市の牛出遺跡(74)、栗林遺跡(62)、安源寺遺跡(112)、風呂屋遺跡(25)、替佐遺跡群(19)、飯綱平遺跡(18)、宮反遺跡(49)、飯山市の田草川尻遺跡、黄金石上遺跡、上野遺跡など千曲川沿いにある遺跡と、中野市の西条岩船遺跡群、上小田中遺跡、新野遺跡、間山遺跡、小布施町の中子塚遺跡(119)、大道上遺跡(123)など千曲川に流れ込



第5図 南曾峯遺跡周辺の遺跡

地図 番号	遺跡名	所在地	田 石 器	弥 文 器	古 墳	奈良 古 墳	近 世	中 世	近 世	調査歴
1	田中下土浮遺跡・ 宇川氏館跡	宇川	○	○	○	○			○	1013~15
2	東柏原遺跡	東柏原	○	○	○	○				
3	上今田遺跡	赤塩								
4	毛見遺跡	赤塩								
5	鶴尾敷遺跡	赤塩			○					
6	上赤塩遺跡	赤塩	○	○					S35-53, 107	
7	7号館風敷遺跡	倉井								
8	中田遺跡	倉井			○					
9	大原遺跡	倉井			○	○				
10	桜田遺跡	倉井								
11	一ツ原遺跡	倉井			○					
12	袖久保遺跡	豊津								
13	大日影遺跡	豊津	○							
14	尾野島(渡輪)遺跡	豊津		○	○				831, 023	
15	笠倉遺跡	豊津							823	
16	笠倉館(森の家)跡	豊津								
17	飯綱平北遺跡	豊津			○					
18	飯綱甲遺跡	豊津			○	○	○	○	104-16	
19	替仕遺跡群 (川久保・宮沖・薬 浜)	豊津		○	○	○	○		841, 106-10	
20	境山遺跡	豊津		○	○	○			106	
21	替仕城跡	豊津								
22	対面所遺跡	豊津						○	107	
23	千田遺跡	豊津		○	○	○	○		103~15/ 17-18	
24	南大河遺跡	豊津								
25	風呂屋遺跡	上今井		○	○	○			106	
26	風呂屋古墳	上今井							106	
27	風呂屋厨屋跡	上今井								
28	北城城址	上今井								
29	寺理宮址	上今井				○			103	
30	西山横遺跡	上今井								
31	山根遺跡	上今井		○	○	○			103	
32	内壘館跡	上今井								
33	南城城址	上今井								
34	南大河遺跡	中今井		○	○	○			826・82・84, 1023	
35	壁田城跡	壁田								
36	ねごや遺跡	壁田				○				
37	永基古墳	厚貝								
38	赤畑古墳	厚貝								
39	陣場遺跡	厚貝	○	○	○					
40	峯遺跡	厚貝	○							
41	山の神古墳	田友				○			823	
42-44	中級1~5号古墳	田友							861・62	
45-46	林群1・2号古墳	田友							823	
47	三ツ又遺跡	田友								
48	大俣城跡	大俣								
49	宮反遺跡	大俣		○	○				858-59	
50	穂ヶ沢遺跡	大俣		○	○				857	
51	七瀬北原宮址	七瀬							863	
52-55	七瀬1~3・5号古墳	七瀬							861・62・63	
56	前山古墳	七瀬							850	
57	七瀬双子塚古墳	七瀬				○				
58	寿徳寺跡	七瀬								
59	七瀬遺跡	七瀬							858, 103・4-6	
60	浜津ヶ池遺跡	栗林・ 片塩	○	○	○				862, 106	
61	光南寺跡	栗林								
62	栗林遺跡	栗林	○	○	○	○	○		823・25-40, 44-52・54- 56-58・62, 103・4-6-11	
63	大徳寺遺跡	片塩			○					
64	片塩遺跡	片塩							835	
65	ふら酒遺跡	安源寺				○				
66	安源寺城跡	安源寺	○	○					1010	

第2表 南曾峯遺跡周辺の遺跡地名表

地図 番号	遺跡名	所在地	田 石 器	弥 文 器	古 墳	奈良 古 墳	近 世	中 世	近 世	調査歴
67	安源寺跡	安源寺								
68	安源寺館跡	安源寺								102
69	小丸山古墳	安源寺								
70-72	薬林1~3号古墳	薬林								
73	古宮遺跡	牛出	○	○	○	○	○	○	105-9	
74	牛出遺跡	牛出	○	○	○	○	○	○	106~8	
75	立ヶ花・上川端遺跡	牛出								
76	牛出城跡	牛出								106-9
77	草間西原宮跡	草間								
78	本誓寺跡	立ヶ花								
79	立ヶ花遺跡	立ヶ花	○	○	○	○	○	○	S37, 101・2・ 3・9・12	
80	池田端宮跡	立ヶ花								103・4
81	清水山宮跡	立ヶ花								104-6
82	立ヶ花表山宮跡	立ヶ花								545
83	興田土遺跡	立ヶ花	○	○	○	○	○	○	103・4・7・17・ 21・22	
84	立ヶ花表遺跡	立ヶ花								107, 103
85-87	立ヶ花1~3号墳	立ヶ花								
88	立ヶ花城跡	立ヶ花								855・59, 101, 108
89	島軒野遺跡	立ヶ花								
90	がまん(御)遺跡 (含、西山宮跡、西 山中央墓址、竜塚 寺跡)	草間	○	○	○	○	○		103・5	
91	草間城跡	草間						○		
92	竈塚古墳	草間								
93	西山古墳	草間								
94	上の山遺跡	草間								106
95	秋葉山古墳	草間								
96	御嶽山古墳	草間								
97	杜宮司古墳	草間								
98-99	高山1・2号古墳	草間								
100	高屋敷遺跡	草間								
101	草間中祖遺跡	草間								
102	上の山墓址	草間								105
103	大久保館跡	草間								
104	大久保宮跡	草間								830・58
105	林野宮跡	草間								
106	中原宮跡	草間								S59
107	東池田宮跡	草間				○				1016
108	坂下宮跡	草間								
109	茶臼宮跡	草間								S38・39・46
110	茶臼宮遺跡・茶臼 墓群(含茶臼墓 塚)	草間						○	○	849
111	風巻遺跡	安源寺								101
112	安源寺遺跡	安源寺	○	○	○	○	○			S26・29・40・ 41・51・54・ 59・60・61・ 62, 106-11
113	西郷遺跡	押羽								
114	向原宮遺跡	北國								
115	西津坊遺跡	北國								
116	三木遺跡	北國								
117	六川遺跡	都住								
118	清酒遺跡	都住								
119	中子塚遺跡	都住								S83
120	松宮遺跡	都住								
121	三田町遺跡	都住								
122	中条庵遺跡	中松								S28・31・32
123	大道上遺跡	中松								S51, 105
124	中町遺跡	榊田								
125	木下遺跡	榊田								
126	宮林遺跡	榊田								
127	清水堀遺跡	榊田								
128	鏡子塚古墳	都住								
129	古堂塚古墳	中松								
130-131	薬師堂3・4号墳	榊田								

第2章 遺跡の環境と概要

地図 番号	遺跡名	所在地	旧 石器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良 古墳	中 古	近 世	調査歴
	132 わく遺跡	藤田	○	○	○					
	133 飯淵前遺跡	藤田	○	○	○					
	134 木戸脇遺跡	藤田	○	○	○					
	135 権助土原遺跡	藤田	○							
	136 藤田城跡	藤田				○				
	137 二十階城跡	藤田				○				
	138 滝の入城跡	藤田				○				
	139 最明寺遺跡	藤田	○							
	140 新田原遺跡	藤田	○	○						
	141 蟹沢遺跡	藤田								
	142 観音崎遺跡	藤田								
	143 松川端遺跡	小 市	藤田	○						
	144 外不動遺跡	藤田				○				
	145-148 二十福1～4号墳	藤田				○				
	149-151 下入4～6号墳	藤田				○				
	152-160 岩松院1～8号墳	町	藤田	○						
	161-162 薬師堂1・2号墳	藤田				○				
	163-165 島の林1～3号墳	藤田				○				
	166-167 観音下1・2号墳	藤田				○				
	168-170 塚入塚1～3号墳	藤田				○				
	171 沢入古墳	藤田						562		
	172 外不動古墳群	藤田						549		
	173 大日堂古墳	大日								
	174 原村古墳	福原				○				
	175 万重塔古墳	上町				○				
	176 石碑古墳	福原				○				
	177 飯田古屋敷遺跡	飯田				○				
	178 釜山遺跡	中 野市	今井	○				386		
	179 ニツ石遺跡	豊野								
	180 小野井遺跡	豊野								
	181 柳栄寺跡	豊野				○				
	182 堰上遺跡	豊野	○							
	183 どうろく神坂遺跡	豊野								
	184 懸ヶ崎宮跡	豊野								
	185 竹原遺跡	豊野	○							
	186 白山遺跡	豊野								
	187 孤山塚群	豊野								
	188 日影川谷遺跡	豊野				○				
	189 長清寺跡	豊野								
	190 大倉城跡	豊野						386		
	191 北裏遺跡	豊野								
	192 箕羽田遺跡	豊野				○				
	193 八幡社遺跡	豊野								
	194 飯橋遺跡	豊野								
	195 下家遺跡	豊野	○							
	196 手子塚城跡	豊野								
	197 膳櫃遺跡	豊野								
	198 手子塚遺跡	豊野	○							
	199 南曾峯遺跡	中 野市	豊野	○	○	○	○		845・55、85 17～19	
	199 峠の塚遺跡	豊野								
	200 坊部（墳墓）	豊野				○				
	201 南曾峯古墳	豊野						832、85		
	202 向平遺跡	豊野				○				
	203 立石ヶ丘遺跡	豊野	○	○	○					
	204 立石ヶ丘古墳	豊野				○				
	205 観音堂遺跡	豊野	○	○	○					
	206 中島遺跡	豊野	○							
	207 町尻遺跡	豊野	○							
	208 大沼浜遺跡	豊野	○							
	209 大川端遺跡	豊野	○	○	○					
	210 上茂野遺跡	豊野	○	○	○			557		
	211 山崎古墳	豊野	○					557		
	212 松ノ木下遺跡	豊野	○							
	213 堤遺跡	豊野								
	214 塚宮跡	豊野								
	215 泉平宮跡	豊野								

地図 番号	遺跡名	所在地	旧 石器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良 古墳	中 古	近 世	調査歴
	216 十二瀬塚群	豊野								
	217 西殿寺遺跡	豊野						○		
	218 長保塚群	豊野						○		
	219 泉平遺跡	豊野						○		
	220 西殿寺跡	豊野								
	221-223 泉平1～3号古墳	豊野								
	224-225 大久保1・2号古墳	豊野								
	226 松塚古墳	豊野								
	227 ゴンゴ山遺跡	豊野	○							
	228 月光寺遺跡	豊野								
	229 大久保遺跡	豊野	○	○	○					
	230 聖林寺跡	豊野						○		
	231 東子山古墳	豊野								
	232 上伊豆毛遺跡	豊野								
	233-236 八雲台1～4号古墳	豊野								
	237 上伊豆毛古墳	豊野								
	238 徳満寺跡	豊野						○		
	239 行人塚古墳	豊野								
	240 西子山古墳	豊野								
	241 豊野遺跡・豊野宮跡	豊野						○	○	
	242 中尾遺跡	豊野								
	243 荒古宮跡群	豊野								
	244 荒古遺跡	豊野						○		
	245 荒古旗塚群	豊野								
	246 笹山遺跡	豊野						○		
	247 塚遺跡	豊野								
	248-252 鏡山一里塚塚群	豊野							○	
	253 清水窪遺跡	豊野								
	254 鏡山遺跡	豊野								
	255 二日城跡	豊野							○	
	256 石村城跡	豊野								
	257 蟹寺遺跡	豊野								
	258 山ノ神宮跡	豊野								S34
	259 北石遺跡	豊野	○	○	○					
	260 殿屋敷跡	豊野							○	
	261 徳長社古墳	豊野								
	262 北土井下遺跡	豊野	○	○	○					S58
	263 明神前遺跡・ 新野神社前遺跡	豊野								S52
	264 神宮寺跡	豊野							○	S41
	265 入石遺跡	豊野								
	266 中ノ丁遺跡	豊野	○	○	○					
	267-270 上ノ山1～4号古墳	豊野								
	271 蟹寺古墳	豊野								
	272 藤林古墳	豊野								
	273 神楽殿古墳	豊野								
	274 栗ノ平古墳	豊野								
	275 東野神社古墳	豊野								
	276 釈迦堂経塚	豊野								
	277 諏訪塚古墳	豊野								
	278 小瀬遺跡	豊野								
	279 西沖遺跡	豊野								
	280 殿橋遺跡	中 野市								
	281 左岸寺跡	小 河原							○	
	282-283 六川溝 西沖第1・2号古墳	小 河原								
	284 丹波塚古墳	日 田								
	285-288 白明塚第1・2号古墳	日 田								
	287 大久保遺跡	都 住							○	
	288 土橋遺跡	都 住							○	
	289 徳釣遺跡	都 住							○	
	290 坂の上遺跡	飯 田								
	291 前平宮跡	長 野市								
	292 橋場遺跡	豊 野市								

※ 288 は中野市では川瀬遺跡で登録されている

む河川の扇状地上にある遺跡が確認されている。

また、南曾峯遺跡(199)周辺には須恵器の窯跡が多数確認されている。千曲川西岸の髷山西南麓には髷山古窯址群、東岸には高丘陵古窯址群があり、それぞれ水内郡と高井郡の須恵器生産地とされている。これらの窯址群は7世紀末から平安時代にかけて操業されており、長野市豊野町の山ノ神窯跡(258)、蟻ヶ崎窯跡(184)、中野市の清水山窯跡(81)、池田端窯跡(80)、牛出古窯跡(73)、茶臼山窯跡(109)、立ヶ花表遺跡(84)など多数の奈良時代の窯跡が調査されている。清水山窯跡(81)では「佐政郡」「高井」などのヘラ描須恵器が出土しており、官窯の可能性が指摘されている。また、沢田鍋土遺跡(83)では須恵器生産に関わると考えられる工房跡(竪穴住居跡)、池田端窯跡(80)では粘土採掘跡が確認されている。

第4節 基本層序と調査成果の概要

1 基本層序

南曾峯遺跡の基本層序は丘陵部と低地部で異なっており、それぞれに基本層序を定めた。第6図に4か所の地点の土層柱状図を示した。地点1・2は丘陵上の1区と4区の土層。地点3・4は低地部の2区の土層で、地点3は自然流路(SD01)内、地点4は自然流路外の土層を示す。なお、1区と2区の調査区壁面土層断面図を第3章1節および3章2節に示した。なお、本報告書では基本層序はローマ数字で示し、遺構埋土は算用数字を用いている。

(1) 丘陵上の基本層序 (第6図・PL1)

丘陵上(1区・4区)の基本層序はⅠ層からⅤ層に区分し、Ⅲ層を更に細分した。Ⅱ層が縄文時代から平安時代の遺物包含層、Ⅲ層が旧石器時代の遺物包含層となる。Ⅲa層・Ⅲb1層は風成層の可能性があるが、Ⅲb2層以下は水成層である。

Ⅰ層：表土層(耕作土)。

Ⅱ層：黒褐色土(Hue10YR2/3)。

Ⅲa層：黄褐色シルト(Hue10YR5/6)。粘土質で乾くと非常に硬くなる。

Ⅲb層：シルト層と砂礫層の互層でⅢb1層～Ⅲb3層に分層される。Ⅲb2層は1区では東半部のみに確認できる砂礫層で、Ⅲb2層がない地点では、Ⅲb1層とⅢb3層の区分は困難なため、Ⅲb1層～Ⅲb3層をまとめてⅢb層群とした。

Ⅲb1層：黄褐色シルト(Hue10YR5/6)。明褐色シルト(Hue7.5YR5/8)が斑に混じる。Ⅲa層に比べ粘性が高い。

Ⅲb2層：砂礫層。直径1～3cm大の礫を主体とするが、0.5～10cm大の礫が含まれる。1区の東側に厚く堆積するが、西側には薄く、小礫が点在する程度となる。

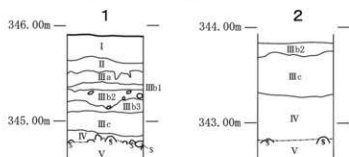
Ⅲb3層：明褐色シルト(Hue7.5YR5/8)。縦方向の網目状のクラック部分に灰黄褐色シルト(Hue10YR6/2)が混じる。黒色のマンガンの沈着がブロック状に認められる。

Ⅲc層：明黄褐色シルト(Hue7.5YR5/6～5/8)。横方向のクラックが顕著であるが、横方向のクラックより新しい縦方向のクラックも認められる。クラック内は黒色粘土(Hue10YR2/2)と灰白色粘土(Hue10YR7/1)である。

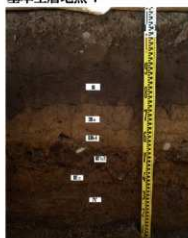
Ⅳ層：褐色砂質シルト(Hue10YR4/6)。Ⅲc層に比べ砂質。灰黄褐色シルトが斑点状に混じる。0.5～2cm大の礫を含むものをⅣ層とした(第3章1節参照)。

Ⅴ層：礫層。20～30cm大の礫が上面に目立ち、3～45cm大の礫が混在する。

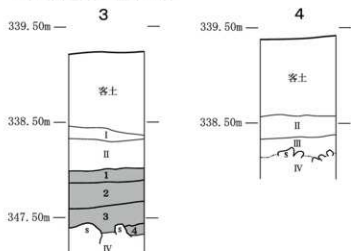
1区・4区(丘陵上)の基本土層



基本土層地点1



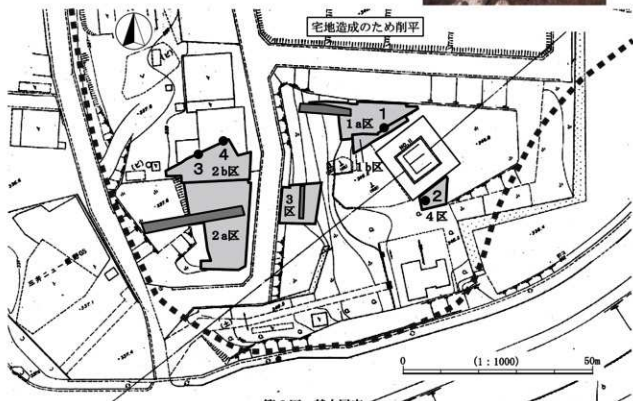
2区(低地部)の基本土層



基本土層地点3



※1層～4層はSD01の埋土



第6図 基本層序

なお、4区はⅡ層からⅢa層が欠如している。1区同様にシルトと礫層が確認された。横方向のクラックが顕著なⅢc層を鏡層として1区と対比したが、水成層であり確実な対比は困難である。

(2) 低地部の基本層序 (第6図)

低地部は調査区の多くの部分が縄文時代早期以前に離水した自然流路跡(SD01)に占められている。自然流路跡の土層は他の遺構埋土と同様に算用数字で示し、自然流路が及ばないところで基本土層を定めた。低地部の基本層序はⅠ～Ⅳ層に区分され、Ⅱ層が平安時代の遺物包含層、Ⅲ層は無遺物層である。Ⅳ層は自然流路の河床礫層と考えられる。河床礫層のさらに下層には、シルト層、粘土層の水成層があり、2a区北壁での調査終了後の立ち割り調査で、これらの水成層が褶曲で約45°傾いていることを確認した(写真参照)^(註5)。



2a区壁面土層断面

Ⅰ層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)。表土。

Ⅱ層：にぶい黄褐色土～暗褐色土(Hue10YR4/3～3/3)。

Ⅲ層：黒褐色土(Hue10YR2/2)。白色岩粒を多く含み、砂質。硬くしまる。

Ⅳ層：暗褐色混土礫層(Hue10YR3/3)。Ⅲ層との境界部に砂を混じる。部分的に暗褐色混土礫層。礫は2～3cm大から人頭大のものが多く、1m大を超える大型の礫も含む。SD01部のⅣ層上面には砂礫が堆積しており、Ⅳ層堆積後に離水したものと判断できる。

基本土層地点3は自然流路跡(SD01)内であり、以下に記す算用数字の1～4層はSD01の埋土である。なお、2層は弥生時代と平安時代の遺物包含層、3層と4層は縄文時代の遺物包含層である。

1層：暗褐色土。基本土層Ⅱ層と埋土2層の漸移層。

2層：黒褐色土(Hue10YR2/2)。粘性が強い。

3層：黒褐色土(Hue10YR2/3)。2層より大粒の白色粒、褐色粒を多量に含む。

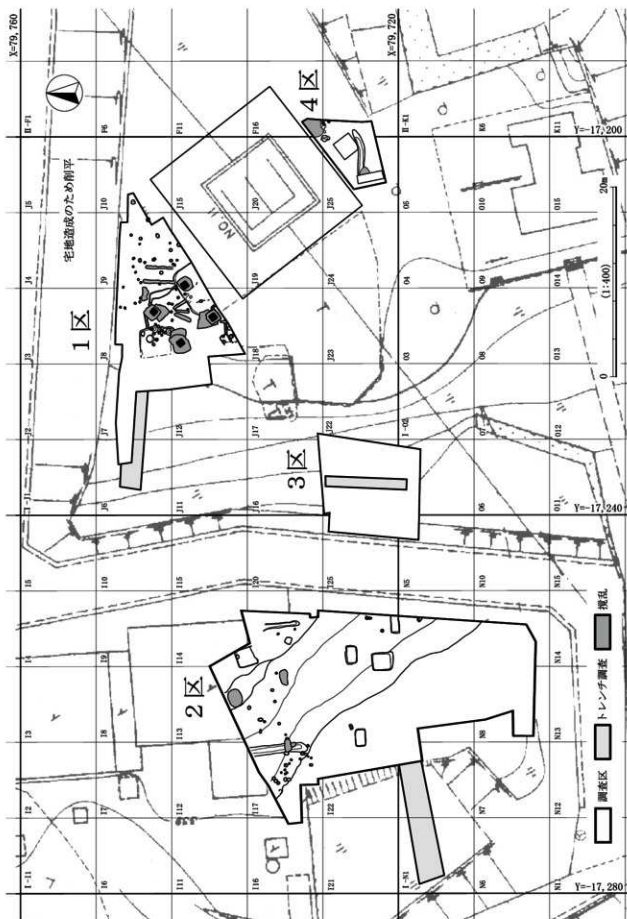
4層：暗黄褐色土。白色粒、褐色粒を多量に含む。炭化物を含む。粘性が強く、乾くと非常に硬い。

2 調査成果の概要 (第7～10図)

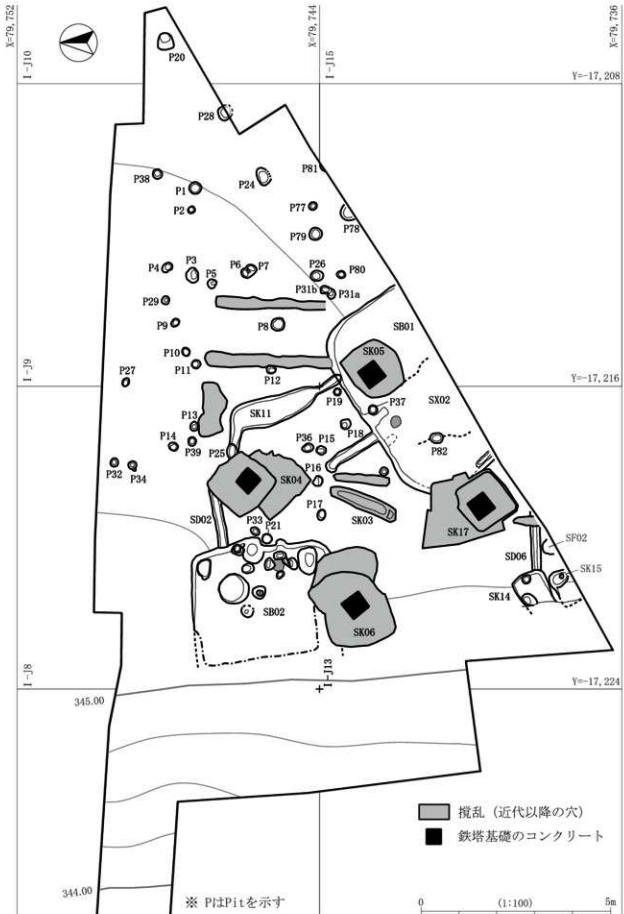
3ヶ年にわたる発掘調査の結果、断続的ではあるが旧石器時代から近世までの生活の痕跡が発見された。旧石器時代のブロック3か所、礫群2か所、縄文時代以前の自然流路、平安時代の竪穴住居跡2棟、時期不明の掘立柱建物跡とみられるピット群、中世の土坑などの遺構を確認した。この他、自然流路(SD01)から縄文時代、弥生時代中期、古墳時代、平安時代の遺物が出土した。なお、今回の発掘調査では、弥生時代後期、奈良時代の遺物が確認されていない。

丘陵平坦部の1区では旧石器時代のブロックと平安時代の竪穴住居跡、時期不明のピット群が確認された。4区では平安時代と推定される竪穴住居跡の痕跡が確認された。1区で確認された旧石器時代の石器群は2,400点を超え、出土層位により大きく二時期に区分される。また、黒曜石産地推定分析の結果、時期別に産地が異なる傾向にあることが明らかとなった。

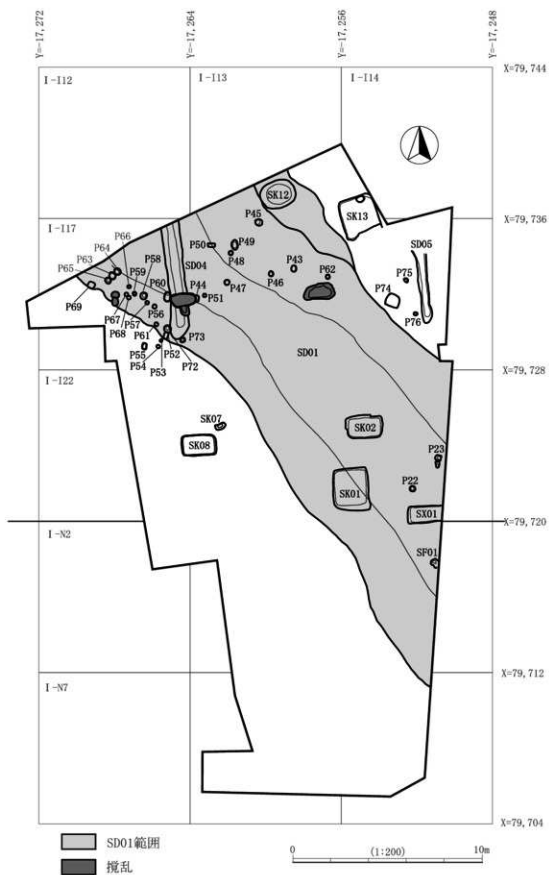
2区では前述の自然流路(SD01)の他、中世以降の土坑、時期不明のピット群等が確認された。縄文時代に離水した自然流路埋土の最下層からは、縄文時代早期から晩期の遺物群、それより上層には弥生時代中期栗林式土器とそれに伴う石器群、平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器などが混在して



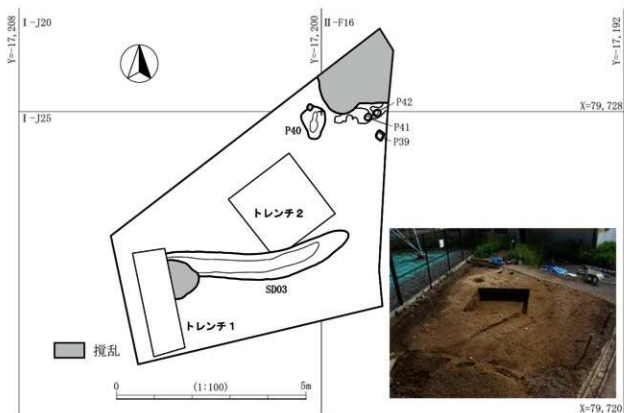
第7図 遺構配置図



第8図 1区遺構配置図



第9図 2区遺構配置図



第10図 4区遺構配置図

おり、土鍾、勾玉（弥生時代中期）、埴輪破片、銅鏡破片（古墳時代）などの遺物も出土した。栗林式土器と平安時代の須恵器・土師器は当該期の遺構が稀少である割に多量に出土しており、調査区周辺に集落域が広がっており、出土遺物は自然流路のくぼみに廃棄されたものと判断できる。今回の調査では、縄文時代以降の遺物の大半はこの自然流路から出土した。

上記のとおり、遺物・遺構の多くは1区（丘陵平坦部）と2区（低地部）で検出された。丘陵急斜面部の3区は、二次堆積層から摩耗した遺物が数点出土したのみであることから、遺構や遺物包含層は存在しないと判断し、トレンチ調査のみで終了とした。

引用・参考文献

- 飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡—昭和60年度市内遺跡詳細分布調査報告書—』
 飯山市誌編纂委員会 1993 『飯山市誌 歴史編（上）』
 大竹憲昭 2000 「第5章 成果と課題」『貫ノ木遺跡・西岡A遺跡 旧石器時代』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48
 大竹憲昭 2010 「『竹佐中原遺跡石器文化』の時代性に関して（予察）」『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書85
 小布施町教育委員会 1987 『長野県上高井郡小布施町遺跡詳細分布図』
 柴田 徹 2011 「構成石材から見た南関東地方における弥生時代の磨製石斧—千葉県佐倉市大崎大遺跡と神奈川県秦野市砂田台遺跡の磨製石斧から—」『物質文化』91
 須坂市教育委員会 1985 『須坂市遺跡詳細分布図』
 高山村教育委員会 1984 『高山村遺跡詳細分布図』
 谷 和隆・大竹憲昭 2003 「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」『第15回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」—発表資料—』

第2章 遺跡の環境と概要

- 谷 和隆 2004 「第5章第1節 旧石器時代石器群の位置付け」『貫ノ木遺跡 照月台遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 62
- 谷 和隆 2007 「野尻湖遺跡群における先石器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館 研究紀要』第13号
- 豊野町教育委員会 1985 『南曾峯遺跡』
- 豊野町誌刊行委員会 1997 『豊野町の自然 豊野町誌1』
- 豊野町誌刊行委員会 2000 『豊野町の歴史 豊野町誌2』
- 豊野町誌刊行委員会 2001 『豊野町誌 豊野町の資料(一)』
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 遺跡地名表』
- 中島庄一 1997 「第9章第1節 高丘陵地における中期・後期旧石器時代移行期から後期前半期の石器群—がまん淵遺跡を中心として」『飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡遺跡・がまん淵遺跡他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24
- 中島庄一 2006 「中野市周辺の調査と石器群—南曾峯・沢田鍋土・がまん淵—」『第18回長野県旧石器文化研究交流会 シンポジウム後期旧石器時代以前の遺跡・石器群をめぐる諸問題 発表資料』
- 中野市教育委員会 2006 『長野県中野市遺跡詳細分布図』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『春山遺跡・春山B遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 45
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『松原遺跡 弥生・総論』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『川田条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 47
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『長野県埋蔵文化財センター 年報21』
- 長野県埋蔵文化財センター 2008 『長野県埋蔵文化財センター 年報24』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009 『長野県埋蔵文化財センター 年報25』
- 長野県埋蔵文化財センター 2011 『長野県埋蔵文化財センター 年報27』
- 馬場伸一郎 2001 「南関東弥生中期の地域社会(上)(下) —石器石材の流通と石器製作技術を中心に—」『古代文化』53-5、53-6
- 馬場伸一郎 2009 「弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通」『駿台史学』第120号
- 馬場伸一郎 2011 「粟林式土器分布圏の石器・石製品と弥生中期社会」『長野県考古学会誌』138・139 合併号
- 町田勝則 2008 「石器に弥生の社会を読む」『赤い土器のクニ』の考古学』
- 町田勝則 2010 「中部日本」『季刊考古学』第111号 特集石器生産と流通にみる弥生文化』
- 牟礼村教育委員会 2000 『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』

注

- 1) 豊野町は平成17年(2005年)に長野市と合併しており、旧豊野町内の遺跡分布図はWeb上の「長野市行政地図情報 遺跡地図(埋蔵文化財)」で公開されている。
上記のホームページアドレスは <http://www2.wagamachi-guide.com/nagano/top/select.asp?dtp=7&pl=3>
- 2) 豊野町誌刊行委員会 2001 『豊野町誌 豊野町の資料(一)』313頁
- 3) 南曾峯遺跡から千曲川上流にある遺跡で、南曾峯遺跡からは中俣遺跡で7.5km、浅川扇状地遺跡群で9.5km、榎田遺跡で11.5km、春山B遺跡で12.9km、川田条里遺跡で13.7km、松原遺跡で18.3kmの距離にある。
- 4) 南曾峯遺跡から千曲川下流にある遺跡で、南大原遺跡で3.5km、柳沢遺跡で10.5km、北原遺跡で18.0km、小泉遺跡で20.7km、上野遺跡で21.5kmの距離にある。
- 5) 2区北壁の深掘り調査の断面の略図を添付CDに収録した。

第3章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代

1 調査の概要

(1) 調査方法

旧石器時代に関わる調査は3次に分けて実施した(第11図上図)。石器群は丘陵上の1区から検出され、旧石器時代に関わる調査区は平坦面の129㎡である。調査区西側の斜面は、表土直下が礫層であり、旧石器時代の遺物包含層が認められなかった。

調査区には、縄文時代の土坑、平安時代の竪穴住居跡と土坑、時期不明のピット群、送電線鉄塔の基礎工事による擾乱などがあり、土坑と竪穴住居跡と鉄塔基礎工事は旧石器時代の包含層まで掘り込まれていたが、3次にわたる調査でブロック3ヶ所(SQ01～SQ03)と礫群2基(SH04・SH05)を調査した(第12図)。基本土層は第2章4節の第6図に示したが、各層が調査区全面に均質に堆積していないため、調査区壁面の土層図を第13図に示した。特に、遺物包含層を上下に区分する砂礫層が調査区全体に分布しないことから、後述する上層石器群と下層石器群の区分にあいまいな部分を残すこととなった。

基本土層Ⅲa～Ⅲc層を中心に、2,400点を超える石器群が出土し、これらの遺物群は調査区北東側に広がる砂礫層(Ⅲb2層)を挟んで2時期の石器群に区分できる。1号ブロック(SQ01)が上層石器群、2号(SQ02)・3号ブロック(SQ03)が下層石器群となる。礫群はSH04が上層石器群に、SH05が下層石器群に伴う。下層石器群の分布範囲周辺は基盤礫層(V層)まで掘り下げ、それ以外の部分ではIV層上部から中部まで掘り下げた(第11図)。

発掘調査は、Ⅲa層上面まで重機で掘下げ、それ以下の土層を両刃鎌で掘り下げた。遺物出土地点は土柱を残し掘り下げ、出土層位、遺物出土位置(座標値と標高)を記録した。調査区内に十字のベルトを残し掘り下げ、そのベルト部分の土壌を1mグリッド単位で2mm～5mmの篩(ふるい)にかけ、碎片、剥片を採取した。調査区全域の土壌を篩うことはできなかったため、碎片については多量のサンプリングエラーが予想される。また、火山灰分析と光ルミネッセンス年代測定を実施した^(註1)。

なお、旧石器時代の調査については、2m×2mのグリッドを用いて調査をおこなった。分布図、遺物観察表のグリッドは小地区のグリッド名称を用いている(第1章2節(2)参照)。

(2) 石器群の観察と検討作業

遺物に注記をした後、石器群の石材分類と母岩別資料分類、接合作業を実施した。母岩別資料分類は、剥片石器群の碎片以外を対象におこなった。黒曜石の母岩別資料分類は沼津工業高等専門学校望月明彦教授による委託研究で実施した蛍光X線分析による産地推定結果に基づき分類をおこなった。

出土遺物全点の長さ、幅、厚さ、重量、欠損状況、自然面の有無などの属性を観察し、報告書掲載遺物と剥片については巻末の遺物観察表に示した。

二次加工がある黒曜石製の石器について、キーエンス社のデジタルマイクロスコープVH-6300を用いて使用痕の観察をおこなった。観察結果の写真をDVDに収録した(PDF形式)。

2 石器群の出土層位

旧石器の大半は基本層序Ⅲ層から出土した（第3表）。少数の石器がⅠ・Ⅱ層から出土したが、Ⅳ層からは出土していない。基本層序Ⅲ層は5層に細分した。砂礫層であるⅢb2層を挟んで、上層石器群はⅢa層・Ⅲb1層、下層石器群はⅢb3層・Ⅲc層にその大半が含まれる。これらの遺物包含層はいずれも水成のシルト層である（第12・13図）。基本層序は第2章4節に記述したとおり、Ⅲa層が黄褐色シルト、Ⅲb1層は粘性が強い黄褐色シルト、Ⅲb2層は砂礫層、Ⅲb3層は明褐色シルト、Ⅲc層は明黄褐色シルトとなる。

なお、調査区南西側にはⅢb2層（砂礫層）の堆積が認められず、Ⅲb1層とⅢb3層の区分が不明瞭であったため、調査区南西側では出土層位から上層石器群と下層石器群とを明確に区分することは困難である（第12・13図）。明確に上下の石器群を区分できない遺物は、便宜的に上層石器群と認識し発掘調査を進めた。平成18年度の調査では当初基本層序Ⅲ層を細分していなかったため、基本層序名と異なる層名を付けている。また、Ⅲb2層が分布しない部分ではⅢb1層とⅢb3層の区分が困難であったため取上げ層位はⅢb層とした。遺物の取り上げ層位と基本層序の関係は下記のとおりである。

(基本層序)	(遺物取上げ層位名)
Ⅰ層	1 (Ⅰ) 層
Ⅱ層	2 (Ⅱ) 層
Ⅲa層	Ⅲ層上部
Ⅲb1層	Ⅲb上面、Ⅲb ^(註2)
Ⅲb2層	Ⅲb2層
Ⅲb3層	Ⅲb、Ⅲb3層
Ⅲc層	Ⅲc層

3 遺構

(1) 上層石器群と下層石器群の区分

出土層位と母岩別資料分類と平面分布位置を考慮して、石器群を上層石器群と下層石器群に区分した。すなわち、調査時に層位的区分で上層石器群としたものでも、母岩別資料分類の観察から、同質母岩がⅢb2層（砂礫層）に覆われたⅢb3・Ⅲc層から出土した石器は、出土層位に関わらず下層石器群とした。また、調査時に下層石器群としたものでも、同質母岩の主体が上層石器群であるものは上層石器群の資料と認識した。

(2) 下層石器群の石器集中と礫群

SQ02 (2号ブロック) (第14・15・17図)

Ⅲc層を主体に出土した石器群である。ナイフ形石器2点、刃器1点、敲石1点、石核11点、剥片39点が出土した。第21図10のナイフ形石器は攪乱出土であり、他の石器とは共伴しない可能性がある。第21図4は出土レベルを考慮するとⅢb1層に相当し上層石器群に含まれる可能性があるが、SQ02の分布範囲の中心に出土しており、上層石器群のSQ01の分布域からは外れていることと、型式学的特徴がSQ03のナイフ形石器と類似することから下層石器群とした。石材組成は第4表のとおりであり、チャートを主体とする。特に赤褐色チャートが多くみられる。

調査区南壁際で確認され、石器の分布状況から調査区外へは広がらないと考えられる。3.5m×2.2m

の範囲に分布する。分布状況から、石器集中の南東側の攪乱部分（鉄塔脚の基礎）にも遺物が分布していたと思われる。竪穴住居跡（SB01）の掘り込みは包含層のⅢc層まで達していないので、SB01までは石器は分布していないことが確認できる。SQ02の範囲内に礫群SH05があり、両者ともⅢc層に生活面が想定され、関連するものと判断できる。接合資料は9個体確認され、すべてブロック内での接合である。接合関係、石器群の詳細は後述する。

SQ03（3号ブロック）（第14・15・17図）

Ⅲb3層とⅢc層を主体に出土した石器群である。SQ03は上層石器群（SQ01）の分布範囲に重なっているが、SQ03の東側では砂礫層（Ⅲb2層）を間層に挟んで、上層石器群とは層位的に明確に区別される。ただし、砂礫層が覆っていない西側ではSQ01との層位的な区分は明確ではない。ナイフ形石器9点、搔器5点、揉錐器5点、削器1点、鋸歯緑削器2点、挟入削器5点、二次加工がある剥片12点、刃器6点、石核11点、剥片365点、碎片89点が出土した。石材組成は第4表のとおりであり、黒曜石、凝灰質頁岩を主体とする。5.5m×3.6mの範囲に石器が分布し、特に直径2.5mの円形の範囲に密集する。また、密集部の北縁にナイフ形石器3点がまとまって出土した（第17図）。接合資料は21個体確認され、すべてブロック内での接合である。接合関係、石器群の詳細は後述する。

SH05（礫群2）（第14～16図）

Ⅲc層から出土。SQ02の分布範囲内に検出され、80×68cmの範囲に28点の礫がまとまって出土した。特に68×20cmの範囲に大半の礫が集中し、その集中部には石核（第27図49）が出土した。礫群を構成する礫は、円礫を主体とし、すべて拳程度の大きさである。自然面が赤褐色または黒褐色に変色したものの、細かなひび割れが認められるものなど、被熱が想定される礫が19点確認される。また、破損したものもあり、礫群内での接合が1例ある。周辺に炭化物は確認されなかった。

（3）上層石器群の石器集中と礫群

SQ01（1号ブロック）（第18～20図）

Ⅲa層とⅢb1層から主体的に出土した石器群である。ナイフ形石器7点、搔器6点、削器4点、挟入削器5点、彫器3点、二次加工がある剥片4点、刃器10点、敲石5点、石核6点、剥片470点（うち石刃2点）、碎片1273点が出土した。第31図60のナイフ形石器はⅡ層下部から出土しており、原位置を保っていないと考えられる。これらの他に、SB01・02とSK11の埋土から268点の剥片と碎片が出土した（第4表）。これらは本来SQ01に含まれるものであると考えられる。大半が黒曜石の碎片である。

竪穴住居跡（SB01・02）と土坑（SK11）の掘削がⅢb1層下部まで達しており遺物包含層が失われているため、遺物分布図では空白となっているが、上記の遺構埋土の石器出土状況を考慮すると、これらの遺構の部分にも石器群が分布していたものと考えるのが妥当であろう。石器群は広範囲に分布しており、特に北側は調査区外に分布の広がりが予想されるが、すでに遺物包含層は削平されている。10.5m×9.5mの広範囲に石器群が分布し、特にI-J108・09グリット周辺の2.5mの範囲に遺物集中が認められる。この分布密度が高い部分では、碎片が多数出土している。

接合資料は13個体確認され、すべてブロック内での接合である。接合関係、石器群の詳細は後述する。

SH04（礫群1）（第18・19図）

Ⅲa層下部で6点の礫が検出された。調査区南壁際のSQ01の縁辺部に、10cm前後の円礫が直径30cmの範囲にまとまって出土した。すべて輝石安山岩である。2点は赤色を帯びて割れており、被熱した可能性がある。いずれも円礫で、接合資料が1個体あり5点の礫となる。周辺に炭化物は確認されなかった。



SH04（北より）

第3章 遺構と遺物

器種	ナイフ形石器	掻器	掻雑器	削器	鋸歯縁削器	抉入削器	彫器	二次加工がある剥片	刃器	石刃	石核	剥片	砕片	蔽石	礫	欠損部接合資料	合計
I												6	2				8
II	1								1			7	14				23
III a	3	5		2		5	1	3	6	2	4	324	802	4	7	1	1169
III b	1						1	1	1			2	70	168			244
III b-1	2	1		1			1	1	3			2	77	269	1	2	360
III b-2												12	10				22
III b-3	3	2	3	2	1	1		3			1	71	30			2	119
III c	6	3	2		1	4		8	6		19	286	50	2	28	9	424
クラック													8	8			16
攪乱	2											10	6				18
不明												1	3				4
合計	18	11	5	5	2	10	3	16	17	2	28	872	1362	7	37	12	2407

※ III b 層は III b2 層の堆積がなく、III b1 層または III b3 層のいずれかで判断できないもの。
ただし、出土レベルから III b1 層に該当するものが多いと判断できる

器種	ナイフ形石器	掻器	掻雑器	削器	鋸歯縁削器	抉入削器	彫器	二次加工がある剥片	刃器	石刃	石核	剥片	砕片	蔽石	礫	欠損部接合資料	合計	
																		石器群区分遺構名
上層	SQ01	7	6		4		5	3	4	10	2	6	468	1273	5	3	1	1797
	SH04															6		6
下層	SQ02	2							1		11	39		1				54
	SQ03	9	5	5	1	2	5		12	6	11	365	89		1	11	522	
	SH05														1	27	28	
合計	18	11	5	5	2	10	3	16	17	2	28	872	1362	7	37	12	2407	

第3表 器種組成表

石材	遺構名	黒曜石	チャート	凝灰質頁岩	頁岩	無斑晶質安山岩	珪質頁岩	硬砂岩	流紋岩	輝石安山岩	安山岩	閃緑岩	その他	合計
1区	SQ01	1544	141	78	18	23	7	6	1	2				1821
	SQ02	1	30	17	1	4								53
	SQ03	160	31	223	80	3			1				1	499
	SH04									6				6
	SH05									16	5	1	6	28
	小計	1705	202	318	99	30	7	6	2	24	5	1	8	2407
	SB01	68	12		7	5	1		1					94
	SB02	17	2			8	2							29
2区	SK11	110	18		1	5	6	1	2				2	145
	SD01					1								1
合計	1900	234	318	107	49	16	7	5	24	5	1	10	2676	

※ SB01・SB02・SK11は剥片・砕片のみの点数。SD01は旧石器時代の石器(石刃)のみの点数。

第4表 石材組成表

4 遺物

(1) 石器群の概要

今回の調査では、旧石器時代の遺物と認識した資料が2,407点出土した。その他に縄文時代以降の遺構埋土から出土した旧石器時代の石器群と想定される資料が268点ある。出土層位別の遺物点数を第3表に示した。

ア 器種組成

1区から出土した旧石器時代の石器群は、ナイフ形石器18点、搔器11点、揉錐器5点、削器5点、鋸歯縁削器2点、挟入削器10点、彫器3点、二次加工がある剥片16点、刃器17点、石核28点、剥片874点(石刃2点を含む)、碎片1,362点、敲石7点、礫37点が出土した(第3表)。これらは上層石器群と下層石器群に区分される。この他、2区より無斑晶質安山岩の石刃が1点出土した(第36図96)。

本書でおこなった旧石器時代の石器群の器種分類の基準を以下に示す。

ナイフ形石器：剥片の鋭い縁辺を一部に残し、他の縁辺を細部加工した石器。台形石器もこの定義にあてはまるが、全体の形状で先端を尖らせているものをナイフ形石器とした。

搔器：連続する加工により、厚い刃部が作り出されている石器。平面形は円形、拇指状を呈するものが多い。刃部の角度が45°以上のものを搔器、それ以下のものを削器とする。

揉錐器：二側縁もしくは一側縁の加工により錐状の先端部が作り出されている石器。

削器：連続する加工による刃部をもつ石器。形態や加工は様々である。

鋸歯縁削器：連続する強い加工や平坦な加工により、鋸歯縁状の刃部が作り出されている石器。

挟入削器：削器のうち刃部がノッチ状になるもの。

彫器：槓状剥離によって作り出された彫刻刀面を持つ石器。

二次加工がある剥片：二次加工が認められるが器種名がつけられない石器。製品の破片で、器種名が判別できなかったものがある。

刃器：剥片剥離による調整加工が認められない鋭利な刃部を有する剥片で、線条痕、微細な剥離などの使用痕が観察される石器。折断加工がおこなわれるものがある^(註3)。

剥片：石核や原石から意図的に打ち剥がされた石片で、二次剥離、線条痕等の使用痕が認められないもの。以下の特徴をもつものを特に石刃、削片、破碎剥片と区別した。

石刃：規則的に連続して剥離された、左右側縁がほぼ平行する細長い剥片。そのものが使用されるほか、ナイフ形石器等の素材となる。

削片：槓状剥離によって剥がされた剥片。

破碎剥片：節理面などでの破碎により、通常の剥片剥離がおこなわれず、打面と主要剥離面が不明なもの、および欠損により形状が不明なもの。石核が破碎したものを含む。

碎片：剥片剥離や石器の調整加工をおこなう時に生じる非目的的な細かい石屑。剥片との厳密な区別が難しく、本書では1cm角の正方形におさまるものを碎片とした。剥片が欠損し1cm以下となったものも便宜的に碎片に分類した。

石核：剥片が剥離された石塊。

敲石：礫の端部に敲打痕がある石器。

イ 石材組成

各遺構の石材組成を第4表に示した。石材組成は各ブロックで異なっており、上層石器群のSQ01では黒曜石が85%を占める。ただし、SQ01の黒曜石の大多数は破片であり、SQ01の剥片石器群の重量比による石材組成を見ると凝灰質頁岩、頁岩、黒曜石、チャートの順になり、黒曜石比率は25%程度となる。下層石器群のSQ02・03では黒曜石の割合は低くなり、SQ02では黒曜石はナイフ形石器の1点のみである。また、黒曜石産地推定の結果、SQ03では諏訪屋ヶ台群が主体となり、SQ01は和田麓山群が主体となることが明らかとなった。また、チャートでは、下層石器群には赤褐色のチャートが多く、上層石器群では青灰色のものが多い傾向が認められる。下層石器群の頁岩（母岩別資料：頁岩101）は、風化がほとんど認められず表面が新鮮な割れ面と同じ黒色を呈しており、近隣の遺跡では見られない石材である。報告では頁岩としたが、遺跡の北方の夜間瀬川や志賀高原で採取される安山岩の可能性があると指摘されており、今後の検討課題である^(註4)。

ウ 母岩別資料と接合資料

母岩別資料分類は、剥片石器群の破片以外を対象におこなった。ただし、剥片と接合した破片、明らかに同一母岩^(註5)と認識した破片については母岩別資料分類の対象とした。母岩別資料は出土層位を考慮したうえで分類をおこなった。接合作業に十分な時間をかけられなかったため、接合資料数は43個体(142点)と少なく、同一母岩の認定も不確実な部分もある。特に黒曜石は出土点数が多く、他の石材に比べ精度の高い母岩別資料分類が困難であり、あいまいな部分を含んだ分類であると了解いただきたい。母岩別資料と接合資料の名称は以下のとおりとした。

母岩別資料名は石材名の後ろに算用数字を付した。算用数字は上層石器群に1～100、下層石器群に101～の番号を用いた（例：チャート1、頁岩101）。なお、類似するが別個体の可能性があるとは判断した場合は数字の後にアルファベットを付して区別した。

接合資料名は石材の略号（巻頭凡例参照）に算用数字を付した。算用数字は上層石器群に1～100、下層石器群に101～の番号を用いた（例Ch1、Sh101）。また別個の接合資料番号を付したものが接合した場合は、数字の大きいほうを欠番とした。

母岩別資料と接合資料の概要は第5・6表のとおりである。

なお、接合資料は剥離順のみではなく、剥離技術を説明するために以下のような記号式で剥離工程を記述する。

- 1 →は剥離の前後関係を示す。
- 2 ⇔は別系統で剥片剥離が行われる大形礫の分割を示す。
- 3 $\square + \square$ は剥片が折れて2点に分割したもの、 $\square \rightarrow \square$ は1度の加撃で同時割れした2点の剥片であることを示す（○には報告番号が入る）。
- 4 ()は剥片素材の石核（分割剥片）であることを示す。
- 5 $\square \rightarrow$ は、中抜けとなる、調査で採取されなかった剥片、あるいは接合を見つけれなかった剥片を示す。 $\square^{\times n} \rightarrow$ は未確認のn枚の剥片剥離があることを示す。
- 6 /は打面転移を示す。
- 7 =は剥片と残核との接合を示す。

「 $\square \rightarrow 53 + 54 \rightarrow 25 = 4$ 」の式（数字は遺物図版の報告番号）は、剥片を素材とした石核を用いて、発掘では採取されなかった剥片が剥離された後、53と54が接合した1点の剥片、25の順で剥離し、4が残核となった、ということを示す。

母岩別資料名	遺構名	点数	備考	母岩別資料名	遺構名	点数	備考
チャート1	SQ01	11		黒曜石1b	SQ01	5	
チャート2	SQ01	3		黒曜石1e	SQ01	17	黒曜石1eは黒曜石113と類似
チャート3	SQ01	4		黒曜石2a	SQ01	24	
チャート4	SQ01	6		黒曜石2b	SQ01	48	
チャート5	SQ01	4		黒曜石3	SQ01	2	
チャート6	SQ01	1		黒曜石4	SQ01	14	
チャート7	SQ01	2		黒曜石6	SQ01	3	
チャート8	SQ01	1		黒曜石9	SQ01	1	
チャート9	SQ01	1		黒曜石10	SQ01	1	
チャート10	SQ01	1		黒曜石11	SQ01	10	
チャート11	SQ01	1		黒曜石12	SQ01	15	
チャート101a	SQ02	6	チャート103Bと類似	黒曜石13	SQ01	4	黒曜石1aと類似
チャート101b	SQ02	4	チャート103Aと類似	黒曜石14	SQ01	1	
チャート102	SQ02	7		黒曜石16	SQ01	1	黒曜石6と類似
チャート103a	SQ02・03	10		黒曜石17	SQ01	1	
チャート103b	SQ02・03	16		黒曜石18	SQ01	1	
チャート104	SQ03	12		黒曜石19	SQ01	1	
チャート105	SQ02	1		黒曜石20	SQ01	1	
チャート106	SQ02	1		黒曜石21	SQ01	1	黒曜石4と類似
チャート107	SQ02	1		黒曜石22	SQ01	10	黒曜石101bと類似
チャート108	SQ02	1		黒曜石23	SQ01	3	黒曜石101bと類似
安山岩1	SQ01	1	無斑晶質安山岩	黒曜石24	SQ01	7	黒曜石1aと類似
安山岩2	SQ01	1	無斑晶質安山岩	黒曜石25	SQ01	6	黒曜石1aと類似
安山岩3	SQ01	1	無斑晶質安山岩	黒曜石26	SQ01	6	
安山岩4	SQ01	5	無斑晶質安山岩	黒曜石27	SQ01	11	黒曜石26と類似
安山岩5	SQ01	6	無斑晶質安山岩	黒曜石30	SQ01	6	
安山岩6	SQ01	3	無斑晶質安山岩	黒曜石31	SQ01	4	
安山岩101	SQ02	1	無斑晶質安山岩	黒曜石32	SQ01	3	
安山岩102	SQ02	1	無斑晶質安山岩	黒曜石33	SQ01	1	
安山岩103	SQ03	1	無斑晶質安山岩	黒曜石34	SQ01	4	黒曜石4と類似
安山岩104	SQ03	1	無斑晶質安山岩	黒曜石35	SQ01	2	黒曜石11と類似
安山岩105	SQ02	2	無斑晶質安山岩	黒曜石36	SQ01	1	
凝灰質頁岩1	SQ01	27		黒曜石39	SQ01	1	
凝灰質頁岩2	SQ01	1		黒曜石40	SQ01	1	
凝灰質頁岩3	SQ01	7		黒曜石101a	SQ03	12	
凝灰質頁岩4	SQ01	5		黒曜石101b	SQ03	63	
凝灰質頁岩5	SQ01	6		黒曜石102	SQ03	1	
凝灰質頁岩6	SQ01	1		黒曜石103	SQ03	2	黒曜石4と類似
凝灰質頁岩7	SQ01	1		黒曜石104	SQ03	2	黒曜石1aと類似
凝灰質頁岩8	SQ01	1	凝灰質頁岩107に類似	黒曜石105	SQ03	11	黒曜石2aと類似
凝灰質頁岩10	SQ01	1		黒曜石106	SQ03	14	黒曜石2bと類似
凝灰質頁岩101	SQ02	3		黒曜石107	SQ03	1	黒曜石2bと類似
凝灰質頁岩102	SQ02	7		黒曜石108	SQ03	1	黒曜石2bと類似
凝灰質頁岩103	SQ02	7		黒曜石109	SQ03	3	黒曜石2bと類似
凝灰質頁岩105	SQ03	19		黒曜石110	SQ03	1	黒曜石2bと類似
凝灰質頁岩106	SQ03	11		黒曜石111	SQ03	6	黒曜石101bと類似
凝灰質頁岩107	SQ03	41		黒曜石112	SQ03	1	黒曜石6と類似
凝灰質頁岩108	SQ03	131		黒曜石113	SQ02	1	黒曜石1eと類似
凝灰質頁岩109	SQ03	3		黒曜石114	SQ03	1	
凝灰質頁岩110	SQ02・03	18		砂岩1	SQ01	1	
凝灰質頁岩111	SQ03	3		頁岩1	SQ01	1	燧石(石核)
凝灰質頁岩112	SQ03	2	凝灰質頁岩108に類似	頁岩2	SQ01	2	自然産の破片の可能性有り
珪質頁岩1	SQ01	2		頁岩3	SQ01	1	自然産の破片の可能性有り
珪質頁岩2	SQ01	1		頁岩101	SQ03	74	
珪質頁岩3	SQ01	1		頁岩102	SQ03	1	
珪質頁岩4	SQ01	1		頁岩103	SQ02	1	
硬砂岩1	SQ01	1		頁岩104	SQ03	2	
硬砂岩2	SQ01	1		流紋岩1	SQ01	1	
黒曜石1	SQ01	5		流紋岩101	SQ03	1	
黒曜石1a	SQ01	187					

第5表 母岩別資料一覧

接合資料名	母岩別資料名	遺構区分	Ⅲ a 層	Ⅲ b 層	Ⅲ b1 層	Ⅲ b2 層	Ⅲ b3 層	Ⅲ c 層	複乱	合計
Ob1	黒曜石 1a	上層石器群	SQ01	2						2
Ob2	黒曜石 1a		SQ01	2	1					3
Ob4	黒曜石 11		SQ01	1		1				2
Ob5	黒曜石 1c		SQ01	1		1				2
Ob6	黒曜石 26		SQ01	2						2
Ob7	黒曜石 27		SQ01	2						2
Ob8	黒曜石 1a		SQ01	1		1				2
Ob9	黒曜石 1a		SQ01	2						2
Ob10	黒曜石 1a		SQ01	2						2
Ob11	黒曜石 1c		SQ03	2				1		3
TS1	凝灰質頁岩 1		SQ01	1						1
TS2	凝灰質頁岩 4	SQ01	2	2						4
TS3	凝灰質頁岩 5	SQ01	1		1					2
TS4	凝灰質頁岩 1	SQ01	2							2
Ob101	黒曜石 106	下層石器群	SQ03	1				1		2
TS101	凝灰質頁岩 101		SQ02					3		3
TS102	凝灰質頁岩 102		SQ02					6		6
TS103	凝灰質頁岩 103		SQ02					6		6
TS105	凝灰質頁岩 105		SQ03				1	11		12
TS106	凝灰質頁岩 106		SQ03				1	10		11
TS107	凝灰質頁岩 107		SQ03	1				2	3	6
TS108	凝灰質頁岩 107		SQ03				1	1		2
TS109	凝灰質頁岩 108		SQ03					1	2	3
TS110	凝灰質頁岩 108		SQ03					4	4	4
TS111	凝灰質頁岩 108		SQ03					2		2
TS112	凝灰質頁岩 108		SQ03					2		2
TS113	凝灰質頁岩 111		SQ03					2		2
TS115	凝灰質頁岩 110		SQ03			1		1		2
TS117	凝灰質頁岩 112		SQ03					2		2
TS118	凝灰質頁岩 108		SQ03					2		2
TS119	凝灰質頁岩 108		SQ03				1	3		4
TS120	凝灰質頁岩 108		SQ03					3		3
Ch101	チャート 101a		SQ02					3		3
Ch102	チャート 101b		SQ02					4		4
Ch103	チャート 103b	SQ02					2		2	
Ch104	チャート 103b	SQ03	1		1				2	
Ch105	チャート 103b	SQ02	1				1		2	
Ch106	チャート 103a	SQ03			1				1	2
Ch107	チャート 102	SQ02					2		2	
Sh101	頁岩 101	SQ03	1				1	6	8	
Sh102	頁岩 101	SQ03					2	4	6	
Sh103	頁岩 101	SQ03						2	2	
An101	安山岩 105	SQ02						2	2	

第6表 接合資料一覧

(2) 下層石器群の石器

下層石器群の器種組成を第3表に、器種別の石材組成を第7表に示した。出土層位、石材、黒曜石産地等は実測図の図版番号の下に記載した。なお、第22図 22は図版作成後に上層石器群の第34図 84と接合した。分布状況、出土層位とレベル、黒曜石の産地群などを考慮して上層石器群としたが、図版の変更が困難であったため、遺物図版の掲載順は変更していない。

ナイフ形石器 (第21図 1~10、第22図 20)

11点出土。10以外はすべて黒曜石である。4以外の黒曜石の産地はすべて諏訪星ヶ台群であり、いずれも同一母岩と認識できるほど石質が類似している。特に1と2は接合してもおかしくないほどよく似ている。黒曜石の横長剥片を素材としたものが主体となる。横長の剥片を素材としたものは比較的形状が整ったもの(1~6)と、そうでないもの(8・20)に区別される。前者は、基部を弧状に整えるのが特徴的であり、後者に比べ大形である。スクリーントーンで示した部分は、主要剥離面以外のボジ面もしくは分割面と考えられる剥離面である。特に1・2・4・5は凸面ではなく平坦かやや凹面を呈しており、ボ

ジ面ともネ方面とも判断しがたい剥離面である。

1～3・5は横長剥片を素材とし、一側縁のブランディングにより先端部を作りだし、基部加工により基部は弧状を呈する。3を除いて素材剥片の打面はブランディングにより失われている。3のブランディングは打点と反対側の側縁に施されており、打面が残っている。4は横長に近い斜軸の剥片を用い、一側縁に対向調整のブランディングがおこなわれ、基部は弧状に加工されている。先端部は欠損している。打面は基部加工により失われている。6は基部を欠損しているが、1～5に類似したナイフ形石器と推定される。7は折断により二側縁を整え、左側縁にはブランディングが施され、刃部には微細な剥離が認められる。8は横長剥片を素材とし、二側縁に調整加工が認められる。9は斜軸の剥片を素材とし、自然面の打面を残している。一側縁にブランディングが施され、対向調整により先端部が作り出されている。10は二側縁に調整加工が認められ、主要剥離面右側面には平坦剥離も見られる。SQ02の分布範囲に含まれていたことから下層石器群としたが、素材の用い方、調整加工、石材等が他のナイフ形石器と異なっており、攪乱との境界部で出土したことを考慮すると、下層石器群には属さない可能性がある。20は横長の剥片を素材とし、右側縁にブランディング状の調整加工が認められ、下半部では鋸歯縁削器の調整加工に近い大きな剥離が見られる。先端部では側縁が屈曲しており、先端部を作りだした揉雑器ともいえる。左側縁には連続した小さな剥離が認められ、刃部に微細な剥離が認められる。

なお、ナイフ形石器には接合資料が1点も確認されていない。

搥器 (第21図11・12、第22図13・14・21)

5点出土。11は下縁部と右側縁に搥器の刃部と考えられる調整加工が認められる。僅かに打面が残っている。器面全体に肉眼で観察できる傷が多数認められ、他の黒曜石の石器に比べ風化が進んでいるように見える。12は自然面を打面とした貝殻状の剥片を素材とし、一側縁に搥器の刃部が作られている。13は下縁部から右側縁部に弧状の刃部が形成されており、主要剥離面には平坦剥離が認められる。14は調整加工が全周にみられるが、下縁部と左側縁部に搥器の刃部が形成されている。21は欠損資料であるが、下縁部と左側縁部に刃部が形成されている。

13・14・21は搥器の刃部とは別に、先端部が認められ、揉雑器の範疇に含めることも可能であろう。

揉雑器 (第22図15～19)

5点出土。いずれも調整加工により先端部が作り出されている。18のみが打面を残している。他は調整加工により打面が失われている。

削器 (第22図23)

1点出土。23は剥片長軸の端部に刃部調整加工が認められる。自然面を打面としている。一見縦長剥片に見えるが、剥片剥離の際に打点から縦方向に同時割れで欠損したものである。下層石器群ではほとんど見られない無斑晶質安山岩製であり、同一母岩資料も認められない。

鋸歯縁削器 (第23図24・25)

2点出土。いずれも一側縁部に鋸歯縁を形成する二次加工が認められ、挟入部分に微細な剥離が認めら

器種 \ 石材	黒曜石	チャート	凝灰質頁岩	頁岩	無斑晶質安山岩	流紋岩	輝石安山岩	合計
ナイフ形石器	10	1						11
搥器	2	3						5
揉雑器	2	2	1					5
削器					1			1
鋸歯縁削器		1	1					2
挟入削器			5					5
二次加工がある剥片	1	1	9	1				12
刃器	2	1	2	2				7
石核		12	9	1				22
剥片	94	39	198	67	5	1		404
砕片	53	8	20	7	1			89
蔵石				1			1	2
合計	164	68	245	79	7	1	1	565

※破を除く

第7表 下層石器群の器種別石材組成

れる。調整加工は24が背面を打面とした反方向の剥離であるのに対し、25は腹面を打面とした正方向の剥離である。25は打面を残している。

挿入削器（第23図26～29、第24図35）

5点出土。26は左側縁が節理での折れ面であり、右側縁は折断されている。挿入部の調整加工は正方向の剥離による。27は素材剥片の形状をほぼ残しており、打面も確認できる。正方向の剥離で挿入部を作り出している。28は4つに割れて出土した。挿入部は反方向の剥離により作りだされており、この調整加工で打面が失われている。また挿入部の反対側の縁辺に正方向の剥離がなされており、この正方向の剥離の際に節理面で割れたものと考えられる。29は縦長の剥片の側縁端部に正方向の剥離で挿入部が作りだされており、挿入部には微細な剥離が認められる。打面が残っており、直径5.5mmの明瞭なコーンが確認される。28・29には接合資料が確認されている（接合資料TS105・TS110）。35の右側縁には正方向の単発の剥離により挿入部が作り出されている。挿入部と左側縁に微細剥離が認められる。また、挿入部に隣接して反方向の二次加工がなされている。1回の打撃で複数の剥離面が生じる同時割れのため、打点の方向が判然としない。

二次加工がある剥片（第24図30～34・36）

12点出土。30は下縁部に4回の小剥離が連続する。打面の右側縁に認められる小剥離は二次剥離ではなく、主要剥離面より古い調整加工であることが接合資料から確認される。31は打点側を欠損した剥片で、3回の二次剥離が確認される。32は剥片端部に2cmにわたる連続した剥離が認められる。削器とするには急角度の刃角である。33は正面図の上縁に挿入部を生じる二次加工が認められ、挿入削器の範疇に含めてもよいであろう。34は欠損した剥片であるが、二側縁に数回の二次加工が確認される。36は2点に割れて出土した。左側縁に正方向の小さな剥離、右側縁には反方向の連続した小剥離が確認される。後者の剥離の際2つに割れたと考えられる。打面は二次加工により失われている。

30と36に接合資料が確認された（接合資料Sh102・TS107）。

刃器（第25図37～41）

7点出土。凝灰質頁岩、頁岩、チャート製のものを図示したが、その他の黒曜石製のものはいずれも3cm以下の小形の剥片である。37～41はいずれも打面を有する縦長剥片である。特に38・39は石刃といえる資料である。37は主要剥離面が節理面であるためバルブヤリングが確認されず判断しがたいが、上端部が打面である。二側縁のところどころに微細な剥離が見られるが、ガジリの可能性もある。38は二側縁に連続した微細な剥離が見られるが、ガジリとの判別が難しい。右側縁の主要剥離面に微細な剥離が確認できる。39は左側縁の主要剥離面に微細な剥離が確認される。40は左側縁の背面に微細な剥離が認められる。右側縁の主要剥離面にみられる剥離は二次剥離ではない。41は左側縁に微細な剥離が認められる。

38に接合資料が確認された（接合資料TS120）。

石核（第26図42～第29図57）

22点出土。図示していない6点の内5点は接合資料の中で写真を提示した（接合資料Ch102・Ch103・TS101・TS119）。

42～47は赤褐色のチャート、48・49は青灰色と赤褐色が斑になったチャート、50は頁岩、51～57は凝灰質頁岩である。接合資料も併せて検討すると原石の大きさは、チャートは7cm大以下の亜角礫、頁岩は10cm大以上の楕円礫、凝灰質頁岩は最大のもので15cm以上の楕円礫が想定される。45・48・50～52・54・55に接合資料が確認されている（接合資料Ch101・Ch106・Sh101・TS106・TS109・TS112・TS115）。なお、下層石器群では黒曜石の石器が多数出土しているが、黒曜石の石核が検出され

ていない。

42は自然面を打面として1回の剥片剥離がおこなわれている。43と48は打面と作業面を交互に交代させている交互剥離がおこなわれている。44～46は同一打面から同一作業面での複数回の剥片剥離が確認される。47は板状の亜角礫を用い、剥離面を打面とし小口での剥片剥離がおこなわれている。49は90°の打面転移がおこなわれた、サイコロ状の石核である。接合する剥片がなく、他に同一母岩資料が認められず（母岩別資料チャート105）、礫群に混じって出土した（第16図）。50は分割面を打面として連続した剥片剥離がおこなわれていることが、接合資料Sh101で確認される。51は剥片素材の石核で、主要剥離面を打面として少なくとも2枚の剥片を剥離している。52は下半部が欠損しているが、打面を共有した異なる作業面での剥片剥離がなされており、剥片との接合が確認された（接合資料TS115）。53は2cm程度の小形剥片の剥離が確認される残核である。自然面は認められず、打面は平坦で分割面もしくは分厚い剥片の主要剥離面である。54は自然面を残しており、分割面を打面する連続した剥片剥離が確認されている（接合資料TS106）。55の剥片剥離はすべて同じ打面からおこなわれており、正面、左側面、裏面にそれぞれ作業面が確認される。打面は分割面と考えられる。裏面にはステップが生じている。自然面が僅かに残っている。剥片との接合が確認された（接合資料TS112）。56は板状の残核で、裏面に広く自然面を残す。なお、51・53・55・56の石核は同一母岩資料と認識した。57は板状の残核で、2cm程度の小形剥片が剥離されている。裏面は自然面である。

敲石（第30図58・59）

2点出土。58は長軸の両端部に敲打による剥離が認められる。59は下端部に顕著な敲打痕が認められる。また、左側縁の突出部に他の表面と比較してざらついた範囲があり、敲打痕の可能性ある（敲線部）。右側縁の稜部全体にも同様に僅かな凹凸が認められるが、敲打痕かどうか判断できない。58はSQ02に属し、59は礫群（SH05）の中に出土した（第16図）。

剥片

404点出土。SQ02ではチャートが17点で主体を占め、他は無斑晶質安山岩4点と凝灰質頁岩3点で、SQ03で見られる黒曜石と頁岩は1点も出土しない。SQ03では凝灰質頁岩が153点、黒曜石93点、頁岩62点、チャート20点、無斑晶質安山岩1点、流紋岩1点が出土した。SQ02では15点、SQ03では35点の破碎剥片が含まれている。剥片全体の中に占める破碎剥片の割合が上層石器群に比べ高い。

碎片

89点出土。SQ02には碎片は確認されず、すべてSQ03で出土した。正確にカウントしていないが、黒曜石の碎片は点打面または線打面のものが7割以上を占めており、ポイントフレイクのように明確な平坦打面・切子打面を残すものが少ない。

（3）上層石器群の石器

上層石器群の器種組成を第3表に、器種別の石材組成を第8表に示した。出土層位、石材、黒曜石産地等は実測図の図版番号の下に記載した。

ナイフ形石器（第31図60～66）

7点出土。黒曜石6点、珪質頁岩1点である。黒曜石産地推定結果はいずれも和田鷹山群である。60はブランディングによる二側縁加工で基部を尖らせている。先端が欠損しているが、割れ面は新しく、調査時に欠損したものである。本資料のみ珪質頁岩でブロック外周部のⅡ層から出土しており（第19・20図）、SQ01の他の石器群と有意な関係を有するか否か再検討を要する。61は斜軸の剥片を用いた二側縁

加工である。調整加工はブランディングというよりは平坦剥離に近い。62は一側縁に平坦剥離に近い調整加工が認められる。先端部は尖らず、僅かに自然面（もしくは分割面）が残っている。図版作成後、基部の欠損部分が確認され（接合資料Ob9）、打面を残す斜軸の剥片を素材にしていることが確認された（44頁の写真参照）。基部に調整加工はなく、主要剥離面の一側縁に微細剥離が確認される。63は打面を残す石刃状の剥片の基部の一側縁に調整加工が認められる。先端部は折れている。64は二側縁に調整加工が認められる。基部は欠損しており、打面は調整加工により失われている。65は横長剥片を素材とし、一側縁に調整加工が認められる。66は二側縁を折断した後、左側縁に僅かに調整加工が施されたと判断した。ただし、折れと調整加工の前後関係が明瞭ではないため、器種判別に再検討が必要である。

搔器（第31図67～第32図72）

6点出土。黒曜石5点、チャートが1点で、黒曜石産地推定結果は和田鷹山群、蓼科冷山群、和田芙蓉ライト群と多様である。67は縦長剥片の端部に刃部があり、打面は折れて失われている。刃部調整剥片が1点接合した（接合資料Ob4）。同一母岩資料が10点確認されているが（母岩別資料黒曜石11）、搔器以外は1.8cm以下の小形の調整剥片である。68は縦長剥片の端部に刃部があり、主要剥離面の中央部に線条痕が認められる。69は縦長剥片の両端部に刃部がある。70・72は縦長剥片の端部に刃部があり、打面を残している。71の素材剥片は縦長でなく、側縁部の欠損面に微細な剥離が観察されることから、形状を整えるため両側縁を折断している可能性がある。

彫器（第32図73～75）

3点出土。いずれも、腹面側に桶状剥離が認められる。73は二側縁に調整加工が認められ、下端部が欠損している。74は右側縁と上縁の調整加工の後に桶状剥離がなされる。下端部が欠損する。75は裏面下縁部に連続する小剥離が認められる。第33図80の抉入削器と接合する（接合資料TS3）。

抉入削器（第33図76～80）

5点出土。黒曜石4点、凝灰質頁岩1点で、黒曜石の産地推定はいずれも和田鷹山群である。76は背面を打面とした複数回の反方向の剥離で抉入部がつくられる。ただし、抉入部の細かな剥離面が他の面に比べ新鮮であり、ガジリの可能性がある。77は1回の正方向の剥離で抉入部がつくられる。打面を残しており、端部は欠損しているが、遺物図版作成後に欠損部の破片が接合した（接合資料Ob10）。78は複数の正方向の剥離により抉入部がつくられる。右側縁には主要剥離面を打面とした正方向の剥離が3回認められ、この剥離により打面が失われている。抉入部以外にも微細な剥離が認められる。79は1回の正方向の剥離で抉入部がつくられる。打面は失われており、剥片端部は欠損しているが、遺物図版作成後に欠損部の破片が接合した（接合資料Ob2）。抉入部以外に調整加工は確認されない。80は1回の正方向の剥離で抉入部がつくられる。抉入部に微細な剥離が観察される。第32図75の彫器と接合し、厚い

器種 \ 石材	黒曜石	チャート	凝灰質頁岩	頁岩	無斑晶質安山岩	珪質頁岩	硬砂岩	流紋岩	合計
ナイフ形石器	6					1			7
搔器	5	1							6
彫器	1	1	1						3
抉入削器	4		1						5
削器	4								4
刃器	7		3						10
二次加工がある剥片	4								4
石核	2		4						6
剥片	371	32	39	3	16	4	2	1	468
石刃	2								2
砕片	1135	101	14	14	7	2			1273
礫石				1			4		5
合計	1541	135	62	18	23	7	6	1	1793

※礫を除く

第8表 上層石器群の器種別石材組成

剥片素材の石核となる。接合資料を観察すると、挟入部の剥離は石核から剥片を剥いだ時に生じたと考えられることでもできる。

削器 (第22図22、第33図81・82、第34図84)

4点出土。81は打面を大きく残す横長の剥片を素材とし、左側縁に刃部調整加工が認められる。右側縁部に主要剥離面より新しい微細剥離が認められる。82は一側縁に刃部調整加工が認められる。下半部が大きく欠損しており、全体の形状は不明である。打面を残している。84は図版作成後、図版第22図22との接合が確認され(接合資料Ob11)、1点の削器であることが判明した。22は当初、出土層位から下層石器群と認識したが、出土地点と黒曜石産地が上層石器群に主体を占める和田鷹山群であること、Ⅲb2層が分布しない部分であり、出土層位の誤認の可能性があることから、22は上層石器群と判断した。図版の修正が困難であったため、22は下層石器群の遺物図版に掲載したまま、本文中で触れることとした。22+84は縦長剥片の側縁に刃部調整加工と微細な剥離が認められる。図示していない削器は刃部小破片である。

二次加工がある剥片

4点出土。すべて黒曜石である。いずれも何らかの石器の破片と思われるが、小破片で器種認定ができない。

刃器 (第34図83・85～89)

9点出土。黒曜石6点、凝灰質頁岩3点である。黒曜石産地推定は和田鷹山群5点、諏訪星ヶ台群1点である。諏訪星ヶ台群はⅡ層から出土しており、他時期の混入の可能性はある。83は打面を残しているが、二辺が折断されており剥片の形状は不明である。鋭利な縁辺に小剥離が連続する。主要剥離面に付着物が確認される。85は上縁と左側縁の主要剥離面に連続する微細な剥離が認められる。打面が折断により欠損している。86は上縁に連続する微細な剥離がある。左側面が打面で、稜上が打点となる。図版作成後、85と86が折断面で接合し、主要剥離面を敲いて敲き折る折断の状況が確認された。87は打面を欠損する剥片で、右側縁に連続する微細な剥離がある。主要剥離面全体に付着物が認められる。88は右側縁に微細な剥離が連続するが、カジリの可能性もある。89は打面を欠損しており、二側縁に連続する微細な剥離がある。石刃を用いている。

石核 (第35図90～93)

6点出土。黒曜石2点、凝灰質頁岩4点であるが、凝灰質頁岩の3点は同じ石核が破損したものであり、個体数は凝灰質頁岩2点である。黒曜石産地推定は和田鷹山群と諏訪星ヶ台群である。90は稜柱状の残核である。最終の剥離面(正面)に比べ、風化が進んでいる剥離面が多くみられることから、板状の石核の側面(小口)に作業面を設けた石核と判断した。剥離される剥片は最大長3cm以下である。91は剥片剥離作業面(正面)にボジ面があり剥片素材の石核であることがわかる。上面が打面、裏面には自然面がある。これらの黒曜石の石核から剥離される剥片は最大長3cm以下である。92は垂角礫を原石とした分割礫を素材とする。剥離面を打面とし同一作業面で剥片剥離を繰り返しており、裏面と右側面に自然面が観察される。93には石核破片2点と剥片1点が接合する(接合資料TS2)。2点の石核破片が節理面から破損した後、さらに剥片剥離が継続されている。当初の剥片剥離は自然面を打面としておこなわれるが、破損後は打面再生をして、剥離面の打面から同一作業面で剥片剥離を繰り返している。93は全体の4割ほどが自然面であり、接合資料から原石がこぶし大の垂角礫であることが判明した。90～92の石核に接合する剥片は確認されなかった。

敲石 (第36図94・95)

5点出土。94は頁岩の石核を利用した敲石である。下端部に敲打痕と敲打による剥離面が見られる。

接合する剥片がなく、同一母岩と思われる剥片も確認できない。95は硬砂岩の棒状礫を用いている。長軸端部に敲打で生じた剥離が認められる。上端の欠損面には平坦面への打撃で生じた剥離面が観察される。この打撃が欠損を生じさせた可能性がある。

剥片

470点出土。黒曜石371点、凝灰質頁岩39点、チャート32点、無斑晶質安山岩16点、珪質頁岩4点、頁岩3点、硬砂岩2点、流紋岩1点である。470点の中に、石刃が2点、削片が3点、破碎剥片20点が含まれる。硬砂岩は蔽石破片である可能性がある。

縄文時代以降の遺物包含層であるⅠ・Ⅱ層のものが32点含まれており、他時期のものが混入している可能性がある。また、Ⅲa層、Ⅲb層には縦方向のクラックが多数みられ、上層から落ち込んだものを認識できず、旧石器の遺物包含層出土と誤認した可能性がある。珪質頁岩、流紋岩はすべてⅢa・Ⅲb層から出土したものであるが、それぞれ別個の母岩資料に分類され、いずれも2cm以下の小形剥片であることから、他時期の遺物が混入した可能性がある。

碎片

1,273点出土。黒曜石1,135点、チャート101点、その他37点と黒曜石が大半を占める。黒曜石の碎片を観察すると、下層石器群の碎片に比べ、平坦打面のもが多く、点打面または線打面のは少ない。碎片を生じる調整加工の方法に違いがあったことが想定される。なお、剥片と碎片の中に、黒曜石製のポイントフレイクが23点確認された。

(4) 下層石器群の接合資料 (第37～45図)

接合資料は30個体確認された(第6表)。欠損部での接合資料もあり、剥片剥離の剥離面での接合資料は23個体である。第37～45図に下層石器群の接合資料を示した。図中の石器の写真に付した番号は遺物番号(注記番号)である^(註6)。以下の記述も注記番号を用いる。なお、個別の実測図、写真展開図を提示した遺物については図版番号を器種名の後ろに記した。

接合はいずれも同一ブロック内のもので、ブロック間の接合は認められなかった(第37図)。

接合資料 An101 (第38図): 母岩別資料安山岩105である。2点の剥片の接合で、それぞれ打面が異なる。SQ02のⅢc層で接近して出土した。同一母岩資料は本接合資料の2点のみである。

記号式で示すと2129/→2128、となる。

接合資料 Ob101 (第38図): 母岩別資料黒曜石106。剥片2点の接合例で、厚い板状の剥片を素材とした石核から、同じ打面と作業面で連続した剥片剥離がおこなわれている。いずれも横長剥片である。

記号式で示すと、□→2060→586、となる。

接合資料 Ch101 (第38図): 母岩別資料チャート101aである。石核1点(第27図48)と剥片2点の接合資料である。打面と作業面を入れ替える交互剥離によって、剥片剥離が進行している。

記号式で示すと、□/→□/→2167→A/→B→C→2176=2142、となる。A～Cは調査では確認されなかった剥片であり、CにAが先行することは確かであるが、AとB、BとCの前後関係は確定できないので、□/→□/→2167/→B/→A/→C→2176=2142、という剥離工程の可能性もある。

接合資料 Ch102 (第38図): 母岩別資料チャート101bである。節理面で分割した分割礫を素材として、剥片剥離をおこなった資料である。剥離面を打面とし、剥片剥離をしようとした結果、節理面等で同時割れが生じたものである。同時割れの後、2156は自然面を打面として、小剥片が剥離されている。接合資料Ch101と同一個体である可能性がある。

記号式で示すと、□⇔2154+2155+□=2156+2086+□ⁿ、となる。

接合資料 Ch103 (第38図): 母岩別資料チャート 103b。剥片1点と石核1点の接合。いずれもⅢc層から出土した。平坦打面から、楕円礫の短軸面に平行した剥片剥離をおこなったのち、同一打面から作業面を45°移動し剥片剥離をおこなった時に節理面での石核が弾けてしまったものである。自然面が多く残っており、原石は、厚さ4cm、長さ8cm、幅7cm程度の楕円礫が想定される。

剥離工程を記号式で示すと、□/→□→508 = $\overline{710+□}$ 、となる。SQ02 (2号ブロック) に属する。

接合資料 Ch104 (第39図): 母岩別資料チャート 103b。剥片2点の接合。1点は打面を欠損しているが、同一打面から加撃されたものと推定される。同一作業面で連続して剥離された資料である。Ⅲa層とⅢb層で出土しているが、母岩別資料チャート 103bの他の資料がⅢb3・Ⅲc層出土であることから下層石器群とした。

剥離工程を記号式で示すと、□→48 → $\overline{1067+□}$ 、となる。SQ03 (3号ブロック) に含まれる。

接合資料 Ch105 (第39図): 母岩別資料チャート 103b。剥片2点の接合。Ⅲa層とⅢc層から出土。同じ打面と作業面で連続して剥片剥離がおこなわれた資料である。Ⅲb2層より上層(Ⅲa・Ⅲb1層)で出土した石器群の中にも本来下層(Ⅲb3・Ⅲc層)の石器群のものが含まれていることを示す資料である。SQ02に含まれる。

接合資料 Ch106 (第39図): 母岩別資料チャート 103a。石核1点(第26図45)と剥片1点が接合した資料。SK11とⅢb層上面より出土したものであるが、同質母岩^(註7)の8点がⅢc層出土であることから、下層石器群と判断した。Ⅲa層とⅢc層の接合例(Ch105)もあり、本接合資料を下層石器群とすることも妥当であると判断した。

接合資料 Ch107: 母岩別資料チャート 102。2点の剥片の接合である。1点は破砕剥片である。

接合資料 Sh101(第39図):母岩別資料頁岩 101。石核1点(第27図50)と剥片7点の接合資料である。折れ面での剥片の接合が1例あるので、剥片は実質的には6点となる。424を剥離した後同一打面から作業面を変更し、1590、1674、1270、1980+1989を連続して剥離し、打面転移をおこない作業面を移し2055を剥離した後、90°の打面転移をおこない剥片剥離をおこなっている。1590～ $\overline{1980+1989}$ の打面は平坦な剥離面であり、通常の剥片剥離で生じた剥離面ではなく、礫を分割した際の分割剥離面である可能性が高い。なお、1980と1989は剥片剥離の際の加撃により同時割れで欠損したものである。

剥離工程は、□→424→□→1590→1674→1270→ $\overline{1980+1989}$ →□^{x2}/→□^{xn}→ $\overline{2055+□}$ /→□ = 1639、となる。

接合資料 Sh102 (第40図): 母岩別資料頁岩 101。二次剥離がある剥片1点(第24図30)と剥片5点の接合資料。欠損部で接合した剥片が1例あるので実質的には剥片は4点となる。同じ打面と作業面で2枚の剥片を剥離し、90°の打面転移をし、同じ打面と作業面で2枚の剥片を剥離している。

剥離工程を記号式で示すと、 $\overline{1883+1885}$ →1599→1809/→1625→1717、となる。 $\overline{1883+1885}$ と1599、1625と1717はそれぞれ打面と作業面が同じ連続した剥片剥離である。1883と1885は剥片剥離の際の加撃により同時割れで欠損したものである。なお、1809は1599が剥離した際、節理面で弾けた小剥片である。

接合資料 Sh103: 母岩別資料頁岩 101。2点の接合資料。剥片剥離の加撃により同時割れで欠損したもので、1点の剥片となる。

接合資料 TS101 (第40図): 母岩別資料凝灰質頁岩 101。石核1点、剥片2点が接合したものである。主要剥離面を打面とし、同一作業面で4枚の剥片が剥離されているのが確認できる。母岩別資料の検討から15cm以上の角礫が想定される。

剥離工程を記号式で示すと、 $\overline{□→2162→□→2140=2087}$ 、となる。

接合資料 TS102：母岩別資料凝灰質頁岩 102。6点が接合し1点の剥片となる。接合はすべて節理面等での欠損部であり、剥片剥離による接合は確認できない。原石は亜角礫であるが、大きさは不明である。接合した剥片の主要剥離面も節理面が認められる。

接合資料 TS103：母岩別資料凝灰質頁岩 103。6点が接合し1点の剥片となる。接合資料 TS102と同様に同時割れ等による欠損の接合であり、剥片剥離による接合は確認できない。自然面が薄く剥落しており、部分的に黒色に変色していることから被熱した可能性がある。接合した剥片の主要剥離面にも節理面が認められる。

接合資料 TS105 (第 41 図)：母岩別資料凝灰質頁岩 105。12点が接合した。剥片の欠損部接合が2例あるので、実質的には抉入削器1点(第23図29)と剥片10点の接合資料である。原石の半分程度がブロック内に残存しており、剥片剥離工程の前半部分の剥片が認められない。また、比較的大形の剥片はすべて接合していることから、他の場所である程度剥片剥離をおこない、その後、石核を遺跡内に持ち込んで剥片剥離をおこなっていることが理解できる。古い作業面への打面転移が複数回認められる。打面転移は90°または180°のものがあり、頻繁な打面転移が観察される。石核は残されていない。また、2016(第23図29)には二次加工で生じた剥片が接合している。なお、1672の打面部は節理面で僅かに欠損している。

上記の剥離工程を記号式で示すと、 $(\square^{\times n})$ 1998 \rightarrow \square \rightarrow 2047 \rightarrow \square / \rightarrow $\boxed{1768+1776} / \rightarrow \square^{\times n}$ \rightarrow $\boxed{1673+1855} / \rightarrow \square / \rightarrow$ 1668 \rightarrow 1615 \rightarrow 1672 \rightarrow 1669 \rightarrow $\boxed{1812 \rightarrow \square = 2016} = \square$ 、となる。なお、最初の「 $(\square^{\times n})$ 」は前述のとおり本遺跡外で行われた剥片剥離を示している。また、1998の剥離順は $\boxed{1768+1776}$ の剥離後の可能性もあるが、打点の位置から上記の剥離順が妥当と判断した。

接合資料 TS106 (第 42 図)：母岩別資料凝灰質頁岩 106 がすべて接合した。11点の資料が接合したが、折れ面で接合した資料と、節理面で弾けた資料があるため、石核1点(第29図54)と剥片6点の剥片剥離に関わる接合資料となる。分割礫を石核として、剥離面を打面とし、同一作業面で連続して複数の剥片を剥離した後、作業面を打面とし剥片剥離(打面再生)をおこない、再度打面転移をおこない、当初と同じ面を作業面とし剥片剥離がおこなわれる。

上記の剥離工程を記号式で示すと、 \square / \rightarrow 1640 \rightarrow 1745 \rightarrow $\boxed{1823+1991} \rightarrow \square \rightarrow$ $\boxed{1626+1806} \rightarrow \square / \rightarrow$ 1877 $\rightarrow \square^{\times n} \rightarrow$ 1622 = $\boxed{1900+1835+2005}$ 、となる。接合資料の大きさから10cm以上の原石であったことが推定できる。

接合資料 TS107 (第 43 図)：母岩別資料凝灰質頁岩 107。6点の資料が接合したが、折れ面で接合するものが2例あるので、二次加工がある剥片1点(第24図36)と剥片3点の接合資料である。分割礫または大形剥片の節理面を打面とし、同一作業面で数回の剥片剥離をおこない、90°の打面転移をおこない、節理面を打面とし大形の剥片を剥離した。

上記の剥離工程を記号式で示すと、 $\square \leftrightarrow \square^{\times n} \rightarrow$ $\boxed{119+\square} \rightarrow$ $\boxed{1874+1964} \rightarrow$ $\boxed{1290+1567+\square} \rightarrow \square^{\times n} / \rightarrow$ 1890 = \square 、となる。

接合資料 TS108 (第 42 図)：母岩別資料凝灰質頁岩 107。剥片2点が接合した。1点は打点が不明な小剥片である。接合資料 TS107 と同質母岩である。

接合資料 TS109 (第 44 図)：母岩別資料凝灰質頁岩 108。3点が接合しているが、節理面での欠損が接合したものであり、実質的には剥片2点の接合である。ただし、大形の剥片は剥片素材の石核(第28図51)である。2点は同一作業面で剥離された剥片であるが、打面に段差があり、打面再生がおこなわれていることが確認できる。大形の剥片(1283+1730)は剥離の際に破損し二つに割れた後に、剥片素材の石核として剥片剥離がおこなわれているが、その石核に接合する剥片は確認できなかった。

剥離工程を記号式で示すと、 $\square \rightarrow 1730 + \square \times n = 1283 / \square / \rightarrow 1912$ 、となる。

接合資料 TS110：母岩別資料凝灰質頁岩 108。4 破片に割れた 1 個体の挟入削器（第 23 図 28）が接合した資料である。

接合資料 TS111（第 43 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 108。剥片 2 点の接合。いずれの剥片にも自然面が認められる。1935 は欠損している。

剥離工程を記号式で示すと、 $2026 = \square \rightarrow 1935 + \square$ 、となる。

接合資料 TS112（第 44 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 108。石核 1 点（第 29 図 55）と剥片 1 点の接合。分厚い剥片素材の石核であり、素材剥片の主要剥離面の一部が残っている。剥片と石核に自然面がわずかに認められる。同一の打面で作業面を 90° 単位で回転させ剥片を剥離している。最後に剥離した剥片（1784）は、端部がヒンジフラクチャーとなり、残核は「し」の字の断面形を示す。

剥離工程を記号式で示すと、 $\square \times n \rightarrow 1784 = 1949$ 、となる。

接合資料 TS113：母岩別資料凝灰質頁岩 111。2 点が欠損部で接合する本来 1 点の剥片である。

接合資料 TS115（第 44 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 110。石核 1 点（第 28 図 52）と剥片 1 点の接合資料である。石核は下半部が欠損しており、1 面に自然面を残している。

剥離工程を記号式で示すと、 $\square \times 2 \rightarrow 1566 = 708$ 、となる。

接合資料 TS117：母岩別資料凝灰質頁岩 112。節理で欠損したものが接合した、本来 1 点の剥片である。記号式で示すと、 $1803 + 1941 + \square$ 、となる。

接合資料 TS118（第 45 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 108。剥片 2 点の接合。同一の平坦打面、同一作業面で剥離された剥片の接合である。いずれも端部を欠損している。1854 \rightarrow 1957 の順で剥離されている。

接合資料 TS119（第 45 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 108。4 点の接合資料。2 点は剥片の欠損部での接合であるので、実質的には石核 1 点、剥片 2 点の接合である。自然面を有する厚手の剥片を石核素材とし剥片剥離をおこなった資料である。素材剥片の主要剥離面が残存している。1792 が剥離した後、石核の端部が欠損しその欠損面を打面とし剥片剥離がおこなわれ、残核となる。

剥離工程を記号式で示すと、 $\square \times n / \rightarrow 1792 / \rightarrow \square / \rightarrow 1624 + 1285 = 1833$ 、となる。

接合資料 TS120（第 45 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 108。刃器 1 点（第 25 図 38）と剥片 2 点の接合。一面に自然面を有する資料である。同一打面と作業面で複数の剥片剥離がおこなわれた後 90° の打面転移をおこない大形の剥片が剥離される。その剥離面を打面とし剥片剥離をおこない、打面転移が最低 2 回行われている。

剥離工程を記号式で示すと、 $\square \times n \rightarrow 1938 \rightarrow \square \times 2 / \rightarrow 1937 / \rightarrow \square / \rightarrow 1727$ 、となる。

（5）上層石器群の接合資料（第 46 ~ 48 図）

13 個体の接合資料が確認された（第 6 表）。欠損部での接合資料もあり、剥片剥離の剥離面での接合資料は 5 個体である。第 46 ~ 48 図に上層石器群の接合資料を示した。図中の石器の写真に付した番号は遺物番号（注記番号）である^(註 8)。以下の記述も注記番号を用いる。なお、個別の実測図、写真展開図を提示した遺物については図版番号を器種名の後ろに記した。また、接合資料の分布状況を第 46 図に示した。

接合資料 Ob1（第 46 図）：母岩別資料黒曜石 1a。2 点の剥片資料。同じ作業面で、連続した剥片剥離がおこなわれている。打面の 1301 は打面を欠損しており、同じ打面であるかどうか確認できない。自然面を残す。

剥離工程を記号式で示すと、 $\square \times n \rightarrow 1301 + \square \rightarrow 341$ 、となる。

接合資料 Ob2: 母岩別資料黒曜石 1a. 抉入削器(第33図79)の欠損部に破片2点が接合しほぼ完形となった。記号式では、 $521 + 473 + 1537 + \square$ 、となる。図版作成後確認した接合資料であるため、実測図の変更ができず接合状態の写真を掲載した。

接合資料 Ob4: 母岩別資料黒曜石 11. 2点の接合資料。搔器(第31図67)とその刃部調整削片の接合である。母岩別資料黒曜石 11は搔器1点、削片7点が出土しており、削片はすべて1~1.5cm大の小形の二次加工で生じる調整削片と考えられる。

接合資料 Ob5: 母岩別資料黒曜石 1c. 2点の接合資料。欠損部での接合で1点の削片となる。

接合資料 Ob6: 母岩別資料黒曜石 26. 2点の接合資料。同じ打面から連続して剝離された削片の接合。記号式では、 $571 \rightarrow 705$ となる。

接合資料 Ob7: 母岩別資料黒曜石 27. 2点の接合資料。欠損部での接合で1点の削片となる。

接合資料 Ob8: 母岩別資料黒曜石 1a. 2点の接合資料。欠損部での接合で1点の削片となる。

接合資料 Ob9: 母岩別資料黒曜石 1a. ナイフ形石器(第31図62)の欠損部に破片1点が接合し、ほぼ完形となる。接合状態で長さ5.8cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmとなる。図版作成後確認した接合資料であるため、実測図の変更ができず接合状態の写真を掲載した。

接合資料 Ob10: 母岩別資料黒曜石 1a. 抉入削器1点(第33図77)と削片1点が接合し、削片の形状がほぼ確認できる。図版作成後確認した接合資料であるため、実測図の変更ができず接合状態の写真を



掲載した。

接合資料 Ob11：母岩別資料黒曜石 1c。3 点の接合。欠損部での接合で、1 個体の削器となる（第 22 図 22 と第 34 図 84 が接合する）。遺物図版作成後に接合を確認したため、それぞれ上層石器群と下層石器群の別図版に提示している。前述のとおり、出土状況と産地推定が和田鷹山群であることから上層石器群であると判断した。記号式で示すと、 $613 + 886 + 1546 + \square$ 、となる（44 頁写真参照）。

接合資料 TS1（第 47 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 1。剥片 2 点の接合。同一打面から剥離された 2 点の縦長剥片が接合したもの。同じ打面と作業面で連続して 6 枚以上の剥片を剥離したことが観察され、いずれも縦長剥片と推定される。

なお、母岩別資料凝灰質頁岩 1 は石核 1 点（第 35 図 92）、剥片 25 が出土しており、原石は 15cm 以上の亜角礫（河床礫）であったことが推定される。石核および剥片の観察から、打面転移による作業面の移動は認められず、同一作業面で連続的に剥片が剥離されたことが推測される。剥片は裏面と表面の剥離軸が平行するものが多く、石刃状の縦長剥片も数点確認できる。

接合資料 ST2（第 47 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 4。4 点が接合する。1 点は剥片で他は石核が割れた破片である。平坦な自然面を打面とし、単一の作業面で数枚の剥片を剥離した後、節理面で石核が 3 つに割れる。割れた後、作業面を入れ替える交互剥離による剥片剥離が再度おこなわれ、545 が剥離され残核（第 35 図 93）となる。原石は $10 \times 9 \times 6$ cm 程度の亜角礫と推定される。母岩別資料凝灰質頁岩 4 は 5 点出土しており、刃器 1 点（第 34 図 86）、剥片 1 点、石核（第 35 図 93）および破片 3 点である。

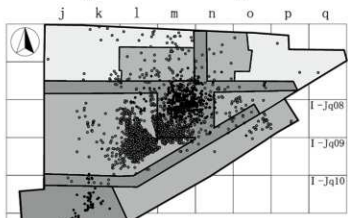
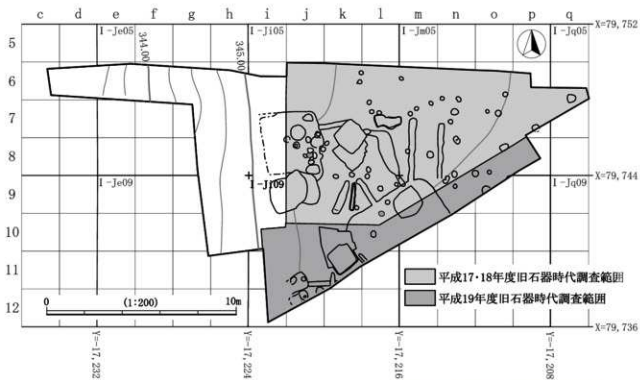
上記の剥片剥離の工程を記号式で示すと $\square^{x/n} \rightarrow 577 + 1895 + \square^{x/n} / \rightarrow \square \rightarrow 545 + \square = 716$ 、となる。

接合資料 TS3（第 48 図）：母岩別資料凝灰質頁岩 5。彫器 1 点（第 32 図 75）と抉入削器 1 点（33 図 80）の接合資料であるが、分厚い剥片が弾けて割れた部分で接合したもので、剥片剥離の接合ではない。接合資料は欠損部がある分厚い剥片となり、主要剥離は平坦であることから分割して生じた剥片であると考えられる。主要剥離面を打面とし剥片剥離がおこなわれた後に割れている。

剥片剥離の工程を記号式で示すと、 $\square \leftrightarrow \square = 713 + \square = 2080 + \square$ 、となる。

なお、母岩別資料凝灰質頁岩 5 はこの他に剥片 3 点、破片 1 点が確認できるのみであり、素材剥片を剥離するための剥片剥離した痕跡は認められない。石器の二次加工に関わる剥片剥離が僅かにおこなわれたものと推定できる。

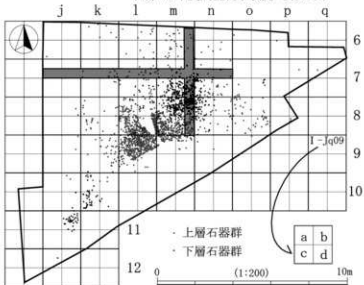
接合資料 TS4：母岩別資料凝灰質頁岩 1。2 点の接合資料。剥片の折れ面での接合資料。折れ面は新しく、発掘調査で破損したものの。



平成18年度調査終了状況(東より)

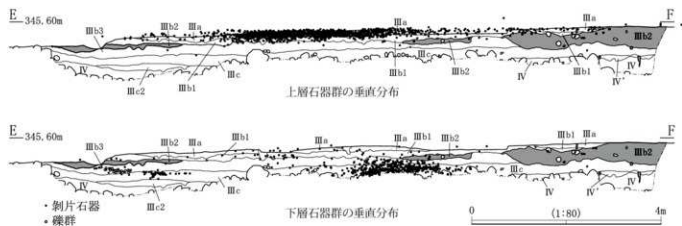
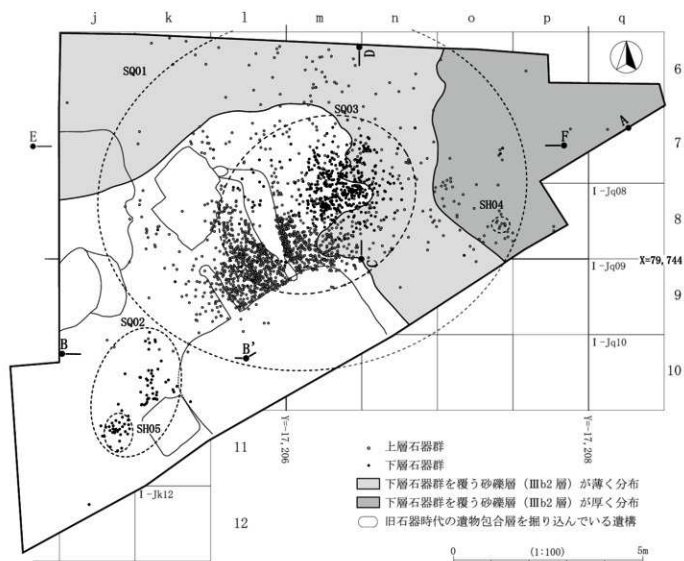


平成19年度調査終了状況(北西より)

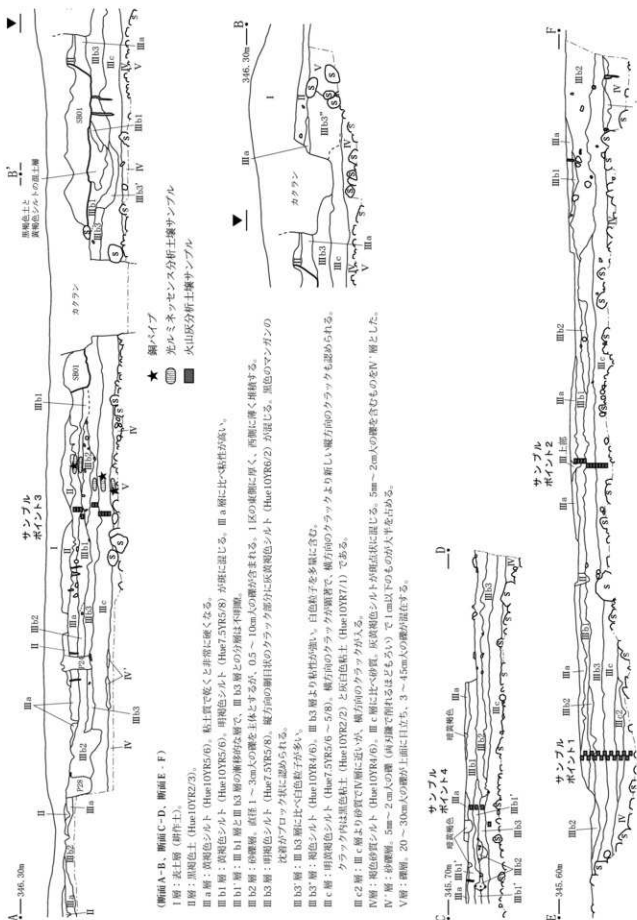


微細遺物採取のため、土壌をふるいにかけた範囲

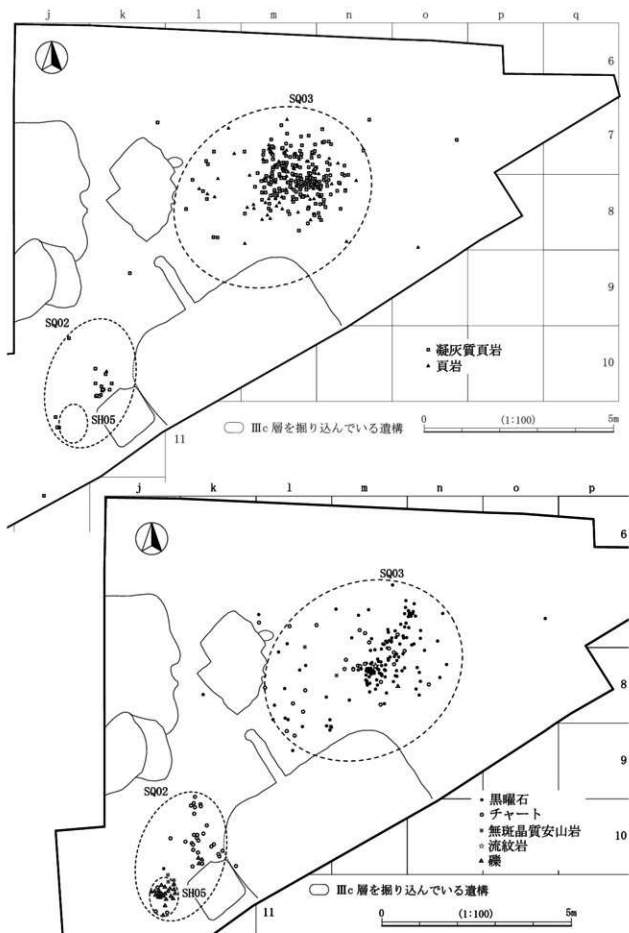
第11図 旧石器時代の調査範囲



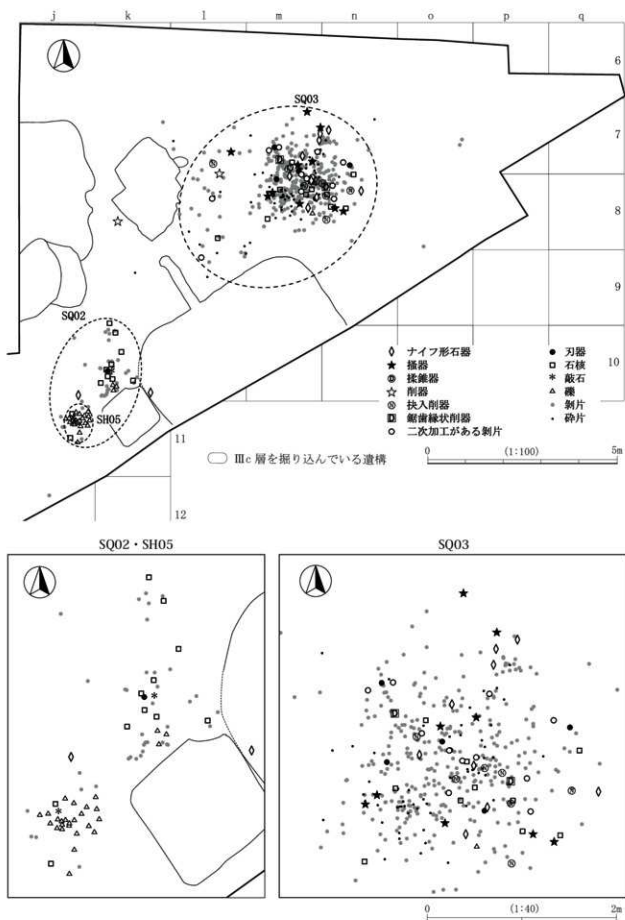
第12図 石器分布状況と砂礫層の分布範囲



第13図 1区土層図



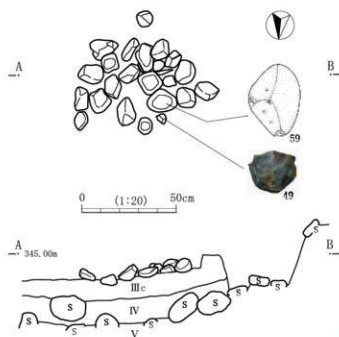
第14図 下層石器群の石材別分布状況



第15図 SQ02・SQ03・SH05分布状況



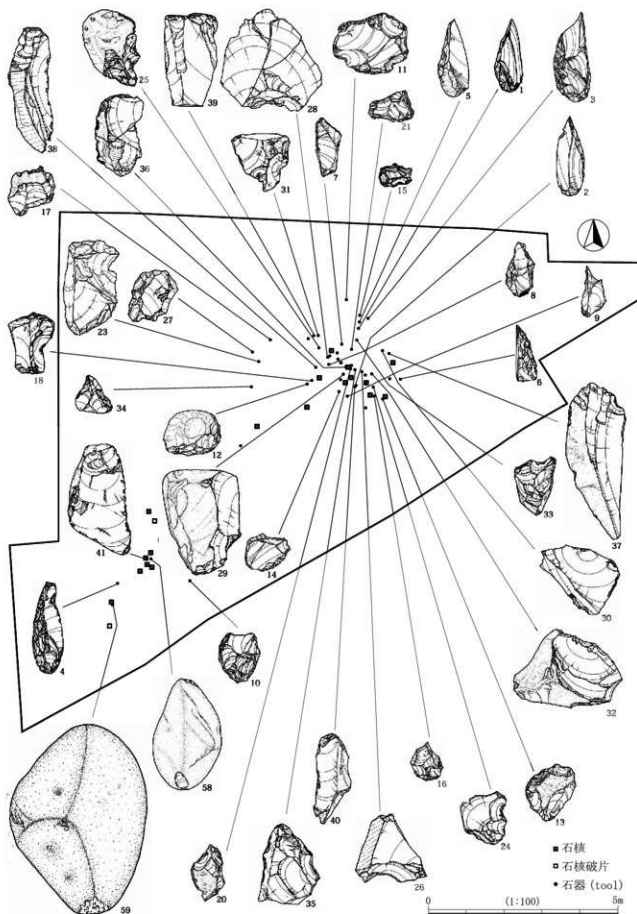
SH05 の礫 (左下の定規は 15cm)



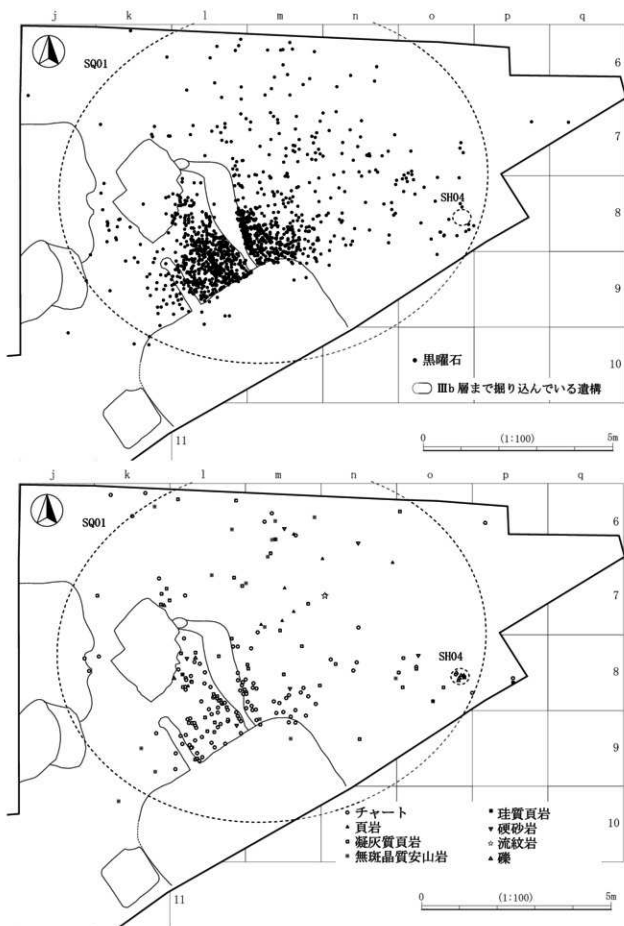
III c 層: 明黄褐色シルト (Hae7, SH5.6 ~ 5.9)。横方向のクラックが顕著に見られ、クラック内は黒色粘土 (Hae10TR2/2) と灰白色粘土 (Hae10TR7/1) が認められる。横方向のクラックより新しい縦方向のクラックが認められる。
 IV 層: 褐色砂質シルト (Hae10TR4/6)。III c 層に比べ砂質。灰黄褐色シルトが斑点状に混じる。
 V 層: 礫層。3 ~ 45 cm 大の礫が混在する。30 ~ 30 cm 大の礫が上面に目立つ。



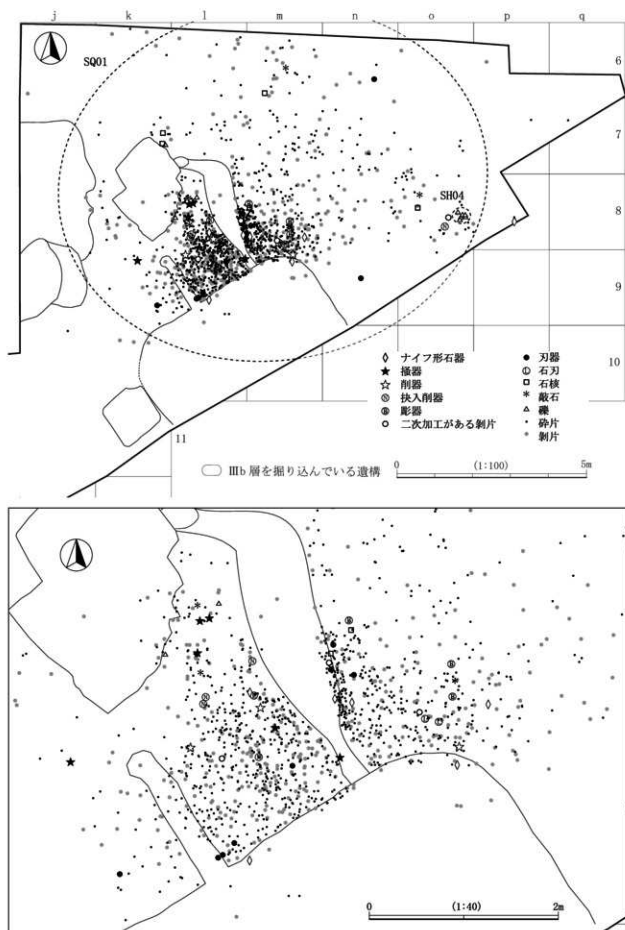
第 16 図 礫群 (SH05)



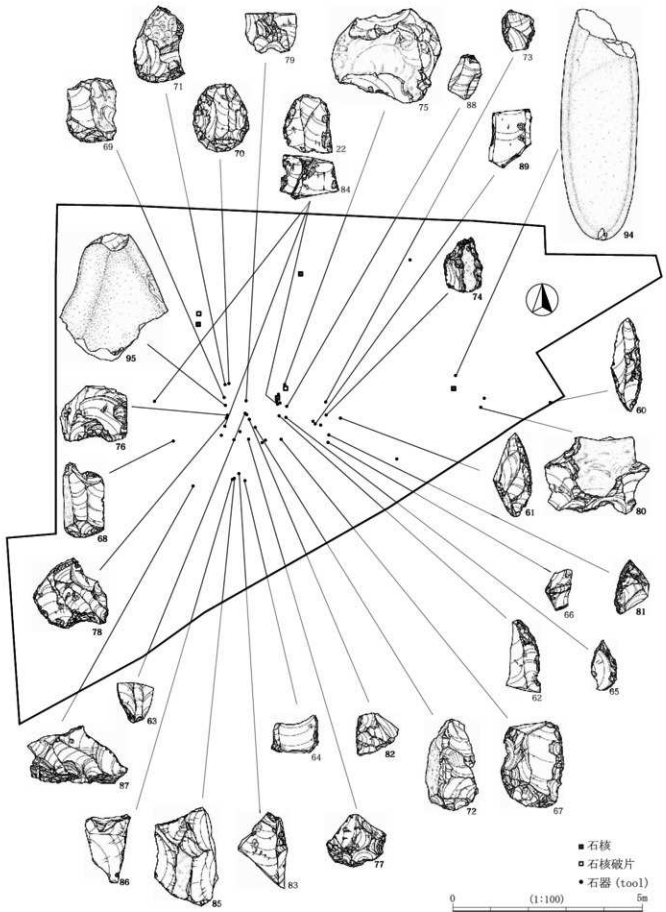
第17図 下層石器群の石器分布状況



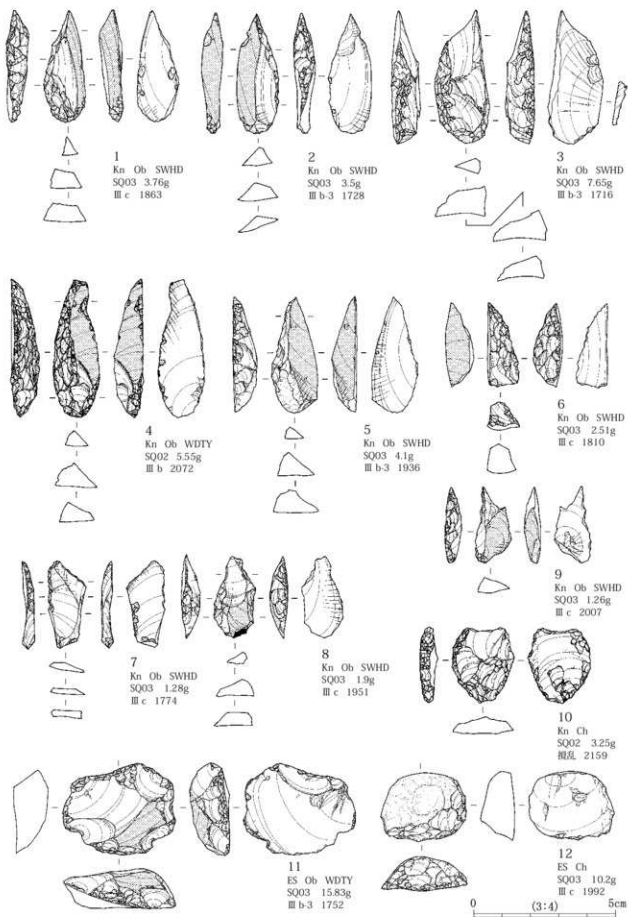
第18図 上層石器群の石材別分布状況



第19図 SQ01分布状況



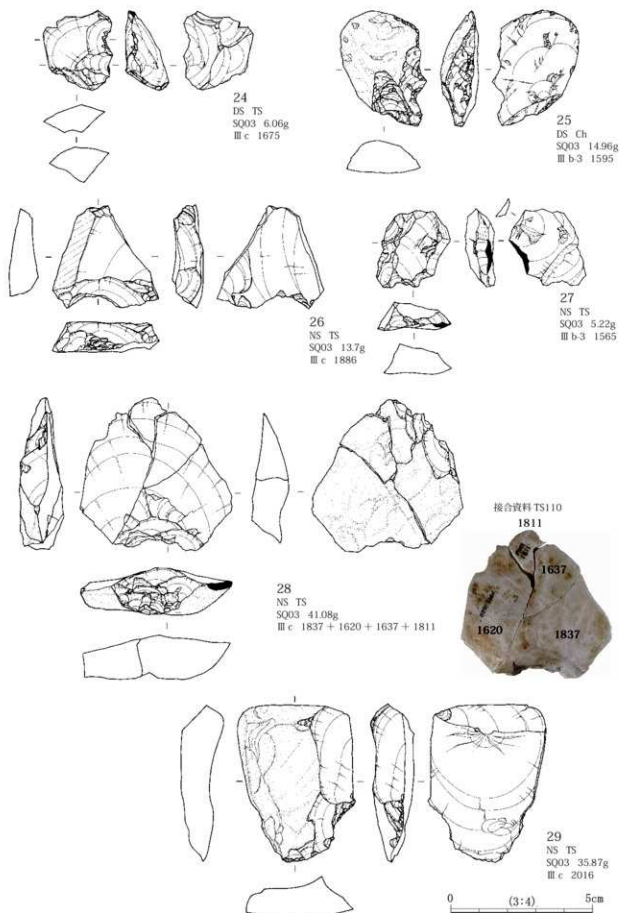
第20図 上層石器群の石器分布状況



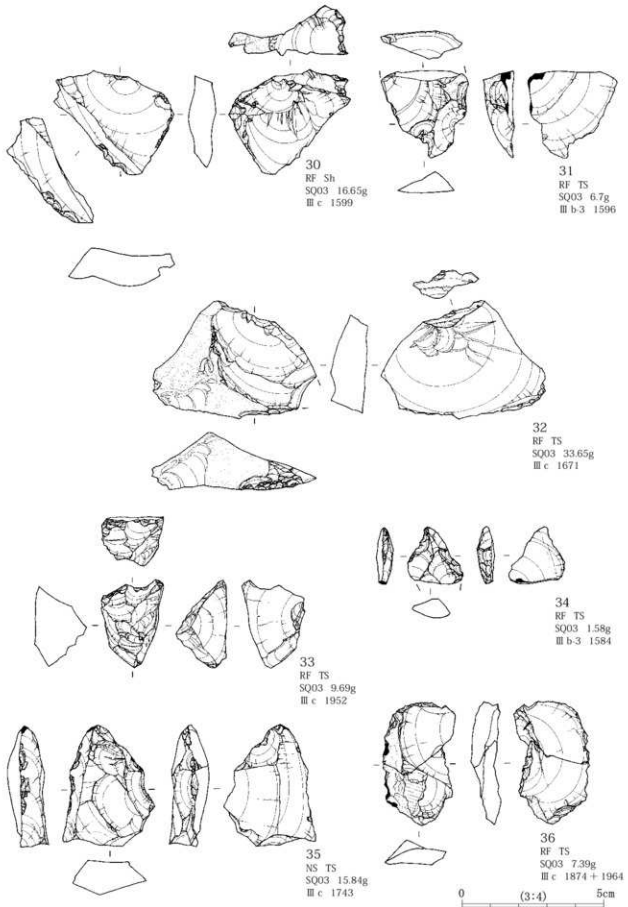
第21図 下層石器群の石器1



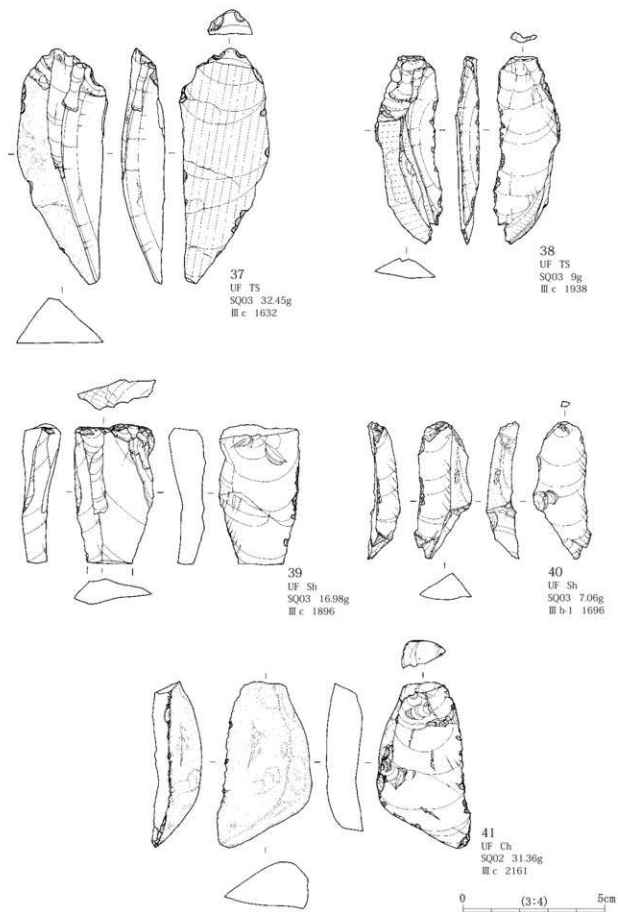
第22図 下層石器群の石器2



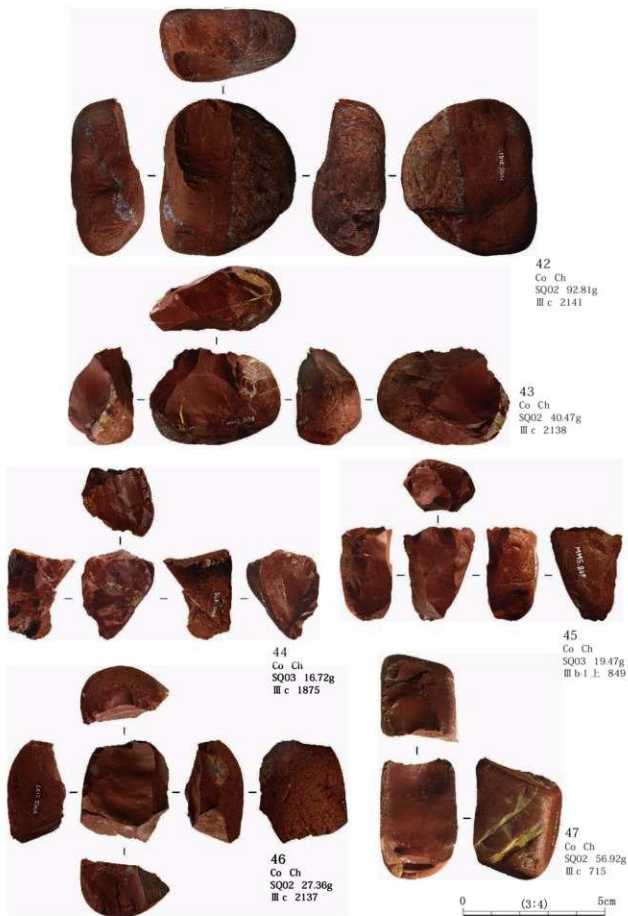
第23図 下層石器群の石器3



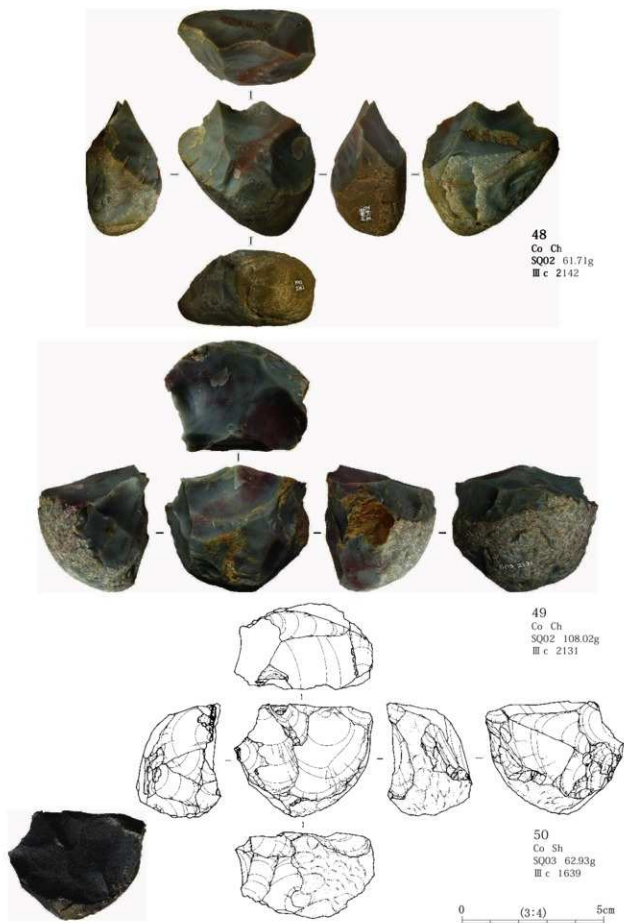
第24図 下層石器群の石器4



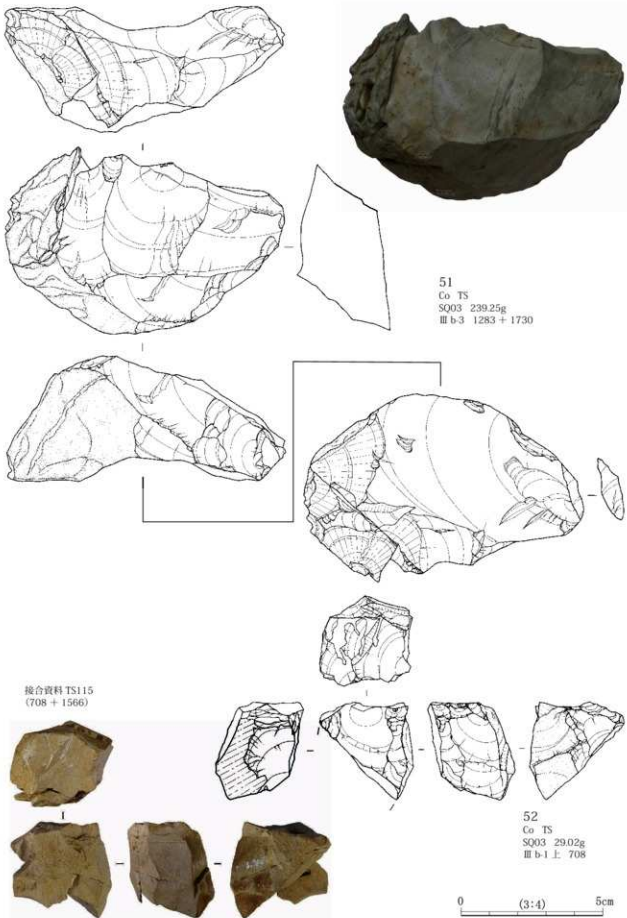
第25図 下層石器群の石器5



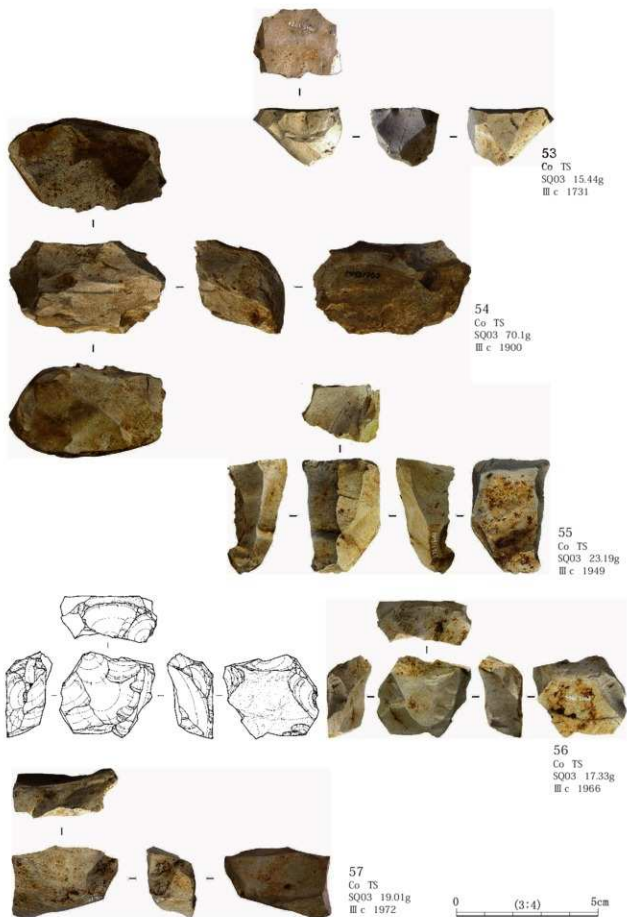
第26図 下層石器群の石器6



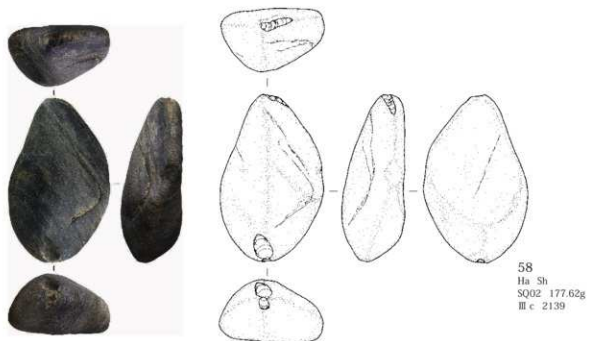
第27図 下層石器群の石器7



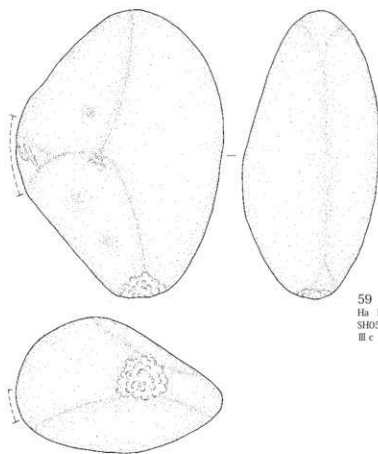
第28図 下層石器群の石器8



第29図 下層石器群の石器9



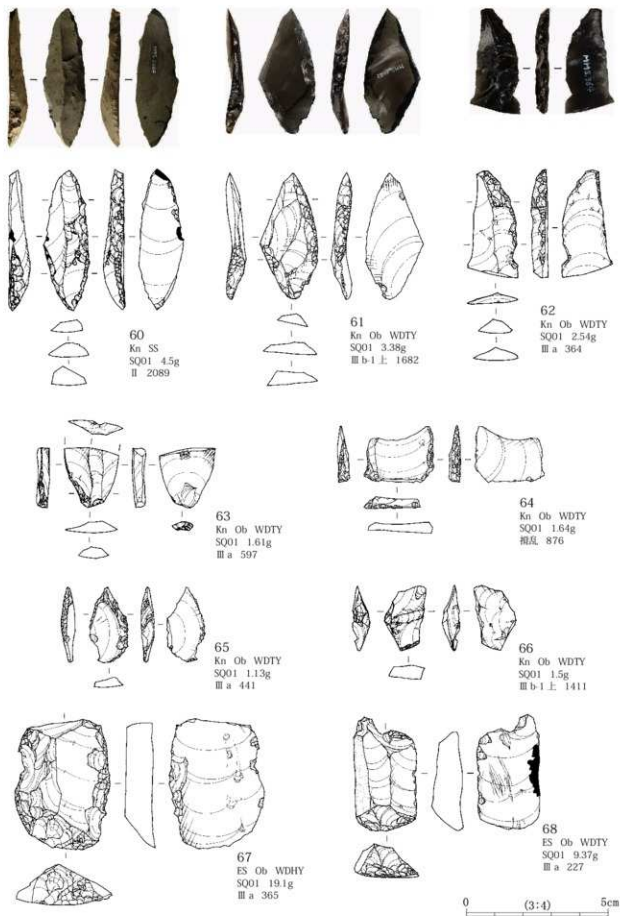
58
Ha Sh
SQ02 177.62g
III c 2139



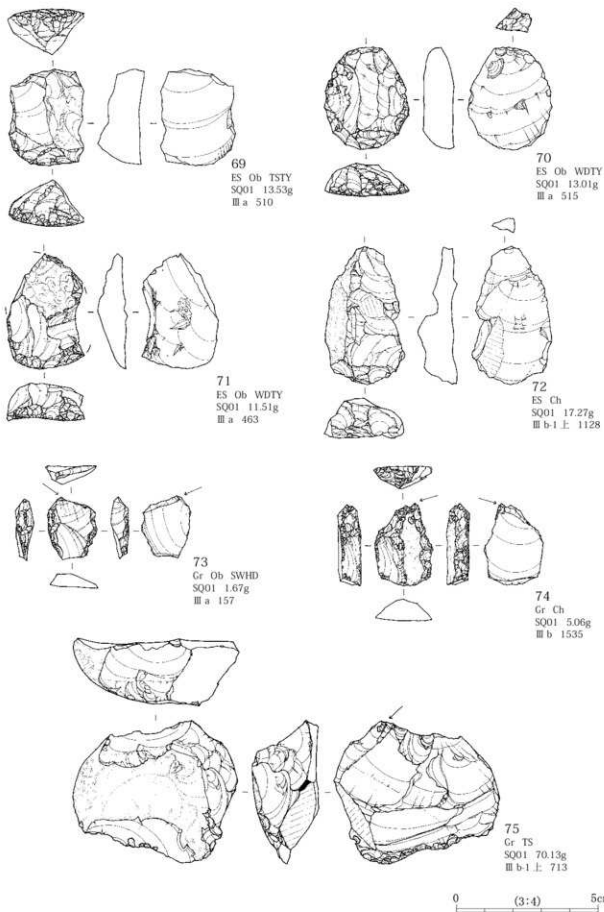
59
Ha 舞石安山岩
SH05 1300.49g
III c 2110

0 (1:2) 10cm

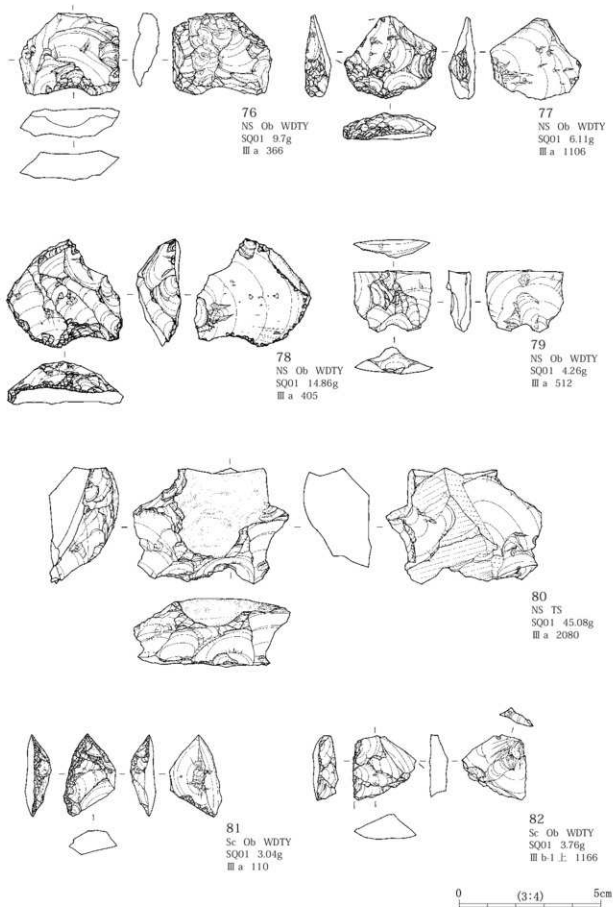
第30圖 下層石器群の石器 10



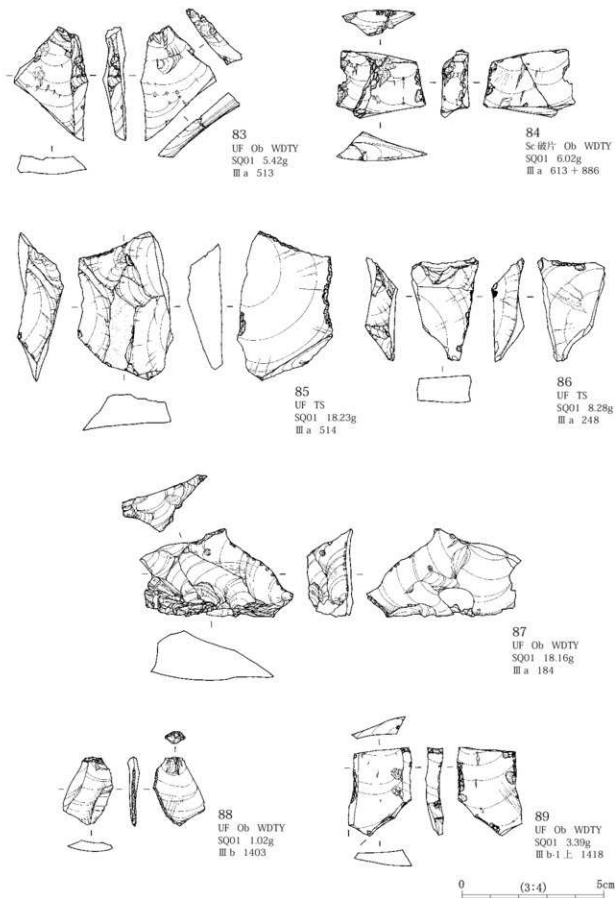
第31図 上層石器群の石器1



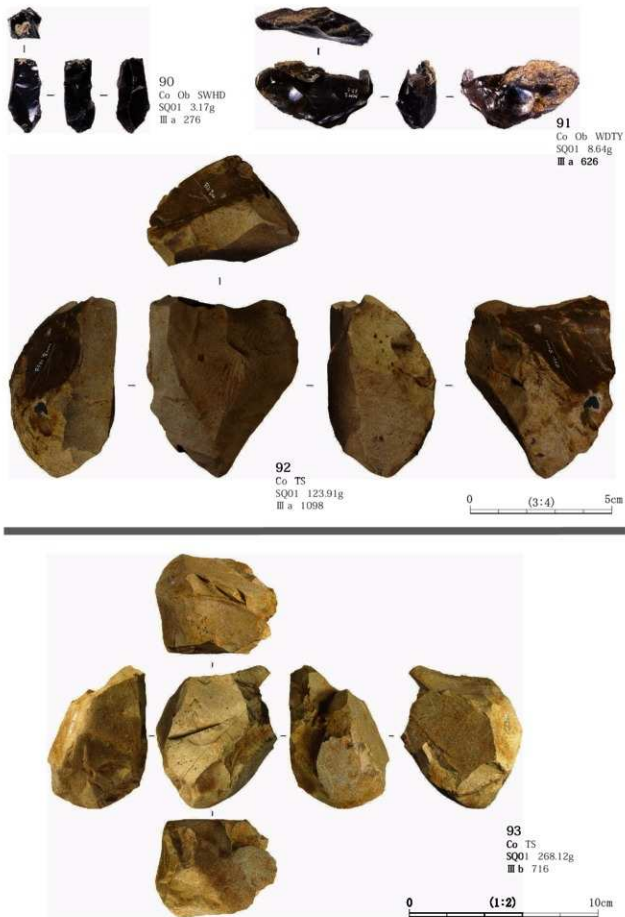
第32図 上層石器群の石器2



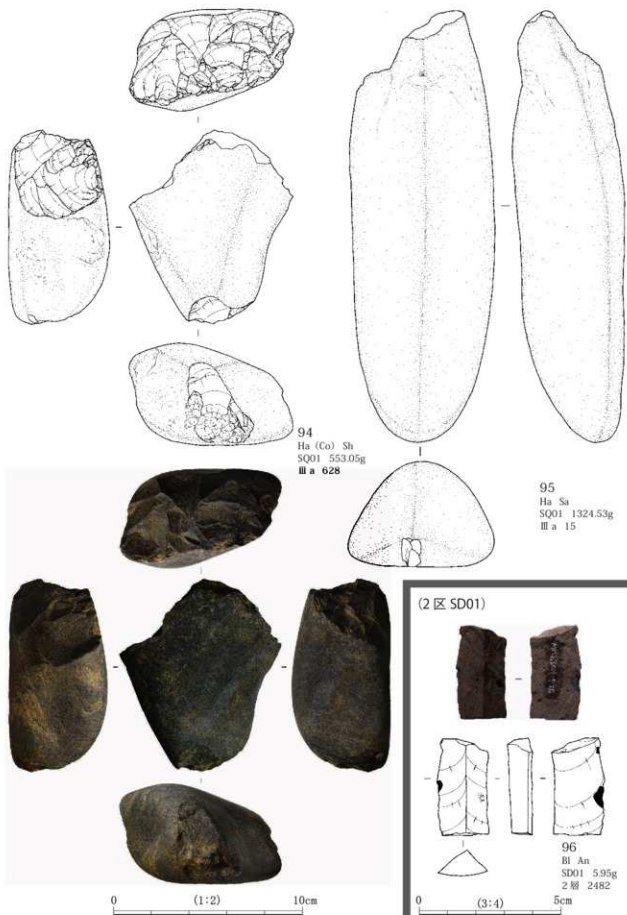
第33図 上層石器群の石器3



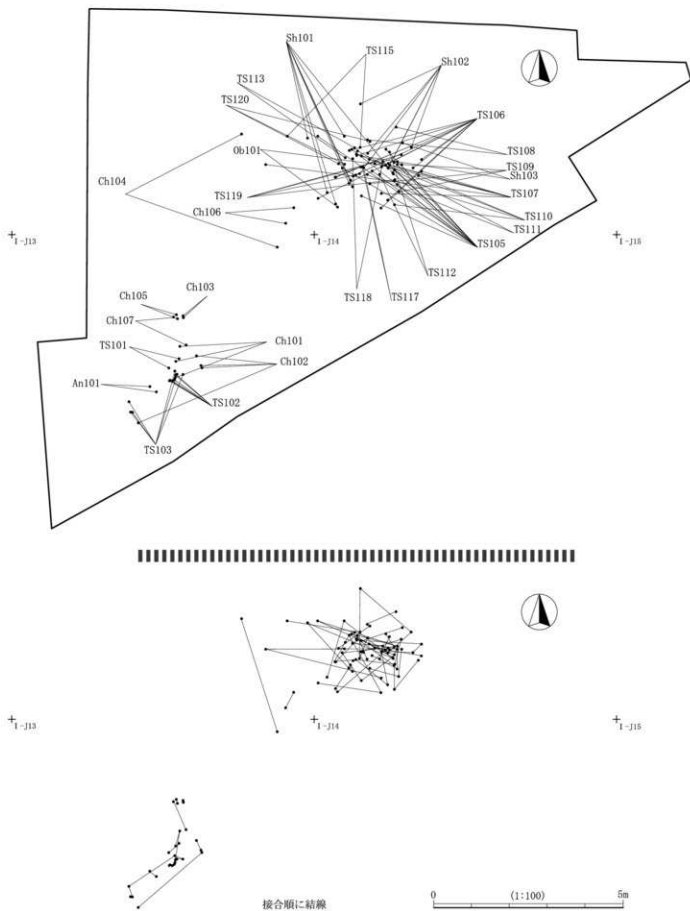
第34図 上層石器群の石器4



第35図 上層石器群の石器5



第36図 上層石器群の石器6



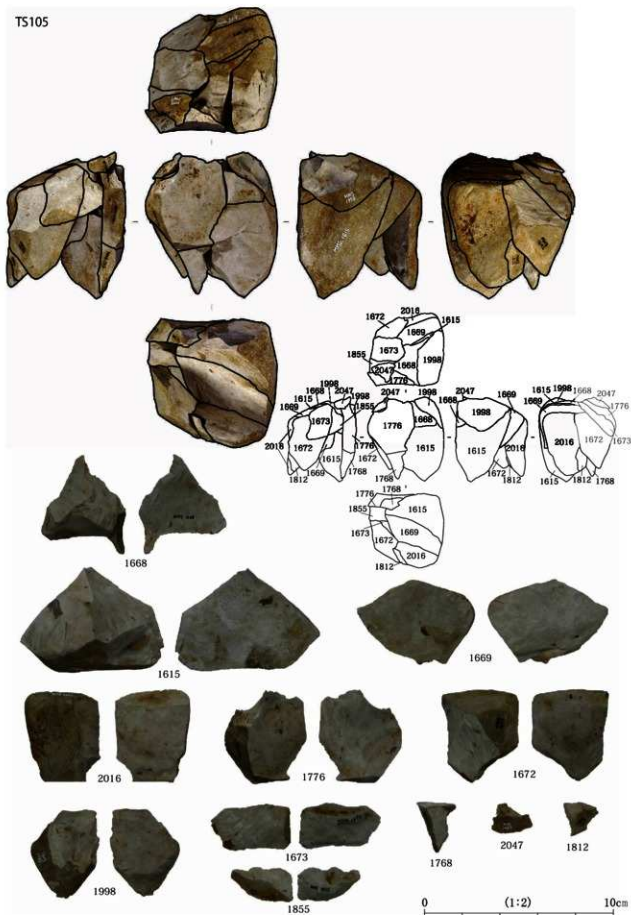
第37図 下層石器群の接合関係



第39図 下層石器群の接合資料 2



第40図 下層石器群の接合資料3

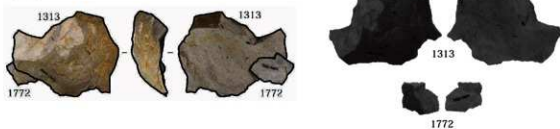


第41図 下層石器群の接合資料4

TS106



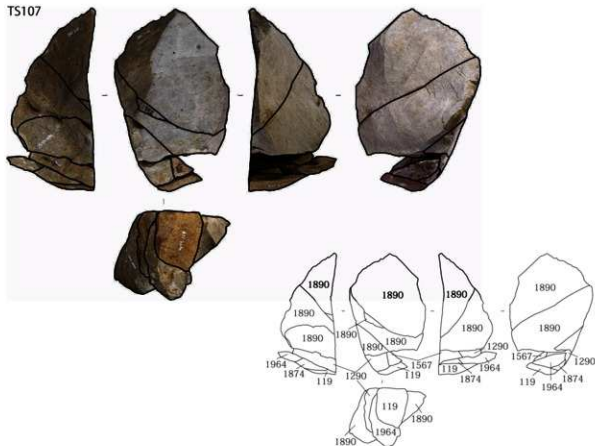
TS108



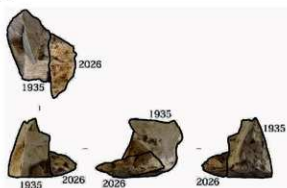
0 (1:2) 10cm

第 42 図 下層石器群の接合資料 5

TS107

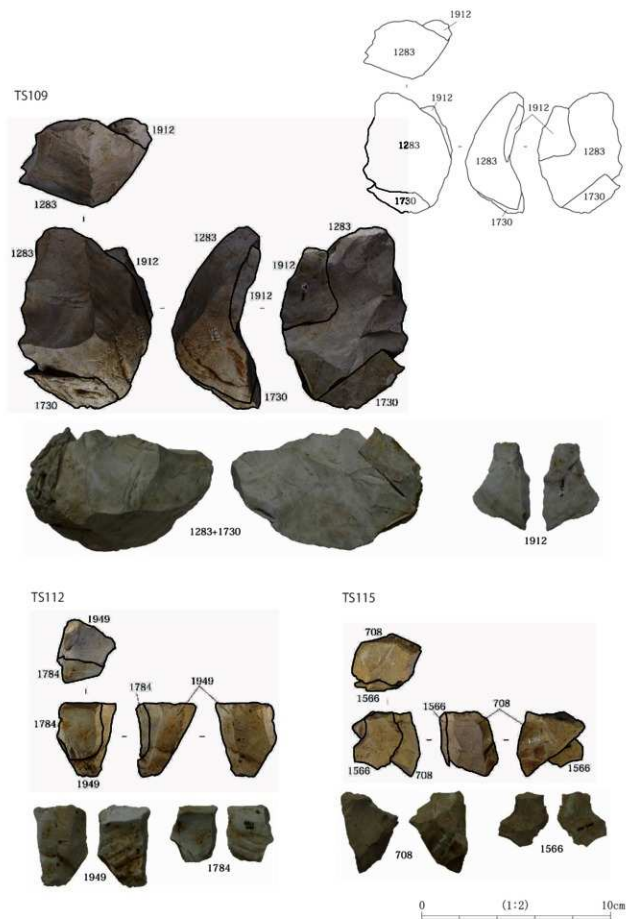


TS111

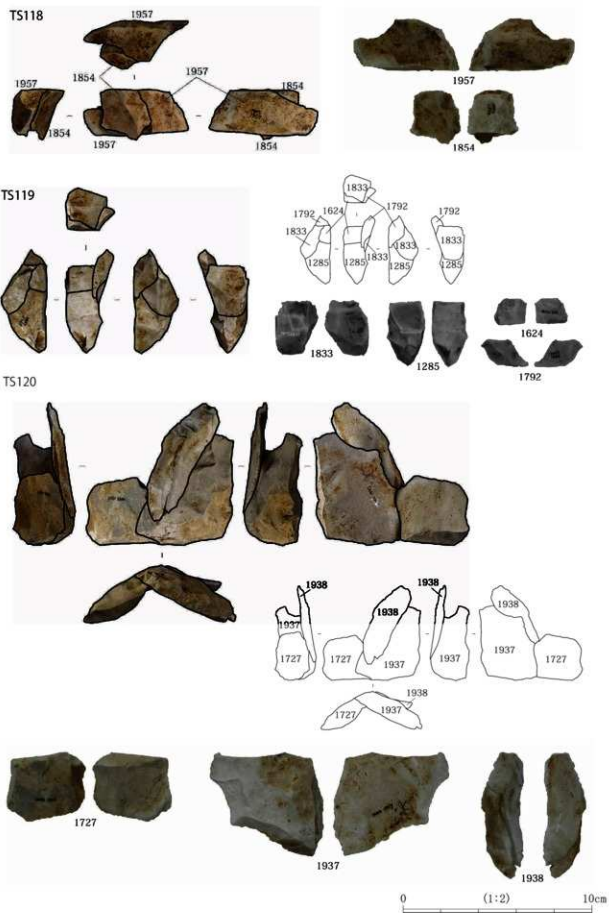


0 (1:2) 10cm

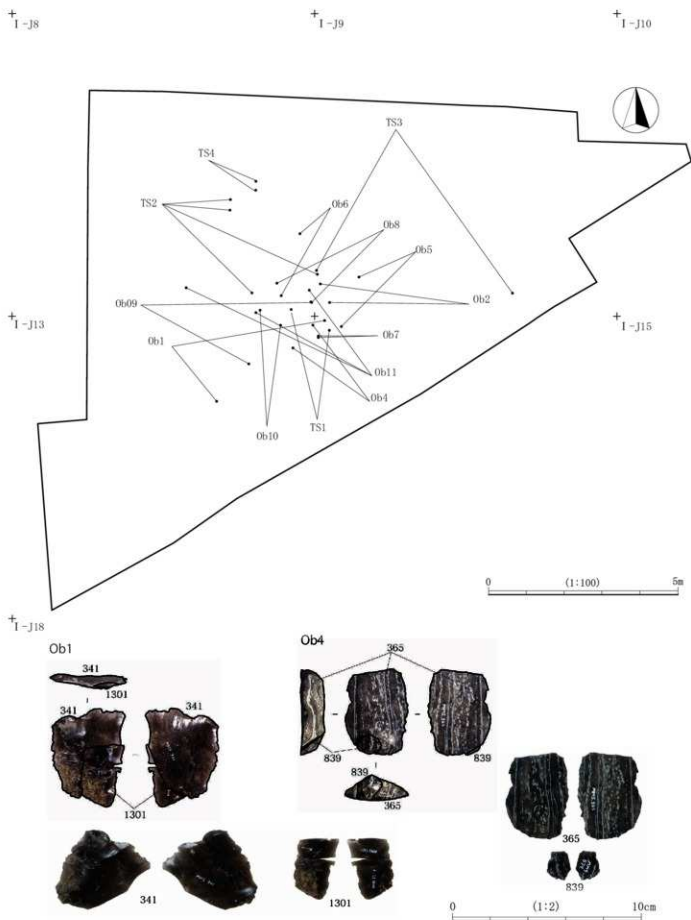
第43図 下層石器群の接合資料6



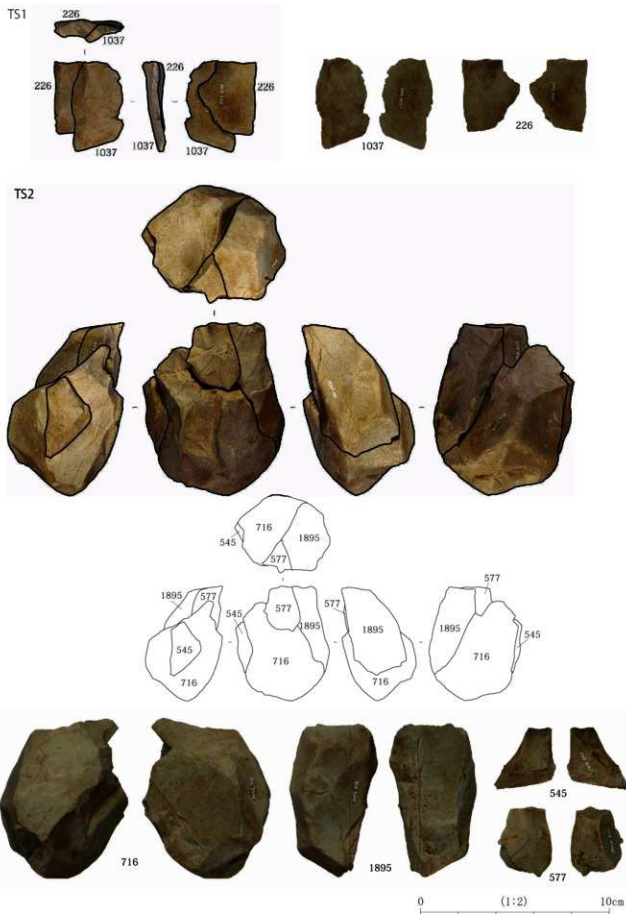
第44図 下層石器群の接合資料7



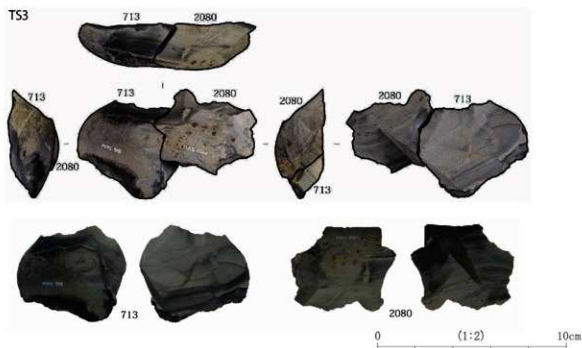
第45図 下層石器群の接合資料8



第46図 上層石器群の接合資料1



第47図 上層石器群の接合資料2



第48図 上層石器群の接合資料3

5 年代測定と黒曜石産地推定

(1) 年代測定について

遺物包含層の堆積年代を想定するため、火山灰分析と光ルミネッセンス年代測定を実施した。火山灰分析は古環境研究所に委託し実施した。光ルミネッセンス年代測定は、遺跡調査指導の一環で、奈良教育大学長友恒人教授に実施して頂いた。測定サンプルの採取場所は第13図の土層図に示した。添付DVDにPDFファイルの分析報告書を収録した。ここでは、分析結果の概要をまとめる。

光ルミネッセンス年代測定

光ルミネッセンスではOSL年代測定を試みたが、測定に適した石英粒子が得られないため、IRSL測定をおこなった。試料は2005年(平成17年)と2006年(平成18年)にそれぞれ1地点ずつサンプリングし、2地点の試料を測定した。サンプル地点は、2005年は調査区北側の崖面、2006年は調査区の南壁面であり、2地点は7mほど離れている。両地点の土層の堆積状況は異なっており、2005年のサンプル地点はIV層の堆積が厚く、基本土層では見られない薄い砂礫層が堆積している。第13図には2005年のサンプル場所を示している。なお、2005年には2006年以降の基本土層の認識が異なっていたため、サンプルの層名が基本土層と異なる。

分析の結果は、下表のとおりである。分析報告書で指摘された、IRSL年代の括弧で示した不確実な数値を除外すると、2地点の測定結果から、III a層が1.6万年前、III b1層が約2.1～2.4万年前、III b3層は不明、IV層は約3.5～4.2万年前という推定値が得られる。

試料名	基本層序名	蓄積線量 (Gy)	年間線量 (mGy/年)	IRSL年代 (千年前)
Ⅲ層	Ⅲ a・Ⅲ b1層	69.6 ± 8.2	3.24 ± 0.11	21 ± 3
Ⅳ-1層	Ⅲ b2・Ⅲ b3層	(78.2 ± 7.3)	2.28 ± 0.14	(34 ± 4)
Ⅳ-2層	Ⅳ層	71.6 ± 12.1	2.05 ± 0.08	35 ± 6
Ⅳ-4層	Ⅳ層	72.2 ± 5.6	1.97 ± 0.08	37 ± 3

注：()内の数値は不確実である（本文参照）

2005年度調査区北側のIRSL年代測定結果

試料名	基本層序名	蓄積線量 (Gy)	年間線量 (mGy/年)	IRSL年代 (千年前)
Ⅲ a層	Ⅲ a層	57.9 ± 4.3	3.54 ± 0.11	16 ± 1
Ⅲ b1層	Ⅲ b1層	67.2 ± 7.1	2.79 ± 0.09	24 ± 3
Ⅲ b3層	Ⅲ b3層	(89.6 ± 10.7)	1.96 ± 0.07	(46 ± 6)
Ⅲ c層	Ⅲ c層	(114.6 ± 16.1)	1.98 ± 0.09	(58 ± 9)
Ⅳ層	Ⅳ層	82.2 ± 8.5	1.98 ± 0.09	42 ± 5

注：()内の数値は不確実である（本文参照）

2006年度調査区南側のIRSL年代測定結果

火山灰分析

火山灰分析のための土壌サンプルは2006年（平成18年）度調査区内の4か所でおこない（第13図）、その中の3か所（サンプルポイント1・3・4）のⅢ a層～Ⅳ層の試料を分析した。ポイント1は第13図セクションE-Fの左側、ポイント3はセクションA-B、ポイント4はセクションC-Dにサンプル場所を示した。

分析結果は、Ⅲ a層とⅢ b1層からUG^(註9)が、Ⅲ c層とⅣ層でATが検出された（下表）。サンプルポイント3の分析結果からUGの降灰層準はⅢ a層上部と推定されている。分析報告書の考察では、「本（南

地点名	層名	試料番号	スコリア量	火山ガラス		軽石量	由来するテフラ
				量	色調・形態		
サンプルポイント1	Ⅲ b-1	2	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ b-3	6	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ c	10	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅳ	16	—	++	cl・bw	—	AT
サンプルポイント3	Ⅲ a	1	—	++	cl・pm>cl・bw	—	UG
	Ⅲ a	2	—	+	cl・pm>cl・bw	—	
	Ⅲ a	3	—	(+)	cl・pm, cl・bw	—	
	Ⅲ b-1	4	—	(+)	cl・pm, cl・bw	—	
	Ⅲ b-3	5	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ b-3	6	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ b-3・Ⅲ c	7	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ c	8	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ c	9	—	+	cl・bw	—	
	Ⅲ c	10	—	+	cl・bw	—	AT
サンプルポイント4	Ⅲ b-1	1	—	+	cl・pm, cl・bw	—	UG
	Ⅲ b-1 ¹	2	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ b-3	3	—	(+)	cl・bw	—	
	Ⅲ c	4	—	++	cl・bw	—	AT

—：含まれない、(+)：きわめて微量、+：微量、++：少量、+++：中量、++++：多量。
cl：無色透明、br：褐色、bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型。

テフラ分析結果

曾峯) 遺跡IV層からⅢ a層は、ATより上位でUG以下と考えられる。(中略) IV層からⅢ a層までの堆積・形成年代は、およそ2.7万年前以降1.5万年前(暦年)までの範囲に入る。」と報告された。また、Ⅲ c層とⅢ b3層以上とは重鉱物組成の傾向が異なり、両者の堆積環境に変化があったことが指摘されている。

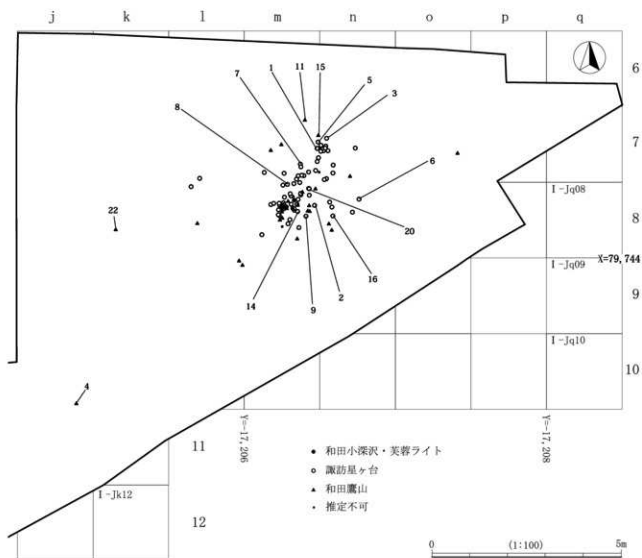
上記の光ルミネッセンス年代測定と火山灰分析の結果を比べると、Ⅲ a層～Ⅲ c層はAT降灰以降であることは一致しているが、IV層の年代に齟齬が生じている。光ルミネッセンス年代測定ではIV層はAT降灰以前の年代が示され、火山灰分析ではIV層はAT降灰以降であるとしている。しかしながら、石器はすべてⅢ c層より上位から出土しており、上層石器群と下層石器群はいずれもAT降灰以前のものであることは確実であろう。なお、IV層から石器が出土していないが、IV層の堆積年代が遺跡が所在する丘陵の隆起開始年代を知る手掛かりとなる。今後の資料の蓄積を待って検討したい。

(2) 黒曜石産地推定について(第49・50図)

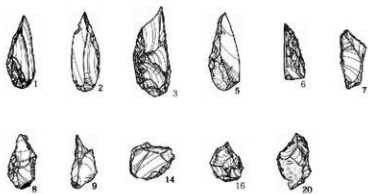
黒曜石産地推定は、沼津工業高等専門学校望月明彦教授(2008年分析当時)の委託研究により実施した。縄文時代の石器を含め672点の資料を分析した。旧石器時代の資料が607点、縄文時代の資料が65点である。2008年度の分析結果をもとに、個別別資料分類と接合作業をおこない、分析結果と齟齬を生じた資料については2011年度に再度分析をおこない、一部産地群に変更があった。望月教授によると、分析結果は土壌の付着、表面の風化などにより誤った結果がでる場合がありうるということで、考古学的分類と齟齬が生じた場合は再測定の必要性があることを確認した。分析報告書(2008年度分析と2011年度再分析)は添付DVDにExcelファイルで収録した。ここでは、分析結果の概要をまとめる。

黒曜石産地群		諏訪風ヶ台群	和田古峠群	和田美野ライト群	和田小深沢群	和田土屋橋西群	和田土屋橋南群	和田土屋橋北群	和田鷹山群	蓼科冷山群	神津島恩島島群	推定不可他	合計	備考
上層石器群	SQ01 ナイフ形石器								6				6	
	SQ01 槌器								3	1			1	5
	SQ01 彫器	1											1	
	SQ01 挟入削器						1	2					1	4
	SQ01 削器								6				6	3点が接合し一一体となる
	SQ01 二次加工がある剥片			1					3				4	
	SQ01 刃器	1	1						5				7	
	SQ01 石刀								1				1	2
	SQ01 石核	1							1				2	
	SQ01 剥片	10	3	20	14	1			255	16	2	17	338	
	SQ01 砕片	2		6	3				96	3		12	122	
下層石器群	SQ02 ナイフ形石器								1				1	
	SQ03 ナイフ形石器		9										9	
	SQ03 槌器		1						1				2	
	SQ03 揉鉢器		1						1				2	
	SQ03 二次加工がある剥片		1										1	
	SQ03 刃器		2										2	
	SQ03 剥片	52		1	1				28				3	85
	SQ03 砕片	8											8	
縄文時代石器群(石鏃・石核他)		22	4	1	4	1	4	24	1			4	65	
合計		111	3	33	19	5	1	5	433	21	2	39	672	

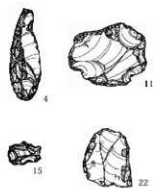
第9表 黒曜石産地推定結果



諏訪星ヶ台群

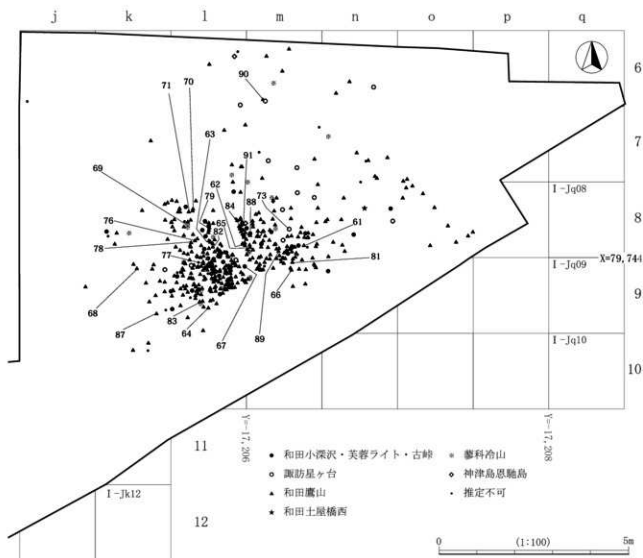


和田鷹山群

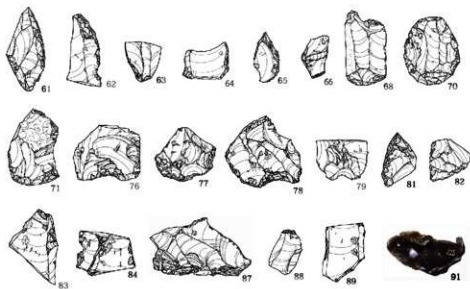


0 (1:2) 4cm

第49図 下層石器群の黒曜石産地別出土状況



和田鷹山群



夢科冷山群



和田芙蓉ライト群



諏訪星ヶ台群



第50図 上層石器群の黒曜石産地別出土状況

下層石器群 (SQ02・SQ03) は諏訪星ヶ台群が多数を占め、上層石器群 (SQ01) では和田鷹山群が大多数を占め、黒曜石産地組成に違いが認められる (第49・50図、第9表)。また、下層石器群のナイフ形石器はSQ03ではすべて諏訪星ヶ台群であるのに対し、SQ02では和田鷹山群である。いずれも、横長の剥片を素材とした調整加工に共通性が認められるナイフ形石器であり、ブロックの形成過程を考える上で興味深い資料である。

神津島馳鳥群が2点確認されているが、Ⅱ層とⅢa層出土であり、上層石器群よりも新しい時期のものが混入した可能性がある。

黒曜石産地推定の結果は、遺物観察表に掲載し、分析報告書は添付DVDにExcelファイル形式で収録した。実測図を掲載したものは、遺物番号の下に産地名の略称 (凡例参照) を示した。

注

- 1) 火山灰分析は株式会社バリノサーヴェイに委託し、光ルミネッセンス年代測定は奈良教育大学長友恒人教授に依頼し実施した。
- 2) Ⅲb2層が堆積していない場所では、Ⅲb1層とⅢb3層の区分が困難であるため、Ⅲb層として遺物を取上げた。すなわち、Ⅲb層としたものにはⅢb1層とⅢb3層のものが含まれている。
- 3) 『日本の考古学Ⅰ』(河出書房)に付けられている用語集では、Bladeの訳語を、刃器または刃器状剥片としている。今日、側縁が平行したBladeは石刃と称され、縄文時代や弥生時代の調整加工のみられる刃器状の石器の器種名に刃器が用いられる場合がある。旧石器時代研究の初期には、刃器は調整加工が認められない石器に与えられた名称であった。本報告書では、基本的にその考え方を踏襲し、二側縁が平行するという条件は満たさないが、調整加工が無い剥片を石器に用いていると判断できた場合、「刃器」の用語を用いて器種名とした。
- 4) 信州大学赤羽貞幸教授のご教示による。
- 5) 接合するものもしくは出土状況から明らかに同一個体であるものを同一母岩資料とし、類似しているが接合関係が確認できず同一個体の確認がないものを同質母岩資料とした。同質母岩の用語は佐藤雅一2006で用いられている。
- 6) 遺物番号の1～2176は発掘時に付した番号であり、2177以降は土を篩にかけて採取したものなど整理段階で付した番号である。資料には遺物番号を注記している。
- 7) 注5と同じ。
- 8) 注6と同じ。
- 9) テフラ名はAsama-Hiraharaで、立川ローム層最上部Ⅲ層の鍵層。浅間黄色板鼻軽石 (As-YP) および浅間草津軽石 (As-K) の細粒部が広域に降下堆積したものとされている。暦年で1.5万～1.6万年前とされている。

引用・参考文献

- 佐藤雅一2006「第4章第2節居尻A遺跡と下モ原I遺跡の連鎖活動について」『貝塚根ノ木平遺跡群〈旧石器時代編〉津南町文化財調査報告書第50輯』
- 長野県埋蔵文化財センター2010『長野県市佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書85

第2節 縄文時代

1 概要

これまでの発掘調査では、縄文時代の遺物は石鏃などを除いてほとんど報告されていないが、長野県史遺跡地名表では縄文時代前期の有尾式、南大原式、上原式の記載がある。今回の調査では縄文時代草創期から晩期の土器が出土した。前期前葉～中葉の土器が主体となり、草創期、早期、中期、後期、晩期の土器は少数である。石器では石鏃が主体を占める。

1区では不整形な穴2基（SK11・SX02）が確認され、土器と石器が数点出土した。2区では遺構は検出されなかったが、自然流路跡である溝状の窪地（SD01）から土器と石器が出土した。4区では土器と石器が数点出土したのみである。

SK11からは石鏃1点、二次加工がある剝片2点、剝片・碎片145点が出土している。土器は出土していない。剝片・碎片の多くは前節で述べたとおり、旧石器時代の遺物であると考えられる。SX02はSB01の床下で確認された不整形な黒褐色土の落ち込みであり、黒褐色土から押型文土器と石鏃各1点が出土した。これらの不整形な穴（SK11・SX02）は風倒木痕であり、人為的な遺構ではないと判断した。

また、用地内に隣接する萩原博士の畑で、かつて神子柴型石斧が採集されており、調査に際し萩原氏より提供いただいた。南曾峯遺跡に隣接する手子塚遺跡、ゴンボ山遺跡で神子柴型石斧が出土しており（豊野町誌刊行委員会2001）、本遺跡の周辺地域で同時期の資料がまとまって出土している。重要な資料であるため、発掘資料と合わせて実測図を提示した（第65図92）。

2 遺物

(1) 出土状況

縄文時代の遺物の大半は2区のSD01から出土した。SD01は幅約10m、長さ27mにわたって確認された自然流路跡であり、埋土1～5層は風成層であることから、縄文時代草創期以前に離水して溝状の窪地になったと判断した。この窪地は中世には埋没している。SD01の埋土3層と4層が縄文時代の遺物包含層である（第51・52図）。埋土1・2層からは弥生時代から平安時代の遺物が多数出土した。SD01埋土の遺物は8mグリッドなどの単位で取上げており、明確なデータは示せないが、北西側に縄文時代の遺物が多く出土する傾向があり、窪地中央部から南西縁部に多く出土し、北東側の縁にはあまり出土していない。

SD01は基本土層Ⅲ層（第2章4節参照）を掘りこんでおり、Ⅱ層に覆われている。Ⅶ層・Ⅷ層は非常に硬い粘土層と砂層であるが、本来水平の水成堆積層が褶曲により斜めに堆積している（第52図、写真）。埋土2層中には、弥生時代と平安時代の土器と共に多量の礫が出土している。これらの礫については第3章5節に詳しく述べる。SD01の最下層からは遺物は確認されず、3・4層から出土する土器で一番古いものは早期押型文土器である。縄文時代中期、後期、晩期の土器は僅かに出土したのみであるが、いずれも2層から出土した。

なお、1区では草創期と早期押型文土器各1点、石鏃16点を含む30点の石器が出土した。4区では土器3点、石鏃1点が出土した。その他はすべて2区のもので、その大半がSD01から出土した。



2a区北壁土層断面

(2) 土器 (第53図～56図)

約570点の土器片が出土したが、そのほとんどがSD01のものである。小破片が多く、文様が解らないものもある。時期が判明するものは、草創期1点(1)、早期48点(2～23・62～64・66・75)、前期360点(24～65・71～74・76～80)、中期12点(81・82)、後期2点(83・84)、晩期2点(85・86)である。前期の中では、繊維を含んだ縄文施文の土器(24～54・71～74)が大多数を占める。

1は斜行する絡条体圧痕文である。2～13は押型土器で、7が縦位回転施文、その他が横位回転施文である。2～7は山形文で、3・4・7は帯状施文であろう。8～11は楕円文で、12は平行線と楕円文の異種併用押型文である。13は櫛状文である。8～10・12の胎土には少量の繊維が認められる。14～19は沈線文系土器で、平行沈線と貝殻腹縁文が確認される。15・17の口唇部には沈線と貝殻腹縁によるキザミがあり、同一個体と思われる。20～23は条痕文系土器で同一個体と思われる。鶴ヶ島台式併行のもので、胎土に繊維と金雲母を多く含んでおり、内面はナデ調整である。24～27は口縁部に爪形刺突文が2列平行する前期前葉の土器である。いずれも胎土に繊維を含み、新潟県の布目式土器に後続する爪形刺突文土器群に類すると考えられる(斎藤準2006)。24・25の爪形刺突文の下部には縄文が認められる。24は波状口縁である。74は底部付近に爪形刺突文が2列平行して施文されており、24～27と同型式の土器であろう。28～39は胎土に繊維を含み、異条または異節の縄文と思われるが、縄文原体を判読できない。前期前葉の関山式併行の土器であろう。40～48は胎土に繊維を含む単節縄文である。40～43は口唇部に刺突列が認められる。前期前葉二木式併行期に位置づけられる。49～52は胎土に繊維を含む羽状縄文、53・54はループ文が見られ、いずれも前期前葉に位置づけられる。55～60は単節縄文であるが、胎土に繊維を含まない。明言できないが、前期の可能性が高い。61は無節の縄文で胎土に繊維を含む。62～64は竹筥による沈線と押し文であり、同一個体の可能性がある。早期沈線文系土器と判断した。65～70は無文土器で、65～67は胎土に繊維を含む。66は口唇部に絡条体圧

器種	器種														合計									
	石織	石織未製品	尖頭器	石錐	篋状石器	搔器	三脚石器	削器	一次加工がある剥片	楔形石器	神子柴型石斧	磨製石斧	特殊磨石	磨石		凹石	砥石	礮石	台石	円盤形石製品	剥片・破片	原石	石核	
石材/出土場所																								
黒曜石	28	1		1	1				29	5										660	1	14	740	
チャート	11	3						4	10	1										223	2	254		
無斑晶質安山岩	12	1	1		1	2		8	3		1									121		150		
ホルンフェルス			1																				1	
頁岩	4	1	1		1			9	5	1	2	1								382		7	414	
流紋岩	2	4						1	5											165			177	
珪質凝灰岩	1								5											90	2		98	
珪質頁岩	1				2		1													41			45	
凝灰岩							1		2	1										5			9	
玉髓									1											2			3	
その他		1					1	2			3									17			24	
輝石安山岩												1		4	1			1		9			16	
多孔質安山岩													1										1	
砂岩												2		1	1	2	1			1			8	
合計	59	11	3	1	2	5	1	24	62	8	3	4	3	1	5	2	2	1	1	1716	1	25	1940	
1区	SB01	4						1	1	2										94		1	103	
	SB02	2							2											29			33	
	SK11	1							2											145			148	
	SK14																			1			1	
	SD06																			2			2	
	SX02	1																		28			29	
	P11	2										1								45			48	
	遺構外	6				1			2					1						82			92	
2区	SD01	41	11	3	1	2	3	1	22	55	5	2	3	3	1	4	1	2	1	1	1228	1	23	1414
	SK08						1													1			2	
	SK13							1												2			3	
	遺構外	1								1	1				1					53		1	58	
	4区 遺構外	1																		6			7	
合計	59	11	3	1	2	5	1	24	62	8	3	4	3	1	5	2	2	1	1	1716	1	25	1940	

第10表 縄文時代石器器種組成表

痕文がみとめられ、早期糸文系の土器に属するものかもしれない。他は早期または前期のものであろう。71・72は胎土に繊維を含み、コンパス文と連続爪形文が見られ同一個体の可能性が高い。繊維を含んでいるが、有尾式に含まれるものであろう。73は格子目状の沈線文で、胎土に繊維を含む。75は屈曲部があり器形が判然としないが、20～23の胎土に類似しており、鶴ヶ島台式の口縁部の屈曲部と考えられる。76～79は半截竹管文である。76は平行沈線文、77・78は連続爪形文、79は結節浮線文でいずれも前期後半の土器である。81・82は単脚斜縄文と沈線文で区画された無文帯をもつ。中期末から後期初頭に位置づけられる。胎土が類似しており同一個体の可能性がある。83・84は後期堀之内1式併行期のものである。85・86は小片であるが沈線の文様が確認される。85は口縁部に2個一対のY字状の小突起をもち、焼成前の穿孔がある。2点とも胎土が白色を帯びており、在地の胎土ではない。晩期の北陸系の土器であろう。

(3) 石器 (第57図～66図)

石織59点、石織未製品11点、尖頭器3点、石錐1点、篋状石器2点、搔器5点、三脚石器1点、削器24点、二次加工がある剥片62点、楔形石器8点、神子柴型石斧3点、磨製石斧4点、特殊磨石3点、磨石1点、凹石5点、砥石2点、礮石2点、台石1点、円盤形石製品1点、剥片・破片1,716点、石核25点、原石1点が出土した。遺構別出土点数と、器種別の石材組成を第10表に示した。なお、2区のSD01埋土に掘り込んだ遺構から出土した石器はすべてSD01の点数に加算した。石器の法量等の属性視

察結果は添付DVDの「縄文時代石器観察表(Excel形式)」に記録した。以下では、石材を中心に記述する。

石鏃・石鏃未製品(第57図1~44):1~37が石鏃、38~44が石鏃未製品である。石鏃は大半が無莖石鏃で、4点のみ有莖石鏃(34~36)である。石材は、3・7・25・29・30・34・36・41が無斑晶質安山岩、5・11・14・18・20・24・32・33・42・44がチャート、13・27・35が頁岩、22・37~40・43が流紋岩、31が珪質頁岩、その他は黒曜石である。石鏃では、黒曜石が28点と多く認められるが、石鏃未製品には黒曜石1点が確認されるのみである。黒曜石産地推定では諏訪屋ヶ台群、和田鷹山群、和田芙蓉ライト群が多くみられる。

尖頭器(第58図45~47):3点出土。いずれも欠損品である。45はホルンフェルス、46は無斑晶質安山岩、47は頁岩である。

石鏃(第58図48):1点出土。諏訪屋ヶ台群の黒曜石である。

筐状石器(第58図49・50):49は無斑晶質安山岩、50は頁岩もしくは珪質頁岩である。

搔器(第59図51~55):5点出土。51は石刃を素材としており、旧石器時代~草創期の可能性がある。51・54は珪質頁岩、52・53は無斑晶質安山岩、55は黒曜石(和田鷹山群)である。

三脚石器(第60図56):1点出土。やや緑色をおびた凝灰岩である。SD01の2層の礫集中より下層から出土した。長野県ではまとまって出土した例は見られないようである。前期から後期にかけて東北・新潟に多くみられる石器とされる。新潟県では、幅上遺跡、城之腰遺跡、清水上遺跡などで多数出土している。これらは中期および、中期末から後期前葉の遺跡であり、城之腰遺跡・清水上遺跡では後述の円盤形石製品(板状石器)と共に出土している。

削器(第60図57~第61図66):24点出土。石材は、57・62・64が無斑晶質安山岩、58・59・61・63がチャート、60・65が頁岩、66が珪質頁岩である。

二次加工がある剥片(第62図67~71):不定形な石器、微細な剥離がある剥片を含めて62点出土。67・68が黒曜石、69・70が珪質凝灰岩、71が緑色を帯びた凝灰岩である。69・70は石鏃未製品の加工の初期段階の可能性があり、71は左側縁と下縁が刃部のように加工されている。

楔形石器:8点出土。黒曜石5点、頁岩、凝灰岩、チャート各1点が出土した。

石核・原石(第62図72~第64図89):原石(83)1点と、石核25点が出土。石材は72・73が珪質凝灰岩、74~83が黒曜石、84・88がチャート、85~87・89が頁岩である。74~76・79・81・84は自然面を打面としている。78・80は両極石核である。85・87は求心状に剥片剥離がおこなわれている。黒曜石は諏訪屋ヶ台群と和田鷹山群が多い。

神子柴型石斧(第65図90~92):3点出土。石材は90が無斑晶質安山岩、91・92が頁岩である。92は調査区に隣接する畑で採取されたものである。断面がD字形で、刃部を研磨している。90・91は欠損品であるが、92に類似した調整加工が見られることから神子柴型石斧と判断した。いずれも基部の破片と考えられる。

磨製石斧(第65図93~95):4点出土。石材は93が頁岩、94・95が蛇紋岩である。いずれも欠損品である。

磨石・特殊磨石(第66図96~98・101):磨石1点と、特殊磨石3点が出土。96・97が硬砂岩、98が輝石安山岩、101が多孔質安山岩である。96~98は後部に機能面が確認される。97は平坦面に敲打による窪みが確認され、98は両端部に敲打痕が認められる。101は表裏面に摩耗痕が見られる。

凹石・敲石(第66図99・100・102):凹石が5点、敲石が2点出土。99・100は輝石安山岩、102は硬砂岩である。

円盤形石製品(第66図103):1点出土。自然礫の周辺部を打ち欠いている。長野県内ではあまり見

器種名	黒曜石産地群							推定不可	合計	図版番号	器種名	遺構名	黒曜石産地推定	黒曜石 分析 番号
	諏訪星ヶ台群	和田芙蓉ライト群	和田土屋橋西群	和田土屋橋南群	和田土屋橋北群	和田土屋橋東群	豊科冷山群							
石鏃	6	4	1	1		1	8	1	22	第57図-1	石鏃	SD01	和田芙蓉ライト群	4
石鏃未製品								1	1	第57図-2	石鏃	遺構外	和田芙蓉ライト群	15
石鏃	1								1	第57図-4	石鏃	SK11	和田土屋橋北群	12
種器										第57図-6	石鏃	遺構外	和田土屋橋北群	14
削器										第57図-8	石鏃	SB01	諏訪星ヶ台群	20
二次加工がある剥片	7		3		2	7	1	2	22	第57図-9	石鏃	SB01	諏訪星ヶ台群	10
楔形石器	2					3			5	第57図-10	石鏃	SD01	和田土屋橋西群	1
石核	6				1	1	4		12	第57図-12	石鏃	SD01	和田土屋橋北群	7
原石									1	第57図-15	石鏃	SD01	諏訪星ヶ台群	5
合計	22	4	1	4	1	4	24	1	4	第57図-16	石鏃	SD01	和田土屋橋西群	3
										第57図-17	石鏃	SD01	和田土屋橋西群	3
										第57図-19	石鏃	SD01	和田土屋橋西群	17
										第57図-21	石鏃	SD01	和田土屋橋西群	6
										第57図-23	石鏃	SD01	和田土屋橋西群	9
										第57図-26	石鏃	SD01	和田土屋橋西群	19
										第57図-28	石鏃	SD01	諏訪星ヶ台群	2
										第58図-48	石鏃	SD01	諏訪星ヶ台群	24
										第59図-55	種器	遺構外	和田土屋橋西群	28
										第62図-67	二次加工がある剥片	SD01	諏訪星ヶ台群	40
										第62図-68	二次加工がある剥片	SD01	和田土屋橋西群	41
										第62図-74	石核	SD01	和田土屋橋南群	29
										第62図-75	石核	SD01	和田土屋橋南群	38
										第62図-76	石核	SD01	諏訪星ヶ台群	37
										第63図-77	石核	SD01	和田土屋橋北群	33
										第63図-78	石核	SD01	諏訪星ヶ台群	36
										第63図-79	石核	SD01	諏訪星ヶ台群	35
										第63図-80	石核	SD01	諏訪星ヶ台群	34
										第63図-81	石核	SB03	諏訪星ヶ台群	32
										第63図-82	石核	SD01	和田土屋橋北群	30
										第63図-83	原石	SB03	推定不可	31

第11表 縄文時代黒曜石産地推定結果

られないが、新潟県で出土している板状石器にあたるものであろう。輝石安山岩である。

台石・砥石 (第66図104) : 台石が1点、砥石が2点出土。台石は砂岩礫の小破片である。平坦面があり台石の可能性はある。砥石はいずれも細粒砂岩であり、104は滑らかな平坦面に線条痕が見られる。SD01の4層から出土しており、縄文時代の石器といえる。この他に、厚さ1.4cmほどの板状の砥石破片が出土した。

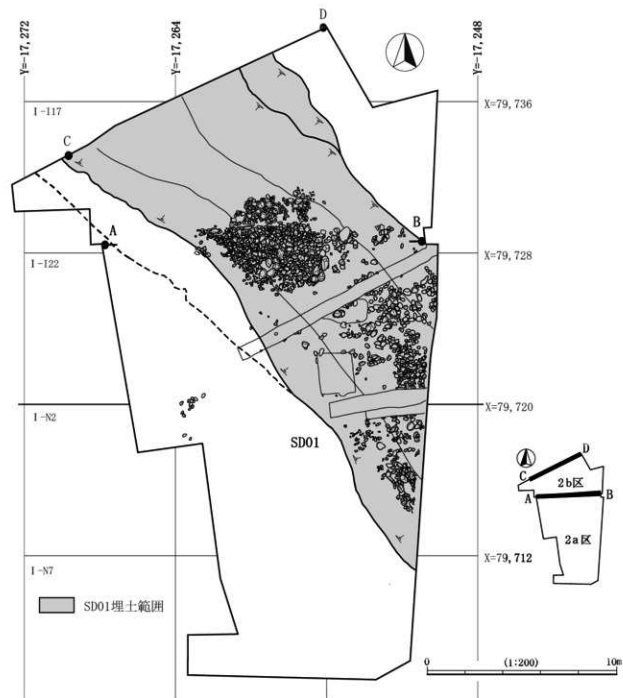
3 黒曜石産地推定

沼津工業高等専門学校校望月明彦教授(分析当時)の委託研究により、蛍光X線分析による黒曜石産地推定を実施した。調整加工が施された石器および石核の65点について分析をおこない、その結果を第11表に示した。石器は縄文時代草創期から晩期のものが含まれている。SD01には弥生時代中期の土器が多量に出土しており、石鏃、削器などは弥生時代中期のものを含んでいる可能性がある。時期ごとの黒曜石産地を知ることができる資料群ではないが、第57図1・2は早期押型文土器に伴う石鏃と判断でき、これらが少数確認された和田芙蓉ライト群であることは興味深い。

望月教授の分析結果報告は旧石器時代の石器の分析結果と一緒に添付DVDに記録した。添付DVDの「縄文時代石器観察表(Excel形式)」と共に参照いただきたい。

引用・参考文献

- 斎藤華 2006 『新潟県における縄文前期前葉の土器群について—一布目式—それ以降の土器群—』『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』
- 十日町市教育委員会 2007 『幅上遺跡発掘調査報告書』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第34集
- 豊野町誌刊行委員会 2001 『豊野町誌 豊野町の資料(一)』
- 新潟県教育委員会 1990 『関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集
- 新潟県教育委員会 1991 『関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第29集
- 新潟県教育委員会 1996 『関越自動車道堀之内インターチェンジ関係発掘調査報告書 清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集

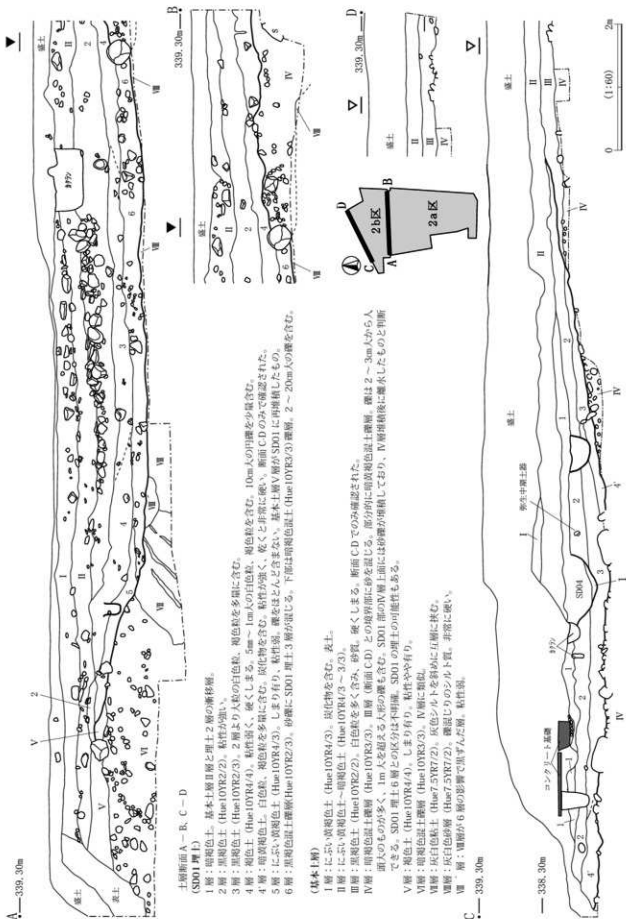


断面A-B 中央部



2a区 SD01 完掘状況 (北西より)

第51図 SD01



第52図 SD01土層断面図

1層：暗褐色土 (Hue10YR4/3)。炭化物を含む。表土。

2層：暗褐色土 (Hue10YR2/2)。粘性が強い。

3層：黒褐色土 (Hue10YR2/3)。2層より大粒の白色粒、褐色粒を多量に含む。

4層：褐色土 (Hue10YR4/4)。粘性弱く、硬くしまる。5mm~1cmの白色粒、褐色粒を多量に含む。炭化物を含む。粘性が強く、乾くと非常に硬い。断面C Dのみで確認された。

5層：濃い黄褐色土 (Hue10YR4/3)。しまり有り、粘性弱。礫をほとんど含まない。基本土層V層がSD01に再堆積したもの。

6層：黒褐色土礫層 (Hue10YR2/3)。砂礫にSD01埋土3層が混じる。下部は暗褐色土 (Hue10YR3/3) 礫層。2~20cmの礫を含む。

(基本土層)

1層：濃い黄褐色土 (Hue10YR4/3)。炭化物を含む。表土。

2層：濃い黄褐色土~暗褐色土 (Hue10YR4/3~2/3)。

3層：黒褐色土 (Hue10YR2/2)。白色粒を多く含む。砂質。硬くしまる。断面C Dのみ確認された。

4層：暗褐色土礫層 (Hue10YR3/3)。3層 (断面C D) との境界面に砂を混じせる。高所に暗褐色土礫土層。礫は2~3mから人頭大のものが多く、1m大を超える大形の礫も含む。SD01部のIV層上面には砂礫が堆積しており、IV層堆積後に塵水したものと判断できる。SD01埋土6層との区分は不明確。SD01の埋土の可能性もある。

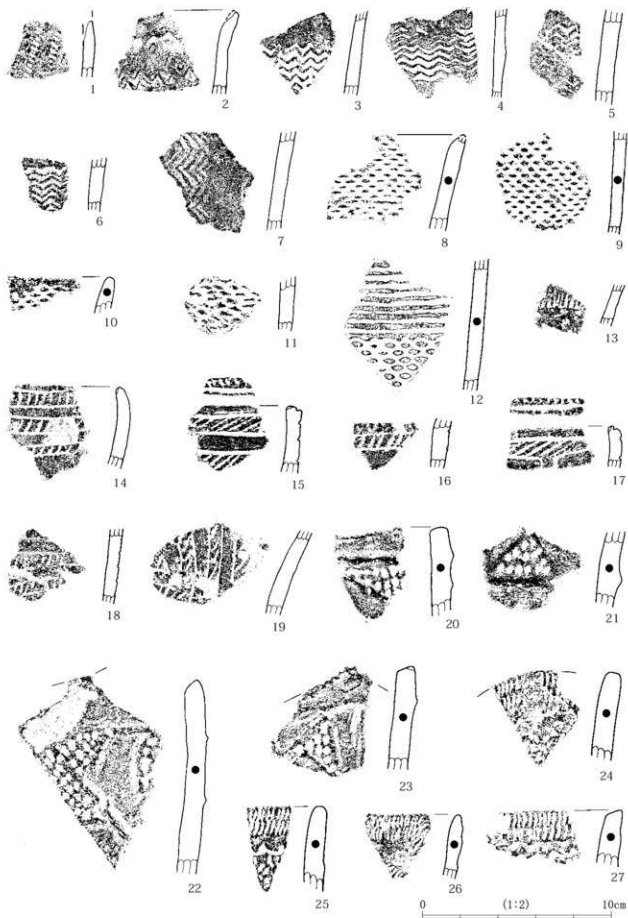
V層：褐色土 (Hue10YR4/4)。しまり有り、粘性やや有り。

VI層：暗褐色土礫層 (Hue10YR3/3)。IV層に類似。

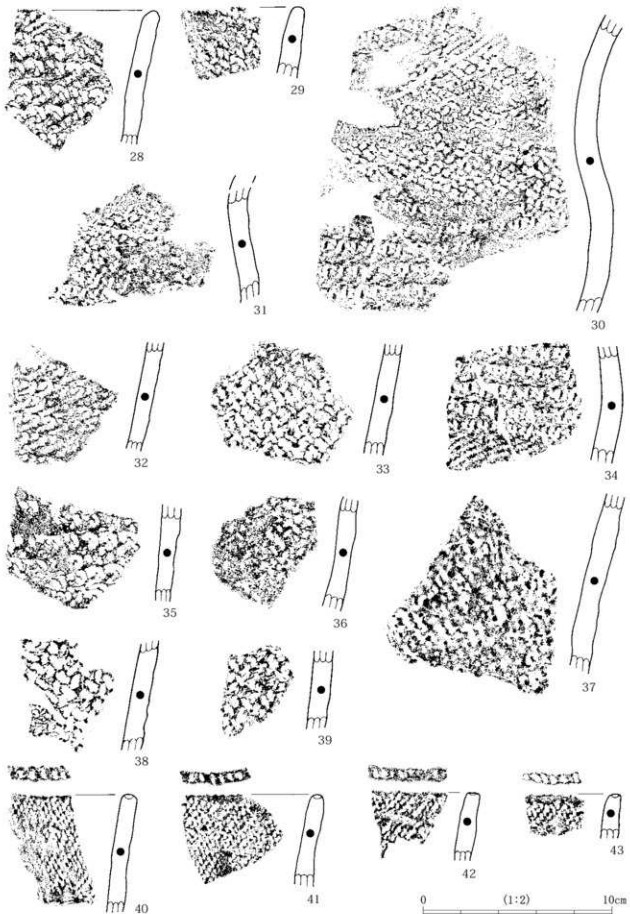
VII層：灰白色粘土 (Hue7.5YR7/2)。灰色シルトを斜めに互層に挟む。

VIII層：灰白色砂層 (Hue7.5YR7/2)。確認じりのシルト粒。非常に硬い。

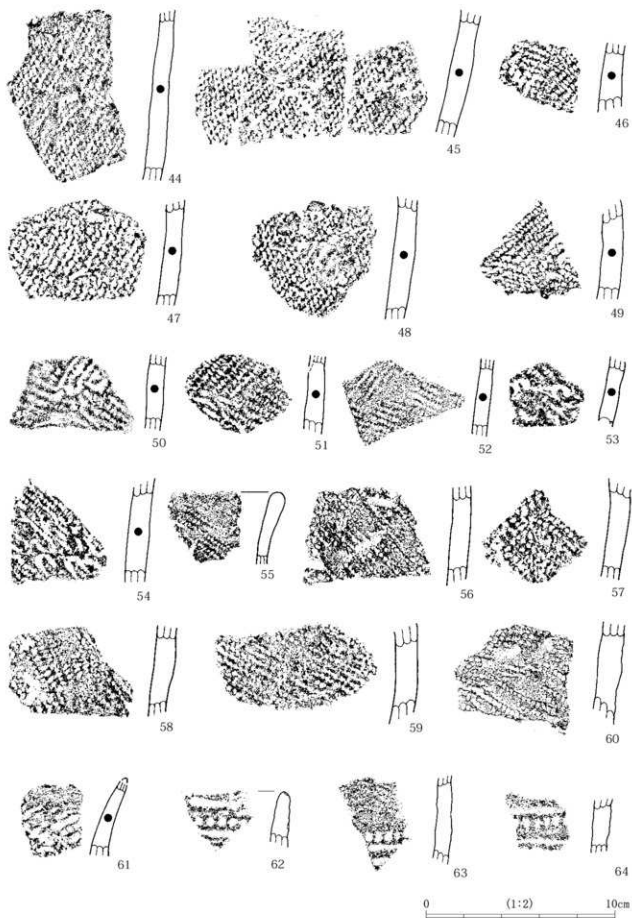
IX層：V層が6層の影響で黒ずんだ層。粘性弱。



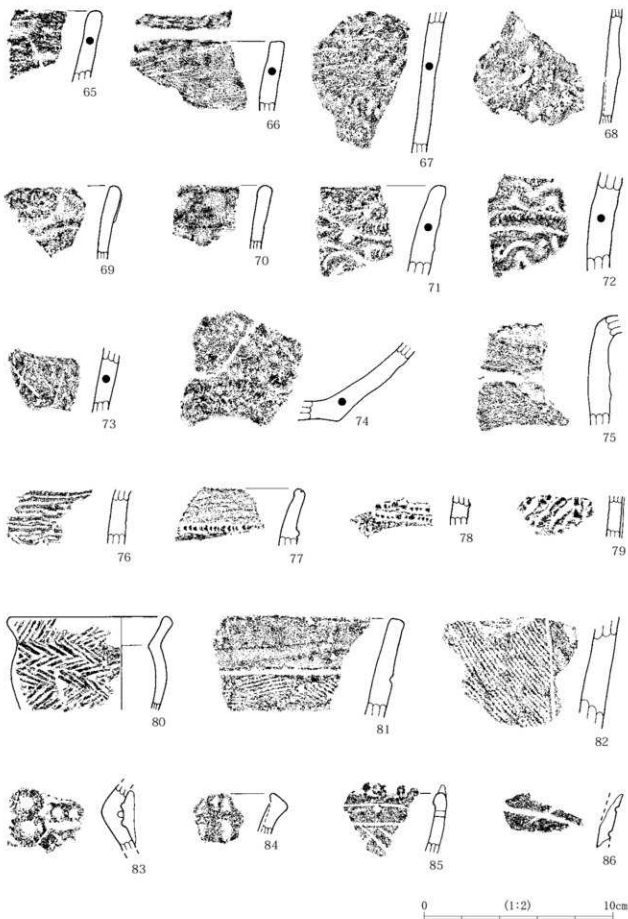
第53図 縄文時代の土器1



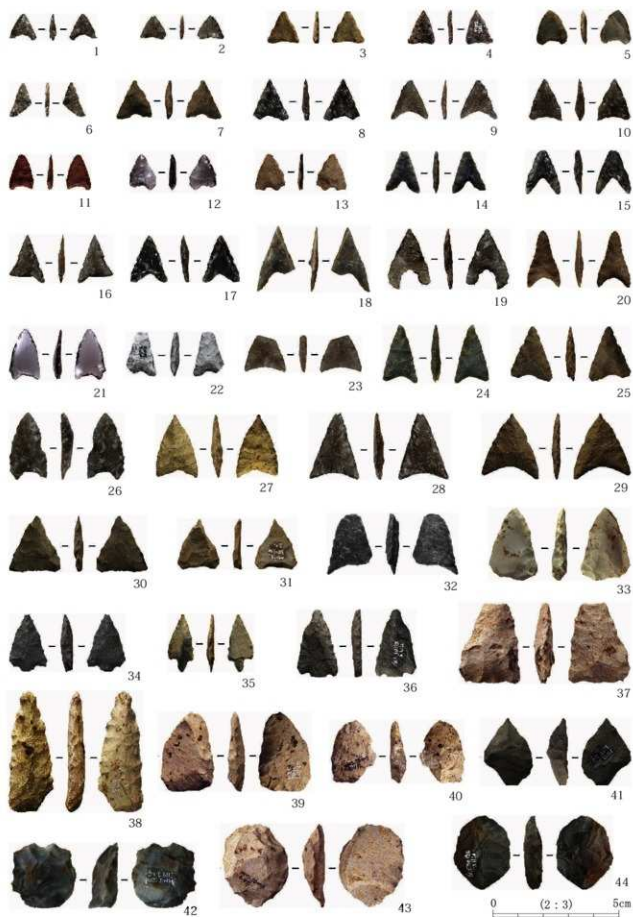
第54図 縄文時代の土器2



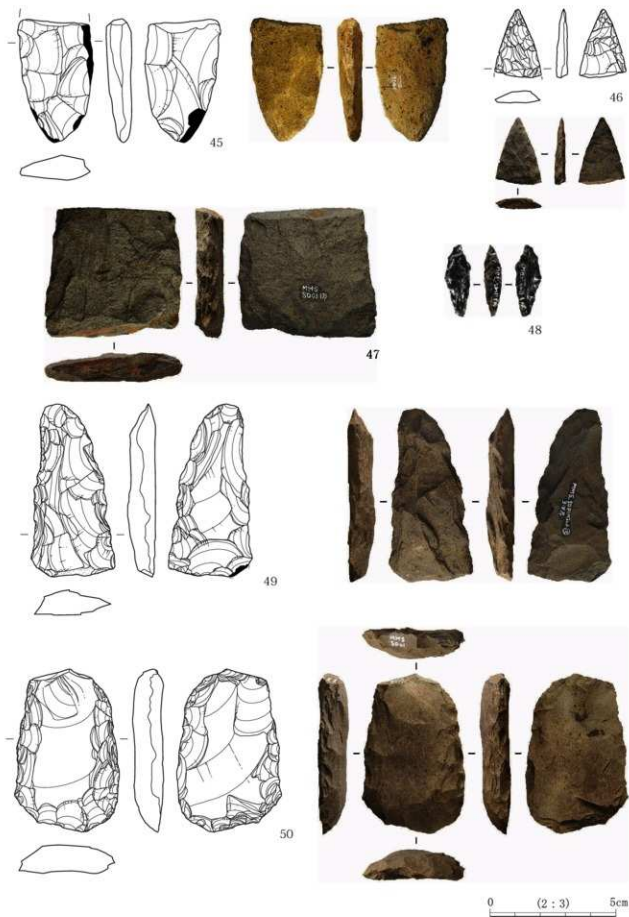
第55図 縄文時代の土器3



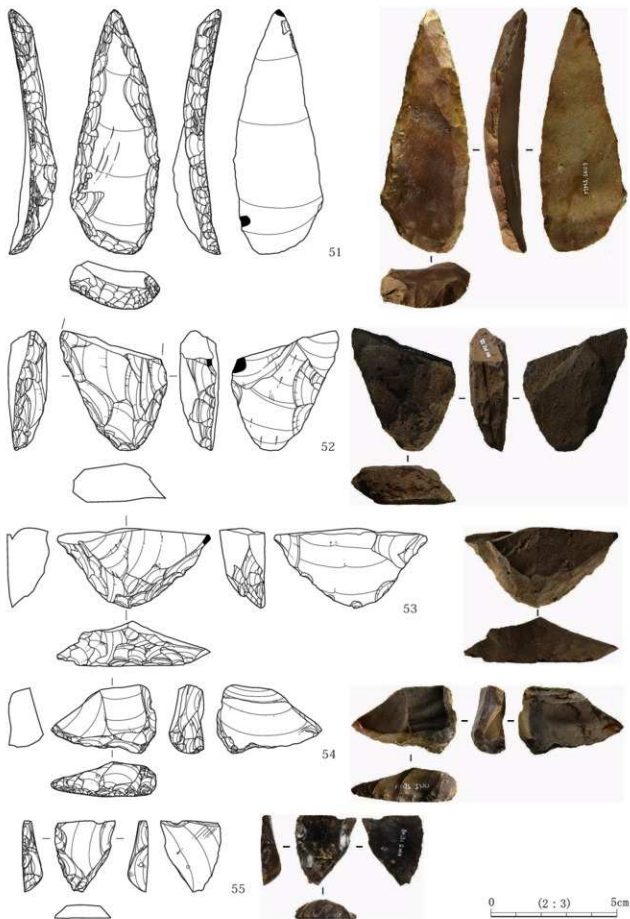
第56図 縄文時代の土器4



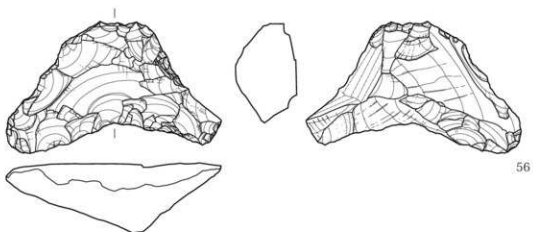
第57図 縄文時代の石器1



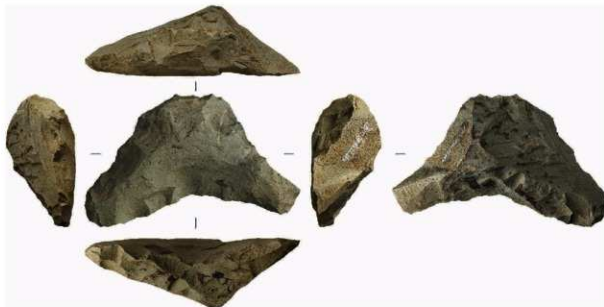
第58図 縄文時代の石器2



第59図 縄文時代の石器3



56



57



58

0 (1:2) 10cm

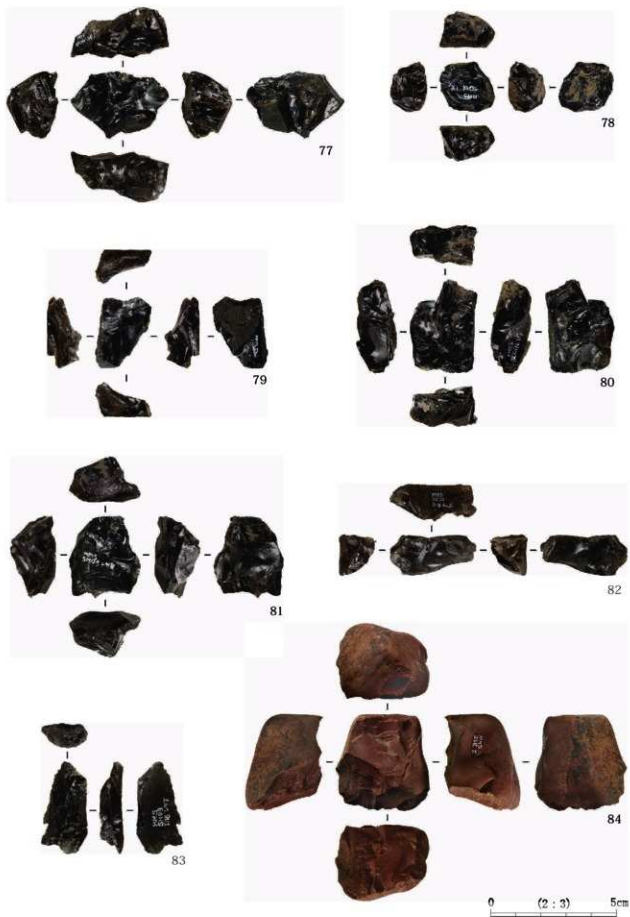
第60図 縄文時代の石器4



第61図 縄文時代の石器5



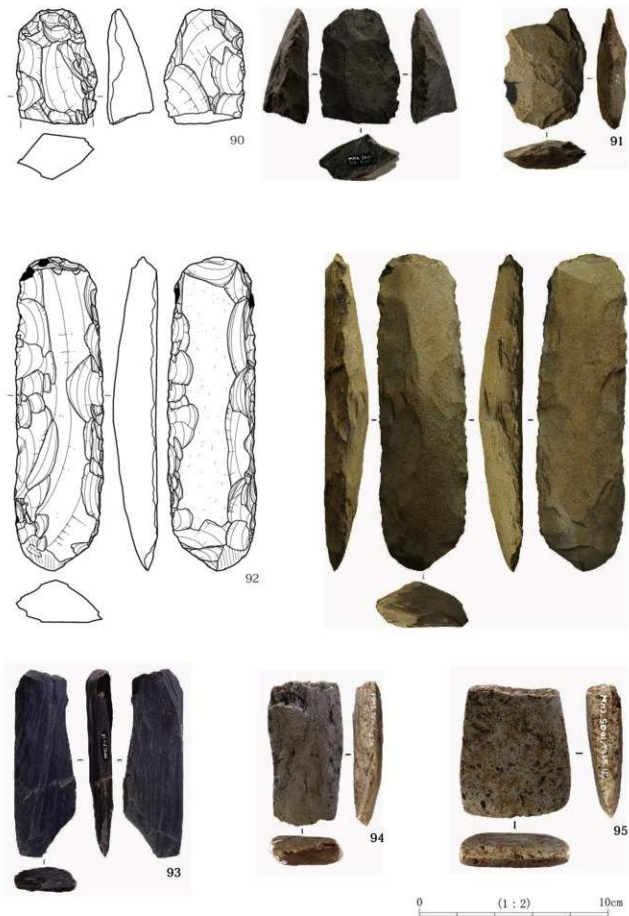
第62図 縄文時代の石器6



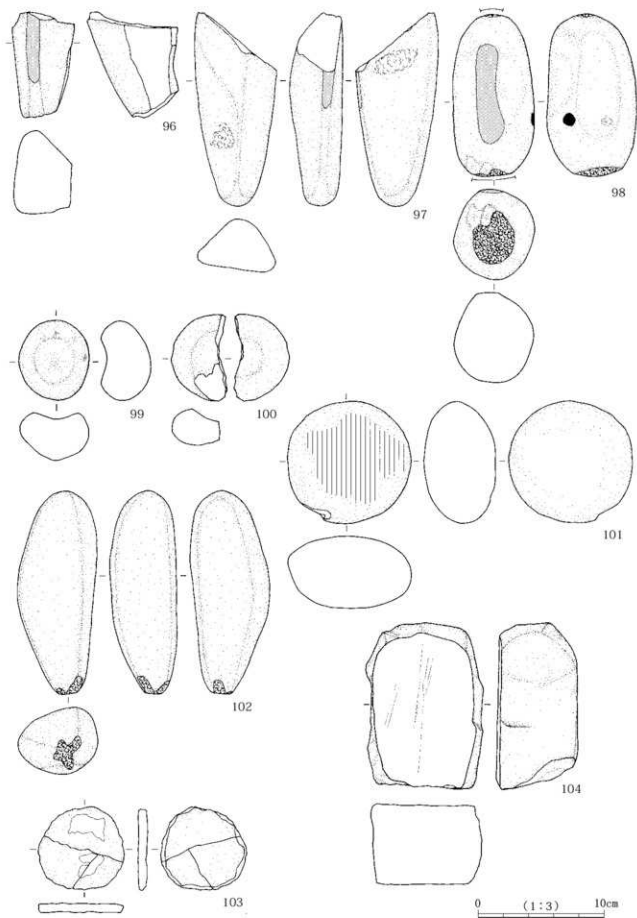
第63図 縄文時代の石器7



第64図 縄文時代の石器8



第65図 縄文時代の石器9



第66図 縄文時代の石器 10

第3節 弥生時代

1 概要

今回の調査では、弥生時代の遺構は確認されなかった。2区の自然流路跡の窪地（SD01）から多数の弥生時代中期栗林式土器と少量の石器・石製品が出土した。前期と後期の資料は1点も出土していない。SD01については第3章2節に記述した。平成5年度の豊野町教育委員会による発掘調査で、丘陵の北西斜面に環濠と思われる溝が検出されている（豊野町誌刊行委員会2001）。溝は幅1.0～1.2m、深さ0.3～0.7mで約30mにわたって等高線に沿って確認されたが、調査範囲、その他の遺構などの詳細は未報告である。豊野町誌に掲載された土器をみる限り、環濠から出土した土器は今回の調査で出土した栗林式土器に類似しており、両者はほぼ同時期の土器群であると判断できる。

2 遺物

(1) 土器

壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、甕形土器、蓋形土器、その他に大別して記述する（以下、形土器をとり呼称する）。土器の部位名称、調整手法、文様については松原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2000）の報告書に準拠した^(註1)。本遺跡の弥生式土器はすべて中期後半のものであり、寺島氏の栗林式土器編年^(註2)の古段階から中段階古層に相当する土器群が出土した。

ア 壺（第67図1～第68図25、第73図133～第76図272・276・277・279・280）

1は口縁部と口唇部にLR縄文。2は縦方向のハケメと頸部に刺突列が認められる。いずれも本遺跡では他に例を見ない。

3～18・133～147・276・277・279・280は口縁部から頸部の資料である。口縁部は単純口縁のもの（3～8・11・138～141・280）と受け口状口縁（133～137・276・277・279）のものがある。口唇部は縄文が施文されるもの（4・7・11・25・133・135・140・141）と刺突があるもの（5）と縄文と刺突が併用されるもの（3・6）、無文のもの（8・138・139）がある。また、口縁部内面に鋸歯文（山形沈線文）があるものが1点確認された（139）。非掲載の口縁部破片が140点出土しており、その比率をみると、単純口縁：受け口状口縁＝12：1であり、単純口縁が多い。また、口唇部文様では、無文：縄文（縄文＋刺突を含む）：刺突のみ＝15：17：1程度の割合である。壺は単純口縁のものが大半を占め、口唇部は無文または縄文のものが同じ程度の割合をしめている。また、受け口状口縁では受口部に縄文施文の後に、連弧文（133）、鋸歯文（136）、波状沈線文（137）などが施文されている。なお、276・277・279は壺の口縁部と思われるが、受口部が内湾し貼付文があり、本遺跡での類例は少ない。280は貼付文に円形の穿孔があり、本遺跡では他に例を見ない。

頸部文様帯に貼り付け凸帯が見られるもの（9・11・12・14・142～145）がある。9・11は貼り付け凸帯というよりも押し出し凸帯である。凸帯部には縄文施文（9・14）、またはキザミ目状の刺突文（11・142～145）が見られる。146～149の刺突文は頸部にみられるもので、貼り付け凸帯部の刺突文に共通する文様である。この他に、頸部文様帯では、横走沈線文（5・8）、爪形刺突文（6・7）、櫛描直線文（7・10・18）、鋸歯文（13）などの文様が見られる。

胴部文様帯では変形工字文（15・150～157）、櫛描簾状文（7・21・197・199）、櫛描短斜線文（17・

198・200～202)、櫛描短横線文および直線文(18・25・173～182・198～202・206・208～210)、櫛描波状文(19・182・234)、波状沈線文や鋸歯文(14・16・210～216・221・226・272)、重鋸歯文(23・217～220)、爪形刺突文(25・165～196)、連弧文(20・22・23・225～233)、重三角文(25・165・195・203・224・242・245～247)、懸垂文(19・250～258)^(註3)、重菱形文(261)などの文様が見られる。この他、15・187・188には縄文が施文された貼り付け凸帯文がみられる。143・263～265などに指頭による円文または楕円文が見られる^(註4)。

縄文はLRの単節縄文が主体で、RLの単節縄文(20・167・187・188・207・224・230・253・261)は少数である。

イ 甕(第69図26～第70図40・47、第71図58～第72図132、第76図273～275)

器形復元された甕の分量をみると、小形(26～30・33～35)、中形(31・32・36)、大形(37～40)の3種に区分できる。

口縁部形態では単純口縁、受け口状口縁(37・88～90・273～275)、折返し口縁(76・78～83)がある。単純口縁では、口唇部に縄文が施文されるもの(28～34・38)、刺突と縄文があるもの(26・35・39・40・67～69・78)、刺突のみもの(27・35・36・70～75・77・84)、無文のもの(58～66・85・86・91)、がある。38・86は口縁内面に縄文が、85は短横線文が施文され、91は波状口縁であり、本遺跡では他に例を見ない。非掲載の口縁部破片の出土数をみると、受け口状口縁は1点、折返し口縁が6点で、他はすべて単純口縁である。単純口縁の口唇部文様は、縄文136点、縄文と刺突6点、刺突のみ111点、無文189点であった。刺突のみの中には内面からも刺突することにより口唇部が波状を呈するものが24点含まれている。

頸部文様は、櫛描直線文(26・39・62・92)、刺突文(37・38・91)、櫛描直線文と刺突(28)、無文のものがある。

胴部文様は、麁状工具^(註5)による短横線文(26)、斜線文と垂直に引かれる直線文(27・36)、横羽状文(29～34・37・38・78・96・101～108・110・114)、櫛描波状文(39・77・123～128)などがある。斜線文と横羽縄文が多数を占めているが、32・35・94～97など他の櫛描文に比べたい沈線のもの少数含まれる。また、胴部上位に刺突列が認められるものが多数認められ、刺突内に布状の圧痕などが見られるものがある(39・40・78)(写真)。

なお、すべての底部破片を観察したが、確実に台付甕といえるものは確認できなかった。第70図47が台付甕の可能性があるが、他に台付甕と認識できる破片は認められず、南首峯遺跡では台付甕は出現し



第70図39の刺突内の圧痕



第71図78の刺突内の圧痕

ていないと認識しておきたい。131はコの字重ね文と思われ、本遺跡では唯一の資料である。132はコの字重ね文の裏の可能性があり図版に掲載したが、縄文時代後期であるかもしれない。

ウ 鉢 (第70図41～43、第76図281～289)

41・281～285は単純口縁、286・288・289は折返し口縁である。41は口唇部に刺突、281・282・284は口唇部に縄文がある。285は頸部に焼成前の穿孔がある。42・43は赤彩土器である。出土数は、壺、甕に比べ少ない。

エ 高杯 (第70図44～46・49、第76図278・279・294・295)

278は口縁部に貼付文があり、外面は摩耗しているが内面に赤彩が確認できる。294は内外面が赤彩されており、同様な貼付文があることから、278も本来内外面に赤彩が施された高杯であると考えられる。295は口縁の平坦部に山形沈線文がある。鉢の可能性もある。赤彩は、高杯、鉢にみられるが、その出土点数は極めて少ない。

オ 甕・底部穿孔土器 (第70図50～53)

52・53は焼成前の円形の穿孔であることから甕と判断した。50・51は焼成後の底部穿孔が見られる。第68図24は壺の底部に焼成後の穿孔が見られる。

カ 蓋 (第76図296・297)

2点出土した。296が直径9.5cm、297が直径6.1cmである。296の中央部にはボタン状の貼付文がある。

キ その他小形土器他 (第70図54～57、第76図290・291・298～303)

54～57・290・291はミニチュア土器である。54は鉢、55は甕、56は壺、290は広口壺、291は口縁直径4cmほどの器形不明の土器である。

298～303は焼成前の穿孔がある土器である。298は口縁部が内湾する鉢、299は無頸壺、300～303は鉢であろう。

(2) 石器・石製品

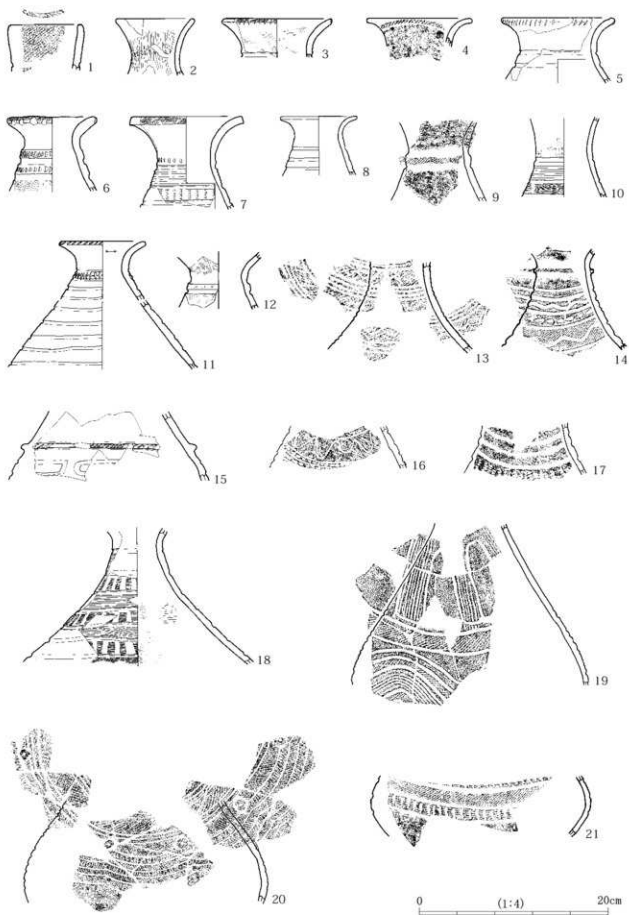
刃器13点、磨製石包丁2点、太型蛤刃石斧1点、勾玉1点出土した(第77・78図)。型式・形態学的に確実に弥生時代の石器といえるものは刃器、磨製石包丁、太型蛤刃石斧(第78図7)のみであり、縄文時代の石器として報告したものの中にも弥生時代のものが含まれていると思われる。1～4は刃器ですべて輝石安山岩である。5は磨製石包丁の未製品で石材は不明である。6は破砕品で僅かに研磨面が残っている磨製石包丁で頁岩製である。7は輝石岩の太型蛤刃石斧で、破損品である。8は長さ10.0mm、幅5.5mmの小形のヒスイ製の勾玉である。これらの石器群はいずれもSD01から出土した。

註

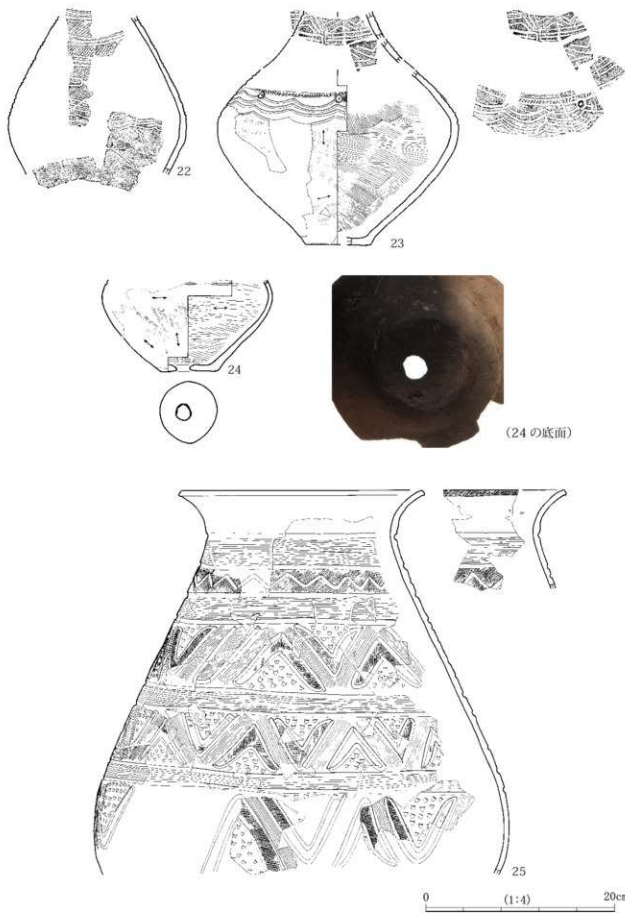
- 1) 文様の呼称については、基本的には松原遺跡(長野県埋蔵文化財センター2000)の報告書に準拠したが、笹澤浩氏の南曾峯遺跡の土器報告(豊野町誌刊行委員会2001)の呼称を踏襲したものもある。
- 2) 栗林式土器は従来Ⅰ式、Ⅱ式の区分で理解されていたが、その後の編年研究で細分が進み、近年、研究者によりその呼称が異なる状況となっている(寺島2011)。本稿では寺島編年(寺島1999)の呼称を用いた。
- 3) 懸垂文は、図示したものを含めて23点確認しており、第67図19以外はすべて小破片である。沈線で区画された内部は柳描直線文で充填し、沈線に沿って刺突列があるものと無いものがある。また、地文は縄文と無文のものがある。
- 4) 栗林式土器ではあまり見られない文様であるが、本遺跡の他には長野市檀田遺跡(長野市教育委員会2004)などに類例が認められる。檀田遺跡の報告書では「指頭円文」とされており、栗林式土器前段階の中期前半に特徴的な古い要素としている。
- 5) 細長い棒状のヒゴを束ねたもので、栗林式土器、箱清水式土器の施文原体と想定されている。徳永哲秀氏により命名された(徳永1995)。

引用・参考文献

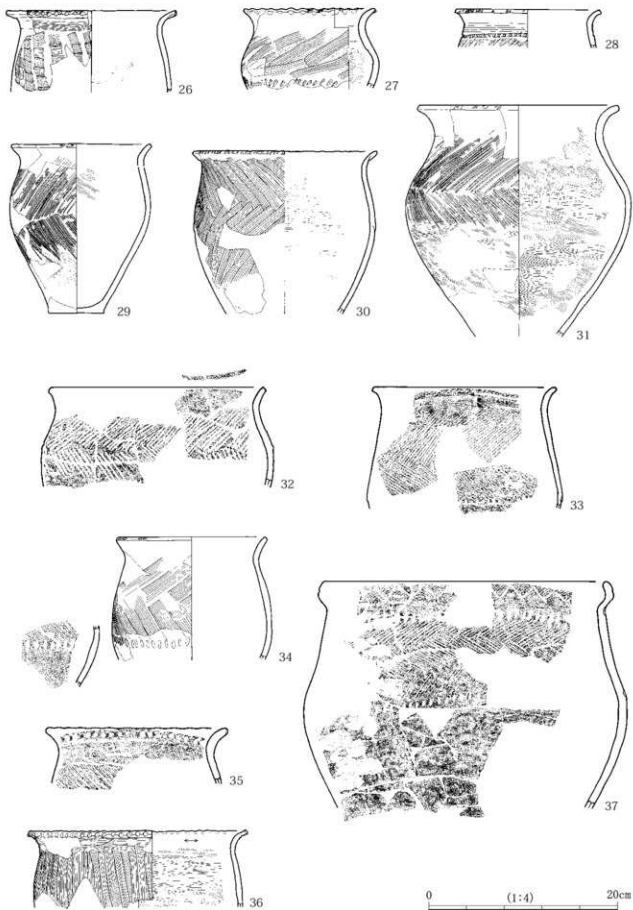
- 笹澤 浩 2001 「第三節 弥生時代」『豊野町誌 豊野町の資料（一）』
- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」『99 シンポジウム「長野県の弥生土器編年」発表要旨』長野県考古学会
- 寺島孝典 2011 「栗林式土器に関する現状と課題」『長野県考古学会誌』138・139 合併号
- 徳永哲秀 1995 「箱清水式土器の施文具および施文方法について」『長野県考古学会誌』75
- 豊野町誌刊行委員会 2001 『豊野町誌 豊野町の資料（一）』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『松原遺跡 弥生・総論3 弥生中期・土器本文』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
- 長野市教育委員会 2004 『檀田遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財 第105集



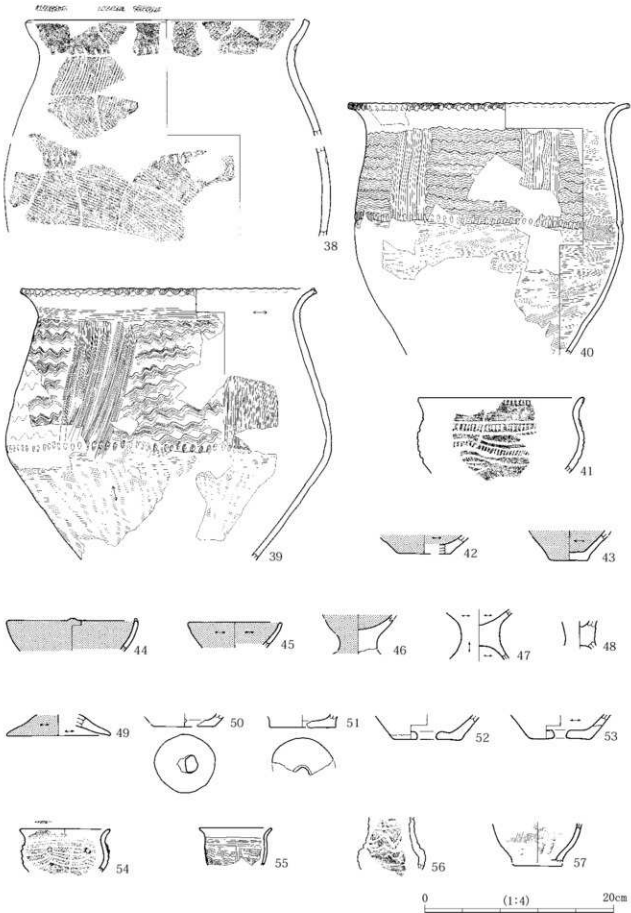
第67図 弥生時代の土器 1



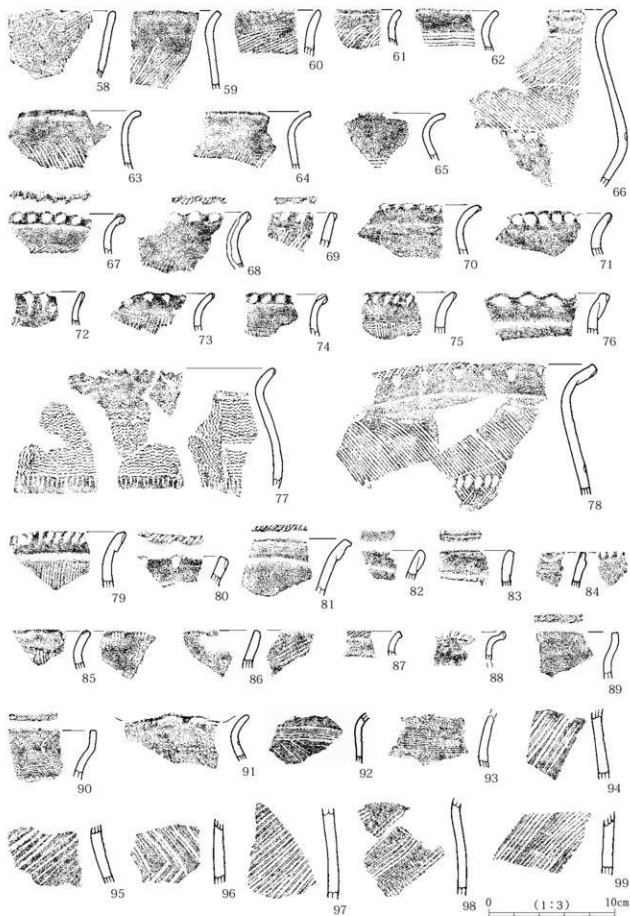
第68図 弥生時代の土器2



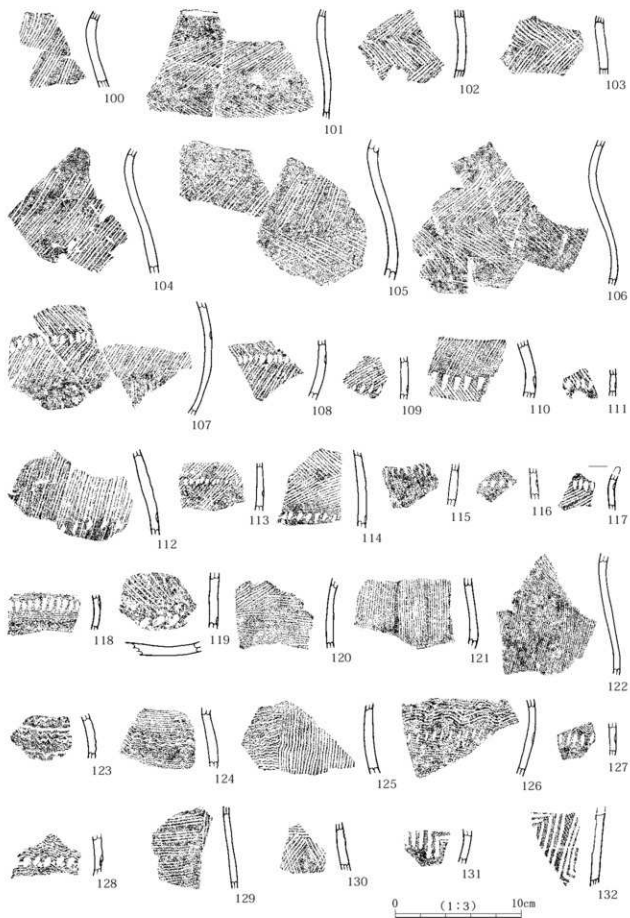
第69図 弥生時代の土器3



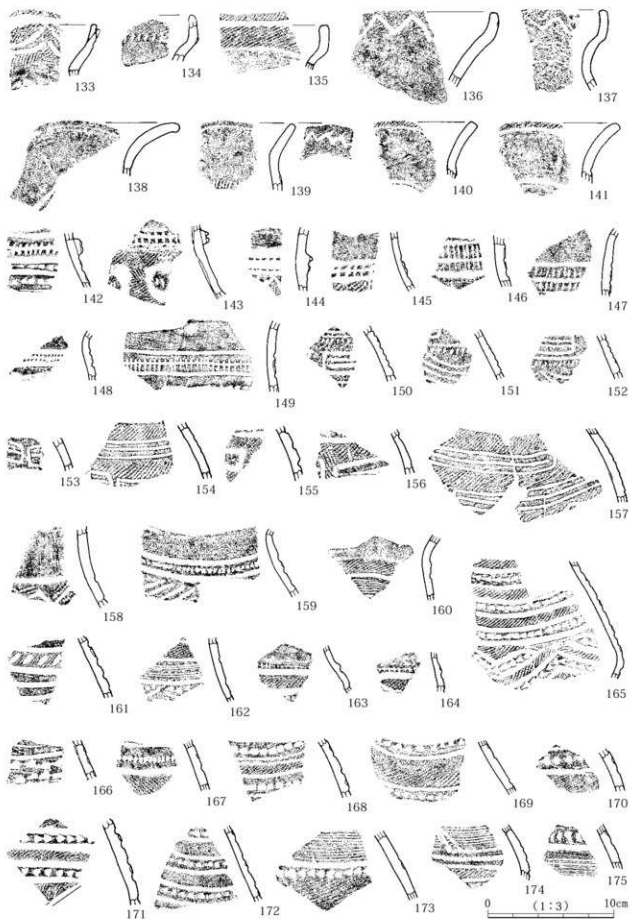
第70図 弥生時代の土器4



第71図 弥生時代の土器5



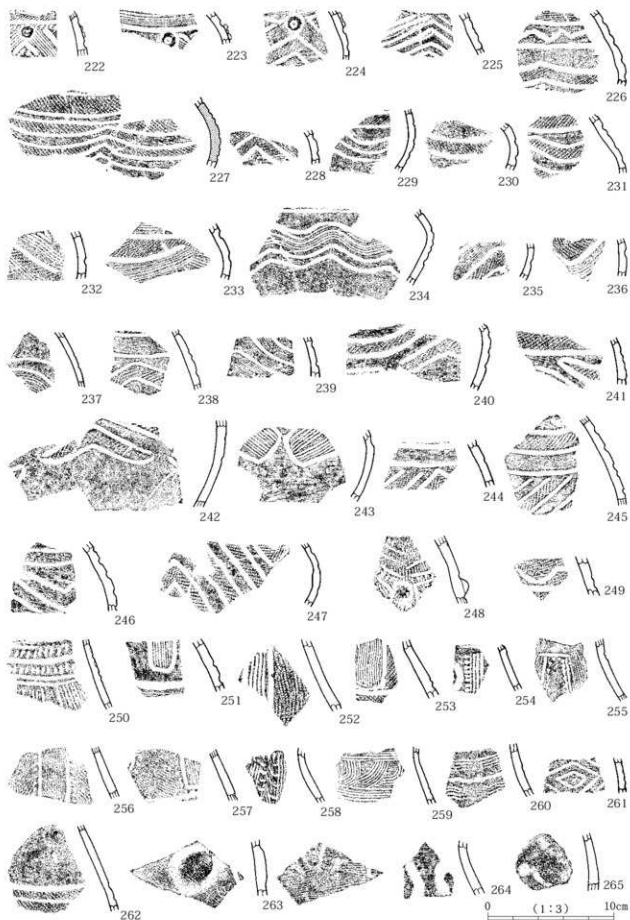
第72図 弥生時代の土器6



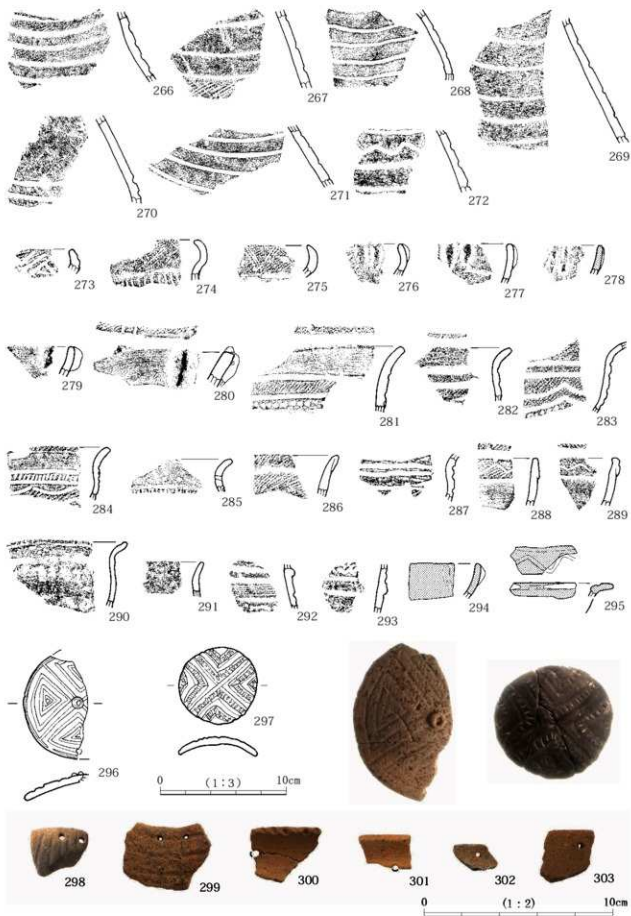
第73図 弥生時代の土器7



第74図 弥生時代の土器8



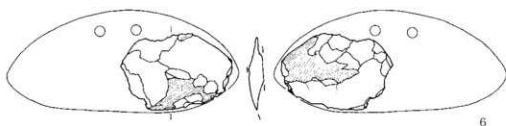
第75図 弥生時代の土器9



第76図 弥生時代の土器10・土製品



第77図 弥生時代の石器1



0 (1:2) 10cm



8

0 (1:1) 5cm



勾玉写真 (×2倍)

第78図 弥生時代の石器2・石製品

第4節 古墳時代

1 概要

南曾峯遺跡では古墳時代の遺構は検出できなかったが、低地部の2区で土師器片3点と埴輪片7点、銅鏡片1点が出土した。土師器と埴輪は自然流路SD01の埋土から出土しており、第79図2を除いてすべてSD01の第2層から出土した。これらはいずれもSD01の丘陵寄りの東岸近くで出土し、埴輪はI-119グリットにまとまっている。銅鏡片はSD01埋没後（中世以降）に掘られたSK02から出土した。

2 出土遺物

(1) 土器（第79図1～3）

1は土師器甕の口縁部である。器面はハケメ調整後にそれに重複してヨコナデが施されている。2は土師器壺の口縁部とみられる破片である。器面はヨコナデされている。3は内黒の黒色土器の杯である。器面には内・外面ともヘラミガキが施されている。実測図には表現できないが、底部外面にはヘラケズリの痕跡がわずかに確認できる。年代については判断材料に乏しいものの、形態的特徴から前者が古墳時代前期に、後者は後期あるいは7世紀代に位置付けられよう。

(2) 埴輪（第79図4～6、PL20）

埴輪はいずれも小片である。出土量が少なく、互いに接合する個体もないため細かな器種の同定は困難である。破片のうち特徴的なものを選んで掲載したが、それぞれ任意の方向で図化している。

出土した埴輪は色調や焼成の特徴によって大別でき、器面が明赤褐色（5YR5/6）やにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する焼成が良い硬質のもの（5・6）と、灰白色（10YR8/2）やにぶい黄褐色（10YR7/3）を呈する焼きがあまり軟質のもの（4）とに分けられる。これらは胎土も異なり、前者が緻密な胎土であるのに対し、後者の胎土は砂粒がやや粗い。いずれも破片が小さいため野焼によるものか窯窯焼成によるものか判断しがたい。

5と6は円筒埴輪の突帯直上部分の破片である。器壁は2cm以上と厚く、外面には突帯を貼り付ける際のヨコナデが認められる。4は形状からみて形象埴輪の破片と考えられるが、器種を同定できない。器面には指頭圧痕が認められるほか、直径2～3mmの小孔も確認できるが、性格は明らかでない。

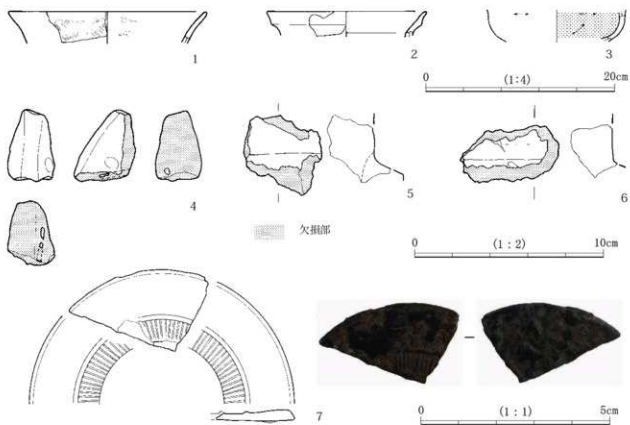
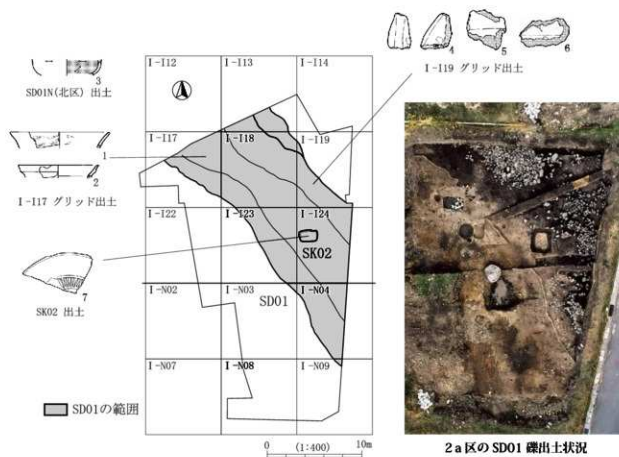
(3) 銅鏡片（第79図7）

鏡面の還元直径が7.0cmを測る小型鏡の破片である。縁部から内区外周にかけての部分であり、厚さは外区の最も厚い部分で0.29cm、櫛歯文帯部で0.17cmを測る。重量は5.80gである。鏡背文様は外区が素文で、その内側に櫛歯文帯をめぐらせるが、鏡式が明らかでなく、年代を絞り込めない。鏡面および鏡背面には緑青が付着しているものの状態の良い部分は光沢を帯びている。

なお、肉眼による観察では、破断面の研磨など二次的な加工は認められない。

3 小結

以上、南曾峯遺跡から出土した古墳時代の遺物について報告してきた。以下では本遺跡の評価とも深く関わる埴輪について見解を述べておく。



第79図 2区出土古墳時代の遺物

埴輪は古墳に並べられることを本義として作られたものであり、今回のように遺跡から埴輪が出土する場合、周辺に埴輪をもつ古墳が存在することが多い。これまでのところ南曾峯遺跡の周辺では埴輪を採用した古墳は確認されていないが、本遺跡ではこうした問題を考える上で注目すべき事象があるので簡単に触れておこう。それがSD01の東岸寄りで検出された礫集中である（第3章第5節）。礫は長さ18m、幅8mの範囲に広がっており、次節で述べられているように平安時代に形成されたと考えられる。この礫集中は、10～30cm程度の礫と50～70cm程度のやや大振りの礫によって構成されており、数は前者が圧倒的に多い。こうした礫の構成は、廣瀬覚による葺石分類のC類^(註1)などの古墳の葺石の構成と共通することが指摘でき（廣瀬2011）、埴輪の存在と考え合わせれば、この礫集中が古墳の葺石に由来する可能性も十分想定されよう。埴輪の出土位置が礫集中と重複し、さらにこれらが礫を多量に含む第2層から出土していることは古墳の存在を考えた場合に整合的である。ここでは調査区の周辺（SD01東側の丘陵上など）に埴輪をもつ古墳が存在した可能性のあることを指摘しておきたい。

なお、本遺跡近在の古墳に南曾峯古墳があるが、ここから埴輪は出土しておらず、また、旧豊野町域の他の古墳からも埴輪は出土していない。南曾峯遺跡がある善光寺平は長野県でも埴輪の多い地域として知られるが、本遺跡周辺での埴輪の出土例はあまり多くなく、中野市七瀬双子塚古墳や飯綱町の庚申塚古墳など数例が知られる程度である。今回出土した埴輪は量こそ少ないが、旧豊野町域での初出例として重要な位置を占めるものといえる。

註

- 1) 廣瀬氏分類のC類は、「他より大振りの石材を横使いして基底石とし、顕著な裏込めを用いずに裾部から一定の角度で上方まで石材を積み上げるもの」である。

参考文献

廣瀬 覚 2011 「1⑥葺石と段築成」『古墳時代の考古学 3 墳墓構造と葬送祭祀』



2b区 SD01 埋土2層中の礫出土状況（南東より）



2a区 SD01 埋土2層中の礫出土状況（北西より）

第5節 古代

1 概要

昭和45年(1970年)の土取りに伴う調査で竪穴住居跡1棟が調査され、昭和55年(1980年)の発掘調査では、1区に隣接する鉄塔建設地で竪穴住居跡が確認されている。いずれも平安時代の9世紀後半から10世紀中ごろのものである。

今回の調査では、竪穴住居跡2棟、土坑3基、ピット群3か所を検出した。また、2区で検出された自然流路跡の窪地(SD01)から土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などが出土した。出土遺物の大半はこれらの遺構と窪地から出土した。

土器の分類と器種名は長野県埋蔵文化財センター屋代遺跡群の報告書に準拠した(長野県埋蔵文化財センター2000)。

2 竪穴住居跡

1区で竪穴住居跡2棟を検出した。3mほどの距離に近接しているが、主軸とカマドの向きが異なっている。(第2章第8図)。

SB01(第80図)

調査区南側で検出したが、南半部は調査区外である。昭和55年以前の鉄塔基礎工事で一部が攪乱されている。東西5.4mの隅丸方形である。北西壁中央にカマドと煙道が検出された。煙道は幅0.26m、長さ1.56mである。カマドは袖の残存部と火床面が確認されたのみである。西側の袖部分は掘りすぎて削ってしまった。南西壁際に周溝の一部が確認された。床面は明確ではなく、硬化面は認められない。本遺構に接する鉄塔建設地の調査(昭和55年)で同時期の竪穴住居跡が確認されている(豊野町教育委員会1985)。

カマドの東側の袖部に接して杯が1点出土した(第80図1)。1は黒色土器A^(註1)の杯である。底部が高台状に厚く底面に木葉痕がみられる。近隣の遺跡では類例が見られない器形で、時期は不明である。この他に土師器破片が少量出土したが、時期が判別できる資料ではない。周辺から奈良時代の遺物が認められないことから、平安時代の遺構と判断した。

SB02(第81・82図)

調査区西側に検出された。昭和55年以前の鉄塔基礎工事で攪乱されている。遺構の西側は傾斜面にかかっており、失われているが、東壁は全長3.7mある。主軸は東西に平行しており、東壁にカマドが確認された。カマド付近には袖の構築材に用いられた礫が出土した。カマドの袖は壊れており、礫は原位置から動いている。P7～P11はカマドの袖石の設置に関わる痕跡である。床は部分的に硬化している。床面で検出されたピットの内、P4では土器片と板状の礫(写真)が出土し、P5では8点の礫がまとめて出土した。礫は10.4×5.6×4.2cm前後の楕円礫である。P12では完形の杯2点(第82図1・11)の上に板状の礫がおかれていた(写真)。土器を覆う礫は床面にめり込むように設置されていた。

土師器杯(1～4)、土師器椀(5)、黒色土器A杯(6～11)、土師器甕(12～16)、須恵器甕(17～20)などが出土した。4はP1(ピット1)、9はP2、1・11はP12、14はP5、その他は床面または、カマド内およびカマド周辺から出土した。須恵器は甕のみで、杯などは出土していない。

出土遺物から9世紀後半の年代が想定される。

3 土坑・ピット群・溝

各調査区で以下の遺構を検出した(2章第8～10図)。その他に、2区の自然流路が埋没した窪地(SD01)に、人頭大の礫がまとまる礫集中が3か所認められた。

1区：土坑2、ピット群1

2区：土坑1、溝2、ピット群1

4区：ピット群1

SK13 (第83図)

2区のSD01の東側で検出した。1.96×2.24mの方形である。床面に地山の大型礫が露出している。北側に杯がまとまって出土した。

黒色土器A杯(1～9)、土師器甕(11)などが出土した。高杯の脚部の可能性がある10は、時期が異なる混入品であると判断した。この他、ケズリ調整の土師器甕の破片が出土したが、須恵器は出土していない。

出土遺物から9世紀中頃から後半の年代が想定される。

SK14 (第83図)

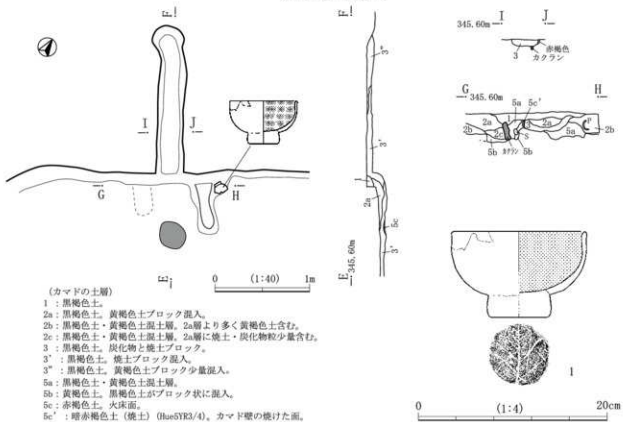
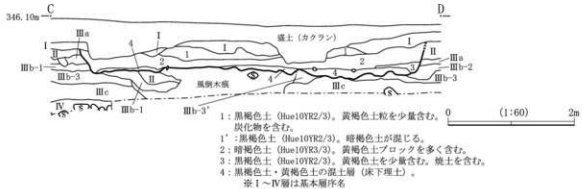
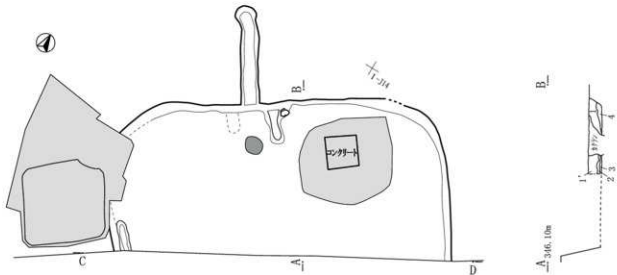
1区の調査区南壁近くで検出した。長軸残存部1.02m×短軸0.88m、深さ16cmである。西側が削られており、全体の形状は不明である。北東と北西の壁際の底面にピットが2か所確認されるが、埋土の観察からは、本遺構の施設であるのか否か判断できなかった。

土師器杯(12・13)と土師器甕(14)の破片が出土した。この他に、黒色土器Aの杯とタタキ調整の土師器甕の破片が少量出土した。

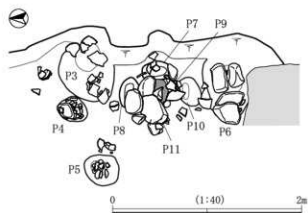
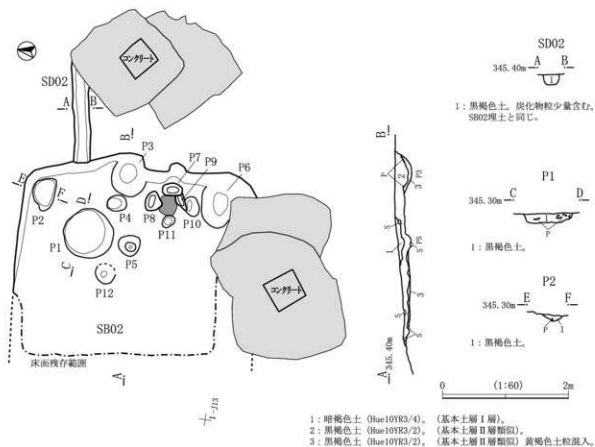
出土遺物から9世紀後半の年代が想定される。



2005年度の調査区遠景(丘陵上が1区、裾野部が2区)



第80図 SB01



SB02 カマド



ビット 12

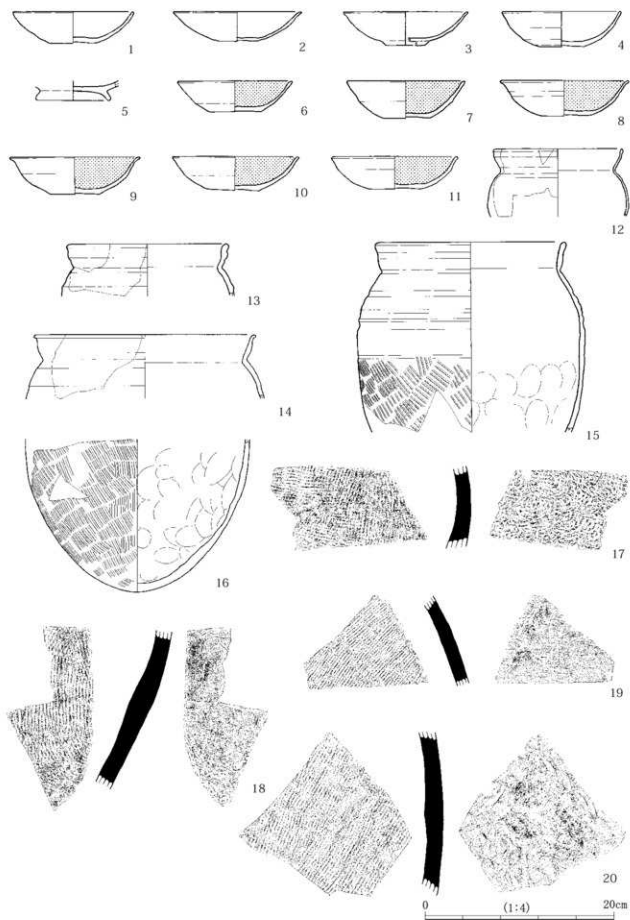


ビット 4

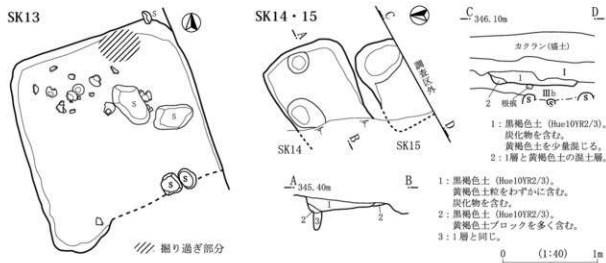


ビット 4 (礫除去後)

第81図 SB02



第82図 SB02出土遺物

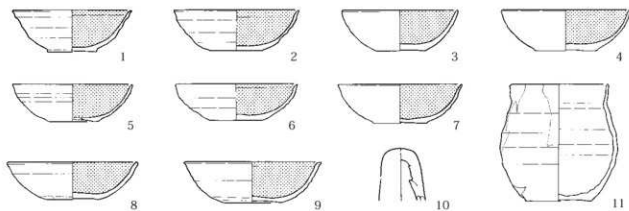


SK13 遺物出土状況

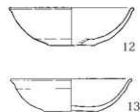


SK14・15 遺物出土状況

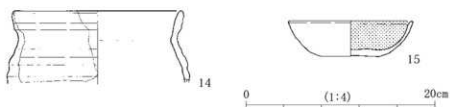
SK13



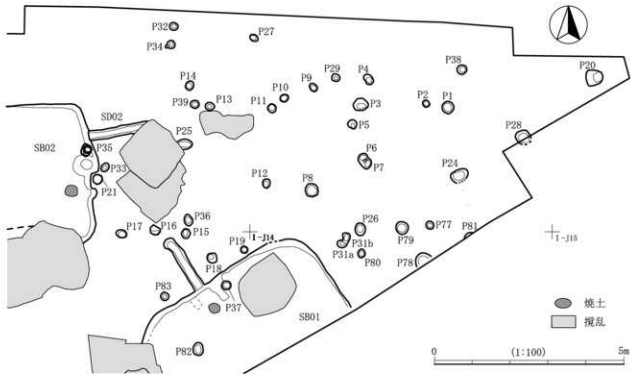
SK14



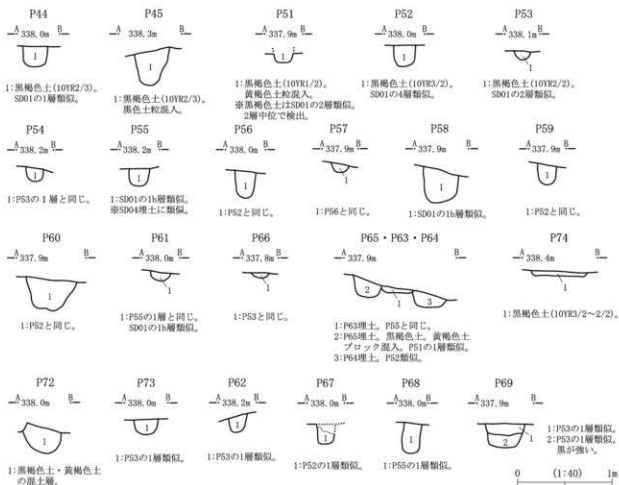
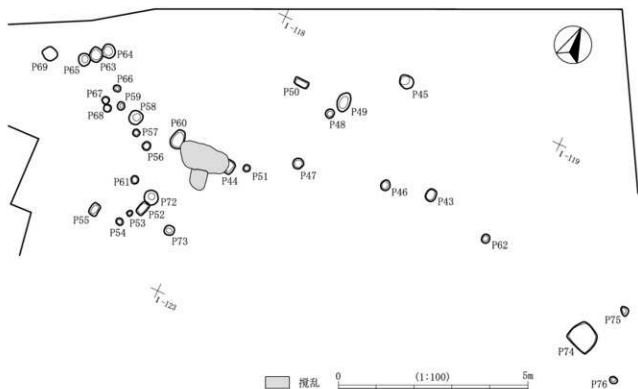
SK15



第83図 SK13・14・15



第84図 I区ピット群



第85図 2区ビット群

SK15 (第83図)

1区の調査区南壁際で検出した。西側は削られ、南側は調査区外であり、形状、大きさは不明である。基本土層Ⅲb層を掘りこんでいる。ほぼ完形の黒色土器A(15)が出土した。この他に、黒色土器A杯、土師器裏破片が少量出土した。出土遺物から9世紀後半の年代が想定される。

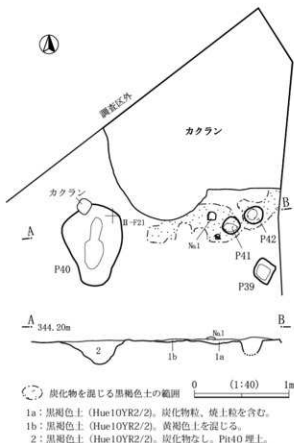
ビット群 (第84～86)

1区で42基、2区で34基、4区で4基のビットが確認された。これらのビットは狭い範囲に集中して検出されているが、平面形が円形と方形のものがあり、大きさも一定しない。掘立柱建物跡の柱穴である可能性がある。特に2区ではSD01の堆積土にビットが掘られており、遺構の検出が困難なためビットを見落としている可能性がある。これらのビットの埋土は一樣ではなく、古代以外の時期のものが含まれている可能性があるが、それらを区別することはできないため、本節で一括して報告した。

ビット内から出土した土器は、いずれも土師器または須恵器であり、これらの遺構の多くが古代以降のものであることが推定される。

SH01～SH03・SD01 (第87・88図)

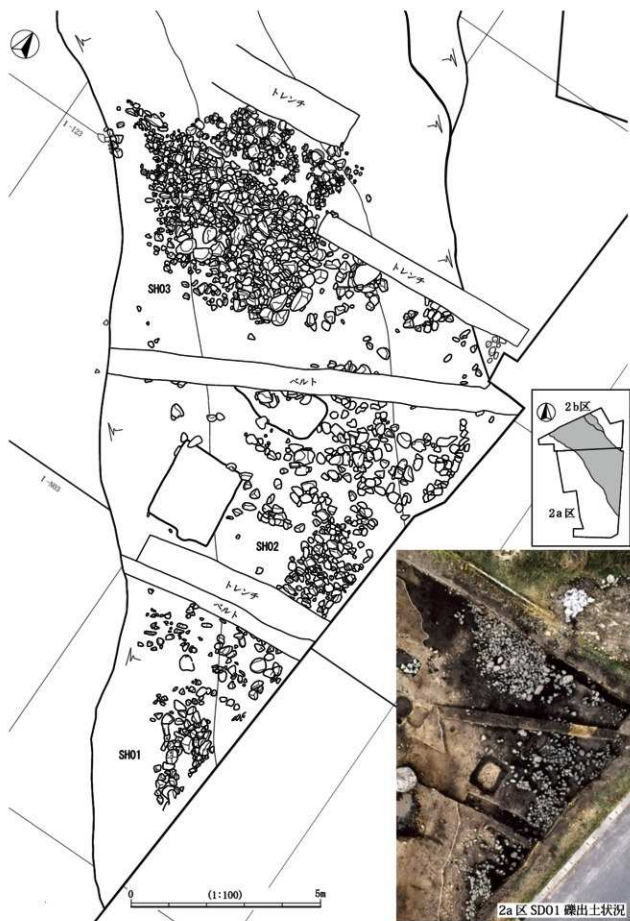
SD01は第3章2節で述べたとおり、縄文時代草創期以前に離水して、縄文時代以降は窪地となった自然流路跡である。また、中世以降には窪地は消え平地となっていたことが土層観察から明らかとなった(第3章2節第51・52図)。SD01埋土2層の3か所に礫がまとまって出土した。これらを礫集中SH01・02・03とした(第87図)。SH01は3.0×1.5m、SH02は3.5×1.5m、SH03は7.5×5.0mの範囲に礫がまとまっており、これらの礫集中部の間にも礫が出土している。SH03の北側には礫がほとんど確認されないことから、窪地の限られた範囲に礫集中があると判断できる。礫集中中の平面形態から、一定の目的をもって配置したようには見てとれず、遺構ではないと判断した。これらの礫は人頭大前後の大きさのものが多く、大きいものでは50～70cm大のものがある。SH01～03はいずれも同じレベルで出土しており、同時期に廃棄されたものと考えられる。SH03の出土状況を見ると、2層上部に礫がまとまっており、短期間に窪地に持ち込まれたことが想定される。2層からは弥生時代中期の土器と古代の土師器・須恵器が出土し、中世以降の遺物は認められない。また、2層上部では古代の土器が多いのに対し、下部では弥生中期の土器が多い。3・4層は縄文時代の遺物包含層で、弥生時代以降の遺物はほと



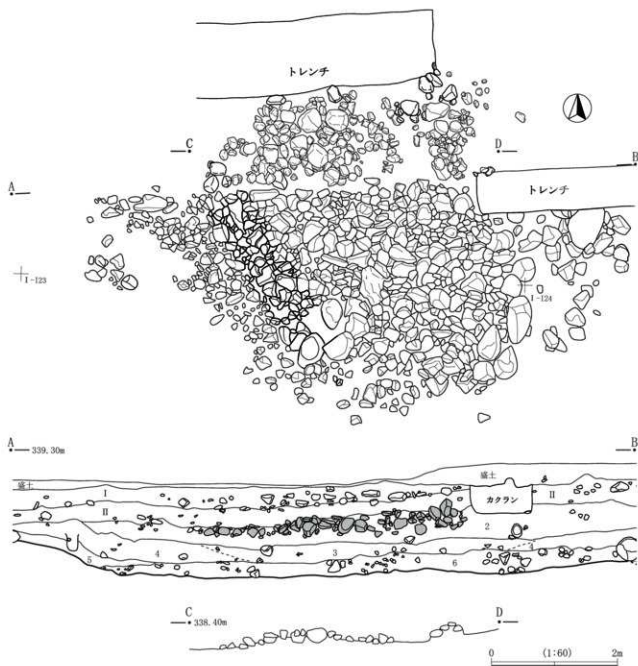
第86図 4区ビット群



礫集中中の礫の間に出土した土師器



第87図 SD01埋土中の礎出土状況 (SH01～03)



(基本土層)

I : にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。炭化物を含む。表上。

II : にぶい黄褐色土～暗褐色土 (Hue10YR4/3～3/3)。

(SDO1 埋土)

1 : 暗褐色土。基本土層II層と埋土2層の漸移層。

2 : 黒褐色土 (Hue10YR2/2)。粘性が強い。

3 : 黒褐色土 (Hue10YR2/3)。2層より大粒の白色粒、褐色粒を多量に含む。

4 : 褐色土 (Hue10YR4/4)。粘性弱く、硬くしまる。5mm～1cm大の白色粒、褐色粒を含む。10cm大の円礫を少量含む。

5 : にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)。しまり有り、粘性弱。礫をほとんど含まない。基本土層V層がSDO1に再堆積したもの。

6 : 黒褐色泥上礫層 (Hue10YR2/3)。砂礫にSDO1埋土3層が混じる。下部は暗褐色泥上 (Hue10YR3/3) 礫層。2～20cm大の礫を含む。

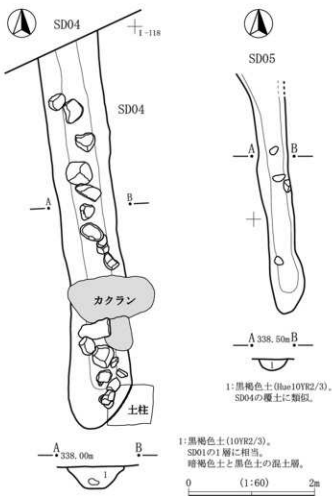


第88図 SH03

んど含まれない。これらの出土状況から礫集中は古代に廃棄されたものと判断した。第3章4節で述べたとおり、これらの礫は、丘陵上にかつて存在した古墳の葺き石を、古代に廃棄したものである可能性が高い。

SD04・05 (第89図)

12.0m間隔で平行する2条の溝である。埋土はいずれもSD01の1層に類似しており、同時期のものと判断した。SD04は幅0.94m、長さ6.1m、SD05は幅0.45m、長さ3.8mにわたって確認され、調査区北壁の北にさらに伸びている(第2章第9図)。SD04からは弥生時代中期の土器と古代の土師器破片と少量の須恵器破片が出土した。SD04はSD01埋土2層を掘り込んでおり、前述の礫集中と同時期もしくはそれより新しい時期のものとして判断した。出土遺物に中世以降のものを含まないこともこれと整合する。また、底面から数cm浮いた埋土中に大形礫が並んで出土した。SD05からは古代の土師器・須恵器破片が少量出土した。



第89図 SD04・05

4 遺構外の遺物

遺構外の遺物の大半は、自然流路跡の窪地 (SD01) から出土した (第90・91図)。以下に、SD01出土遺物について記す。

土器 (第90図1～91図33)

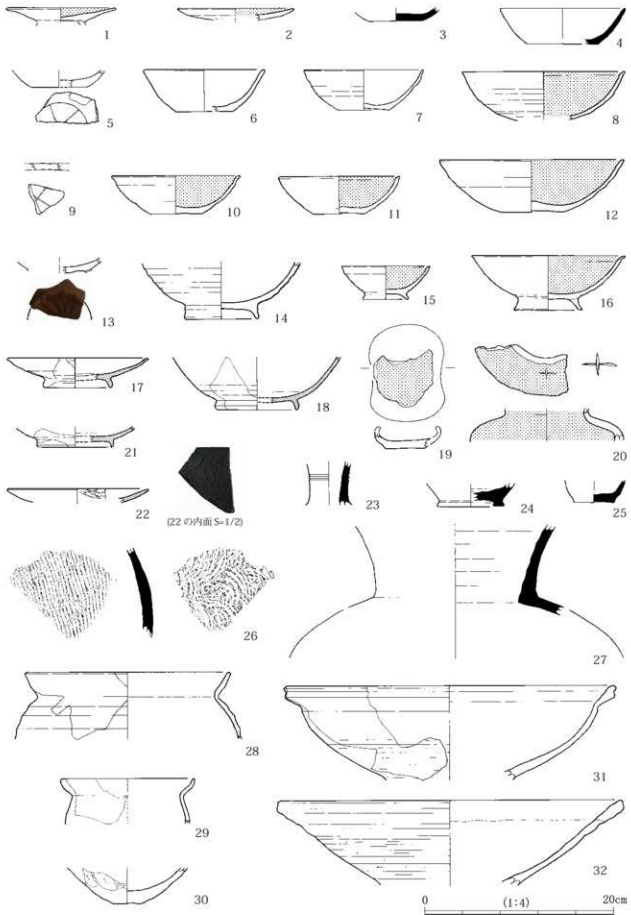
SD01で出土した土器はいずれも破片である。破片の概数で、須恵器甕・壺191点、須恵器杯264点、黒色土器1,144点、土師器甕2,387点、土師器杯・椀342点、灰軸陶器77点、緑軸陶器2点である。杯類はすべて糸切り底であり、ヘラ切り底は確認できなかった。

1・2は黒色土器A皿、3・4は須恵器杯、5～7は土師器杯、8～12は黒色土器A杯、13・14は土師器椀、15・16は黒色土器A椀である。5・9には焼成前の線刻がある。17・18・21・22は灰軸陶器の皿と椀である。22の灰軸陶器皿には線刻花文が見られる。19・20は黒色土器Bの耳皿と壺である。20には焼成前の線刻がある。23～27は須恵器の壺と甕、28～30・33は土師器甕、31・32は土師器鍋^(註2)である。31・32は胴下半部をロクロケズリで成形している。33は内面がカキメで、外面にケズリが見られる。いずれも類例が少ない。小破片のため実測図は掲載しなかったが、緑軸陶器の破片が2点出土した。PL22に写真を掲載した。管理番号1091は器種不明、1092は皿の高台部分である。

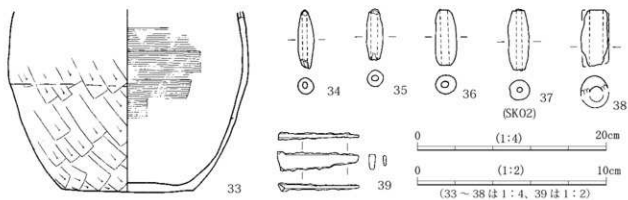
土製品・金属器 (第91図34～39)

土鈿(34～38)が6点出土した。いずれも長さ6cm前後である。37はSK02から出土したものであるが、SK02はSD01の堆積土に掘られた遺構であり、本来SD01埋土に含まれていたものと判断した。SD01からは弥生時代中期の土器も出土しており、弥生時代に属する土鈿も含まれている可能性がある。

39は鉄製の刀子の破片である。SD01の埋土2層から出土した。



第90図 SD01出土遺物1



第91図 SD01出土遺物2

註

- 1) 黒色土器 A は内面を黒色処理した土師器。黒色土器 B は内外面両面を黒色処理した土師器。
- 2) この手の器形の土師器の器種名は統一されていない。鍋、浅鉢形甕などが用いられている。

引用・参考文献

豊野町教育委員会 1985 『南曾峯遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 2000 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 一古代1編一』長野県埋蔵文化財発掘調査報告書 42

第6節 中世以降

1 概要

中世まで確実に遡る遺構は土坑1基(SK07)で、他の遺構は近世以後のものである。近世以後の遺構については、近世の可能性のある遺構と、明治時代以後の特殊な遺構の実測図を掲載した。明治時代以後の遺構についても、遺物出土地点を記録するために、すべての穴に遺構番号を付しており、報告書では攪乱としたが、遺構番号が付してある。次項で取り上げない遺構はすべて明治時代以後のものである。なお、1区の攪乱としたSK03～06・17は、現在の高圧線鉄塔を設置する前(昭和55年以前)の鉄塔基礎に関係する穴である。

2 土坑

SK01 (第92図)

2区のSD01堆積土中に検出した。出土遺物から判断して、埋没時期は明治時代以降である。1.84m×2.20mの方形を呈し、深さ0.21mほどの土坑で、南北の軸にほぼ平行する。北東隅は破壊されていたが、東西南北4面に石列を廻らし、床面には一面に礫を敷いている。礫の下には炭化物と灰の層が広がり、炭化物にはもみ殻が混じっている。2区にはかつて民家があったので、これに関わる施設の可能性がある。

SK02

2区のSD01堆積土中に検出した。1.22m×1.90mの方形で、深さ0.56mである。近世に埋没したと断定できる遺構が確認されないこと、SK01と平行して隣接し、埋土が類似することから、本遺構も明治時代以降のものである可能性が高い。埋土にはSD01の2層に含まれる礫が多量に入っていた。出土遺物は弥生時代中期の土器破片、平安時代の土師器・須恵器破片の他に、古墳時代銅鏡破片1点、土鍾1点が出土した。これらの遺物は本来SD01の堆積土に含まれていたものである。

SK07 (第92図・第12表・PL20)

2区のSD01の西側に検出した。0.3m×0.56mの楕円形で、深さ5cmほどのすり鉢状の土坑である。検出面から底部にかけて銭貨23枚が出土した。1枚を除いてすべて北宋銭であり、中世の遺構と判断した。

SK08 (第92図)

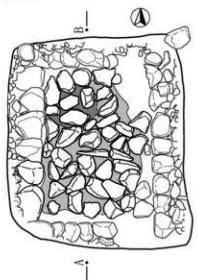
2区のSD01の西側に検出した。1.08m×1.82mの方形で、深さ0.4mである。平安時代の土師器破片と、縄文時代の搔器(第59図51)が出土した。埋土から中世以降の土坑と判断したが、時期は不明である。

3 遺構外の遺物

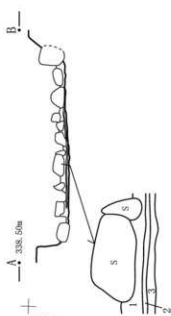
1は鍋で、SD01堆積土から出土した。この他に鍋破片が30点出土した。2は砥石で、SD01の1層から出土した。大きさは3.4cm×4.7cm×1.5cmである。出土層位から中・近世のものだと判断した。3は23cm×19cmの五輪塔空風輪で2b区の表土から出土した。五輪塔はこの1点のみであるが、2区に隣接して墓地がある。現在、五輪塔は確認されないが、この墓地と関係したものであろうか。

この他、青磁碗の小破片が2点出土したのみで中世の遺物は他に確認されなかった。近世以降の遺物については、整理対象外とした。

SK01



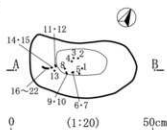
■ 炭化物の分布範囲
 ■ 灰の分布範囲



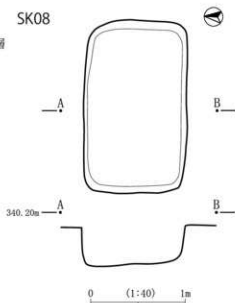
1層：暗褐色土
 2層：炭化物・灰・もみ殻層
 3層：暗褐色土



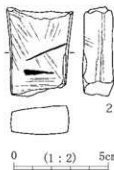
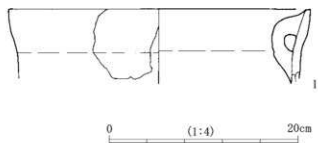
SK07



SK08



遺構外出土遺物



第92図 中世以降の遺構と遺物

番号	銭貨名	国名	初鑄年	書体	外径縦 (mm)	外径横 (mm)	備考	取上げ 番号	保存処理 番号
1	元豊通寶	北宋	1078	篆書	25.4	25.4		1	1
2	熙寧元寶	北宋	1068	篆書	—	—	欠損	2	2
3	元豊通寶	北宋	1078	篆書	23.9	23.8		3	3
4	元豊通寶	北宋	1078	篆書	24.9	25.0		4	4
5	元符通寶	北宋	1098	篆書	23.9	23.9		5	5
6	熙寧元寶	北宋	1068	篆書	23.7	24.0	No.7と付着	6	6
7	紹聖元寶	北宋	1094	篆書・背上月	24.1	24.3	No.6と付着	7	7
8	元符通寶	北宋	1098	行書	24.1	24.0		8	8
9	紹聖元寶	北宋	1094	篆書・背下呈	24.0	23.8		9	9
10	皇宋通寶	北宋	1038	真書	24.4	24.3		10	10
11	景祐元寶	北宋	1034	篆書	25.0	25.3		11	11
12	咸平元寶	北宋	998	真書	24.7	(24.0)		12	12
13	元豊通寶	北宋	1078	行書	24.8	24.7		13	13
14	元豊通寶	北宋	1078	行書	24.8	25.0	No.15と付着	14	14
15	熙寧元寶	北宋	1068	真書	23.9	24.2	No.14と付着	15	15
16	熙寧元寶	北宋	1068	真書	23.6	23.7		16	16
17	開元通寶	唐	621	背上月	24.8	24.8		17	17
18	元祐通寶	北宋	1086	行書	24.4	24.5		18	18
19	紹聖元寶	北宋	1094	行書	24.1	24.1	No.20と付着	19	19
20	熙寧元寶	北宋	1068	篆書	25.0	25.0	No.19と付着	20	20
21	紹聖元寶	北宋	1094	篆書・背上月	25.2	25.1	No.22と付着	21	21
22	元祐通寶	北宋	1086	篆書	24.0	24.3	No.21と付着	22	22
23	皇宋通寶	北宋	1038	真書	24.8	24.8	検出面		23

第12表 SK07 出土銭貨一覧



第4章 総括

南曾峯遺跡は、信濃川（千曲川）左岸の丘陵上にある遺跡として知られていた。420 × 250mにわたる範囲が南曾峯遺跡とされていたが、度重なる開発事業により丘陵は削平され、かつての姿を留めていない。現在は丘陵の南端部がわずかに残されているのみである。今回の調査は、広大な南曾峯遺跡の南端部の僅かな範囲であったが、旧石器時代から中世に及ぶ各時代の遺物が出土した。縄文時代は草創期から前期前葉の土器と石器、弥生時代中期後半の粟林式土器と石器、古墳に関わる埴輪と銅鏡破片、平安時代の丘陵上の集落など失われてゆく遺跡の内容の一端を示すことができた。特に、旧石器時代については、長野市内の遺跡で最多の石器出土数となった。以下に旧石器時代の調査成果をまとめ、総括としたい。

旧石器時代の二つの石器群

旧石器時代の調査では、129m²の範囲に2,400点を超える石器群が出土した。これらの石器群は砂礫層を挟んで上下二つの石器群に区分された。二つの石器群は、器種組成では類似するが、各器種の特徴や黒曜石産地に差異が認められる。これらは丘陵上の平坦面に出土しており、現在の千曲川水面との比高差は約20mである。しかし、石器はシルト層と砂層などの水成層から出土しており、旧石器時代には水をかぶる環境にあることが推測された。遺跡周辺は2～4万年前に隆起を開始し、現在の丘陵ができたものとされている^(註1)。遺物包含層の堆積状況を考慮すると、調査地点は千曲川河畔の増水で冠水する程度の河原の微高地上であり、旧石器時代には千曲川兩岸にみられる丘陵は形成されていなかったと考えられている。遺物包含層直下に礫層が確認されることも、上記の想定と矛盾しない。

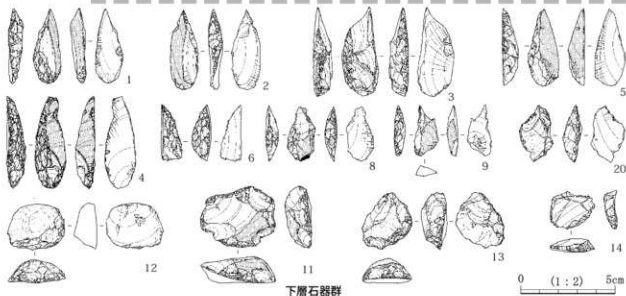
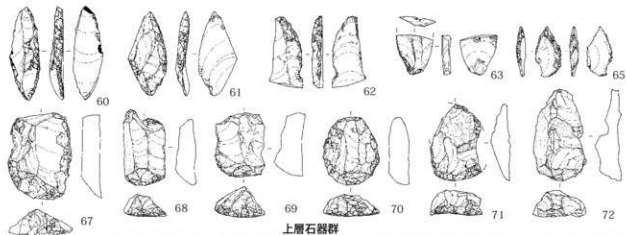
なお、石器群の包含層の火山灰分析と光ルミネッセンス年代測定の結果、いずれの石器群もAT降灰以降のものであることが明らかにされた。

上層石器群

主に、Ⅲ a 層・Ⅲ b1 層から出土した石器群である。調査区全体に分布が認められるが、密集部は2.5mほどの範囲である。上層石器群は61に代表される尖頭部を有する二側縁加工のナイフ形石器と、縦長剥片を用いた搔器で特徴づけられる（第93図）。60は出土状況から他の石器群との相伴関係に疑問があり、62・63は端部または基部に部分的な調整加工が施されるのみで、定形的な形状を示しているとは言えない。65は横長剥片を素材としており、下層石器群の8・9・20に類似するが、上層石器群の分布の中心部に出土しており、黒曜石産地が上層石器群で主体となる和田鷹山群である。石器の特徴は下層石器群と類似しており、上層と下層の石器群の関係を考えるにあたり、問題とされる資料である。また、縦長剥片を用いた搔器が6点出土しており、黒曜石5点の産地が和田鷹山群（68・70・71）、和田芙蓉ライト群（67）、蓼科冷山群（69）とバリエーションがある。黒曜石製の石器はいずれも剥片剥離の接合例が確認されず、素材剥片の製作の痕跡は確認できない。黒曜石破片が1,135点出土しており、67に刃部調整剥片が接合しているなど、遺跡内では調整加工を主体的におこなっていたことが判明した。黒曜石の剥片は372点出土したが、ナイフ形石器や搔器などの石器の素材となりうる剥片は見られない。最大長の剥片でも4.2cm程度であり、3.5cm以上のものは6点のみである。剥片の観察からも素材剥片を目的とした剥片剥離が遺跡内で行われていない、との結論になり、黒曜石の石核が出土していないことと整合する。また、ポイントフレイクが複数認められ、搔器やナイフ形石器の調整加工の他に、槍先尖頭器が存在した可能性も指摘しておきたい。

下層石器群

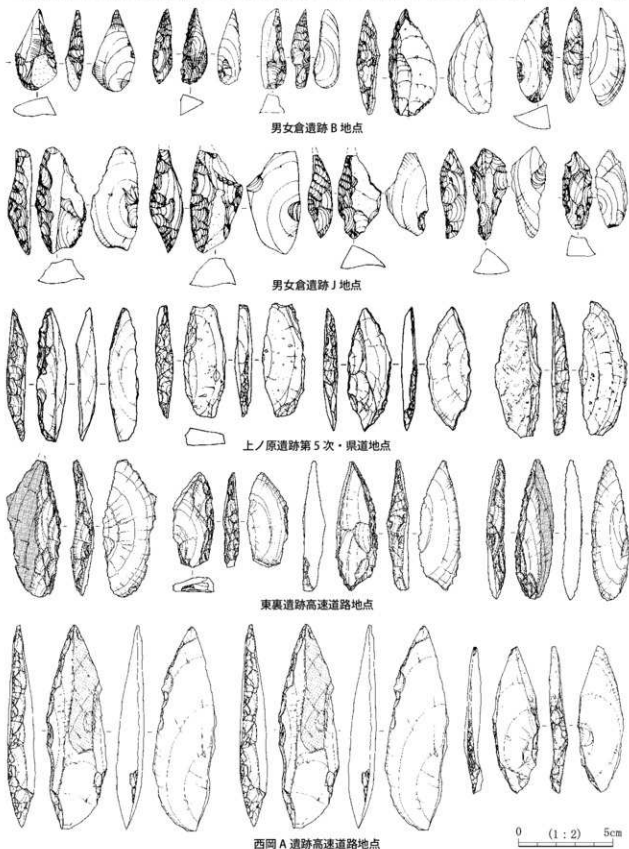
主に、Ⅲ b3層・Ⅲ c層から出土した石器群である。二つのブロックに分かれるが、いずれも 2.0～2.5m 程度の範囲に石器群が密集する。下層石器群は横長剥片を用いたナイフ形石器と不定形な搔器で特徴づけられる（第 93 図）。ナイフ形石器は黒曜石の横長剥片を素材とし、先端部と基部が弧状になる特徴的な形態のものが主体である。黒曜石のナイフ形石器は 10 点出土し、4 以外はすべて SQ03（3 号ブロック）で出土しており、諏訪星ヶ台群を産地とする。4 は SQ02（2 号ブロック）で出土し、産地は和田鷹山群で、斜軸の剥片を素材とし、対向調整のブランディングがあるなど、SQ03 のナイフ形石器（1～3・5）と異なる特徴をもつ^(註 2)。SQ03 では少数の和田鷹山群の搔器、採籜器、剥片が出土しており、4 が下層石器群の他の石器群と共伴することに問題はないと思われる。ナイフ形石器の特徴と産地群の違いが時間的な差に起因するものなのか、その他の要因によるものなのか、今後類例の増加を待って検討する必要がある。



平成 5 年採取資料
第 93 図 南曾峯遺跡の石器

挿器には黒曜石（11・14）とチャート（12・13）が用いられている。挿器は不定形であり、刃部が鋸歯状になり、先端部が形成されているものがあるなど、上層石器群の挿器とは異なる特徴を示す。

黒曜石製の石器群の剥片剥離を示す接合例は認められない。黒曜石の剥片は2.5cm以下の小さなもので、



第94図 長野県内の横長剥片素材のナイフ形石器

上層石器群と同様に、素材剥片の剥片剥離は遺跡外でおこなわれている。

石器群の編年的位置付け

長野県内では横長剥片を素材とした国府系ナイフ形石器が野尻湖遺跡群の上ノ原遺跡、西岡 A 遺跡、東裏遺跡^(註3)などでまとまって出土している。これらは無珉晶質安山岩を用いたもので、南曾峯遺跡下層石器群のナイフ形石器とは石材、形態的特徴が異なる。黒曜石の横長剥片を素材としたものは長和町男女倉遺跡 B・J 地点、信濃町裏ノ山遺跡、貫ノ木遺跡、東裏遺跡、仲町遺跡などで確認されるが、AT 降灰以降で特徴が類似するものは男女倉遺跡 B 地点(第 94 図)(和田村教育委員会 1975)である。男女倉遺跡のナイフ形石器は埼玉県明花向遺跡 C 地点との類似が指摘され、砂川石器群直前期に位置付けられている(森先一貴 2010)。黒曜石の横長剥片素材の先端部を作りだし、基部が弧状をなすナイフ形石器が埼玉県新屋敷遺跡 C・D 区でも出土しており、南曾峯遺跡下層石器群ナイフ形石器の類似資料である。

上記の位置付けを支持するならば、下層石器群は野尻湖編年第三期(谷 2007 他)にあたる。また、上層石器群は砂川期に相当し、野尻湖編年Ⅲ期～Ⅳ期の前半にあたると思われる。上層石器群と下層石器群との間に大きな時間差があるのか否か、今後の検討課題である。

中期旧石器時代とされた平成 5 年採取資料について

平成 5 年の区画整理事業に際して、丘陵掘削中の礫層上部の白色粘土層から 8 点の石器が発見された(第 93 図)。今回の調査地点の北側 20～30m ほどの距離である。これらの石器について、中期旧石器時代新段階の資料であるとの評価がなされた(中島庄一 1997)。その後、2000 年の旧石器遺跡ねつ造事件の検証報告があり、南曾峯遺跡採取資料に関わる評価は撤回された(中島庄一 2006)。評価の撤回は、今回の発掘調査成果によるところが大きい。すなわち、南曾峯遺跡下層石器群の直下には礫層が堆積しており、下層石器群と近い年代に離水したことが明らかとなった。石器が出土した土層が 4 万年を遡る年代の堆積層である可能性がなくなったのである。より古い人類を探し求めるロマンには水を差す結果となったが、これも今回の発掘調査の大きな成果の一つである。

註

- 1) 赤羽貞幸信州大学教授のご教授による。
- 2) 第 93 図 4 は他の SQ02 の石器より 20～30cm ほど高い位置で出土している。SQ02 の石器群の大半がⅢ c 層であるのに対し、第 93 図 4 はⅢ b 層から出土した。
- 3) これらの遺跡は、長野県埋蔵文化財センター 2000a・2000b・2004、信濃町教育委員会 2008 に報告されている。

引用・参考文献

- 埼玉県埋蔵文化財事業団 1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤他』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 35 集
- 埼玉県埋蔵文化財事業団 1996 『新屋敷遺跡 C 区』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 175 集
- 埼玉県埋蔵文化財事業団 1998 『新屋敷遺跡 D 区』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第 194 集
- 信濃町教育委員会 2008 『上ノ原遺跡(第 5 次・県道地点)発掘調査報告書』
- 谷 和隆 2007 『野尻湖遺跡群における先石器時代石器群の変遷』『長野県立歴史館 研究紀要』第 13 号
- 中島庄一 1997 『第 9 章 1 節 高丘陵陵における中期・後期旧石器時代移行期から後期前半期の石器群—がまん淵遺跡を中心として』『飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん淵遺跡他』長野県埋蔵文化財発掘調査報告書 24
- 中島庄一 2006 『中野市周辺の調査と石器群—南曾峯・沢田鍋土・がまん淵—』『第 18 回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム後期旧石器時代以前の遺跡・石器群をめぐる諸問題』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a 『裏ノ山遺跡・東裏遺跡他』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 48
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b 『貫ノ木遺跡・西岡 A 遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 48
- 長野県埋蔵文化財センター 2004 『仲町遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 63
- 森先一貴 2010 『旧石器社会の構造的変化と地域適応』
- 和田村教育委員会 1975 『男女倉』国道 142 号新和トンネル有料道路事業用地内緊急発掘調査報告書

【旧石器時代遺物包含層の調査風景】



手前下段の石器がSQ02（下層石器群）、奥の上段の石器がSQ01（上層石器群）。

【南曾峯遺跡に設置された説明板】



今回の発掘調査により、中期旧石器時代の石器とされたものは3万年前以降の石器と判明し、説明板の内容は修正された。写真は修正前のもの。

遺物觀察表

1 石器観察表

(1) 観察表の掲載対象

破片を除く旧石器時代の遺物の観察表を掲載した。ただし、接合資料の破片、母岩別分類をおこなった破片、黒曜石産地分析をおこなった破片は以下の遺物観察表に掲載した。旧石器時代の破片の属性、観察表に掲載しきれなかった剥片の属性、出土位置の国家座標値と標高値は、添付 DVD にデータを記録した（ファイル名：旧石器時代石器観察表）。

縄文時代、弥生時代の加工がある石器の観察表は添付 DVD に記録した（ファイル名：「縄文時代・弥生時代石器観察表」）。

(2) 石器の属性観察

旧石器時代の石器群（破片を除く）の以下の属性について計測と観察をおこなった。②・③の属性は DVD 収録の石器観察表に記録した。

- ① 法量（長さ、幅、厚さ、重さ）：剥片は剥離軸を垂直に置いたときの縦軸を長さ、横軸を幅とし、厚さは最大厚部分を計測した。また、欠損により全体の大きさが不明なものは－（マイナス）を付して残存値を示した。0.01g 以下の破片は 0.009g と記載した。
- ② 自然面の残存状況：剥片・破片・石器類は主要剥離面以外（打面と背面）での自然面残存率、石核は全面に対する自然面残存率を示す。
- ③ 打面の属性：打面形態の観察と、打面長、打面幅の計測をした。打面形態は以下のように分類した。
平坦打面：一つの剥離面を打面としたもの。切り打面：複数の剥離面を打面としたもの。線打面：面を成さず線状の打面であるもの。点打面：面を成さず点状の打面であるもの。礫面打面：自然面または節理面を打面としたもの。なお、打面が欠損して失われているものは打面欠損とした。

(3) 観察表の記載方法

欠損品が接合して 1 点の剥片・石器になった場合は、一番大きな破片の欄に法量を記載した。その他の破片の接合前の計測値は括弧を付けて示した。また、器種名は一番大きな遺物の欄に記載し、他の接合した資料には括弧付きでその器種名を示した。以下の略号を用いた。

石材の略号

An：無斑晶質安山岩、Ob：黒曜石、Ch：チャート、Rh：流紋岩、Sa：硬砂岩、SS：珪質頁岩、Sh：頁岩、TS：凝灰質頁岩、PA：輝石安山岩

石器器種の略号

Rn：ナイフ形石器、ES：搔器、Dr：揉雑器、Gr：彫器、Sc：削器、NS：抉入削器、DS：鋸歯縁状削器、BI：石刃、RF：二次加工がある剥片、UF：刃器、FI：剥片、FIB：破碎剥片、Sp：削片、Ch：破片、Co：石核、Ha：敲石

2 土器・土製品観察表

土器・土製品の観察表は添付 DVD に記録した（ファイル名：「土器・土製品観察表」）。

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩/製造材料名	組合番号/番号	部位	遺跡名	タワット	原産石所在地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
	3	F1	06			I	5001	J-000b	和出黄山群	14.0	19.4	3.0	1.23	
	3	F1	06	原産石 20		I	5001	J-000a	和出中成沢群	24.3	26.5	7.4	5.34	
	7	F1	06	原産石 22		II	5001	J-006d	諏訪原ヶ台群	13.7	8.0	1.4	0.18	
	9	F1	Ac	安山岩 5		II	5001	J-007c		13	20	1.6	0.41	
	11	F1	TS	細灰質頁岩 3		II	5001	J-008d		30	19	2.6	1.74	
	12	F1	06	原産石 14		II	5001	J-000c	和田英吾タワット群	13.3	6.0	4.0	0.31	
	13	F1	06	原産石 16a		II	5001	J-000d	和出黄山群	17.0	16.0	2.7	0.7	
	14	F1	3b	砂岩 2		II	5001	J-006c		-17.2	-15	1.7	0.63	
	15	Ba	3a	砂岩 2		II	5001	J-000a		-227	75	30	133.5	32
	16	F1	06	原産石 4		II	5001	J-000a	和出黄山群	-12.9	13.0	4.0	0.64	
	17	F1	06	原産石 4		7747	5001	J-000a	和出黄山群	11.8	13.7	3.0	0.43	
	18	F1	06	原産石 1c		II	5001	J-000a	和出黄山群	-13.9	10.4	3.0	0.57	
	19	Ch	06			II	5001	J-000a	和出黄山群	-9.7	7	5.7	0.25	
	20	Ch	06			II	5001	J-000a	和出黄山群	-7.7	10	3.2	0.19	
	21	F1	TS	細灰質頁岩 1		II	5001	J-000a		26.1	17.4	6.7	2.23	
	22	F1	Ch	チャート 4		II	5001	J-000a		-4.0	11.9	2.1	0.44	
	23	F1	06	原産石 17		II	5001	J-000b	和田英吾タワット群	-11.2	16.3	2.4	0.45	
	25	F1	TS	細灰質頁岩 1		II	5001	J-000b		-13.9	13.1	6.0	1.64	
	26	Ch	06			II	5001	J-000b		-12	-8	9	0.2	
	31	F1	Ac	安山岩 4		II	5001	J-000b		12.2	13.0	1.2	0.28	
	32	F1	06	原産石 16		II	5001	J-000b	和出上層崎群	11.1	17.4	2.0	0.43	
	34	F1	06	原産石 4		I	5001	J-007d	和出黄山群	-9.7	20.9	3.4	0.67	
	36	F1	06	原産石 20		II	5001	J-002c	検定不可	12.7	10.7	4.6	0.49	
	37	F1	TS	細灰質頁岩 2		II	5001	J-007c		21.6	25.9	3.9	1.58	
	42	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-000a	和出黄山群	16.2	13.2	2.0	0.68	
	45	FP	06	原産石 22		II	5001	J-006d	諏訪原ヶ台群	19.4	26.2	4.7	1.63	細砂層有り
	46	F1	06	原産石 15b		II	5001	J-000c	和出黄山群	-25.7	27.1	8.9	6.68	打痕調整
	48	F1	Ch	チャート 103b	Ch101	II	5001	J-007c		37.4	13.0	8	3.45	
	50	F1	06	原産石 2a		II	5001	J-007d	和出黄山群	19.8	-17.0	3	0.98	
	59	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-007c	和出黄山群	-7.2	26.1	3.0	0.45	
	61	Ch	06			II	5001	J-007c	和出黄山群	-10.2	12.0	1.9	0.7	
	62	F1	TS	細灰質頁岩 1		II	5001	J-007b		26.9	25.6	4.9	4.17	
	65	FP	06	原産石 16		II	5001	J-000b	和出黄山群	-12	10	1.6	0.32	
	69	Ch	06			II	5001	J-007b	和田英吾	-8	10	2.8	0.23	
	69	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-000b	和出黄山群	12	10	2	0.23	
	71	Ch	06			II	5001	J-000b	和田英吾タワット群	-7.5	10.9	2.6	0.19	
	72	F1	Ch	チャート 6		I	5001	J-006a		72.4	60.8	16.9	53.36	
	75	F1	06	原産石 1a		II	5001	J-007d	和出黄山群	08.4	21.8	8.9	2.22	
	79	F1	06	原産石 2a		II	5001	J-000b	和出黄山群	-20	16.7	4	1.64	
	82	Ch	06			7747	5001	J-000a	和出黄山群	-8.3	9.2	1.7	0.13	ポイントウツレテ
	84	F1	Ch	チャート 4		II	5001	J-000a		12.4	2.8	1.0	0.07	
	88	F1	TS	細灰質頁岩 7		攪乱	5001	J-000a		-20.1	25.7	8.4	4.32	
	90	F1	06	原産石 17		II	5001	J-000b	神津島島崎島群	-10.6	12.0	2.6	0.31	
	92	F1	Ac	安山岩 2		II	5001	J-000b		-29.3	-19.4	5.4	4.02	
	93	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-000a	和出黄山群	-8.4	12.6	1.4	0.21	
	95	Ch	06			II	5001	J-000b	和出黄山群	6.8	10.7	2.3	0.21	
	96	F1	06	原産石 12		II	5001	J-000b	和出黄山群	-13.7	-4.9	2.1	0.11	
	100	F1	TS	細灰質頁岩 3		I	5001	J-000a		02.8	30	7.8	2.90	
	101	F1	Ch	チャート 3		I	5001	J-006a		80.8	39.1	40	16.6	
	107	F1	TS	細灰質頁岩 1		II	5001	J-000a		19	22	4.0	2.81	
	110	Sc	06	原産石 1c		II	5001	J-000b	和出黄山群	16.7	28.1	7.4	3.04	細砂層有り
	112	F1	06	原産石 16		II	5001	J-000b	和出黄山群	-10.8	-13	1.1	0.13	
	115	F1	Ch	チャート 8		II	5001	J-007c		13.2	4.7	1.4	0.09	
	116	F1	06	原産石 16		II	5001	J-000b	和出黄山群	10.3	12.0	2.8	0.39	
	117	FP	06	原産石 2b		II	5001	J-000b	和出黄山群	-25.4	21.8	6.7	3	石割へ、表面削削
	118	F1	Ch	チャート 4		II	5001	J-000b		7.2	12.0	1.4	0.13	
	119	F1	TS	細灰質頁岩 102	TS102	II	5001	J-000a		20.7	-24.1	5.0	4.82	
	120	F1	TS	細灰質頁岩 1		II	5001	J-000b		-26.8	12.6	5.0	1.49	
	121	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-000c	和出黄山群	-18.2	-20	2.2	0.53	
	122	F1	TS	細灰質頁岩 1		II	5001	J-000a		23.4	31.8	2.3	6.99	
	124	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-000c	和出黄山群	12.1	7	2	0.19	
	125	F1	3a	砂岩 1		II	5001	J-006c		29.9	26.5	2.8	10.16	
	130	F1	06	原産石 6		II	5001	J-000c	和出黄山群	11	9.0	1.0	0.22	
	131	Ch	06			II	5001	J-000c	和出黄山群	-13	8	2.2	0.18	
	132	F1	06	原産石 1a		II	5001	J-000c	和出黄山群	12.2	8.1	1.3	0.16	
	134	F1	06	原産石 1a		II	5001	J-000c	和出黄山群	13.6	10.6	2.5	0.46	
	135	F1	06	原産石 1a		II	5001	J-000c	和出黄山群	16.4	-14	3	0.47	
	136	Ch	06			II	5001	J-000c	和出黄山群	-9.5	8.4	2.3	0.26	
	140	F1	06	原産石 1a		II	5001	J-000c	和出黄山群	11.2	13.7	1.0	0.25	
	142	F1	06	原産石 2a		II	5001	J-000c	和出黄山群	-22.5	22	5.7	3.98	
	143	F1	06	原産石 17		II	5001	J-000b	豊料山群	-13.2	10.1	1.0	0.22	
	144	F1	06	原産石 12		II	5001	J-000b		14	-4.0	1.0	0.13	
	147	Ch	06			II	5001	J-000c	和出黄山群	-8.6	8.6	2.6	0.21	
	148	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-000c	和出黄山群	10	12.0	2.2	0.27	
	152	F1	06	原産石 2b		II	5001	J-000c	和出黄山群	-10.2	-10.9	1.4	0.22	
	158	F1	06	原産石 2a		II	5001	J-000c	和出黄山群	-13.6	17.0	1.0	2.49	
	159	Gr	06	原産石 22		II	5001	J-000d	諏訪原ヶ台群	21.0	17.6	5.0	1.62	

遺物観察表

報告番号	遺物番号	図種	石材	母岩/産出科名	検査資料番号	産地	産地名	タワット	産層石高地帯定	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考	
	163	F1	06	花崗石 20		産 a	5001	J-0004	指定不可	-15	12	3.1	0.23		
	165	Ch	06			産 a	5001	J-0006	和出黄山群	-6.2	5.9	2.4	0.13		
	168	F1	06	花崗石 26		ワ7	5001	J-0006	和出黄山群	15.1	9.3	1.3	0.19		
	169	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	-7.5	15	2.2	0.28		
	172	F1	06	花崗石 25		産 a	5001	J-0006	和出小沢沢群	-13.5	-14.8	6.5	0.72		
	179	F10	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	13.3	15.2	6.3	1.2		
第 34 図 -87	182	F1	03	チャート 1		産 a	5001	J-000a		13.3	9.1	1.6	0.2		
	184	LF	06	花崗石 26		産 a	5001	J-0004	和出黄山群	31.2	54	14	18.16		
	185	F1	06	花崗石 1e		産 a	5001	J-000c	和出黄山群	-26.6	31.9	6.2	1.21		
	189	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	11.6	8.9	1.6	0.19		
	192	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	-18	17.2	3.3	1.05		
	193	F1	06	花崗石 21		産 a	5001	J-0006	和出小沢沢群	6.5	14.1	4.7	0.7		
	194	F1	06	花崗石 13		産 a	5001	J-0006	和出長谷ワイド群	8	13.8	1.3	0.2		
	197	F1	06	花崗石 26		産 a	5001	J-0006	豊村の山群	6.9	12.9	2.6	0.23		
	199	F1	06	花崗石 20		産 a	5001	J-0006	指定不可	-11.4	12.1	1	0.16		
	200	Ch	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-11.8	16.2	2.2	0.33		
	209	Ch	06			産 a	5001	J-000a	和出黄山群	3.8	9.6	1.2	0.16		
	211	F1	06	花崗石 26		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	15.9	16.2	4.7	0.89	ボジリ有り	
	212	F1	06	花崗石 26		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	16.1	6	1.6	0.12		
	215	F1	06	花崗石 26		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	26.4	13.7	3.2	0.71	ポイントワレノク	
	216	Ch	06			産 a	5001	J-0006	和出黄山群	6.5	6.6	2.0	0.17		
	211	F1	03	チャート 5		産 a	5001	J-000a		30.6	22.7	7.2	6.9		
	215	F10	06	花崗石 22		産 a	5001	J-000c	指定不可	17.8	10	5.3	0.88		
	217	F1	06	花崗石 20		産 a	5001	J-000c		11.8	-4	6.8	0.93		
218	Ch	06			産 a	5001	J-0006	和出黄山群	-8.2	10	1.6	0.15			
225	F1	06	花崗石 21		産 a	5001	J-000c	和出小沢沢群	11.5	8.9	3.6	0.25			
226	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	11.4	14.5	1.1	0.18			
226	F1	TS	緑沢貫貫目 1	TS1	産乱	5001	J-000a		37.9	31.2	8.4	6.19			
第 34 図 -88	227	H5	06	花崗石 1e		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	40	21.6	11.3	9.37		
	229	H6	5a			産 a	5001	J-0004		-147	47	44	486.73		
	230	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	13.6	14.8	3.8	0.51		
	232	Ch	6c	安山岩 6		産 a	5001	J-000a		12.1	8.1	1.4	0.12		
	233	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	11.1	15.8	2.3	0.4		
	237	F1	03	チャート 1		産 a	5001	J-000a		11	7.1	1.7	0.14		
	239	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-20.8	10	1.5	0.29		
	240	HF	06	花崗石 1e		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-14.8	-7.8	4.9	0.3	3ヶ所×彫石露出層ノキ	
	242	F1	06	花崗石 20		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	31.2	22.8	6.5	2.34		
	243	F1	06	花崗石 11		産 a	5001	J-000a	和出長谷ワイド群	16.2	30	2.5	0.5		
	244	F1	06	花崗石 27		産 a	5001	J-000a	豊村の山群	-8.2	12.7	1.4	0.2	ボジリ有り	
	第 34 図 -89	248	LF	TS	緑沢貫貫目 2		産 a	5001	J-000c		37.3	23.4	8.4	8.28	
		249	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-14	-6.5	2.6	0.23	
		251	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	20	18.1	4.9	0.84	ボジリ有り
		252	Ch	06			産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-10.7	6.6	2.2	0.19	
		258	F1	06	花崗石 26		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	13	16.6	1.7	0.34	ボジリ有り
		260	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0004	和出黄山群	-9.5	-15.5	1.8	0.19	
		262	F1	03	チャート 2		産 a	5001	J-0004		-10.7	19.8	2.1	0.51	
266		Ch	06			産 a	5001	J-000c	和出黄山群	12	8.8	1.2	0.16		
274		F1	TS	緑沢貫貫目 3		産 a	5001	J-000c		18.2	31.4	3.7	2.54		
第 34 図 -90		276	Co	06	花崗石 6b		産 a	5001	J-000c	諏訪層・台群	25.9	10	10.1	2.17	
		277	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	21.7	7.1	3	0.41	
		282	F1	06	花崗石 25		産 a	5001	J-000c	和出小沢沢群	-10.8	15.9	4	0.64	
		283	H1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0004	和出黄山群	-21	16.3	5.3	1.88	
		284	H6	5a			産 a	5001	J-0004		-71	29	26	95.11	緑沢産
		285	F1	06	花崗石 1a	06b	産 a	5001	J-0006	和出黄山群	-24.7	16.4	6.5	4.2	
		286	F10	06	花崗石 9		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	17	11.1	1.7	0.4	全露出部
		287	F1	06	花崗石 21		産 a	5001	J-000c	和出小沢沢群	-11.5	14.4	1.2	0.21	
		292	Ch	06			産 a	5001	J-000c	和出黄山群	-11.5	-7	2	0.21	
	294	F1	06	花崗石 1a		産乱	5001	J-000a	和出黄山群	12.5	11.2	5	0.6		
	299	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0004		-7	-13	1	0.12		
	299	Ch	06			産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-10.1	8.2	1.1	0.16	ボジリ有り	
	302	F1	06	花崗石 25		産 a	5001	J-0004	和出小沢沢群	-14	-7.5	5.5	0.67		
	303	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	13.8	14	2	0.34	ポイントワレノク	
	305	F1	06	花崗石 2a		産 a	5001	J-000c	和出黄山群	-12.6	-27.8	4.2	0.52		
	306	F1	06	花崗石 2a		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-15.9	14.4	6.3	1.2		
	308	F1	06	花崗石 10		産 a	5001	J-0004	和出黄山群	-17	14.3	0.8	0.28	全露出部	
	309	F1	06	花崗石 20		産 a	5001	J-0004	指定不可	-9.6	14.6	2.5	0.27		
312	F1	TS	緑沢貫貫目 1		産 a	5001	J-0004		62	95.5	11.2	68.62			
317	F1	06	花崗石 22		産 a	5001	J-0006	諏訪層・台群	5.7	13.2	2	0.15			
320	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-000c	和出黄山群	25.2	26.4	2.7	1.43			
329	F1	06	花崗石 1a		産 a	5001	J-0006	和出黄山群	-20.2	13	2	0.27	ボジリ有り		
334	F1	06	花崗石 26		産 a	5001	J-000a	和出黄山群	-12	20.4	3.5	0.68	ボジリ有り		
334	F1	03	チャート 1		産 a	5001	J-0006		12.8	1	1.5	0.23			
335	F1	06	花崗石 22		産 a	5001	J-0006	指定不可	-11.9	9.6	5.6	0.36			
338	F1	06	花崗石 26		産 a	5001	J-000c	和出黄山群	24.2	18.8	2.5	1.46			
339	F1	5a	頁岩 3		産 a	5001	J-000b		-28.7	-14.5	2.9	1.52			
341	F1	06	花崗石 1a		06d	産 a	5001	J-0006	和出黄山群	-20	51	4	2.51		
342	F1	06	花崗石 4		ワ7	5001	J-0006	和出黄山群	-19.1	-6.1	2.6	0.21			

報告番号	遺物番号	器種	石種	母岩別資料名	組合資料番号	部位	遺跡名	グリッド	埋蔵石の現地座定	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
	343	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006	和出葉山群	9.6	15.4	2.1	0.23	
	345	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	11.2	13.0	0.3	0.21	
	346	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	12.1	19.4	6.0	0.54	磨り有り
	352	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-7.5	12.7	1.7	0.21	
	353	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	12.9	8.8	3.3	0.42	磨り有り
	357	F1	06	花崗石 2a		器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	23.9	10.2	0.5	1.09	
	361	F1	A6	安山岩 5		器	5001	J-1006b		26.5	20.3	0	1.83	
	363	F1	3b	頁岩 101		器 a	5003	J-1006c	和出葉山群	30.4	-21.6	5.9	2.88	
第 33 号-62	364	A6	06	花崗石 3a	069	器 a	5001	J-1006d	和出葉山群	-27.4	17.5	4.0	2.54	
第 33 号-62	365	E5	06	花崗石 11	061	器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	43	23.6	12.3	19.1	
第 33 号-76	366	N5	06	花崗石 2a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	28.5	35.2	9.5	9.7	
	367	F1	3b	緑閃頁岩 110		器 a	5002	J-1006c		21.8	26.7	4.8	2.91	
	368	F1	C3	チャート 102b	Ch105	器 a	5002	J-1006a		22.8	17	6	2.71	
	369	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006c	推定不可	14.2	14.4	3.4	0.63	
	377	Cb	3b	頁岩 101		器 a	5003	J-1006c		5.6	2.7	0.5	0.91	
	378	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006c	和出小段式群	-10	8.4	1.2	0.13	
	386	Cb	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	10	10.9	2.3	0.23	
	387	Cb	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006d	和出葉山群	11.5	9.7	1.7	0.16	
	394	F1	06	花崗石 3a		器 b	5001	J-1006b	和出葉山群	14.9	23.2	4.6	1.72	
	395	F1	06	花崗石 3a		器 b	5001	J-1006b	和出葉山群	-24.9	-16.4	2	1.26	
	396	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c		13.2	5	1.2	0.13	
	401	F10	06	花崗石 1b		器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	13.9	11	7.2	0.80	
	402	F1	06	花崗石 2c		器 a	5001	J-1007d	緑閃頁岩 110	6.7	15.0	4.5	0.79	
	404	F1	06	花崗石 2b		器 b	5001	J-1006b	推定不可	-22.1	-13.9	8.1	1.43	
第 33 号-78	405	N5	06	花崗石 2a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	36.9	38.8	12.2	14.86	
	406	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-23.5	11.5	2.2	0.56	
	407	F1	A6	安山岩 1		器 b	5001	J-1006a		22.2	10	3.6	0.68	
	410	Cb	06			器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-12.2	8.9	1	0.16	
	412	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-6.1	-16.1	1	0.13	
	417	F1	06	花崗石 4		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-11.9	8.7	1.9	0.23	
	420	Cb	06			器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-12.8	5.7	3.1	0.15	
	422	F1	06	花崗石 1c		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-11.2	11.1	1.8	0.22	
	423	F1	3b	頁岩 101	3b101	器 a	5003	J-1006b		37.2	27.3	7.9	11.24	
	428	F1	06	花崗石 1b	062	器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-25.4	25.2	9.9	4.94	磨面再分
	430	F1	06	花崗石 1b		器 a	5001	J-1006c	神津島集石群	12	17.5	2.1	0.22	
	426	F1	06	花崗石 1c		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	22.4	9.1	1.4	0.13	
	425	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	13.5	15.6	1.7	0.23	
	438	F1	06	花崗石 27		器 a	5001	J-1006c	蟹科の山群	12	9.4	2.5	0.22	
	440	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006c	推定不可	-14.1	9.8	2	0.41	
第 33 号-65	441	A6	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	26.1	12.1	4.1	1.13	
	442	F1	06	花崗石 2a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-26.2	18	6.6	2.07	
	450	F1	06	花崗石 2d		器 a	5001	J-1006c	和出小段式群	12.8	10.9	4.6	0.46	
	455	F1	06	花崗石 2a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	13.9	24.9	2.7	1.3	
	456	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	26.2	15.5	4.8	1.9	
	458	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	13.9	20.7	4.4	1.53	磨面確認もしくは磨り有り
	459	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	-22.2	-16.2	3.4	0.78	
	462	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006a	推定不可	-10	18.2	1.5	0.21	
第 33 号-71	463	E5	06	花崗石 1c		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	46.2	-27.8	11.8	11.51	
	464	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-17	25.6	3.5	1.4	
	466	Cb	06			器 a	5001	J-1006a	推定不可	8	11.3	3	0.23	
	467	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006a	蟹科の山群	16.5	14.4	3.5	0.24	
	468	Cb	06			器 a	5001	J-1007d	和出葉山群	-11.2	7.7	2.7	0.33	
	471	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006c	蟹科の山群	-12.1	4.3	2.7	0.21	
	473	F1	C3	チャート 102b		器 a	5003	J-1006d		-17.7	18.6	2.7	0.20	
	474	F1	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006d	和出葉山群	15.7	10.5	1.7	0.22	磨り有り
	477	Cb	06			器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	16.4	8.2	1.7	0.13	
	478	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	17.3	10.3	1.7	0.21	
	479	F1	C3	チャート 1		器 a	5001	J-1006a		12.5	8.4	1.8	0.21	
	482	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006b		-13.3	6.3	1.2	0.13	
	484	F1	3b	緑閃頁岩 110		器 a	5001	J-1007d		15.3	23.8	5.9	1.18	
	491	F1	06	花崗石 27		器 a	5001	J-1006a	蟹科の山群	14.5	6.2	1.2	0.2	磨り有り
	492	Cb	06			器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	-9.9	8.3	3.5	0.28	磨り有り
	493	Cb	A6	安山岩 5		器 a	5001	J-1006a		6	11.9	2.3	0.17	
	495	F1	A6	安山岩 4		器 b	5001	J-1006b		-17.9	17.3	4.1	1.41	
	496	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	-18.5	-9.2	4.9	0.96	
	497	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006a	和出葉山群	-6.5	14.6	3.1	0.3	
	498	F1	3b	緑閃頁岩 110		器 b	5003	J-1006a		26.5	17	6.8	1.20	
	499	F1	3b	頁岩 101		器 b	5003	J-1006a		34.5	25.9	6.5	6.94	
	500	F1	A6	安山岩 5		器 c	5002	J-1007d		-16	22.2	3.5	1.02	
	501	F1	A6	安山岩 4		器 a	5001	J-1007d		-13.1	26.4	4.2	1.24	
	502	Cb	06			器 a	5001	J-1007d	蟹科の山群	-17.6	10.8	2.3	0.27	
	503	F1	A6	安山岩 4		器 c	5002	J-1007d		13.8	20	4	1.14	磨り有り
	506	F1	C3	チャート 102b	Ch103	器 a	5002	J-1006a		43	26	20	23.13	
	508	F1	C3	チャート 102b		器 c	5002	J-1006a		68	52	14	34.49	
第 33 号-69	510	E5	06	花崗石 2b		器 a	5001	J-1006c	蟹科の山群	23	27.1	15.3	13.51	
	511	F1	06	花崗石 3a		器 a	5001	J-1006c	和出葉山群	-18.8	21.4	6.8	1.17	
第 33 号-79	512	N5	06	花崗石 3a	062	器 a	5001	J-1006d	和出葉山群	-20.7	27.5	7.0	4.26	磨面再分

遺物観察表

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩/産出地	総合資料番号	部位	遺構名	グリッド	埋蔵石の地帯	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第33期-83	513	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-29.8	-25.7	6.3	5.42	
第34期-84	514	F1	75	緑閃頁頁岩 2		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-23.5	52.2	36	18.23	
第35期-70	515	E5	06	花崗石 2		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	26.4	29	11.4	13.61	
	516	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-25	26.9	2	2.3	
	519	Ch	06			蓋	5001	J-1076a	指定不可	-9.6	6.9	2.1	0.18	
	520	F1	Ch	チャート 1		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	19.8	9	1.5	0.11	
	521	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-16.2	13	2	0.49	
	524	Ch	06			フタ?	5001	J-1076	和出葉山群	19.8	10.2	1.4	0.19	
	532	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	26.5	23.3	4.2	2.57	
	533	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	17	14.7	6.3	1.86	
	534	F1	75	緑閃頁頁岩 2		蓋	5001	J-1076c		48	21.6	8.3	3.85	
	535	Ch	06			蓋	5001	J-1076	和出葉山群	12.3	9	1.1	0.17	
	536	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	3.8	22	2.7	0.57	
	538	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	9	15	1.2	0.7	
	540	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-16.2	11.7	3.7	0.79	ボジド有り
	543	F1B	75	緑閃頁頁岩 1	752	蓋	5001	J-1076	和出葉山群	22.7	20	0.2	1.86	
	545	F1B	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-21.5	14.5	0.4	0.47	
	550	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	指定不可	-23.3	9.6	4.7	0.79	
	551	Ch	06			蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-9.5	9.3	1.3	0.17	
	552	Ch	06			蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-10.9	6.6	2.7	0.36	
	556	F1	06	花崗石 1a	069	蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-14.7	21.2	4.7	2.72	
	559	F1	75	緑閃頁頁岩 1		蓋	5001	J-1076		-14.4	19.3	4.2	1.11	
	560	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-16.7	11.9	2	0.63	
	567	F1	75	緑閃頁頁岩 5		蓋	5001	J-1076		-13.9	-25.5	9.9	0.69	
	569	F1	Ch	チャート 107b		蓋	5001	J-107d		-6.5	14	2.3	0.25	
	571	F1	06	花崗石 2b	06b	蓋	5001	J-107d	豊村の山群	16.9	12.8	3.3	0.79	ボジド有り
	574	Ch	06			蓋	5001	J-107d	和出葉山群	3.7	6.9	3.2	0.19	
	575	Ch	06			蓋	5001	J-107c	指定不可	-10.2	-8.6	2.4	0.26	
	576	F1	3b	頁岩 101		蓋	5001	J-107a		-12.3	-8.4	1.9	0.21	
	577	G7	75	緑閃頁頁岩 1	752	蓋	5001	J-107a		35	28	2.1	16.47	
	580	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	13.2	8.2	1.9	0.3	
	582	F1	3b	頁岩 101		蓋	5001	J-107a		21.8	-13.5	6.4	1.11	
	583	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-6.9	15.7	1.6	0.4	
	585	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	-18.9	12.3	2.7	0.61	ポイントフレイク
	586	F1	06	花崗石 107b	06b1	蓋	5001	J-1076	和出葉山群	12.3	20.3	2.7	0.99	
	587	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	鎌倉ヶ崎群	18.9	21.5	8.7	2.46	
	588	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	13.5	7.9	2.3	0.27	
	592	F1	75	緑閃頁頁岩 3		蓋	5001	J-1076		22.9	19.4	4.2	2.16	
	594	F1	3a	頁岩 101		蓋	5001	J-1076a		12.6	10.1	2	0.56	
	595	F1	Ch	チャート 8		蓋	5001	J-1076		17	22.9	2.9	1.13	
第36期-63	607	K7	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	-20.6	18.7	4.1	1.61	
	608	B1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	-23.4	12.5	3.5	1.22	
	609	F1	06	花崗石 1a		蓋	51	J-106a	和出葉山群	-17.4	-9.5	1.6	0.24	
	611	F1B	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	13	13.5	6.4	0.7	
	613	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	-16.5	14	6.8	1.67	
	614	F1	06	花崗石 11		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	18.8	11.6	2.3	0.49	
	615	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	-14.3	9.4	2	0.22	
	611	Ch	06			蓋	5001	J-106	和出葉山群	8.2	10.1	1.3	0.13	
第37期-84	617	(5c)	06	花崗石 1c	0611	蓋	5001	J-106	和出葉山群	-22.5	16.8	8.2	2.59	986・1586と適合
	613	F1	06	花崗石 1a		覆瓦	5001	J-106	和出葉山群	-13	20	3.5	1.08	ボジド有り
	616	F1	06	花崗石 1a		覆瓦	5001	J-106	和出葉山群	13.2	2.5	1.5	0.22	
	622	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-107a	和出小沢山群	-13.8	20.3	3.1	2.11	0.62
第38期-91	626	G6	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	-22	14.4	10	8.61	
	627	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-107a	和出葉山群	22.3	26.8	7.8	0.79	
第39期-94	628	Ba	2b	頁岩 1		蓋	5001	J-107c		105	86	33	553.65	6.79でもみる
	623	Ch	06			蓋	5001	J-1076	和出葉山群	16.3	6.3	2.4	0.16	
	628	F1	Ac	頁岩 101		蓋	5001	J-107a		-7.6	-19.8	1.9	0.21	
	633	F1	Ch	チャート 7		蓋	5001	J-107b		33.1	18.8	2.2	1.10	
	640	Ch	06			蓋	5001	J-107b	和出葉山群	11.6	9.9	2.5	0.2	
	642	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	指定不可	-10.8	11.5	1.7	0.24	
	643	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	13	9	2.2	0.24	
	649	F1	06	花崗石 6		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	13.2	14.7	2.1	0.44	
	652	F1	06	花崗石 2a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	12.4	16.5	6.4	0.69	ボジド有り
	655	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	9.3	13	2.7	0.36	
	657	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	23	19.5	2	0.59	
	663	Ch	06			蓋	5001	J-106d	和出葉山群	8	11.7	1.7	0.13	
	664	Ch	06			蓋	5001	J-106d	和出葉山群	11	9.3	1.3	0.15	
	665	F1	06	花崗石 2b		蓋	5001	J-1076		13.9	8.4	6.5	0.17	
	666	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	10.7	15.9	9.9	0.66	
	667	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-1076	和出葉山群	12.1	11.8	2.8	0.28	
	668	Ch	06			蓋	5001	J-106d	和出葉山群	-8.7	10.8	1.8	0.2	
	670	F1	06	花崗石 1a		蓋	5001	J-106d	和出葉山群	-15.4	7.7	1.7	0.23	
	673	Ch	06			蓋	5001	J-1076	和出葉山群	9.2	11.8	1.5	0.19	ポイントフレイク
	674	F1	75	緑閃頁頁岩 1		蓋	5001	J-106d		-8.1	27.2	2	10.08	
	675	F1	75	緑閃頁頁岩 1		蓋	5001	J-106d		-28.5	20.4	0	2.29	
	678	Ch	06			蓋	5001	J-106b	和出葉山群	6	8.9	2.1	0.11	
	678	Ch	06			蓋	5001	J-106b	和出葉山群	10.8	11	1.9	0.21	

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩調査品番号	組合資料番号	部位	遺構名	タワット	埋蔵石の地層相定	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
	603	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-14.3	19.3	2.9	0.82	
	605	F1	06	茨城石 13		器 a	5003	J-0006	和田長菅ライオン群	-15.3	13.1	4.1	0.61	
	609	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-15.5	8.5	2	0.36	
	600	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-15.5	10	2.1	0.29	
	602	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0009	和出黄山群	-15.4	-7.5	1.5	0.18	
	603	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0009	和出黄山群	-15.6	10	4.6	0.26	
	604	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-16.7	12	2.3	0.46	
	605	Ch	06			器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-6.1	11.5	1.3	0.17	
	606	F1	06	茨城石 22		器 a	5001	J-0006	諏訪岩ヶ台群	-13.4	-9.6	2	0.27	
	609	F1	06	茨城石 22		器 a	5001	J-0006	豊料の山群	-13.9	10.9	2.4	0.35	
	700	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-14.7	-06.7	3.5	0.73	
	701	F1	06	茨城石 26		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-17.4	13.9	1.7	0.55	
	702	F1	Ch	チャート 4		器 a	5001	J-2004		13.5	11.1	3.2	0.69	
	703	F1	Ch	チャート 4		器 a	5001	J-2004		13.9	9.9	1.6	0.31	
	705	F1	06	茨城石 26	066	器 a	5001	J-0006	豊料の山群	20.5	12	6.5	1.29	
第 12 遺 - 60	708	Co	Ch	縮尺貫貫目 10	75113	器 h	5	J-0074		-29	-82	27	28.03	
	710	Co	Ch	チャート 102B	Ch102	器 c	5002	J-0006		-11.1	-26.9	23.5	45.5	
	711	F1	Ch	チャート 102B	Ch102	器 c	5002	J-0006		26.2	21.6	5.5	4.76	
	712	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-28.5	37.1	5.5	4.46	片面磨
第 12 遺 - 75	713	Gr	F1	縮尺貫貫目 3	753	器 h	4	J-0064		-6.6	66.4	22.4	78.13	
	714	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-6.7	22.9	9	7.12	
第 15 遺 - 67	715	Co	Ch	チャート 108		器 a	5002	J-0006		42	32	30	56.91	
第 15 遺 - 93	716	Co	F1	縮尺貫貫目 4	752	器 h	5	J-0074		8.1	62.5	22.5	268.12	
	717	練	Fa			器 h	4	J-0074		68	70	60	425.46	
	718	F1	06	茨城石 1		器 h	5001	J-0006	和出黄山群	-26.2	23	3.1	2.94	
	723	F1	06	茨城石 25		器 a	5001	J-0006	和出古砂群	-14.9	-7.6	1.6	0.23	
	724	F1	06	茨城石 3a	064	器 h	4	J-0006	和出黄山群	-23.1	15.4	3.3	0.7	
	725	F1B	06	茨城石 25		器 h	4	J-0006	和出小沢沢群	1.9	12.6	2.9	0.19	
	727	F1	06	茨城石 11		器 a	5001	J-0006		12.9	7.2	1	0.14	
	729	F1	F1	縮尺貫貫目 1		器 a	5001	J-0006		-11.9	12.1	3.4	0.33	
	731	F1B	35	珪質貫貫目 1		器 a	5001	J-0006		12.2	10	1.7	0.7	
	733	F1	06	茨城石 3a		器 h	4	J-0006	和出黄山群	-11	15.2	2.7	0.47	
	736	Ch	06			器 h	4	J-0006	和出黄山群	-10.2	9.5	2.1	0.22	
	737	F1	06	茨城石 3a		器 h	4	J-0006	和出黄山群	-15.9	10	1.3	0.29	
	741	F1	06	茨城石 3a	0610	器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-19.1	-18.4	4.3	1.23	
	743	F1	06	茨城石 26		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-14	9.2	2.2	0.22	
	751	Ch	06			器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-9	-9	2.7	0.46	
	752	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-16.9	11.2	1.2	0.21	ボイントンフレキ
	754	F1	Ch	チャート 7		器 a	5001	J-0006		7.6	14.1	2.4	0.44	
	756	F1	Ch	チャート 2		器 a	5001	J-0006		-14.8	11.3	2.3	0.42	
	758	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-9	-15	3.9	0.34	
	760	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-14.3	19.5	2.6	1.03	
	761	F1	06	茨城石 25		器 a	5001	J-0006	和出小沢沢群	-14.2	17.5	3.3	0.92	
	762	Ch	06			器 a	5001	J-0006	和出黄山群	9.3	8.9	1.8	0.16	
	763	F1B	06	茨城石 26		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-16.8	23.2	4.3	0.8	
	766	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-27	46	6.1	3.68	
	767	Ch	06			器 a	5001	J-0006	推定不可	-6	13.5	1.8	0.16	
	769	F1	F1	縮尺貫貫目 1		器 a	5001	J-0006		-18.6	14.3	2.3	0.73	
	775	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006		-13.8	-3.9	1.8	0.11	
	776	F1	F1	縮尺貫貫目 3		器 a	5001	J-0006		-31.7	21.8	6.7	4.31	
	782	Ch	06			器 a	5001	J-0006	推定不可	-7.9	9.1	2.4	0.15	
	783	F1	06	茨城石 11		器 a	5001	J-0006	和田長菅ライオン群	-3.9	14.4	3.1	0.81	
	785	Ch	06			器 a	5001	J-0006	和出黄山群	10.5	11.7	2.9	0.24	
	788	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-11.8	9.8	2.3	0.31	
	791	F1	06	茨城石 22		器 a	5001	J-0006	諏訪岩ヶ台群	-12.9	8	2.2	0.22	
	792	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006		-12.3	11	1.7	0.13	
	794	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-18.7	-7.9	2.1	0.22	
	795	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-15.3	16.4	1.8	0.46	
	800	Ch	06			器 a	5001	J-0006	推定不可	-30.8	10	3.4	0.22	
	801	F1	06	茨城石 1		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	17	14.2	4.3	0.98	
	802	Ch	06			器 a	5001	J-0006	豊料の山群	7.6	11.5	3.3	0.21	ボイントンフレキ
	806	F1	06	茨城石 3a		器 h	4	J-0006	和出黄山群	-23	12.4	2.1	0.93	
	808	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-26.7	10	2.9	1.16	
	810	Ch	06			器 a	5001	J-0006	和出黄山群	10.8	8	1.4	0.18	
	811	Ch	06			器 a	5001	J-0006	和出黄山群	11	11.4	4.2	0.42	
	811	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-16.4	11.5	2.2	0.27	
	815	F1	06	茨城石 12		器 a	5001	J-0006		12.5	7.5	1.6	0.17	
	816	F1	06	茨城石 1a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-7.2	13.4	6.8	0.47	
	819	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-18.1	11.9	2.9	0.31	
	819	F1	Ch	チャート 3		器 a	5001	J-0006		-12.7	6	2.2	0.46	
	821	F1B	Ch	チャート 102	Ch102	器 c	5002	J-0006		7.8	12.3	7.5	0.44	
	823	Ch	06			器 a	5001	J-0006	和出黄山群	10.4	9.6	1.5	0.12	ボイントンフレキ
	825	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	8.3	13	1.7	0.3	
	827	F1	06	茨城石 26		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-17.2	9.1	2.2	0.26	
	829	F1	06	茨城石 4		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-15.1	10.9	1.4	0.36	
	829	F1	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	-22.3	22	3.4	1.33	
	830	F1B	06	茨城石 3a		器 a	5001	J-0006	和出黄山群	21	13	3.6	0.86	

遺物観察表

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩別資料名	組合資料番号	部位	遺跡名	グリッド	埋蔵石高地標定	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
820	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田小渡古群	8.2	9.5	1.8	0.27	
823	F1	06	形塚石 2b			器a	5001	J-1096	和田黄山群	22.3	10.3	2.1	0.6	
839	F1	06	形塚石 11		0b4	器h1上	5001	J-1096	和田実音ワイド群	15.8	12.6	2.7	0.52	
840	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	10.2	7.4	2.0	0.17	
841	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	-9.8	6.2	0.9	0.16	前面オザリ
842	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	-6	12.0	1.9	0.24	
843	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	7.3	9.6	3.3	0.23	
844	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1096	和田黄山群	-10.2	17	4.2	0.39	
846	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1096	和田黄山群	-6.7	-16	2.8	0.4	
849	F1	75	柳沢貫首1			器h1上	5001	J-1094		20.7	20.0	8.1	6.87	
第26図-45	849	Ca	Ch	チャート 103a	Ch106	器h1上	5001	J-1094		21	24.7	16.3	19.47	
852	F1b	06	形塚石 12			器a	5001	J-1096	和田実音ワイド群	11.7	10.3	0.9	0.47	
853	Ch	06				器h1上	5001	J-1096	和田黄山群	-8	6.4	2	0.15	
854	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	-7.4	8.4	2	0.16	
857	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	6.4	9.7	5.1	0.27	
858	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	-9.9	10	2.3	0.22	
860	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1096	和田黄山群	-14.9	2.7	2.1	0.68	
861	F1	06	形塚石 27		0b2	器a	5001	J-1096	蟹持の山群	-13.2	11.3	1.5	0.25	
862	F1	06	形塚石 1a			器h1上	5001	J-1096	和田黄山群	16.2	14.8	1.7	0.23	
868	F1	7a	砂山1			器h1上	5001	J-1096		12.1	19.2	2.0	0.73	
870	F1	06	形塚石 13			器h1上	5001	J-1096	和田実音ワイド群	19.3	13.1	1.5	0.29	
第31図-64	870	8a	06	形塚石 1a		埋込	5001	J-1096	和田黄山群	-19	21.0	3.5	1.64	
872	F1	06	形塚石 2b			器h1上	5001	J-1096	和田黄山群	-24.0	13.4	3.1	1.12	
879	F1	06	形塚石 2a			器h1上	5001	J-1096	和田黄山群	18	19	4.2	1.12	
881	F1	Ch	チャート 9			器b	5001	J-1096		24	19.8	6.5	2.43	
882	Ch	06				器b	5001	J-1096	和田黄山群	9.1	10	2	0.27	
884	F1	06	形塚石 1a			器b	5001	J-1094	和田黄山群	22	20.2	8.1	3.66	
第34図-94	886	(3c)	06	形塚石 1c	0b11	器a	5001	J-1094	和田黄山群	-26	-26.2	8.8	3.43	613・1506と適合
887	HF	06	形塚石 12			器a	5001	J-1094	和田実音ワイド群	-24.9	-16.3	6.2	1.9	
889	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1094	和田黄山群	12.9	17.5	5.5	0.72	ポイントフレート
893	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1094	和田黄山群	14.3	15.6	3.2	0.5	
894	F1	06	形塚石 12			器a	5001	J-1096	和田実音ワイド群	-11.4	-12.2	1.7	0.2	
896	F1	06	形塚石 1a			器b	5001	J-1096	和田黄山群	11.9	9	1.9	0.19	ポイントフレート
897	Ch	06				器a	5001	J-1094	和田黄山群	-11	9	2.2	0.2	
900	Ch	06				器h1上	5001	J-1096	和田黄山群	10.3	10.2	1	0.18	
904	Ch	06				器h1上	5001	J-1096	推定不可	-9.2	6.6	2.1	0.25	
905	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1094	和田黄山群	12	16	1.7	0.26	
912	Ch	06				器b	5001	J-1096	和田黄山群	-11.2	7.2	1.5	0.17	
914	Ch	06				器b	5001	J-1096	和田黄山群	-7.8	12	1.9	0.17	
915	F1	06	形塚石 2b			器b	5001	J-1096	和田黄山群	-16.4	10	1	0.29	
921	F1	Ch	チャート 4			器h1上	5001	J-1096		-27.2	-7.5	5.2	1.1	
933	F1	06	形塚石 2b			器h1上	5001	J-1094	和田黄山群	10.9	14.4	2.6	0.54	
936	F1	06	形塚石 2b			器a	5001	J-1096	和田黄山群	-16.5	13.8	2.0	0.46	
937	F1	06	形塚石 27		0b7	器a	5001	J-1096	蟹持の山群	13.4	-7	1.6	0.23	
939	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田実音ワイド群	11.7	6.1	1.9	0.15	
941	F1	06	形塚石 2b			器a	5001	J-1096	和田黄山群	18.2	11	3.2	0.48	
945	F1	06	形塚石 2b			器a	5001	J-1096	和田黄山群	10.8	13.8	4.3	0.4	
946	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	-7.1	12.1	1.8	0.19	ポイントフレート
947	Ch	06				器a	5001	J-1096	和田黄山群	-6.9	10.2	6.4	0.53	
949	Ch	06				器h1上	5001	J-1096	和田黄山群	-10.8	5.9	1.9	0.2	
950	F1	06	形塚石 12			器h1上	5001	J-1096	和田黄山群	-15.8	5	2	0.12	
953	F1	06	形塚石 1a			器b	5001	J-1096	和田黄山群	-13.2	8.2	2.4	0.31	
961	F1	06	形塚石 1a			器b	5001	J-1096	和田黄山群	11.5	8.6	0.8	0.14	
963	F1	06	形塚石 1a			器b	5001	J-1096	和田黄山群	11.9	12.7	3	0.3	
966	F1	06	形塚石 1a			器b	5001	J-1096	和田黄山群	18.9	13	2	0.62	
967	F1	06	形塚石 1a			器b	5001	J-1096	和田黄山群	17.6	10.2	4.9	0.83	
968	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1096	和田黄山群	-6.8	12.4	2.5	0.21	
970	7a	06	形塚石 4			器a	5001	J-1096	和田黄山群	-12.8	-11.8	3.2	0.81	埋込の破片
974	F1	Ch	チャート 1			器h1上	5001	J-1096		10	11	2	0.22	
984	F1	06	形塚石 1a			器a	5001	J-1096	和田黄山群	-12.3	10.4	1.6	0.47	
992	F1	06	形塚石 2b			器a	5001	J-1094	和田黄山群	-16	7.8	3.5	0.19	
999	Ch	75	柳沢貫首2			器h1上	5001	J-1097c		-7.8	11.3	1.9	0.18	
1000	F1	06	形塚石 27			器h1上	5001	J-1097c	諏訪基ヶ台群	-16.4	-23.8	8	2.1	
1004	F1	8a	安山石 4			器b7c	5001	J-1096c		-12.3	-16.9	2.2	0.62	
1005	F1	8a	安山石 9			器b5a6	5001	J-1096c		-16.3	25.2	2	1.16	
1006	F1	06	形塚石 22			器a	5001	J-1097a	推定不可	17.5	12.5	3.5	0.87	
1009	Ch	06				器b	5001	J-1097a	和田黄山群	-11.2	9.2	4.0	0.56	
1010	Ch	06				器h1上	5001	J-1097c	和田黄山群	-8	11.2	3.5	0.37	
1012	Ch	06				器a	5001	J-1097c	和田実音ワイド群	-9.7	10.2	1	0.16	
1018	F1	75	柳沢貫首1			器h1上	5001	J-1097a		17.7	23	5	1.39	
1021	Ch	06				器h1上	5001	J-1097a	和田黄山群	6.2	11.9	2.4	0.34	
1022	7a	06				器a	5001	J-1096		1.03	10.2	29	896.2	幾何の微跡なし
1023	7a	06				器h1上	5001	J-1096		-71	47	-30	155.9	長軸短径の扁平。逆勢。
1024	7a	06	安山石			器h1上	5001	J-1096		110	88	-100	64.4	2a 赤色化
1026	F1b	06	形塚石 2b			器	5001	J-1096	推定不可	9.2	23	6.9	1.1	幾何が著しい
1033	F1	06	形塚石 27			器b	5001	J-1096	蟹持の山群	12.2	6.8	2	0.13	
1037	F1	75	柳沢貫首1		75d	器a	5001	J-1094		47.2	27.5	6	7.34	

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩別産地番号	総合資料番号	部位	遺構名	タワット	埋蔵石高地標定	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1038	F1	75	緑灰質頁岩 1			扉 a	5001	J-0004	和田黄山群	10	16.7	2.9	0.42	
1038	F1	06	茶褐色石 22			扉 b	5001	J-0004	豊利の山群	14.1	13.5	2.2	0.34	
1040	F1	06	茶褐色石 20			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-19.3	10	6.9	1.58	
1042	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	-21.1	14.1	1.1	0.94	
1043	Ch	06	茶褐色石 1c			扉 b	5001	J-0004	和田黄山群	-12.3	9.8	2.5	0.22	
1047	F1R	06	茶褐色石 1c			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	11.9	19.8	8.5	1.31	
1049	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	17.3	18.6	2.5	0.87	ボジリ有り
1049	F1	75	緑灰質頁岩 107			扉 b	5003	J-0004	和田黄山群	10.1	11.4	2.1	0.54	
1051	F1	06	茶褐色石 20			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	10	12.5	1.6	0.21	
1063	F1	06	茶褐色石 11			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	-12.8	6.6	1.3	0.13	
1066	F1	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	13.2	12	3.2	0.66	
1067	F1	Ch	チャート 003b	Ch04		扉 h1	5003	J-0006	和田黄山群	-26.5	24.6	6.5	4.37	
1068	F1	06	茶褐色石 20			扉 a	5001	J-0006	和田古砂群	15.2	15.2	4.7	0.92	
1072	F1	06	茶褐色石 22			扉 h1	5001	J-0006	瀬谷尾コッテ群	11.9	9.8	2	0.23	
1075	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	豊利の山群	11	16.7	3.8	0.26	ポイントフレイト
1076	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	-18.9	9.2	3.8	0.83	
1078	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-18.8	9.7	2.3	0.3	
1082	F1	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	11.4	20.3	3.3	0.68	
1083	F1	75	緑灰質頁岩 1			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	-8.9	16.5	8.7	5.83	
1084	F1R	06	茶褐色石 11			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	12.1	9.8	5.7	1.01	
1085	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0006	和田黄山群	-9.2	7.2	2.2	0.19	ボジリ有り
1086	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	13.9	16.2	2.5	0.66	
1091	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	14	11.9	3.7	0.53	
第 10 編-93	1099	Co	75	緑灰質頁岩 1		扉 a	5001	J-0004		67.5	29	37	123.91	
1101	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	14.2	8.7	3.6	0.35	
第 10 編-77	1106	NS	06	茶褐色石 1a	0b10	扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	-27.4	22.5	8.8	6.11	
1107	F1	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	-14.3	9.2	3.2	0.18	
1108	F1	06	茶褐色石 22			扉 a	5001	J-0006	和田中渡沢群	-8.3	14.2	4	0.57	
1117	F1	06	茶褐色石 11			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	11.3	12	1.6	0.28	
1118	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0004	和田黄山群	8.9	6.9	2.2	0.17	
1119	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	9.7	14.6	1	0.19	
1121	F1	06	茶褐色石 20			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	12	12.6	1.7	0.24	ポイントフレイト
1125	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田中渡沢群	-6.4	12.2	1.2	0.21	
第 10 編-72	1128	Ks	Ch	チャート 10		扉 h1	5001	J-0004	和田中渡沢群	67.4	27	33	117.25	
1131	F1	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	12	14.3	1.1	0.29	
1132	F1	06	茶褐色石 20			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-18.1	8.4	1.6	0.28	全面剥離
1133	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	-11.9	9.9	1.4	0.19	
1134	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-9	11.2	1.4	0.17	
1139	F1	75	緑灰質頁岩 1			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	22.4	24.9	3.5	1.31	
1141	F1	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	-12.4	-6.9	1	0.17	
1146	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	10.5	7.9	2.1	0.22	
1150	Rf	Ch	チャート 003b			扉 h1	5003	J-0004		6	8.4	2.1	0.12	全面剥離有り
1151	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0004	和田黄山群	11	7.2	3.5	0.26	
1154	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	7.4	6.7	3.8	0.22	
1157	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	11	10.1	2.7	0.26	
1159	F1R	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0006	和田黄山群	17.4	6.5	2.1	0.18	
1162	F1	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0004	和田黄山群	11.5	18.6	2.3	0.69	
1163	F1	06	茶褐色石 1a			不明	5001	J-0004	和田黄山群	8.8	14.1	2.6	0.28	
第 10 編-62	1166	Sc	06	茶褐色石 1c		扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-21.6	-21.9	8.4	2.26	
1167	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-4.3	12.7	1.6	0.13	
1171	F1	06	茶褐色石 1a	0b4		扉 a	5001	J-0004	和田黄山群	-17.1	15.2	1.7	0.19	
1173	F1	06	茶褐色石 1a			扉 a	5001	J-0004	和田黄山群	-7	15.3	1	0.11	
1175	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-24.4	12.5	2.3	0.4	
1182	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	11.1	-8	2.5	0.23	
1185	F1R	Ch	チャート 2			扉 h1	5001	J-0006		11.1	18	2.7	1.27	
1188	F1	06	茶褐色石 11			扉 b	5001	J-0006	和田黄山群	14.9	10.2	2	0.32	
1190	F1	06	茶褐色石 12			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	15.3	3.1	1	0.26	
1191	F1	06	茶褐色石 12			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	-12.8	8.7	6	0.16	
1194	F1	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0004	和田黄山群	-12.1	24.5	4.9	2.47	
1201	F1R	Ch	チャート 003b			扉 h1	5003	J-0004		13.8	13.5	4.5	0.69	
1203	F1	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0004	和田黄山群	7.2	18.2	1.5	0.24	
1210	F1	06	茶褐色石 20			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	17.3	12.3	3.2	0.73	ボジリ有り
1214	F1	06	茶褐色石 12			扉 b	5001	J-0006	和田黄山群	8.4	6.2	2.5	0.09	
1219	F1	06	茶褐色石 20			扉 b	5001	J-0004	和田黄山群	-15	9	1.1	0.21	
1221	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-2.9	10	1.2	0.17	
1223	F1R	Ch	チャート 2			扉 h1	5001	J-0006		9.3	12.9	2.6	0.35	
1224	F1	75	緑灰質頁岩 1			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	36.8	31.7	16.1	15.47	
1225	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	10.4	10.9	1.8	0.2	
1226	F1	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0006	和田黄山群	-6.2	12	1	0.11	
1228	F1	06	茶褐色石 20			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	-6	26.8	8	3.75	
1230	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-10	13	2.3	0.32	
1232	F1	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	-12.4	19.8	3.5	0.74	ボジリ有り
1237	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 h1	5001	J-0004	和田黄山群	16.5	9.5	2.1	0.21	
1238	F1	Ch	チャート 2			扉 h1	5001	J-0004		67.4	24.8	6.3	6.38	
1239	F1	06	茶褐色石 20			扉 h1	5001	J-0006	和田黄山群	29	21.3	3.1	0.72	ボジリ有り
1243	F1	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0004	和田黄山群	-5.4	-13.8	1.5	0.24	
1244	Ch	06	茶褐色石 1a			扉 b	5001	J-0004	豊利の山群	-8.6	-10	2	0.12	

遺物観察表

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩別記号名	検出資料番号	形状	遺跡名	グリッド	埋石の現地座定	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
1252	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 100		皿 b	5003	J-100a		38.9	22.6	6.5	3.30	
1258	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	11	11.5	1.2	0.2	
1261	F1	Fl	Fl	赤褐色石 6		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	35.9	24.6	3.9	2.80	ボリ有り
1264	Ch	Ch	Ch			皿 b以上	5001	J-100d	和出葉山群	7.5	8	2	0.36	
1268	F10	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 a	5001	J-100b	和出葉山群	8.5	15.6	2.5	0.34	
第 29 図 -23	1269	Se	Se	火山石 104		皿 k3	5003	J-107d		69.5	27.0	15.9	22.11	
1270	F1	Fl	Fl	赤褐色石 101	50-101	皿 k3	5003	J-107d		30.2	31.5	9	15.87	
1279	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100b	和出葉山群	13.2	8.6	2.2	0.77	
1282	F1	Fl	Fl	赤褐色石 6		皿 b	5001	J-100b	和出葉山群	-16.9	11	3	0.6	磨りガラス状
第 29 図 -51	1283	Go	Fl	緑灰質頁岩 108	75109	皿 k3	5003	J-300a		100	70	37.4	239.25	割片素材
1284	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 c	5003	J-307c		30	17	10	3.47	
1285	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108	75119	皿 c	5003	J-307c		60.6	21	10	13.38	1424 土検合
1286	F1	Fl	Fl	赤褐色石 101a		皿 c	5003	J-307c	諏訪基ヶ台群	12.5	12.6	2.3	0.27	
1287	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 c	5003	J-300a		30	19.2	6.6	2.11	
1288	F1	Fl	Fl	赤褐色石 101		皿 k3	5003	J-307c		30.4	44.4	10	11.75	
1289	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 107	75107	皿 k3	5003	J-300a		30.2	28.2	11.8	18.06	1807 土検合
1291	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 c	5003	J-300a		-12.9	20.2	7.5	2.48	
1292	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 k3	5003	J-300a		30	-10.7	7.3	2.1	
1293	F1	Fl	Fl	赤褐色石 101b		皿 k3	5003	J-300a	諏訪基ヶ台群	-6.4	13.5	2.9	0.46	
1294	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 k3	5003	J-300a		-20.3	15.4	8	2.74	
1295	Fl	Fl	Fl	赤褐色石 101b		皿 k3	5003	J-300a	諏訪基ヶ台群	-10	-10.1	2.0	0.58	石割の破片
第 29 図 -16	1296	He	Ch	赤褐色石 101		皿 k3	5003	J-300a	諏訪基ヶ台群	39.6	46.0	11.9	51.1	
1297	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 k3	5003	J-300a		-20.1	29.4	4.1	2.61	ボリ / 内面に黒色見える
1298	F1	Fl	Fl	赤褐色石 103		皿 k2	5003	J-007d	和出葉山群	11.9	25.5	23	0.78	
1299	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 109		皿 k2	5003	J-007d		-18.9	15.4	6	0.95	
1301	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a	他	皿 a	5001	J-100a	和出葉山群	23	21.2	4.6	2.79	
1302	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 a	5001	J-100a	和出葉山群	12.6	10.5	1.1	0.21	
1305	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 a	5001	J-100a	和出葉山群	-10.8	17	2.5	0.29	
1310	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	-13	17	4.2	0.95	
1313	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 107	75108	皿 k2	5003	J-307c		52	58	18	34.38	
1314	F10	Fl	Fl	緑灰質頁岩 107		皿 c	5003	J-307c		28	40.2	16.0	12.18	
1315	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 107		皿 c	5003	J-307c		-65	-51.8	18.1	48.93	
1320	F1	Ch	Ch	赤褐色石 1a		皿 a	5001	J-100a	諏訪不可	19.4	9.4	3.1	0.93	
1322	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	66.5	7.2	1.2	0.49	
第 29 図 -47	1327	Ch	Ch	チャート 104		皿 k3	5003	J-107d		26	25	10.5	6.38	
1341	F1	Fl	Fl	赤褐色石 6		皿 k2	5001	J-100b	和出葉山群	-12	8.5	2.5	0.28	
1342	F1	Fl	Fl	赤褐色石 4		皿 a	5001	J-100a	和出葉山群	10.2	13	2.5	0.36	
1344	Ch	Ch	Ch			皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	-10	-7.2	2.2	0.46	
1348	Ch	Ch	Ch			皿 b以上	5001	J-100a	諏訪不可	65.5	8.7	2.4	0.2	
1349	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 a	5001	J-100d	和出葉山群	11.2	11.5	1.8	0.21	
1351	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 a	5001	J-100a	和出葉山群	-9	11	1.9	0.17	
1352	F1	Fl	Fl	赤褐色石 101b		皿 c フラ	5003	J-307c	諏訪基ヶ台群	14	12	1.9	0.29	
1353	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 k3	5003	J-300a		36.2	17.4	4.6	0.49	
1354	F1	Fl	Fl	緑灰質頁岩 108		皿 k3	5003	J-300a		28	26.7	5.4	3.36	
1355	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100a		16.1	4.5	0.6	0.08	
1356	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	-21.1	11.9	3.9	1	ボリ有り
1358	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	12.8	16.8	2.7	0.58	
1361	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 k2	5001	J-100a		21.2	20.2	2	1.2	
1365	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	-15	22	4.3	1.29	
1372	Ch	Ch	Ch			皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	11.2	10.6	2.5	0.21	
1374	Ch	Ch	Ch			皿 a	5001	J-100d	和出葉山群	42.5	6.2	2	0.19	
1376	Ch	Ch	Ch			皿 a	5001	J-100d	和出葉山群	10	10	1.6	0.18	
1382	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 a	5001	J-100a	和出葉山群	-14.4	12.2	2.4	0.22	
1383	F1	Fl	Fl	赤褐色石 2b		皿 a	5001	J-100a	和出葉山群	-21.8	16.9	2.8	1.06	
1386	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1b		皿 b以上	5001	J-100d	和出葉山群	21.8	22.4	6.4	2.3	
1387	F1	Fl	Fl	赤褐色石 22		皿 b以上	5001	J-100a	蟹野の山群	15.3	12.9	2.4	0.43	
1394	Ch	Ch	Ch			皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	-6	4.5	4.7	0.2	
1395	F1	Fl	Fl	赤褐色石 2b		皿 b以上	5001	J-100d	和出葉山群	13.1	11.9	3.2	0.31	ポイントワレキ
1399	F1	Fl	Fl	赤褐色石 20		皿 a	5001	J-100d		-14.4	7.8	0.9	0.14	
1402	Ch	Ch	Ch	チャート 101		皿 a	5003	J-107c		-8.9	-10.4	3.7	0.38	
第 29 図 -83	1403	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	23.4	19.5	3.8	1.02	
1404	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	11	20	3.5	0.69	
1405	F1	Fl	Fl	火山石 5		皿 b	5001	J-100a		57.8	34.2	12.0	17.56	
1406	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	11.2	11.8	2.2	0.31	
1409	Ch	Ch	Ch			皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	-10	8	1.6	0.18	
第 29 図 -66	1411	He	Ch	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	22.9	12.9	3.1	1.1	
1412	F1	Fl	Fl	赤褐色石 4		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	14.2	9.3	1.0	0.2	
1413	F1	Ch	Ch	チャート 1		皿 b	5001	J-100a		12.3	10	2	0.27	
1417	F1	Ch	Ch	チャート 1		皿 b以上	5001	J-100d		11.1	10	2	0.22	
第 29 図 -89	1418	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100d	和出葉山群	-31	21	4	3.89	
1422	F1	Fl	Fl	赤褐色石 1a		皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	20.4	12.5	2.7	0.57	
1423	F10	Fl	Fl	赤褐色石 1a	他	皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	8.6	12.8	6.9	9.4	
1424	Ch	Ch	Ch			皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	-8	10.8	4	0.23	
1428	Ch	Ch	Ch			皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	11	8.2	1.7	0.2	
1431	Ch	Ch	Ch			皿 b以上	5001	J-100a	和出葉山群	9.4	10.7	2.0	0.38	
1436	F1	Fl	Fl	赤褐色石 22		皿 b以上	5001	J-100a	蟹野の山群	13.9	9.3	1.6	0.22	ボリ有り
1442	F1	Fl	Fl	赤褐色石 3		皿 b	5001	J-100a	和出葉山群	-20	25.5	11.8	5.24	

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩/製造地	検出箇所	形状	遺跡名	グリッド	埋蔵石高/地相	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考	
1443	F1	06	花崗石 1a		第 51 上	5001	J-0006	和出農山群	10.2	14	1	0.16		ポイントトリアイア	
1465	F1	06	花崗石 1a		第 51 上	5001	J-0004	和出農山群	9.5	15.3	1.3	0.19			
1466	Ch	06			第 51 上	5001	J-0004	和出中環山群	10.8	11.1	1.0	0.2			
1473	F1	06	花崗石 2b		第 5 上	5001	J-1006	和出農山群	12.2	16.7	2.5	0.42			
1483	F1	06	花崗石 1a		第 51 上	5001	J-0004		-8	14.9	1	0.11			
1485	F1	06	花崗石 1a		第 51 上	5001	J-0004	和出農山群	-11.7	17.9	3.7	0.39			
1492	F1	06	花崗石 1a		第 51 上	5001	J-0004	和出農山群	17.8	19	4.3	0.66			
1493	F1	06	花崗石 2b		第 51 上	5001	J-0006	推定不可	8.5	14.3	2	0.29			
1496	Ch	06			第 5 上	5001	J-0004	諏訪藍ヶ台群	8.3	8.4	2.2	0.16			
1497	F1	06	花崗石 12		第 5 上	5001	J-0004		12	9	0.9	0.1			
1498	F1	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	20	12.5	2	0.28			
1500	Ch	35	頁岩 101		第 5 上	5003	J-0004		-8.9	5.4	2	0.17			
1503	Ch	06			第 51 上	5001	J-0004	和出農山群	-12.5	7.9	3.3	0.33			
1512	F10	Ch	チャート 5		第 5 上	5001	J-0004		17.2	5.8	2.6	0.3			
1513	F1	30	頁岩 101		第 5 上	5003	J-0004		26.2	15.7	7.2	3.08			
1515	F1	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0006	和出農山群	-18.9	-30.4	7.2	3.23			
1516	F1	06	花崗石 1b		第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	-25.9	-1.0	3.0	3.08			
1517	Ch	06			第 5 上	5001	J-0004	和出藍ヶ台群	10.4	9.7	1.7	0.18			
1518	F1	06	花崗石 22		第 5 上	5001	J-0004	諏訪藍ヶ台群	14	13.5	4	0.57			
1521	F1	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0006	和出農山群	15.8	17.8	4.5	0.99			
1522	RF	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	-11.8	-6.2	4.2	0.13		ナイフ形断面の破片のみ	
1529	F1	06	花崗石 4		第 51 上	5001	J-0004	和出農山群	-6.9	0.9	2.5	0.19		メジロ有り	
1530	F1	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	14	11.5	1.6	0.29		ポイントトリアイア	
第 23 編 -74	1535	Gr	Ch	チャート 11		第 5 上	5001	J-0004	-28.7	20	7.7	3.96			
1537	F1	06	花崗石 1a		902	第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	-12.1	-21	4.2	0.88		産地不明
1541	Ch	06			第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	11	10.2	1.3	0.21			
1542	F1	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	-13.6	-12.1	2.8	0.33			
1543	F1	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	-11	-18.6	3.3	0.33			
1545	Ch	06			第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	11.9	5.4	3.2	0.18			
第 23 編 -72	1546	Sc	06	花崗石 1a	9811	第 53 上	5001	J-1006	和出農山群	-30.9	26.5	16.4	7.58		913・906 と結合
1547	Ch	06			第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	13.4	8.7	3.3	0.24			
1549	Ch	06			第 5 上	5001	J-1004	和出農山群	8.1	9.2	3	0.2			
1550	F1	35	頁岩 101		第 5 上	5003	J-0006		-12.9	9.4	2.2	0.28			
1551	F1	75	緑泥質頁岩 100		第 5 上	5003	J-0006		20.5	17.2	7.2	1.86			
1554	F1	06	花崗石 12		第 5 上	5001	J-0004	和出藍ヶ台群	-21.1	8	3	0.25			
1563	F1	06	花崗石 2a		第 5 上	5001	J-0006	和出農山群	8.6	12.5	1.7	0.15			
第 23 編 -27	1565	SS	75	緑泥質頁岩 100		第 53 上	5003	J-0074		32.5	22.3	9.2	5.22		
1566	F1	75	緑泥質頁岩 100	75110	第 53 上	5003	J-0074		30.6	22.5	5.9	3.18			
1567	011	75	緑泥質頁岩 107	75107	第 53 上	5003	J-0074		(19)	(21)	(8)	(1.23)	1200 と結合		
1568	F1	75	緑泥質頁岩 100		第 5 上	5003	J-0004		13	20	4.4	1.41			
1569	F1	06	花崗石 2a		第 52 上	5001	J-0004	和出農山群	-6	16.4	1	0.15			
1573	F1	35	頁岩 101		第 53 上	5003	J-0005		-33	-25	11.2	7.02			
1575	F1	Ch	チャート 055a		第 5 上	5003	J-0004		18.7	18.2	6.4	1.73			
1576	F1	75	緑泥質頁岩 108		第 52 上	5003	J-0004		36.8	14.9	10	3.87			
1577	F1	Ch	チャート 1		第 52 上	5001	J-0004		13.9	8.5	2.2	0.3			
1578	F1	75	緑泥質頁岩 100		第 53 上	5003	J-0074		-30.1	27.2	11.6	9.86			
1580	F1	06	花崗石 1a		第 5 上	5001	J-0004	和出農山群	16.6	8	2.1	0.19			
1582	F1	06	花崗石 104		第 53 上	5003	J-0004	和出農山群	10.7	14.7	3.1	0.41			
第 23 編 -94	1583	RF	75	緑泥質頁岩 100		第 53 上	5003	J-0005	-21.1	-18.8	5.4	1.58			
1585	F1	30	頁岩 101		第 53 上	5003	J-0005		12.4	15.9	2.9	0.43			
1586	F1	30	頁岩 101		第 53 上	5003	J-0005		21.8	19.5	7.8	3.44			
1588	F1	06	花崗石 101b		第 51 上	5001	J-0074	諏訪藍ヶ台群	19.5	20	4	0.4			
1589	F1	06	花崗石 101b		第 53 上	5003	J-0004	諏訪藍ヶ台群	8.7	14	1.6	0.13			
1590	F1	35	頁岩 101	35103	第 5 上	5003	J-507a		-43.4	57	18.8	27.17			
1591	F1	06	花崗石 101a		第 52 上	5003	J-500b	諏訪藍ヶ台群	8.1	12.5	3.4	0.27			
1592	F1	06	花崗石 101b		第 5 上	5003	J-500c	諏訪藍ヶ台群	12.4	17.2	3.2	0.56			
1593	F1	06	花崗石 101b		第 53 上	5003	J-0005	諏訪藍ヶ台群	12.6	7.4	1.5	0.19			
1594	F1	75	緑泥質頁岩 107		第 52 上	5003	J-007c		10.3	12.6	4	0.13			
第 23 編 -15	1595	06	Ch	チャート 102b		第 53 上	5003	J-007a		29	43.5	43.1	14.96		
第 24 編 -21	1596	RF	75	緑泥質頁岩 108		第 53 上	5003	J-0074	-30.4	30.5	8.7	6.7			
1597	F10	75	緑泥質頁岩 107		第 53 上	5003	J-007c		28.9	12.5	13.5	3.78			
1598	F1	75	緑泥質頁岩 108		第 5 上	5003	J-507c		57	42.5	40.2	22.21			
第 24 編 -30	1599	RF	35	頁岩 101	35102	第 5 上	5003	J-507c		30.4	43.8	15	16.63		
1600	F10	75	緑泥質頁岩 107		第 53 上	5003	J-007a		15.1	27.2	8	2.3			
1601	F1	06	花崗石 105		第 53 上	5003	J-007a	和出農山群	1.69	10.4	2.9	0.4			
1602	F1	Ch	チャート 104		第 53 上	5003	J-007a		9.2	12.8	8.8	0.3			
1603	F1	06	花崗石 111		第 53 上	5003	J-007a		7.9	13.1	1.5	0.12			
1604	F1	06	花崗石 101b		第 53 上	5003	J-0004	諏訪藍ヶ台群	11.1	13	2.6	0.32			
1605	F1	06	花崗石 101a		第 52 上	5003	J-0004	諏訪藍ヶ台群	-7.8	12.7	1.4	0.18			
1607	F1	75	緑泥質頁岩 107		第 53 上	5003	J-0004		-25.1	17.8	3	1.09		メジロアリ	
1608	F1	Ch	チャート 052b		第 52 上	5003	J-0004		-29.3	10.9	5.4	1.24			
1612	F1	75	緑泥質頁岩 108		第 53 上	5003	J-0074		36.8	22.5	14.3	5.93			
1613	F1	58	頁岩 101		第 53 上	5003	J-0074		36.8	32.4	11.4	18.16			
1614	F10	75	緑泥質頁岩 108		第 52 上	5003	J-0074		35.1	24.9	6.4	3.68			
1615	F1	75	緑泥質頁岩 105	75105	第 53 上	5003	J-007c		77.3	58	30	124.63			
1617	F1	06	花崗石 105		第 52 上	5003	J-007b	和出農山群	12.5	11.2	1.6	0.21			

遺物観察表

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩/産出地	検出地	用途	産地	タリット	原産石産地推定	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1618	F1	06	花崗石 103		第33区	5003	J-1006	和歌山県	13.5	10.7	2.3	0.73		
1619	F1	06	花崗石 103b		産	5003	J-3024	諏訪県+内務	12.2	15.2	2	0.47		
1620	D53	75	緑閃石頁岩 108	75110	産	5003	J-300a		(25.3)	(41.1)	(12.0)	(13.03)	1837上縁合	
1621	F1	75	緑閃石頁岩 106	75106	産	5003	J-300a		13.2	21.3	4.7	1.21		
1623	Ch	06	花崗石 103b		産	5003	J-3006b	諏訪県+内務	11.3	4.3	3.0	0.15		
1624	U11	75	緑閃石頁岩 108	75119	産	5003	J-3005b		(14.2)	(16.3)	(7.6)	(2.12)	1305上縁合	
1625	F1	3a	頁岩 101	3a102	産	5003	J-3006b		-23.5	-29.1	2.4	3.96		
1626	F10	75	緑閃石頁岩 106	75106	産	5003	J-3005b		11.7	23.9	2.1	1.46		
1627	F1	75	緑閃石頁岩 102		産	5003	J-3027c		9.2	14.6	3	2.29		
1628	F1	3a	頁岩 101		産	5003	J-3007d		27.9	-13	6.3	2.29		
1629	F1	Aa	空山岩 103		産+親長	5003	J-1006		29.5	14.9	2.7	1.36		
1631	F1	06	花崗石 103b		産+77a	5003	J-3006	諏訪県+内務	11.2	15.7	4.0	0.76		
第25区-37	1632	YF	75	緑閃石頁岩 108	産	5003	J-3027c		92	32	15.1	22.45	摩耗有り	
1633	Br	Ch	06	サマート 104	産	5003	J-3006a		30.5	39	7.3	5.4		
1635	F1	06	花崗石 103b		産	5003	J-3027c	和歌山県	19.1	8.1	2.1	0.77		
1636	F1	75	緑閃石頁岩 108		産	5003	J-3007d		-94	30.3	7.9	0.73		
1637	D53	75	緑閃石頁岩 108	75110	産	5003	J-3006		(19.7)	(21.5)	(13.9)	(6.78)	1837上縁合	
1638	F1	06	花崗石 103b		産	5003	J-3027c	諏訪県+内務	19	13	4	0.96		
第27区-50	1639	Ca	3a	頁岩 101	3a103	産	5003	J-3006c	42	48	30	43.93		
1640	F1	75	緑閃石頁岩 106	75106	産	5003	J-3006c		21	20	4.9	1.33		
1642	F1	3a	頁岩 101		産	5003	J-3006b		45	11.4	1	0.72		
1644	F1	75	緑閃石頁岩 9		産	5003	J-1027b		36.3	30	6.4	3.56		
1646	F1	06	花崗石 103a		産	5003	J-3027c	諏訪県+内務	-25.4	18.7	5.2	1.9		
1647	F1	06	花崗石 103b		産	5003	J-3027c	諏訪県+内務	13.1	17.6	3.5	0.56		
1648	F1	06	花崗石 103a		産	5003	J-3027c	諏訪県+内務	11.7	14.2	3	0.5		
1649	F1	06	花崗石 103a		産	5003	J-3027c	諏訪県+内務	12	13.9	2	0.56		
1650	F1	3a	頁岩 101		産	5003	J-3007d		22.2	13.8	3.3	1.22		
1651	F1	06	花崗石 1a		産	5001	J-3006d	和歌山県	-10	17.3	3	0.81		
1653	Ch	06			産	5001	J-3027b	和歌山県	12.3	6.4	2	0.23		
1662	F1	06	花崗石 2b		産	5001	J-3006b	和歌山県	15.1	11.6	2.3	0.26		
1663	F1	06	花崗石 1a		産	5001	J-3006d	和歌山県	19	14.9	3.9	0.37		
1664	F1	06	花崗石 1a		産	5001	J-3006d	和歌山県	16.4	5.3	1.4	0.19		
1665	F1	06	花崗石 2b		産	5001	J-3006d	和歌山県	-17.7	4.3	2	0.23		
1666	F1	75	緑閃石頁岩 108		産	5001	J-3007d		-25.9	16.3	11.4	2.74		
1667	F10	75	緑閃石頁岩 108		産	5003	J-3006		21.7	21.9	30.1	114.68		
1668	F1	75	緑閃石頁岩 105	75105	産	5003	J-300a		94	43	26.1	25.48		
1669	F1	75	緑閃石頁岩 105	75105	産	5003	J-300a		42	36.3	17.4	15.05		
1670	F1	3a	頁岩 101		産	5003	J-3006		33.1	22.3	18.2	4.72		
第24区-22	1671	KP	75	緑閃石頁岩 108	産	5003	J-300a		40	50	30	33.63	ボジリの可能性有り	
1672	F1	75	緑閃石頁岩 105	75105	産	5003	J-300a		30.5	41.1	18.1	20.4		
1673	F1	75	緑閃石頁岩 105	75105	産	5003	J-300a		52.2	65.6	11.1	14.73	1835上縁合	
1674	F1	3a	頁岩 101	3a103	産	5003	J-300a		36.5	30.2	11.4	9.73		
第23区-24	1675	05	75	緑閃石頁岩 110	産	5003	J-300a		-25	29	13	6.98		
1676	F1	75	緑閃石頁岩 108		産	5003	J-3027c		-13.7	11.3	1.8	0.39		
1677	Ch	06			産	5001	J-3006b	和歌山県	12.7	10.2	2.3	0.31	ボイントウレニア	
1679	F1	06	花崗石 103b		産	5003	J-3006	和歌山県	-14.6	13.7	1.8	0.32		
1680	Ch	06			産	5001	J-3006d	和歌山県	19	6.8	2.7	0.13		
1681	Ch	06			産	5001	J-3006d	和歌山県	-6.4	-6.9	2.8	0.13		
第21区-61	1682	Ka	06	花崗石 2a	第34上	5001	J-3006d	和歌山県	43.9	19.7	5	3.28		
1684	F1	06	花崗石 2b		産	5001	J-3006d	和歌山県	-24	10.4	1.7	0.3		
1685	F1	75	緑閃石頁岩 102		産	5003	J-3007d		14.5	22.4	5.8	1.69		
1686	F1	06	花崗石 10		産	5001	J-3006d	和歌山県	12.4	13	2.7	0.43		
1687	F1	06	花崗石 2		産	5001	J-3006	諏訪県+内務	19	11.4	2.9	0.58		
1688	F1	75	緑閃石頁岩 1		産	5001	J-3006b		38.8	16.3	6.8	6.48		
1689	F1	75	緑閃石頁岩 5		産	5001	J-3006d		15	-6.9	2.5	0.22		
1690	F1	75	緑閃石頁岩 107		産	5003	J-3006d		-18.7	36.3	6.3	3.02		
1691	F1	06	花崗石 1		産	5001	J-3006b	和歌山県	12.2	7.5	1.7	0.21		
1692	F1	06	花崗石 3a		産	5001	J-3006b	和歌山県	15.1	6.0	2	0.24	ボイントウレニア	
1693	F1	75	緑閃石頁岩 105		産	5003	J-3007d		14.1	16.4	3.5	0.72		
1695	F1	Aa	空山岩 2		産	5001	J-1027b		24.3	21.3	3.1	2.06		
第22区-60	1696	YF	3a	頁岩 101	産	5003	J-3006b		47	19.7	10.3	1.06	摩耗跡有り。縁合済み	
1697	F1	06	花崗石 1		産	5001	J-3027a		15.2	24.1	2.4	0.83		
1700	F1	75	緑閃石頁岩 102		産	5003	J-3007d		27	20.5	9.3	6.95		
1702	Ch	06			産	5001	J-3027c	豊後高田	-8.2	8.3	1.3	0.16		
1703	F1	75	緑閃石頁岩 5		産	5003	J-1027b		-14.9	-6.9	2	0.17		
第20区-3	1706	Ka	06	花崗石 103b	産	5003	J-3027a	諏訪県+内務	46.5	18.1	10.1	2.43		
1717	F1	3a	頁岩 101	3a102	産	5003	J-3007d		29	24.6	12.3	6.81		
1718	F1	06	花崗石 103b		産	5003	J-3006b	諏訪県+内務	7.5	12.1	1.9	0.36		
1719	F1	75	緑閃石頁岩 109		産	5003	J-3006b		14	7.9	1.7	0.29		
1721	F1	75	緑閃石頁岩 108		産	5003	J-3007d		-26.7	19	8.7	3.25		
1723	F1	06	花崗石 103b		産	5003	J-3007d	諏訪県+内務	11.7	8.39	2.3	0.19		
1725	F1	Ch	サマート 104		産	5003	J-3007d		-18.9	11.3	2.9	0.6		
1734	F10	06	花崗石 103b		産	5003	J-3006b	和歌山県	7.4	21.4	7.9	6.88		
1727	F1	75	緑閃石頁岩 108	75108	産	5003	J-3006b		34.9	42.2	14.4	18.48		
第19区-2	1728	Ka	06	花崗石 103b	産	5003	J-3007d	諏訪県+内務	41.5	14.9	7.0	3.3		
第28区-51	1730	D53	75	緑閃石頁岩 108	75109	産	5003	J-3006b	-28	-41.1	20	31.39	1833上縁合	
第29区-53	1731	Ca	75	緑閃石頁岩 108	産	5003	J-3006b		21	30	20	15.44		

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩/採取地/番号	組合器種番号	形状	遺跡名	グリッド	埋蔵点の現地座標	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第22編-21	1732	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		14.8	17.3	4.9	1.23	
	1733	ES	CS	チャート104		皿	5003	J-007d		-17	23.5	9.2	3.7	
	1734	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006d		-17	23.1	8.8	0.32	
	1736	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007b		36.3	14.2	4	0.74	
	1737	F1	TS	緑灰質頁岩107		皿	5003	J-007d		-9.6	-11.8	1.8	0.2	
	1738	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		-15.6	13.8	8.5	1.63	
	1739	F10b	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		36.1	9.8	2.3	0.3	
	1742	F10b	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		33.5	18.2	10	4.56	
第24編-30	1743	NS	TS	緑灰質頁岩107		皿	5003	J-006b		49	32	13.4	15.84	
	1744	F10b	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		19.7	8	4.9	0.31	
	1745	F1	TS	緑灰質頁岩106	TS106	皿	5003	J-006d		-8.1	33.6	6.4	2.29	
	1746	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		38.9	12.1	4.1	1.69	
	1747	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		21.5	26.5	6.1	2.71	
	1749	F1	06	茨城石106		皿	5003	J-006d	和石麓山群	13.9	19.1	2.6	0.47	
	1749	F1	06	茨城石106b		皿	5003	J-006d	諏訪麓・台群	15.5	11.2	2.9	0.49	
	1750	F1	06	茨城石107		皿	5003	J-006d	和石中流内群	18.9	16	2	0.24	
	1751	F1	TS	緑灰質頁岩110		皿	5003	J-007b		-14.4	-6.7	5.3	0.38	
第25編-11	1752	ES	06	茨城石111		皿	5003	J-007b	和石麓山群	32	38.3	13	15.83	オジロ有
	1753	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		22.4	23.1	9.5	11.73	
	1754	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		19	12.6	3.3	0.32	
	1758	F10b	TS	緑灰質頁岩111		皿	5003	J-007d		22.2	14.9	7.9	2.14	継断点
	1759	F1	06	茨城石104		皿	5003	J-109b	和石麓山群	-5.7	-13.6	1.6	0.17	
	1760	F1	06	茨城石112		皿	5003	J-109c		-15.5	-5.9	1.6	0.13	
	1761	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-006b		21.6	35	8.8	3.86	
	1762	F1	06	茨城石108		皿	5003	J-006b	和石栗野ライオ群	14.1	19.4	2.8	0.77	
	1764	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		11.1	12.7	2.2	0.25	
	1765	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		14.7	-16.9	6.9	1.08	
	1766	F1	06	茨城石106		皿	5003	J-006d	和石麓山群	13	19.3	7	2.28	
	1767	F1	TS	緑灰質頁岩107		皿	5003	J-007d		13.5	16.5	1.1	0.21	
	1768	F11	TS	緑灰質頁岩105	TS105	皿	5003	J-006b		(27) (26.2)	(7.8)	(2.86)	1768と継合	
	1769	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		11.5	13.1	6	1.21	
	1770	F1	SA	頁岩102		皿	5003	J-007d		15.4	26.4	3.2	1.45	
	1771	F10b	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		39	25.3	7.5	6.23	
	1772	F1	TS	緑灰質頁岩107	TS107	皿	5003	J-007d		-15.9	19.2	4.4	1.96	
	1773	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		38.4	18	8	1.62	
第26編-7	1774	SA	06	茨城石109b		皿	5003	J-007d	諏訪麓・台群	30	13.4	3.8	1.28	オジロ有
	1775	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		38.1	-17.2	7.7	3.86	
	1776	F1	TS	緑灰質頁岩105	TS105	皿	5003	J-006d		22.1	42	23	24.63	1768と継合
	1777	F1	06	茨城石109b		皿	5003	J-006b	諏訪麓・台群	12.5	11.3	1.7	0.36	
	1778	F10b	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		28	26.7	14	16.38	
	1780	F1	TS	緑灰質頁岩107		皿	5003	J-007d		-15.6	-7.5	2.6	0.24	
	1781	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		-16.4	1.1	5.1	1.12	
	1782	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		13.9	11.8	2.8	0.38	
	1783	F1	06	茨城石109		皿	5003	J-007d	推定不可	-7.8	12.3	1.7	0.24	
	1784	F1	TS	緑灰質頁岩108	TS112	皿	5003	J-007d		29.4	24	14	9.13	
	1785	F1	06	茨城石109b		皿	5003	J-007d	諏訪麓・台群	9.5	10	2.4	0.21	
	1786	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-006b		12.8	8.8	3.3	0.4	
	1787	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		22.8	30.9	11.7	6.7	
	1788	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		-8.9	28.5	6	0.97	
	1789	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		-21	8.9	6.7	0.82	
	1790	F10b	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		31	36.7	13.2	8.82	
	1791	F1	06	茨城石108		皿	5003	J-006d	和石麓山群	15.2	21.2	3.5	1.08	
	1792	F1	TS	緑灰質頁岩108	TS119	皿	5003	J-006b		14	26.7	5.1	1.27	
	1793	F10b	SA	頁岩101		皿	5003	J-006b		2.8	14.8	9	0.5	
	1794	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		16	27.3	4.7	1.73	
	1795	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007c		24.3	12.3	6.9	1.39	
	1796	F1	TS	緑灰質頁岩107		皿	5003	J-007c		12.2	21.9	2.8	0.91	
	1797	SP	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007c		25.3	20.3	11	5.97	
	1799	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007c		22.6	10.1	5.2	0.96	
	1799	F10b	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		12.1	23.7	6	1.71	
	1800	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		27	21.9	8	0.86	
	1801	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-006b		-15.4	-19.1	3.7	0.56	
	1802	F1	TS	緑灰質頁岩111	TS113	皿	5003	J-006b		22.2	36.6	13.1	16.6	1868と継合
	1803	F1	TS	緑灰質頁岩112	TS117	皿	5003	J-006b		27.8	29	8.2	7.11	
	1804	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		13.9	6.7	3	0.21	
	1805	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007d		12.1	16.1	2.2	0.3	
	1806	F1	TS	緑灰質頁岩106	TS106	皿	5003	J-006d		38.2	42	13	16.28	
	1807	F1	TS	緑灰質頁岩108		皿	5003	J-007c		-57	49	21	32.19	
	1808	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-107b		-7.9	19	2.5	0.23	
	1809	F1	SA	頁岩101	SA102	皿	5003	J-007b		15.2	11.3	3.8	0.86	
第28編-6	1810	SA	06	茨城石109b		皿	5003	J-006b	諏訪麓・台群	29.2	10.6	9.9	3.37	
	1811	NSD	TS	緑灰質頁岩105	TS110	皿	5003	J-006b		(14.5)	(25.2)	(7.1)	(14.82)	1811と継合
	1812	F1	TS	緑灰質頁岩105	TS105	皿	5003	J-006b		19.6	19.2	3.6	0.86	
	1814	F1	SA	頁岩101		皿	5003	J-007d		-17.8	19.1	5.1	1.86	
	1815	F11	SA	頁岩101	SA103	皿	5003	J-007c		(28.0)	(38.2)	(10.0)	(66.80)	1878と継合
	1816	F1	06	茨城石109b		皿	5003	J-007c	諏訪麓・台群	-13.1	6.1	3.1	0.22	
	1817	F1	06	茨城石109b		皿	5003	J-007c	諏訪麓・台群	11	12.4	1.6	0.2	

遺物観察表

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩/製造材料名	検出資料番号	部位	遺跡名	グリッド	黒曜石産地推定	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1818	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3075c	諏訪湖・台群	19.6	15.9	1.4	0.36	
1819	F1	75	緑閃石頁岩 107			蓋	5003	J-3075c	諏訪湖・台群	51	29	16.5	12.48	
1820	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3075c	諏訪湖・台群	11	18.5	4	6.83	
1821	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076a		30.3	23.9	6	2.90	
1822	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		9.7	13.8	2.5	0.29	
1823	F1	75	緑閃石頁岩 106	75106		蓋	5003	J-3077a		-12	23.5	2.3	1.8	
1824	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		21.3	10.3	5.2	6.6	
1825	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3076b	諏訪湖・台群	16.3	23.1	3.3	1.02	
1826	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		14.4	18.9	4.2	0.86	
1827	1F	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	12.8	13.7	3.9	6.4	黒曜石の可能性有り
1829	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	17.5	22.4	5.5	1.92	
1829	Ch	75	緑閃石頁岩 107			蓋	5003	J-3077a		11	7.5	2.6	0.17	
1830	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		15	27	9.1	1.94	
1831	F1	75	緑閃石頁岩 107			蓋	5003	J-3077a		16.7	7.5	5.9	0.27	
1832	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		-51.5	24.5	12.5	10.48	
1833	Ca	75	緑閃石頁岩 108	75119		蓋	5003	J-3076b		31	27	16	11.84	
1834	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		53	24	9	9.23	
1835	F1	75	緑閃石頁岩 106	75106		蓋	5003	J-3077a		21	26.8	6.7	4.99	
1836	BF	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		-18.5	-20.7	8	2.63	
第13編-28	1827	SS	75	緑閃石頁岩 108	75110		蓋	5003	J-3077a	52	53.2	16.2	41.08	6830+1630+1811と整合
1838	F1	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3077a		22	22.9	8.4	2.94	
1839	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	13.7	14.9	4.2	0.53	
1840	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		42	17.5	13.2	7.08	
1841	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		13	16	4.1	0.79	
1842	F1	75	緑閃石頁岩 102			蓋	5003	J-3077a		16.6	7.5	3.7	0.36	
1843	F1	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3076a		33.3	21.5	6.1	2.92	
1845	Ch	75	緑閃石頁岩 100			蓋	5003	J-3077a		11	10.9	3.3	0.25	
1846	F1	75	緑閃石頁岩 107			蓋	5003	J-3076b		30.1	26.7	7	8.26	
1848	F1	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3076b		28.1	23	8.4	5.85	
1849	碑	安山岩				蓋	5003	J-3076b		81	54	43	223.17	褐色付着物
1850	F18	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3076b		16.7	17.1	3.7	1.64	
1851	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		25.9	-14.6	13.7	1.2	
1852	F1	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3077a		22.1	12	4.6	1.2	
1853	F1	Ch	7+e-1-107a			蓋	5003	J-3077a		-15.4	10.2	3.8	0.88	
1854	F1	75	緑閃石頁岩 108	75119		蓋	5003	J-3077a		29	26	8	6.07	
1855	DF1	75	緑閃石頁岩 105	75105		蓋	5003	J-3077a		(18.7)	(26.3)	(9.2)	(4.96)	1823と整合
1856	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		22.8	13.2	6.3	1.68	
1857	F1	06	花崗石 302			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	14.7	11.1	1.4	0.36	
1858	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	8.7	13.7	2.7	0.36	
1859	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		22	10.4	2.7	0.36	
1860	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	14	11.9	2.9	0.32	
1861	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	10.7	11.7	2.3	0.23	
1862	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	13.5	19	3.7	0.77	
第13編-1	1863	Ac	06	花崗石 300b		蓋	5003	J-3077a	諏訪湖・台群	38.7	14.6	2.6	3.76	
1864	F1	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3077a		-27	16.5	5.4	1.86	
1865	F1	75	緑閃石頁岩 105			蓋	5003	J-3076c		23.3	-12.7	7.4	1.32	
1866	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		23.3	13.5	2	0.72	
1867	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		11.7	10.2	2.3	0.32	
1868	DF1	75	緑閃石頁岩 111	75113		蓋	5003	J-3077a		(38.7)	(20)	(11.1)	(2.36)	1802と整合
1869	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		13.8	11.2	2	0.29	
第12編-19	1870	Br	75	緑閃石頁岩 108		蓋	5003	J-3077a		32	28	12	2.95	
1871	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		-22.8	14.9	5.4	1.23	
1872	F1	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3076b		-13.9	21.9	2.7	1.11	
1873	F1	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3076b		-18.7	-6.7	2.3	0.43	
第13編-26	1874	BF	75	緑閃石頁岩 107	75107		蓋	5003	J-3076b	-12.5	24	6.4	2.29	1864と整合
第13編-44	1875	Ca	Ch	7+e-1-104		蓋	5003	J-3076b		33.3	23	23	16.72	
第12編-20	1876	Ac	06	花崗石 300a		蓋	5003	J-3076b	諏訪湖・台群	30.7	22.5	8.8	2.94	
1877	F18	75	緑閃石頁岩 106	75106		蓋	5003	J-3076b		46	31	13	13.71	
1879	F1	3b	頁岩 101	3b103		蓋	5003	J-3077a		32.9	48.6	10.2	14.94	1815と整合
1879	F1	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		-12	12.7	3.8	0.49	
1880	F1	06	花崗石 305			蓋	5003	J-3077b	和歌山麓群	-12.5	12.3	2	0.29	
1881	F18	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		15.2	14.2	6.7	0.81	
1882	DF1	3b	頁岩 101	3b102		蓋	5003	J-3076b		(30.8)	(10.8)	(8.3)	(1.82)	1805と整合
1884	F1	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3076b	諏訪湖・台群	13	13.8	3.2	0.32	
1885	F1	3b	頁岩 101	3b102		蓋	5003	J-3076b		30.1	49	8.7	8	1803と整合
第13編-28	1886	SS	75	緑閃石頁岩 108		蓋	5003	J-3076b		35.6	36	10.7	13.7	
1887	F1	06	花崗石 305			蓋	5003	J-3076b	和歌山麓群	17	20	4.1	1.1	
1888	F1	06	花崗石 306			蓋	5003	J-3076b	和歌山麓群	-13.3	13.1	2.1	0.25	
1889	F18	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3076b		31.9	22	9	5.93	
1890	F1	75	緑閃石頁岩 107	75107		蓋	5003	J-3076b		71	79	40	168.88	
1891	1F	06	花崗石 300b			蓋	5003	J-3076b	諏訪湖・台群	11.1	23.9	3.1	0.79	1827と整合
1893	F18	3b	頁岩 101			蓋	5003	J-3076b		12.3	19.1	5.2	1.99	
1894	F1	06	花崗石 306			蓋	5003	J-3076c	和歌山麓群	8.1	23	4.4	0.74	
1895	Ca	75	緑閃石頁岩 4	752		蓋	5003	J-3077b		28	-79	10	92.14	
第13編-29	1896	1F	3b	頁岩 101		蓋	5003	J-3077a		-48.3	28	11	16.98	
1898	Ch	75	緑閃石頁岩 108			蓋	5003	J-3077a		9.5	9.1	3.6	0.36	
1899	F18	75	緑閃石頁岩 105			蓋	5003	J-3077a		14.7	9	2.5	0.33	

報告番号	遺物番号	素材	石材	母岩/産出地	検査番号	形状	産地	タワット	黒曜石産地推定	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第29編-04	1906	Cu	T5	緑灰質頁岩 106	T5106	盤	5003	J-507c		43	56	29.0	26.1	
1907	F1	T5	黒灰質頁岩 110		盤	5003	J-507c			13.9	17.3	2.7	6.30	
1908	F1	06	黒曜石 309		盤	5003	J-506b		鑑定不可	8	11.3	2.9	6.22	
1909	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		諏訪層+内群	13	16.9	2	6.49	
1907	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		諏訪層+内群	15	18.5	4.5	1.33	
1909	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			-11.1	1	2.1	5	
1910	F18	3b	頁岩 101		盤	5003	J-506b			11.3	18.7	10.7	1.4	
1911	Ch	06	黒曜石 310b		盤+フタ	5003	J-506d		諏訪層+内群	12.4	7.3	2.1	6.2	
1912	F1	T5	緑灰質頁岩 108	T5109	盤	5003	J-506a			-7.8	30.2	7	8.06	
1913	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-507d			-19.7	17	5.8	1.52	
1916	F1	3b	頁岩 101		盤	5003	J-506b			7	16.6	4	6.46	
1917	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-507d			61.1	13.5	8.8	3.97	
1919	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		諏訪層+内群	11.3	22.4	4	6.93	
1921	F1	06	黒曜石 306		盤	5003	J-506b		和田麓山群	16.8	19	1.5	6.15	
1922	F18	T5	緑灰質頁岩 108		盤+フタ	5003	J-506b			16.4	11.8	9.9	1.03	
1923	F1	06	黒曜石 311		盤	5003	J-506b			31.8	-25.4	10.4	18.95	
1925	F1	06	黒曜石 305		盤	5003	J-506d		和田麓山群	26.4	12.5	2.2	6.64	
1926	F1	3b	頁岩 101		盤	5003	J-506b			25.8	18.7	6	5.23	
1927	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-507c			12	14.9	4.1	6.55	
1928	F1	T5	緑灰質頁岩 110		盤	5003	J-506b			-68	-31	10	11.12	
1929	Ch	06	黒曜石 310a		盤	5003	J-506d		諏訪層+内群	8	9.5	2	6.13	
1930	F1	06	黒曜石 310		盤	5003	J-506b		鑑定不可	-8.2	16.5	3.9	6.45	
1931	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506a			-31.8	19.9	1.71	1.71	
1932	F18	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506a			12.2	14.5	2.7	6.33	
1933	F1	3b	頁岩 101		盤	5003	J-506a			13.3	8.4	2.7	6.23	
1935	F18	T5	緑灰質頁岩 108	T5111	盤	5003	J-507c			38	33	22	23.19	
1936	ke	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-507b		諏訪層+内群	40.1	15.8	8.7	4.1	
1937	F1	T5	緑灰質頁岩 108	T5120	盤	5003	J-506a			60.5	63.5	16	63.18	ボツボ有り。コンクリート埋
1938	1P	T5	緑灰質頁岩 108	T5120	盤	5003	J-506a			62.8	27.5	8	9	ボツボによる微細観察
1939	Ch	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506d		諏訪層+内群	7.2	8.7	2	6.10	
1940	Ch	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		諏訪層+内群	8.5	9.5	3.1	6.16	
1941	F18	T5	緑灰質頁岩 112	T5117	盤	5003	J-506b			26.3	41.1	11.5	17.03	
1942	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			19	6.5	1.9	6.25	
1943	Ch	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			5.7	12.5	4.2	6.28	
1944	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			16.5	13	3.3	6.27	
1945	F1	T5	緑灰質頁岩 107		盤	5003	J-506b			-15.2	-23	9.2	5.22	
1947	F1	Ch	チャート 104		盤	5003	J-506a			13.4	12.1	3.3	6.42	
1948	F1	T5	緑灰質頁岩 107		盤	5003	J-506a			-7.3	26.1	10.7	16.89	
第29編-05	1949	Cu	T5	緑灰質頁岩 108	T5112	盤	5003	J-506b		42	27	-21	23.19	
第22編-15	1950	Dr	06	黒曜石 310		盤	5003	J-507b	和田麓山群	11.1	16.7	3.2	4.1	
第14編-0	1951	ka	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b	諏訪層+内群	-26.2	11.2	6.2	1.9	
第14編-33	1952	RP	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-507d		21	21.5	16.7	9.89	
1953	F1	T5	緑灰質頁岩 107		盤	5003	J-506b			-9.2	16.4	3.7	6.65	
1955	F1	T5	緑灰質頁岩 107		盤	5003	J-507d			18.1	8	1.9	6.37	
1956	F18	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-507d			-26.5	42	16.7	13.64	
1957	F1	T5	緑灰質頁岩 108	T5118	盤	5003	J-506b			-30	33	17	26.96	
1959	F1	06	黒曜石 306		盤	5003	J-506c		和田麓山群	-6.8	21	2	6.78	
1960	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-507b			-62.5	38	14	27.63	
1961	F18	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			11.4	26.7	6.7	1.76	
1962	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			33.3	17	6.2	2.68	
1961	19P	T5	緑灰質頁岩 107	T5107	盤	5003	J-506b			25.2	9.6	2.9	6.68	
1963	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		諏訪層+内群	1261	1213	66	63.62	砂土と混合
1965	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b			8.4	11.6	2.2	6.28	
第29編-06	1966	Cu	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b		22	-31.5	13.7	17.33	
1967	RP	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506d			48	26	13	19.61	
1968	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506d			16.8	6.7	2.5	6.19	
1969	Ch	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506d			13.9	7.5	2.7	6.26	
1970	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506d			27	23.9	8	3.4	
1971	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			21.8	21	8	2.08	
第29編-07	1972	Cu	T5	緑灰質頁岩 107		盤	5003	J-506b		29	29.5	16	19.15	製片素材の石群
1973	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-507b		諏訪層+内群	12.8	12.7	2.1	6.24	
1974	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506d			-31	26.8	14	10.81	
1975	Ch	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			11.3	-9	6.4	6.5	
第22編-12	1976	ES	Ch	チャート 104		盤	5003	J-506a		27	26.5	13.2	8.63	
1978	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			44.5	29	6.5	9.95	
1980	F1	3b	頁岩 101	Sb101	盤	5003	J-506b			35.4	-15.2	7	6.27	
1981	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506a		諏訪層+内群	12.5	15.8	2.4	6.45	
1983	F1	Ch	チャート 104		盤	5003	J-506b			11.2	12.8	2	6.1	
1985	F18	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506b			11.6	19	7	6.79	
1986	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		和田麓山群	10.4	19.7	1.1	6.17	
1988	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		諏訪層+内群	5.1	22.8	3	6.29	
1989	F1	3b	頁岩 101	Sb101	盤	5003	J-506b			25.2	-36.2	8	5.66	
1991	F1	T5	緑灰質頁岩 106	T5106	盤	5003	J-506a			-17.3	21.8	6.1	1.91	
第22編-12	1992	ES	Ch	チャート 103b		盤	5003	J-506a		24	29.7	11.7	16.2	
1993	F1	T5	緑灰質頁岩 108		盤	5003	J-506a			41	34	10	16.66	
1994	F1	3b	頁岩 101		盤	5003	J-506b			21.8	24.4	5.2	2.88	
1995	F1	06	黒曜石 310b		盤	5003	J-506b		諏訪層+内群	11.3	7.1	2	6.26	

遺物観察表

報告番号	遺物番号	図様	石材	母岩/採石場	組合資料番号	傾斜	遺構名	タワット	埋蔵石の地帯	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(kg)	備考	
1996	F1	06	花崗石 3016			崖	5003	J-007d	諏訪墓+台葬	15	17.5	4.5	6.86	群生有	
1996	Ch	06	花崗石 3016			崖	5003	J-007d	諏訪墓+台葬	9.3	10.2	2.4	6.22		
1998	F1	75	凝灰質頁岩 105	T5105		崖	5003	J-007d		49.5	36	13.2	20.86		
1999	F1	75	凝灰質頁岩 107			崖	5003	J-006b		-17.9	15.2	7	1.46		
2000	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006b		11.8	12.5	6	6.88		
2001	Ch	06	花崗石 111			崖	5003	J-006b		-7.7	11.5	1.5	0.1		
2002	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006b	諏訪墓+台葬	-11.6	15.5	2.5	0.41		
2003	F1b	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006b		33.1	14.7	7.9	8.82		
2004	Ch	5b	頁岩 101			崖	5003	J-006b		5.5	9.2	2.2	0.1		
2005	Ch	75	凝灰質頁岩 106	T5106		崖	5003	J-006a		7	11.7	2.6	6.08		
2006	F1	Ch	チャート 103a			崖	5003	J-006a		-6.7	9.7	3.5	0.28		
第21編-9	2007	ka	06	花崗石 1016		崖	5003	J-006b	諏訪墓+台葬	35.9	12.1	5.2	1.26		
2009	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006b		36.9	15	5.1	6.66		
2010	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006b		39.2	15.7	8.1	1.62		
2011	F1	Ch	チャート 104			崖	5003	J-006b		-10.9	12.7	4.1	0.59		
2013	F1	75	凝灰質頁岩 106			崖	5003	J-007d		15.3	16.7	2.5	0.24		
第23編-29	2016	N5	75	凝灰質頁岩 106	T5106		崖	5003	J-006b	37	11	13.4	25.47		
2017	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006b		12	26.3	2.7	6.62		
2018	F1	Ch	チャート 104			崖	5003	J-006a		36.4	6.9	2.8	0.21		
2019	Ch	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006a		11	5.6	2.4	0.12		
2020	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006a	諏訪墓+台葬	2.7	15.2	2.3	0.36		
2022	F1	Ch	チャート 103b			崖	5003	J-006b		38.9	19.5	2.5	2.63		
2023	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006b	諏訪墓+台葬	11	14.4	2.4	0.29		
2024	F1	06	花崗石 106			崖	5003	J-006b	和田麓山群	16.2	17	1.7	0.28		
2025	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006b	諏訪墓+台葬	13.9	13.4	2	0.47		
2026	F1	75	凝灰質頁岩 108	T5111		崖	5003	J-006b		32.7	16.4	10.4	4.59		
2027	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-007d	諏訪墓+台葬	11.8	11.2	3.7	0.24		
2029	F1	Ch	チャート 104			崖	5003	J-006a		-1.1	19.9	8	8.27		
2030	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006a		-63.3	27.2	7	6.11		
2031	F1b	75	凝灰質頁岩 107			崖	5003	J-006a		33.3	16.4	2.5	1.97		
2033	Ch	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006a	諏訪墓+台葬	2.8	8.9	2.1	0.15		
2034	Ch	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006a	諏訪墓+台葬	8.7	10.2	2.2	0.19		
2035	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006b	和田麓山群	-11.9	-12.2	2.2	0.25		
2037	F1	75	凝灰質頁岩 107			崖	5003	J-007d		50	14.4	2.8	1.28		
2038	F1b	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006a		15.2	8.2	6.4	0.41		
2039	F1	5b	頁岩 101			崖	5003	J-006a		13.4	16.4	2.7	0.42		
2040	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006a		-10.5	12	2.1	0.3		
2041	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006a	和田麓山群	16.4	9.8	2.1	6.48	1	表面タワリ
2042	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006b	諏訪墓+台葬	11.4	12.2	2.4	0.21		
2043	Ch	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-007d		6.9	12.1	2.5	0.17		
2044	F1	75	凝灰質頁岩 107			崖	5003	J-007d		-8.1	15	2.6	0.42		
2047	F1	75	凝灰質頁岩 105	T5105		崖	5003	J-007d		36.9	22.5	5.2	1.4		
2048	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-007d		39.3	22.2	4.4	2.05		
2049	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006b		23.2	30.1	6.7	4.54		
2051	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006b	和田麓山群	12	12.8	2.2	0.4		
2052	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006a	諏訪墓+台葬	12.2	11.4	3.8	0.47		
2053	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006a		-14.9	18.8	5.2	1.25		
2054	F1	5b	頁岩 101			崖	5003	J-006b		29.3	-12.4	1	2.3		
2055	F1	5b	頁岩 101	3b101		崖	5003	J-006a		-21.4	22.1	3.5	2.09		
第25編-14	2057	ES	06	花崗石 1016		崖	5003	J-006b	諏訪墓+台葬	18.5	25.5	6.5	2.68		
2058	F1	5b	頁岩 101			崖	5003	J-006a		6.5	12.4	2.1	0.2		
2060	F1	06	花崗石 106	0b101		崖	5003	J-007d	和田麓山群	13.8	26.3	3.2	1.49		
2061	F1	06	花崗石 106			崖	517d	J-006a	和田麓山群	9.8	24.1	4.4	0.23		
2062	F1	06	花崗石 1016			崖	5003	J-006a	諏訪墓+台葬	8.8	12.9	1.5	0.19		
2063	F1	06	花崗石 106			崖	5003	J-006a	和田麓山群	-9	12.8	2.4	0.16		
2064	F1	75	凝灰質頁岩 107			崖	5003	J-007d		36	15.5	10	2.94		
2065	BP	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-007d		-29	17	2.4	2.17		
2066	F1	75	凝灰質頁岩 108			崖	5003	J-006a		-14.4	-10	2.9	0.31		
2068	F1b	75	凝灰質頁岩 107			崖	5003	J-007d		36.7	11	5.8	1.2		
2069	Ch	75	凝灰質頁岩 107			崖	5003	J-007d		11.1	11.5	2.4	0.28		
第27編-4	2072	ka	06	花崗石 112		崖	5002		和田麓山群	-68.1	16	9	5.53		
2073	F1	Ch	チャート 5			崖	5001			-8.1	12.9	3.2	0.36		
2077	F1	06	花崗石 1016			崖	5001		和田麓山群	-23.2	18	10.7	4.25		
第28編-80	2080	NS	75	凝灰質頁岩 5	T51	崖	5001			41	54	24	45.08		
2081	BP	06	花崗石 8			崖	5001		和田麓山群	-23.9	7	4	0.3		
2082	Ch	06				崖	5001		和田麓山群	-6.1	9	2.9	0.18		
2083	F1	35	凝灰質頁岩 2			崖	5001			-12.5	10	1.9	0.19		
2085	FP	75	凝灰質頁岩 6			崖	5001			32.8	21.2	9	6.81	隣断全無有り	
2086	Ca	Ch	チャート 1016	0b102		崖	5002			36	15	25	46.05		
2087	Ca	75	凝灰質頁岩 101	T5101		崖	5002			21.8	89	38.5	152.47		
第30編-60	2019	ka	35	凝灰質頁岩 4		崖	5001			-68	18.1	6.4	5.13		
2092	F1	06	花崗石 4			崖	5001		和田麓山群	11.5	12.5	1.4	0.25		
2093	Ch	06	花崗石 4			崖	5001		和田麓山群	8.5	11.7	3	0.22		
2094	F1	5b	頁岩 101	0b11	5003	崖	5001			-1	-14.8	2.1	0.18		
2098	礎	FA				崖	5004			82	73	60	902.32		
2099	礎	FA				崖	5004			-79	73	46	234.62	赤色化。2103と組合	
2100	礎	FA				崖	5004			66	66	60	308.62		

報告番号	建物番号	屋根	石材	母岩調査料番号	検査資料番号	傾斜	建端名	タワット	黒曜石布地判定	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	向き(°)	備考
	2101	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ004				-73	-58	-39	280.47	
	2102	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ004				96	75	-45	284.26	赤色化
	2103	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ004				-45	-39	-36	48.89	2000土壌合
	2104	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				99	74	75	628.69	赤色化
	2105	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				-99	-80	-62	300.15	赤色化、O2付属
	2106	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				111	90	60	803.67	赤色化
	2107	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				-97	84	37	618.23	赤色化、O2付属
	2108	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				97	66	42	273.22	
	2109	礎	FA?		Ⅱa	Ⅱ005				71	67	30	268.22	
第20号-39	2110	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				151	107	71	1300.49	赤色化
	2111	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				121	112	30	1001.19	赤色化
	2112	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				-64	-44	-19	71.12	2108・2111土壌合
	2113	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				62	51	42	163.54	
	2114	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				-102	-90	-62	601.17	赤色化、O2付属
	2115	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				145	92	-24	1422.76	2102・2105土壌合
	2116	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				-98	-88	-13	22.76	2107・2113土壌合
	2117	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				114	-102	66	816.67	赤色化
	2118	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				72	64	64	354.67	赤色化、O2付属
	2119	礎	FA?		Ⅱa	Ⅱ005				-127	-93	-73	270.68	
2120	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				119	102	-54	893.33	赤色化、O2付属	
2121	礎	閃緑岩?		Ⅱa	Ⅱ005				-133	-91	-66	390.16		
2122	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				127	70	50	711.42	赤色化	
2123	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				97	-81	-27	600.08	赤色化	
2124	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				110	104	-69	633.78	赤色化	
2125	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				127	90	42	642.63	赤色化	
2126	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				106	-72	-39	518.06	赤色化	
2127	礎	安山岩		Ⅱa	Ⅱ005				-89	67	40	282.28	赤色化、O2付属	
2128	F1	Ac	安山岩 105	Ac101	Ⅱa	Ⅱ002			35.9	25	10.9	8.27		
2129	F1	Ac	安山岩 105	Ac101	Ⅱa	Ⅱ002			22	11.9	4.8	1.93		
2130	F1	Ac	安山岩 102	Ⅱa	Ⅱ002				18.6	25.9	3.2	1.27		
第21号-39	2131	Co	Ch	チャート 105	Ⅱa	Ⅱ002			43	30	40.5	108.07		
	2132	F1b	TS	凝灰質頁岩 103	TS103	Ⅱa	Ⅱ022		33.5	9.5	26.1	70.51		
	2133	F1	Ch	チャート 102	Ⅱa	Ⅱ002			40.7	31.7	25.2	80.23		
	2134	F1	Ch	チャート 101a	Ⅱa	Ⅱ002			-11.2	-9.89	2.3	0.93		
2135	F1	Ch	チャート 101a	Ⅱa	Ⅱ002			-15.6	-14.8	6.1	1.84			
2136	F1	Ch	チャート 102	Ⅱa	Ⅱ002			23.2	16.1	9.9	2.61			
第26号-44	2137	Co	Ch	チャート 102a	Ⅱa	Ⅱ002			35.4	31.3	19	27.26		
	2138	Co	Ch	チャート 102a	Ⅱa	Ⅱ002			42	40	25	46.47		
第28号-50	2139	Ac	Sb	頁岩 103	Ⅱa	Ⅱ002			89	54	31.5	172.82		
	2140	F1	TS	凝灰質頁岩 101	TS101	Ⅱa	Ⅱ022		35.7	62.9	13.2	33.12		
第28号-42	2141	Co	Ch	チャート 102	Ⅱa	Ⅱ002			15	46	24.9	92.81		
	2142	Co	Ch	チャート 101a	Ch101	Ⅱa	Ⅱ002		51	40	30	61.71		
第27号-18	2143	F1b	TS	凝灰質頁岩 103	TS103	Ⅱa	Ⅱ022		39.8	47.1	11.5	32.71		
	2144	F1b	TS	凝灰質頁岩 101	TS103	Ⅱa	Ⅱ022		36.7	15.6	3.4	1.43		
	2145	F1b	TS	凝灰質頁岩 103	TS103	Ⅱa	Ⅱ022		34.9	46.8	8.3	17.81		
	2146	F1b	TS	凝灰質頁岩 102	Ⅱa	Ⅱ022			15.2	25.4	8.1	3.29		
	2147	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005			116	71	39	596.4	赤色化	
	2148	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005			88	37	46	238.36		
	2149	F1b	TS	凝灰質頁岩 102	TS102	Ⅱa	Ⅱ022		25.1	17.2	10.7	2.96		
	2150	F1b	TS	凝灰質頁岩 102	TS102	Ⅱa	Ⅱ022		22.1	48.9	18.7	46.29		
	2151	F1b	TS	凝灰質頁岩 102	TS102	Ⅱa	Ⅱ022		22.5	65.2	20.1	47.12		
	2152	F1	Ch	チャート 102	Ch101	Ⅱa	Ⅱ002			23.5	19.3	7.1	2.76	
2153	F1	Ch	チャート 102	Ⅱa	Ⅱ002			-14.97	-14.99	8.1	2.2			
2154	F1	Ch	チャート 101b	Ch102	Ⅱa	Ⅱ002			-23.9	-15.8	8.8	2.29		
2155	F1	Ch	チャート 101b	Ch102	Ⅱa	Ⅱ002			-26	-22.2	4.5	16.02		
2156	Co	Ch	チャート 101b	Ch102	Ⅱa	Ⅱ002			41	29	30	23.12		
2157	F1	Ch	チャート 102	Ⅱa	Ⅱ002				26.7	23.1	11.4	2.29		
2158	Co	Ch	チャート 103a	Ⅱa	Ⅱ002				61	42	16.8	36.37		
第21号-39	2159	Ac	Ch	チャート 106	障乱	Ⅱ002			21.3	26.5	5.7	2.25		
	2160	F1b	TS	凝灰質頁岩 101	Ⅱa	Ⅱ002			37.6	63.4	36.3	124.5		
第23号-41	2161	CF	Ch	チャート 102	Ⅱa	Ⅱ002			59.8	27.5	17.3	21.26		
	2162	F1	TS	凝灰質頁岩 101	TS101	Ⅱa	Ⅱ022		17	22.7	5	1.47		
	2163	F1	Ch	チャート 101a	Ⅱa	Ⅱ002			21.5	25.6	6.8	3.3		
	2164	F1	Ch	チャート 101a	Ⅱa	Ⅱ002			29.6	11.1	5.8	0.99		
	2165	F1b	TS	凝灰質頁岩 102	TS102	Ⅱa	Ⅱ022		23.7	26.7	9	4.22		
	2166	F1b	TS	凝灰質頁岩 102	TS102	Ⅱa	Ⅱ022		32.2	14.2	10.4	4.09		
	2167	F1	Ch	チャート 101a	Ch101	Ⅱa	Ⅱ002			38.3	27.4	10.5	16.41	
	2168	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				-68	-41	-10	24.29	赤色化
	2169	F1	Ch	チャート 102	Ⅱa	Ⅱ002			-23.1	11.4	6.5	1.83		
	2170	F1b	TS	凝灰質頁岩 103	TS103	Ⅱa	Ⅱ022			36	13.3	6.3	1.92	
2171	礎	FA		Ⅱa	Ⅱ005				78	68	47	2101.43	赤色化	
2172	F1	Sb	頁岩頁岩	Ⅱa	Ⅱ001				23.4	12.4	1.4	0.46		
2173	F1	Ac	安山岩 101	Ⅱa	Ⅱ001				11.6	34	5.7	1.83		
2174	F1b	TS	凝灰質頁岩 102	TS102	Ⅱa	Ⅱ022			46.4	68	18.4	26.63		
2175	F1	Ch	チャート 101a	Ch101	Ⅱa	Ⅱ002			28.2	28.6	7.2	6.96		
2183	F1	Sb	頁岩頁岩	Ⅱa	Ⅱ001	J-999b			15.7	10	2	0.22	タワット一級	
2190	F1	TS	凝灰質頁岩	Ⅱa	Ⅱ001	J-107a			-52.8	-21	4.1	1.64	タワット一級	

遺物観察表

報告番号	遺物番号	器種	石材	母岩別資料名	検査資料番号	測定	産地名	グリッド	黒曜石産地推定	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
2191	F1	TS	黒灰質頁岩 1	TS1	黒 α	S001	J-1075a			-12.2	-11.1	2.9	0.36	グリッド-併, 2192と組合
2192	DF13	TS	黒灰質頁岩 1	TS1	黒 α	S001	J-1075a			(12.2)	(13.7)	(2.9)	(0.24)	グリッド-併, 2191と組合
2197	F1	CS			黒 β2	S003	J-1075b			11.6	11.0	3.0	0.46	グリッド-併
2210	F1	SS	頁岩 2		黒 α	S001	J-10075			20	9.0	2.4	0.46	グリッド-併
2212	F1	06	黒曜石 111		黒 α	S003	J-10075			11.7	13.0	2.5	0.36	グリッド-併
2217	F1	06	黒曜石 112		黒 β1	S001	J-10074			11.4	7.1	1.0	0.12	グリッド-併
2231	F1	CS	チャート 002b		黒 β1	S003	J-10074			11.2	-4.9	2.7	0.15	グリッド-併
2236	F1	06	黒曜石 30		黒 β2	S001	J-10074			10.4	14	2.7	0.4	グリッド-併
2237	F1	TS	黒灰質頁岩 110		黒 β2	S003	J-10074			30.2	28.9	8.1	5.9	グリッド-併
2238	F1	TS	黒灰質頁岩 110		黒 β2	S003	J-10074			19.6	19.6	5.1	1.63	グリッド-併
2240	F1	06	黒曜石 111		黒 β3	S003	J-10074			11.3	-6	1.7	0.14	グリッド-併
2243	F1	TS	黒灰質頁岩 108		黒 β3	S003	J-10074			18.3	16.6	3.1	0.72	グリッド-併
2244	F1	TS	黒灰質頁岩 105		黒 β3	S003	J-10074			-9.1	8.7	1.5	0.15	グリッド-併
2248	F1	06	黒曜石 111		黒 α	S003	J-10074			10.1	11.9	2	0.24	グリッド-併
2252	F1	06	黒曜石 16		黒 α	S001	J-10076			10.4	7.1	2.1	0.22	グリッド-併
2261	F1	06	黒曜石 18		黒 α	S001	J-10076			13	7.2	2.2	0.16	グリッド-併
2265	F1	SS	頁岩 4		黒 α	S001	J-10076			17	6.4	3.4	0.26	グリッド-併
2267	F1	SS	頁岩 104		黒 α	S003	J-10076			9.5	11.4	1.9	0.24	グリッド-併
2268	F1	SS	頁岩 104		黒 α	S003	J-10076			12.5	-15.9	2.3	0.46	グリッド-併
2287	F1	TS	黒灰質頁岩 10		黒 β1	S001	J-10076			24.9	25	8.0	4.43	グリッド-併
2288	F1	TS	黒灰質頁岩 110		黒 β1	S003	J-10076			13.2	22.2	2.7	2.03	グリッド-併
2299	F1	TS	黒灰質頁岩 110		黒 β1	S003	J-10076			-12.9	11.1	3.4	0.9	グリッド-併
2304	F1	06	黒曜石 22		黒 β1	S001	J-10076			14.0	10.4	4.7	0.72	グリッド-併
2306	F1	TS	黒灰質頁岩 108		黒 α	S003	J-10076			-13.6	-18.4	5.4	1.72	グリッド-併
2307	F1	06	黒曜石 111		黒 β3	S003	J-10076			12	-14.1	2	0.21	グリッド-併
2310	F1	SS	頁岩 104		黒 β3	S003	J-10076			13.2	6.1	1.2	0.15	グリッド-併
2311	F1	SS	頁岩 104		黒 β3	S003	J-10076			13.6	4.1	2.0	0.12	グリッド-併
2314	F1	06	黒曜石 12		黒 β1	S001	J-10076			9.5	12	1.1	0.12	グリッド-併
2319	F1	SS	頁岩 104		黒 β1	S003	J-10076			10.7	6.2	2.4	0.19	グリッド-併
2326	F1	06	黒曜石 30		黒 α	S001	J-10076			12.1	-9.7	6.4	0.1	グリッド-併
2327	F1	TS	黒灰質頁岩 103		黒 α	S003	J-10076			-19.6	-9.9	8.3	1.27	グリッド-併
2328	F1	SS	頁岩 104		黒 α	S003	J-10076			-21.1	-1.9	6.3	2.06	グリッド-併
2329	F1	SS	頁岩 104		黒 α	S003	J-10076			10.8	14.1	2	0.12	グリッド-併
2341	F1	06	黒曜石 109		黒 β2	S003	J-10074			12.9	8.2	3.3	0.51	グリッド-併
2370	F1	06	黒曜石 16		黒 α	S001	J-10074			12.7	-8.2	2.3	0.22	グリッド-併
2371	F1	06	黒曜石 16		黒 α	S001	J-10074			11.4	6.8	0.7	0.09	グリッド-併
2382	F1	CS	チャート 3		黒 β1	S001	J-10074			10	-8.7	1.3	0.11	グリッド-併
2383	F1	CS	チャート 002a	CS106	雑乱	SX11				21.3	19.6	9.2	5.21	
2402	R1	SS			2	S101				-24.3	18.1	8.4	5.90	
2452	F1	06	黒曜石 101b		黒 α下層	S003	J-10076			1.07	1.50	0.50	0.11	グリッド-併
2454	F1	06	黒曜石 101b		黒 α下層	S003	J-10076			0.95	2.41	0.45	0.56	グリッド-併
2483	F1	CS	チャート 002b		黒 β1	S003	J-10076			1.04	0.96	0.26	0.3	グリッド-併
2486	F1	CS	チャート 002a	CS106	雑乱	S101				2.25	1.5	0.72	1.56	

写真図版



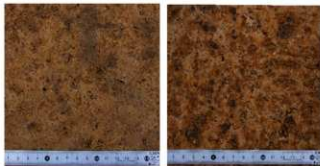
南方上空より南曾峯遺跡を望む（平成4年撮影）



1区基本層序 (I~IV層)

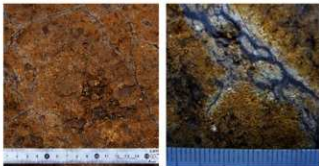


1区基本層序 (III a~V層)



III b1層平面

III b3層平面



III c層平面

III c層平面クラック拡大



SQ01 石器出土状況 (上層石器群)



SQ03 石器出土状況 (下層石器群)



SQ02 石器・礫群出土状況 (下層石器群)



礫群出土状況 (下層石器群)



SB01 完掘



SB02 遺物出土状況



SK13 遺物出土状況



SK14・15 遺物出土状況



1区 ビット群



SD01 弥生土器出土状況 (第70図39)



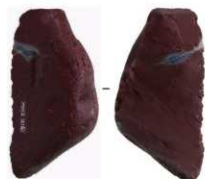
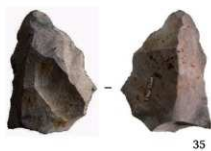
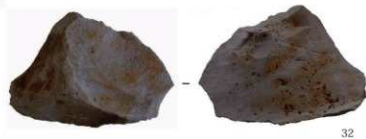
SD01 埋土中大形礫出土状況



SK07 古銭出土状況



下層石器群 (S ≒ 3/4)

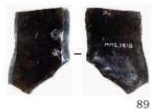




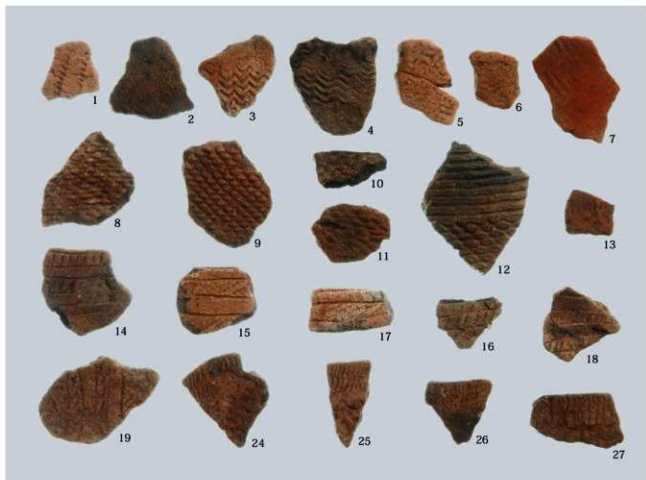
(42～57は約3/4、58・59は約1/2)



上層石器群 (S ≒ 3/4)



(82～94は約3/4、95は約1/2)



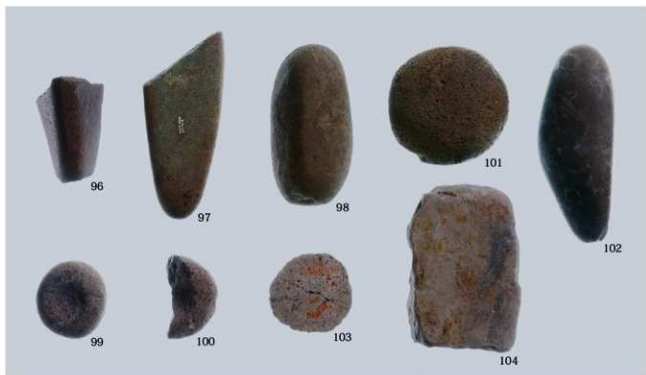
縄文時代草創期・早期・前期の土器 (S 約 1/2)



縄文時代早期・前期の土器 (S 約 1/3)



縄文時代前期～晩期の土器 (S ≈ 1/3)



縄文時代の礫石器 (S ≈ 1/3)



縄文時代の割片石器 (S 与 2/3)



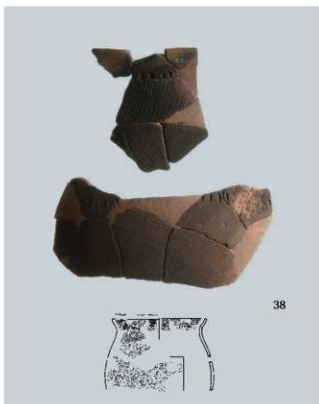
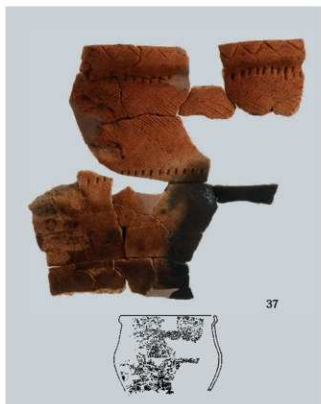
縄文時代の割片石器 (S 与 2/5)



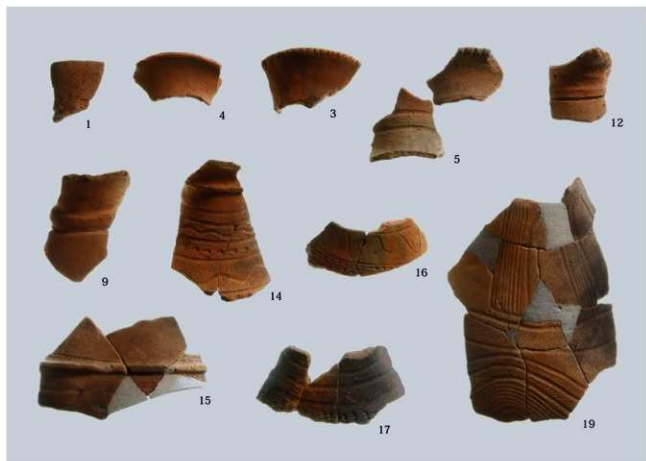
SD01 出土壺形土器 (S ≈ 1/4)



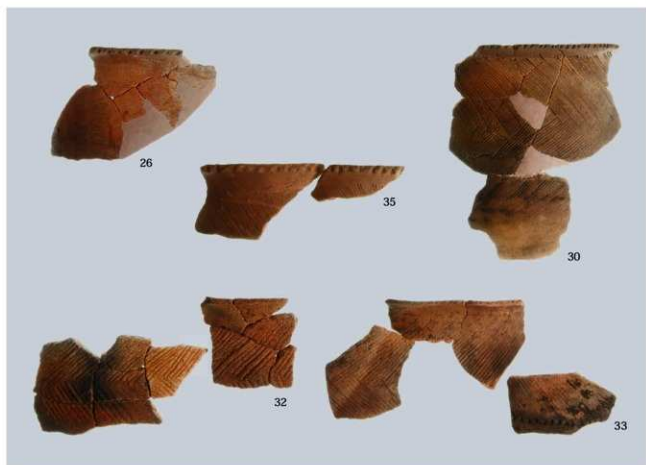
SD01 出土壺形土器・甕形土器 (S 与 1/4)



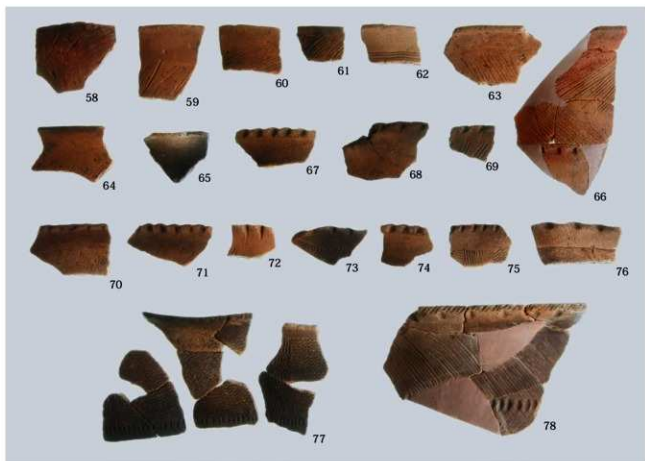
SD01 出土甕形土器 (S 与 1/4)



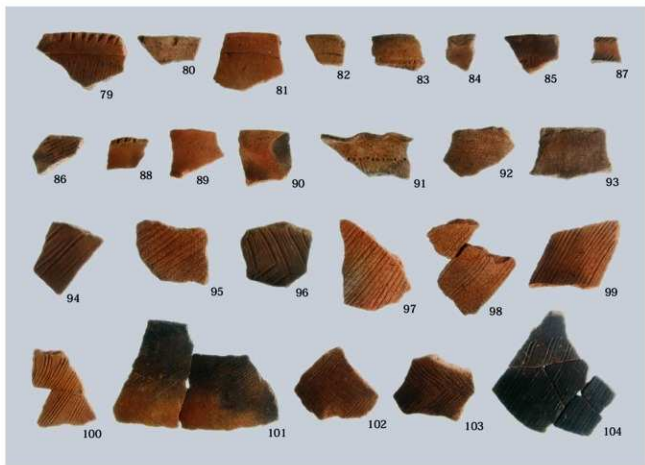
SD01 出土壺形土器 (S ≒ 1/3)



SD01 出土壺形土器 (S ≒ 1/3)



SD01 出土袋形土器 (S ≒ 1/3)



SD01 出土袋形土器 (S ≒ 1/3)



SD01 出土袋形土器 (S ≒ 1/3)



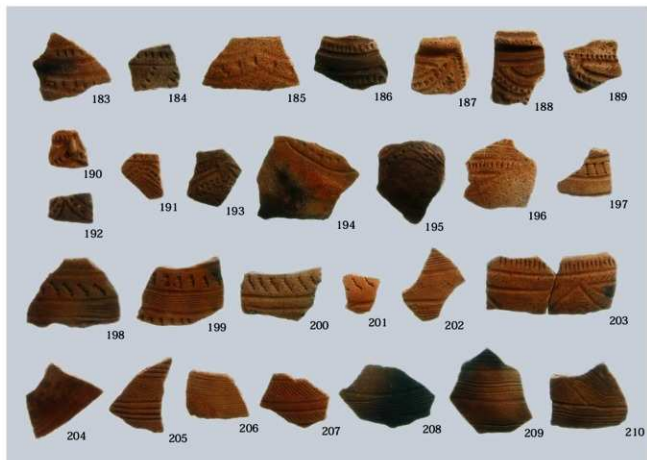
SD01 出土鉢形土器・高杯他 (S ≒ 1/3)



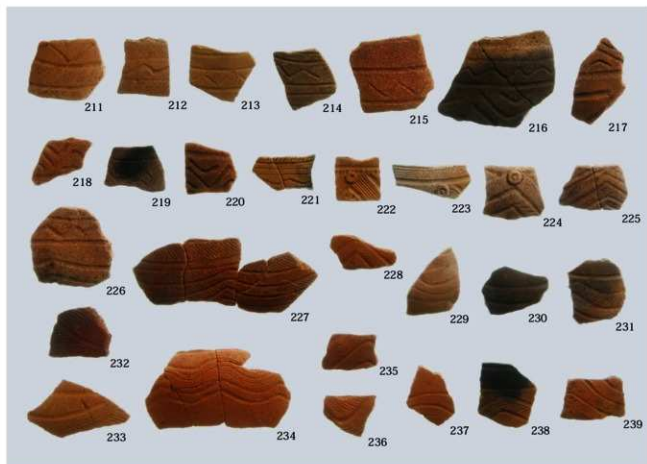
SD01 出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



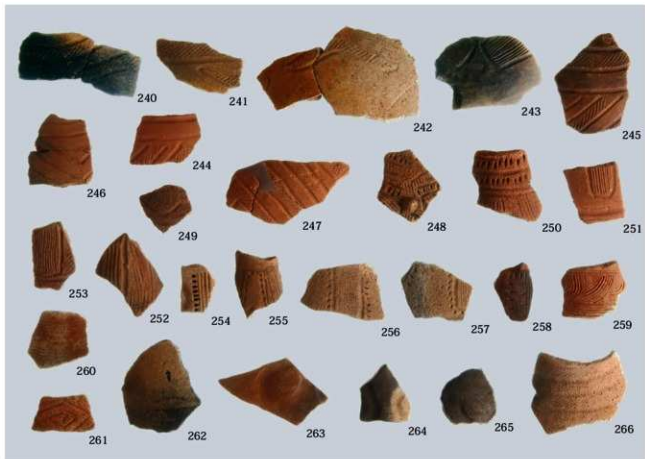
SD01 出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



SD01 出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



SD01 出土壺形土器 (S ≈ 1/3)



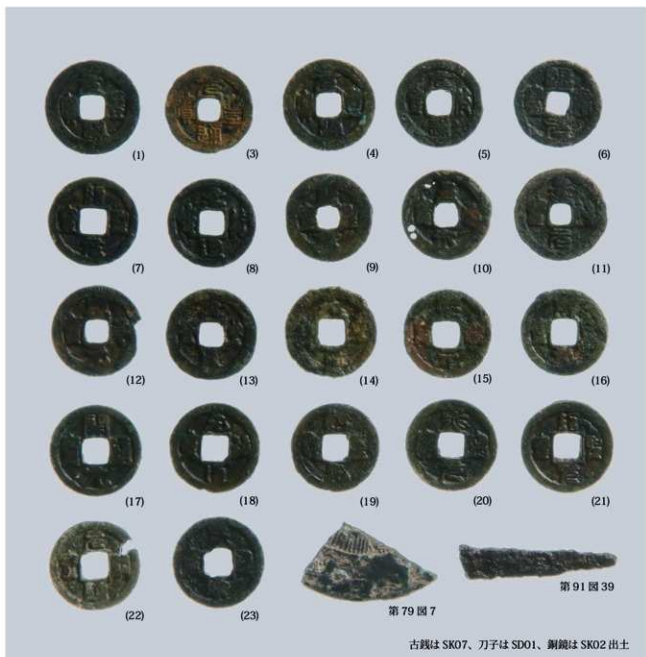
SD01 出土壺形土器 (S ≒ 1/3)



SD01 出土壺形土器・鉢形土器・蓋他 (S ≒ 1/3)



SD01 出土古墳時代の土器・埴輪 (S ≒ 1/2)



古銭はSK07、刀子はSD01、銅鏡はSK02出土

金属器 (中世古銭、古墳時代銅鏡、刀子) (S ≒ 1/1)



1～5は土師器杯・碗 6～11は黒色土器A杯 12～14は土師器甕
SB02 出土土器



SB02 出土土器 (S ≈ 1/4)



SB02 出土土器 (S ≈ 1/4)



SB01 出土土器 (S 与 1/4)



SD01、SK02 出土土錘 (S 与 1/3)



SD01 出土土器 (S 与 1/3)



SK13 出土土器

報告書抄録

ふりがな	ほくりくしんかんせんけんせつじぎょう まいぞうふんかざいはくつちようさほうこくしょ 6							
書名	北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 6							
副書名	南曾峯遺跡							
巻次	長野市内その 3							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	93							
編著者名	鶴田典昭 宮村誠二							
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4 TEL. 026-293-5926							
発行年月日	2012年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みなみさかみねいけき 南曾峯遺跡	ながのけん 長野県 ながのしよとのまち 長野市豊野町 おおあざかにまわ 大字蟹沢 あざみなみさかみ 字南曾峯 2758 他	20201	J-020	36° 43′ 18″	138° 18′ 14″	20050914 ~ 20051104 20051205 ~ 20051209 20060508 ~ 20060728 20070620 ~ 20071116	1,977㎡	北陸新幹線 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
南曾峯遺跡	集落跡	旧石器時代		ブロック 3、礫群 2		ナイフ形石器、搔器、 削器、彫器、敲石		横長剥片を素材とした ナイフ形石器
		縄文時代				早期～晩期の土器、 神子柴型石斧、石鏃、 三脚石器		
		弥生～古墳時代				弥生中期栗林式土器、 古墳時代埴輪、銅鏡		
		古代		竅穴住居跡 2、土坑 3		土師器、須恵器、 灰輪陶器、緑釉陶器		
		中世		土坑 1		銭貨		
要約	<p>丘陵上とその裾野に広がる旧石器時代から中世までの複合遺跡である。今回の調査では、旧石器時代のブロックが 3 基確認され、砂礫層を挟んで 2 時期の石器群が出土した。いずれも黒曜石のナイフ形石器をもつ石器群で、黒曜石産地推定の結果、上層と下層で異なる産地が推定された。また、下層では横長剥片を素材としたナイフ形石器が 7 点出土した。</p> <p>縄文時代以降は断続的に遺構・遺物が確認されるが、縄文時代前期、弥生時代中期、平安時代の遺物がまとまって出土した。</p>							

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 93

北陸新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 6

—長野市内その3—

南曾峯遺跡

発行 平成24年(2012)3月21日
発行者 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構
鉄道建設本部 北陸新幹線建設局
(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp
印刷 西沢印刷株式会社
〒380-0904 長野市七瀬中町 1048
Tel 026-226-6071